

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第6冊

岸の上遺跡 I

2019. 3

香川県教育委員会

序文

岸の上遺跡は、丸亀市飯山町川原に所在する遺跡であり、国道438号道路改築事業に伴い新たに存在が確認された遺跡です。

平成25年度から発掘調査が実施され、これまでに、弥生時代から近世までの遺構・遺物が見つかっています。

今回報告を行うのは、遺跡の中でも最も北側の部分に当たります。微高地から低地に向かって地形が下がる地点であり、各時期の遺構面が、河川の堆積に覆われることにより、良好な状態で残存していました。

古墳時代後期には微高地の縁辺に掘立柱建物が築かれました。これは倉庫としての機能が考えられ、2棟が並んだ状態で見つかっています。各棟の大きさをみても県内の同時期の建物と比べ突出した規模を有しています。

古代には、大型の溝が掘削されます。溝の埋土からは各時期の土器のほか、残りの良い木製品が多量に出土しました。木製品には多種の祭祀具のほか、県内の古代遺跡では2例目となる木簡が3点も出土しました。岸の上遺跡を横断するように、古代の基幹道路である南海道の推定ラインが通っており、出土遺物や検出された遺構から、遺跡の所在する讃岐国鵜足郡の中でも重要な場所であることがうかがえます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財の理解と関心が深められる一助となれば幸いです。

なお、最後になりましたが、今回の発掘調査に際しては、地元関係者を始め、多数の方のご理解とご協力をいただきました。最後になりますがお礼申し上げます。

香川県埋蔵文化財センター 所長
西岡 達哉

例 言

1. 本報告書は、国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴い実施した、香川県丸亀市飯山町川原に所在する岸の上遺跡の報告である。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、発掘調査・整理作業は香川県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本報告書で報告する範囲の発掘調査期間と担当者は次のとおりである
期間：平成 26 年 11 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日、平成 27 年 4 月 1 日～6 月 30 日
担当：西村尋文、小野秀幸、真鍋貴匡（平成 26 年度）
佐藤竜馬、西村尋文、信里芳紀、竹内裕貴（平成 27 年度）
4. 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の関係機関や地元の方々のご協力を得た。記して謝意を表したい。
地元水利組合、大久保徹也、近藤武司、谷 梢、奈良文化財研究所史料研究室
5. 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施し、編集・執筆は竹内が担当した。
6. 本報告書で用いる座標系は国土座標（世界測地系）第IV系である。方位の北は国土座標系IV系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
7. 本書においては、遺構は次の略号により表示する。
SB 建物 SP 柱穴 SD 構 SK 土坑 SE 井戸 SX 不明遺構 SZ 畦畔 SA 櫓列
8. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高（単位m）である。
9. 遺構断面図中の色調及び観察表の一部の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。
10. 各資料の年代決定に際して参考にした文献及びそのほかの参考文献は本文末に掲載した。

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 整理作業の経過	1
第3節 調査体制	1
第2章 周辺の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法と調査区の設定	5
第2節 基本層序	5
第3節 4区の調査成果	12
第4節 5区の調査成果	60
第5節 6区の調査成果	95
第4章 自然科学的分析の成果	
第1節 岸の上遺跡における植物珪酸体分析	112
第2節 岸の上遺跡出土木製品の樹種同定	118
第3節 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定	121
第5章 まとめ	
第1節 遺構の変遷について	130
第2節 SD4028 出土木簡と木製品について	135
遺物観察表	139
写真図版	

挿図目次

第1図 道路の位置	1	第38図 SD4028 木棧出土状況	32
第2図 周辺道路分布図	4	第39図 SD4028・SD4030・SD6006断面	33
第3図 調査区割	5	第40図 SD4028 上層・最上層出土遺物	34
第4図 5区調査区西壁土壌断面	7～8	第41図 SD4028 中層出土遺物1	35
第5図 6区調査区西壁土壌断面	9～10	第42図 SD4028 中層出土遺物2	36
第6図 6区調査区北壁土壌断面	11	第43図 SD4028 下層出土遺物1	37
第7図 2a層、3a層、3b層、4層、5層出土遺物	12	第44図 SD4028 下層出土遺物2・最下層出土遺物	38
第8図 4区1面平面	13	第45図 SD4028 再掘削路出土遺物	38
第9図 SD4001出土遺物	14	第46図 SD4028 層位不明遺物	39
第10図 SD4002出土遺物	14	第47図 SD4028 中層出土木器1	40
第11図 SD4005出土遺物	14	第48図 SD4028 中層出土木器2	41
第12図 SD4011平・断面出土遺物	15	第49図 SD4028 中層出土木器3	42
第13図 SE4001平・立面	16	第50図 SD4028 下層出土木器1	44
第14図 SE4001出土遺物1	17	第51図 SD4028 下層出土木器2	45
第15図 SE4001出土遺物2	18	第52図 SD4028 下層出土木器3	46
第16図 SX4002出土遺物	19	第53図 SD4028 層位不明木器	47
第17図 SX4004出土遺物	19	第54図 SD4030 出土木器	47
第18図 SX4006平・断面	20	第55図 SD4030 出土木器	47
第19図 SD4004出土遺物	21	第56図 4区2面平面	48
第20図 SD4007出土遺物	21	第57図 SD4017平・断面	49
第21図 SD4009平・断面	21	第58図 SP4013平・断面	49
第22図 SD4010出土遺物	22	第59図 4区3面平面	51
第23図 SD4024平・断面	22	第60図 SB4002, SB4003, SD5018, SD4029平・断面	52
第24図 SD4024出土遺物	22	第61図 SB4002, SB4003, SD5018, SD4029平・断面(2)	53
第25図 SD4025出土遺物	22	第62図 SB4002平・断面	54
第26図 SD4021平・断面	23	第63図 SB4003平・断面	55
第27図 SD4021出土遺物1	25	第64図 SB4003平・断面(2)	56
第28図 SD4021出土遺物2	26	第65図 SB4003(SP4053)平面・出土遺物 SB4002出土遺物	56
第29図 SK4001平・断面	27	第66図 3面土器底	57
第30図 SK4002平・断面	27	第67図 4区土器底より出土遺物	57
第31図 SP4017平・断面	27	第68図 SD4100, SD4031, SD4033, SD5020平・断面	58
第32図 SP4024平・断面	27	第69図 SD4019出土遺物	59
第33図 4区1面柱穴群平面・出土遺物1	29	第70図 SD4018平・断面	59
第34図 4区1面柱穴群出土遺物2	30	第71図 SX4008平・断面	59
第35図 SP4035平・断面	31	第72図 SD4032平・断面・出土遺物	59
第36図 SP4035出土遺物	31	第73図 4区遺構外出土遺物	60
第37図 SD4028・SD4030・SD6006平面	32	第74図 5区1面平面	61

第 75 国	SD5001 平·断面 ······	62	第 113 国	SZ5013 平·断面 ······	89
第 76 国	SD5002 平·断面 ······	63	第 114 国	5 区 3 面 平面 ······	90
第 77 国	SD5004 平·断面 ······	64	第 115 国	SD5017 平·断面 ······	91
第 78 国	SD5007A·B 平·断面 ······	65	第 116 国	SD5020 出土遗物 ······	91
第 79 国	SK5002 出土遗物 ······	66	第 117 国	SD5019 平·断面 ······	91
第 80 国	SK5003 平·断面 ······	66	第 118 国	SD5021 平·断面 ······	91
第 81 国	SK5003 出土遗物 ······	66	第 119 国	SD5023 平·断面 ······	92
第 82 国	SX5005 平·断面 ······	66	第 120 国	SK5018 平·断面 ······	92
第 83 国	SX5007 出土遗物 ······	66	第 121 国	SA5001 平·断面 ······	92
第 84 国	SX5008 平·断面 ······	66	第 122 国	SA5002 平·断面 ······	93
第 85 国	SX5008 出土遗物 ······	68	第 123 国	SP5033 平·断面 ······	93
第 86 国	SX5009 出土遗物 ······	69	第 124 国	SP5038 平·断面 ······	93
第 87 国	SX5010 出土木器 ······	69	第 125 国	SP5042 平·断面 ······	93
第 88 国	SD5003, SD5005 平·断面 ······	70	第 126 国	SP5043 平·断面 ······	93
第 89 国	SD5003 出土遗物 1 ······	72	第 127 国	SP5044, SP5045, SP5046 平·断面 ······	93
第 90 国	SD5003 出土遗物 2 ······	73	第 128 国	SP5047, SP5048 平·断面 ······	93
第 91 国	SD5005 出土遗物 ······	74	第 129 国	SP5049, SP5050 平·断面 ······	94
第 92 国	SD5006 出土遗物 ······	74	第 130 国	SP5051, SP5052 平·断面 ······	94
第 93 国	SD5008 平·断面 ······	75 ~ 76	第 131 国	SP5053 平·断面 ······	94
第 94 国	SD5008 出土遗物 1 ······	78	第 132 国	SP5054 平·断面 ······	94
第 95 国	SD5008 出土遗物 2 ······	80	第 133 国	SP5055 平·断面 ······	94
第 96 国	SD5008 出土木器 ······	81	第 134 国	SP5057, SP5058 平·断面 ······	94
第 97 国	SK5004, SK5008 平·断面 ······	82	第 135 国	SX5011 平·断面 ······	94
第 98 国	SK5004 出土遗物 ······	82	第 136 国	SX5012 平·断面 ······	95
第 99 国	SK5005 出土遗物 ······	82	第 137 国	5 区 遗构外出土遗物 ······	95
第 100 国	SK5007 平·断面 ······	82	第 138 国	5 区 遗构外出土木器 ······	96
第 101 国	SK5007 出土遗物 ······	82	第 139 国	6 区 1 面 平面 ······	97
第 102 国	SK5010 出土遗物 ······	83	第 140 国	SE6001 出土遗物 ······	98
第 103 国	SK5001 平·断面 ······	83	第 141 国	SD5003 平·断面 ······	98
第 104 国	SK5017 出土遗物 ······	83	第 142 国	SE6002 平·断面 ······	98
第 105 国	5 区 2 面 平面 ······	84	第 143 国	SE6003 出土遗物 ······	98
第 106 国	SD5009 出土遗物 ······	85	第 144 国	SE6004 出土遗物 ······	98
第 107 国	SP5007 平·断面 ······	85	第 145 国	SD6004 出土遗物 ······	99
第 108 国	SZ5001, SZ5002, SZ5003, SZ5005, SZ5009, SD5010 平·断面 1 ··· 86		第 146 国	SD6005 · SD6006 · SE6004 出土遗物 ······	99
第 109 国	SZ5001, SZ5002, SZ5003, SZ5005, SD5009, SD5010 断面 2 ··· 87		第 147 国	SD6006 出土木器 ······	99
第 110 国	SZ5006 平·断面 ······	87	第 148 国	SD6007 出土木器 ······	100
第 111 国	SZ5008 平·断面 ······	88	第 149 国	SE6001 平·断面 ······	100
第 112 国	SZ5009 平·断面 ······	88	第 150 国	SE6001 出土遗物 ······	100

第 151 図	SE6001 出土木器	101	第 167 図	6 区遺構外出土遺物	111
第 152 図	SD6003 出土遺物	102	第 168 図	岸の上遺跡 4~4 区西壁における植物珪酸体分析結果	116
第 153 図	SD6008 出土木器	103	第 169 図	岸の上遺跡の植物珪酸体	117
第 154 図	SP6008 平・断面	103	第 170 図	岸の上遺跡出土木材	120
第 155 図	6 区 3 面 平面	104	第 171 図	岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および 走査型電子顕微鏡写真 1	125
第 156 図	SD6011 平・断面	105	第 172 図	岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および 走査型電子顕微鏡写真 2	127
第 157 図	SD6013 平・断面	106	第 173 図	岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および 走査型電子顕微鏡写真 3	129
第 158 図	SD6014 平・断面	107	第 174 図	遺構の変遷 1	132
第 159 図	SD6015 平・断面	107	第 175 図	遺構の変遷 2	133
第 160 図	SK6005 平・断面	108	第 176 図	遺構の変遷 3	134
第 161 図	SE6006 平・断面	108	第 177 図	SD4028 出土木第 1 赤外線写真	135
第 162 図	SP6001 平・断面	108	第 178 図	SD4028 出土木第 2 赤外線写真	136
第 163 図	SP6007 平・断面	108	第 179 図	SD4028 木簡出土地点	137
第 164 図	SD6002 平・断面	108			
第 165 図	SB6003 平・断面	109			
第 166 図	SK6004 平・断面	109			

表 目 次

表 1	岸の上遺跡における植物珪酸体分析結果	115	表 5	土器観察表	139
表 2	樹種同定結果	118	表 6	瓦観察表	158
表 3	岸の上遺跡出土木製品・木材の 樹種同定結果一覧	121	表 7	木器観察表	160
表 4	岸の上遺跡出土木製品・木材の 樹種同定結果	125 ~ 126	表 8	石器観察表	162

写 真 図 版 目 次

図版 1	遺構写真 1 調査地遠景（南から）	SP4044 檢出状況
	6 区 3 面全景（直上から）	SP4053 檢出状況
図版 2	遺構写真 2 6 区 3 面全景（南から）	SP4053 断面及び遺物出土状況
	6 区 SD4028 土層断面（南東から）	SP5056 檢出状況
図版 3	遺構写真 3 6 区 調査区西壁（SD4028 部分）	SD4019 断面
	SD4028 木簡出土状況	遺構写真 6 4~2 区 1 面完掘状況（南から）
	SD4028 木製品出土状況	SD4005, SD4006 完掘状況
	SD4028 木製品出土状況	SD4004 断面
	SD4028 士器器出土状況	SE4001 檢出状況
図版 4	遺構写真 4 6 区 SD5030, SP6003 檢出状況（南から）	SE4001 断面
	4 区 SB4002, SB4003 檢出状況（北から）	SD4017 断面
図版 5	遺構写真 5 SP6003 断面	4 区 土器だまり検出状況
	SP5008 断面	遺構写真 7
	SP4056 断面	5 区 1 面完掘状況（東から）

図版 8	遺構写真 8 5区 2面完掘状況（南から） SZ5001 検出状況 SZ5002 検出状況 SZ5013 土器出土状況 5区 剥離検出状況	SD5008 縦断面 SD5008 底面の状況 5区 2面北半 完掘状況
図版 9	遺構写真 9 4区 SD4021 柱穴群完掘状況（北から） SD4021 完掘状況 4区 SD4021 断面 SD4030 断面 SD4031 断面	図版 11 5区 3面完掘状況 5区 3面完掘状況（遠景） 遺構写真 11 5区 3面北半 完掘状況
図版 10	遺構写真 10 SD5008 完掘状況（南から） SD5008 断面（南から） SD5008 土器出土状況 SD5009 断面（西から）	図版 12 5区 3面南側 遺構検出状況（東から） 6区 1面完掘状況 図版 13 6区 西壁土層 6区 北壁土層 図版 14 6区 西壁土層 5区 西壁土層 2 図版 15～図版 30 出土遺物写真 1～16

付図目次

付図 1	岸の上遺跡 I 1面 平面図
付図 2	岸の上遺跡 I 2面 平面図
付図 3	岸の上遺跡 I 3面 平面図

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

平成24年度、国道438号（飯山工区）の建設に伴い、域内の埋蔵文化財の確認が行われた。その結果、丸亀市飯山町川原付近において、遺構・遺物が確認されたため、これらを「岸の上遺跡」として周知した。

国道の整備事業に伴い実施された発掘調査は、平成25年度～平成30年度までの間に、断続的に行われている。

岸の上遺跡として調査を行った範囲の中で、本書で報告する部分については、平成26年11月～3月、平成27年4月～6月の期間で調査を行った範囲の一部であり、岸の上遺跡の範囲のうち、北側の部分にあたる2,225m²である。



第1図 遺跡の位置

第2節 整理作業の経過

出土遺物の洗浄・注記作業については、平成29年度までに完了した。報告書作成のための整理作業(出土遺物の接合・抽出・実測・製図、遺構図の製図等)は平成29年6月より開始し、翌年3月まで行った。整理作業の対象とした遺物は28リットル入りコンテナで92箱に上った。

第3節 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制については、次のとおりである。

平成 26 年度免査調査体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長 増田 宏	総括 所長 真鍋 昌二	副課長 川上 泰	次長 前田 和也
副課長 片桐 孝造	課長 前田 和也（兼）	文化財グループ 副主幹 松下 由美子	主任 佐野 英二
主事 和木 麻佳	主任 寺岡 仁美	文化財専門員 山下 平重	主任 中川 美江
文化財グループ 課長補佐 片桐 孝造	主任 高木 秀哉	文化財専門員 松本 和彦	主任 岩崎 昌平
主任文化財専門員	主任 森 格也	文化財専門員	主任 西村 審丈
主任文化財専門員	主任 小野 秀幸	文化財専門員	主任 真鍋 貞區
	技師 今井 由佳	文化財専門員	嘱託 藤井 茂穂子
	嘱託 藤井 茂穂子	文化財専門員	嘱託 名倉 美保
	嘱託 井上 加奈子	文化財専門員	嘱託 井上 加奈子
	嘱託 横尾 恵	文化財専門員	嘱託 横尾 恵

平成 27 年度免査調査体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長 増田 宏	総括 所長 真鍋 昌二	副課長 小柳 和代	次長 前田 和也
副課長 片桐 孝造	課長 前田 和也（兼）	文化財グループ 副主幹 松下 由美子	主任 中川 美江
文化財グループ 副主幹 和木 麻佳	主任 寺岡 仁美	文化財専門員 山下 平重	主任 丸尾 麻知子
文化財グループ 課長補佐 片桐 孝造	主任 岩崎 昌平	文化財専門員 佐藤 龍馬	主任 高木 秀哉
主任文化財専門員 山下 平重	主任 森 格也	文化財専門員 竹内 裕貴	主任 佐藤 龍馬
主任文化財専門員 佐藤 龍馬	主任 丸尾 麻知子	文化財専門員 井上 加奈子	主任 藤井 茂穂子
	主任 岩崎 昌平	文化財専門員 藤井 茂穂子	主任 井上 加奈子
	主任 高木 秀哉	文化財専門員 佐藤 龍馬	主任 藤井 茂穂子
	主任 森 格也	文化財専門員 竹内 裕貴	主任 佐藤 龍馬
	主任 丸尾 麻知子	文化財専門員 井上 加奈子	主任 藤井 茂穂子
	主任 岩崎 昌平	文化財専門員 藤井 茂穂子	主任 佐藤 龍馬

平成 29 年度整理作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長 小柳 和代	総括 所長 増田 宏	副課長 片桐 孝造	次長 森 格也
副課長 片桐 孝造	課長 森 格也（兼）	文化財グループ 課長補佐 中川 啓朗	副主幹 斎藤 政好
文化財グループ 副主幹 松下 由美子	主任 高橋 純行	文化財専門員 山下 平重	主任 丸尾 麻知子
文化財グループ 課長補佐 片桐 孝造（兼）	主任 岩崎 昌平	文化財専門員 佐藤 龍馬	主任 横井 隆史
主任文化財専門員 佐藤 龍馬	主任 古野 徳久	文化財専門員 佐藤 龍馬	主任 竹内 裕貴
主任文化財専門員 佐藤 龍馬	主任 資料叢書及び課長	文化財専門員 小早川 真由美	主任 藤井 茂穂子
	技師 齋藤 政好	文化財専門員 西本 智子	主任 宮崎 喬子
	嘱託 齋藤 政好	文化財専門員 宮崎 喬子	
	嘱託 佐藤 龍馬		

第2章 周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

岸の上遺跡の位置する丸亀平野は、土器川・金倉川による扇状地が主体となる。岸の上遺跡は丸亀平野の東部に位置する。

調査地の東側 300 m には大東川、1.5 km 西側には県内唯一の一級河川である土器川が流れ、両河川に挟まれる形で遺跡は立地している。周辺に残る地割をみても、条里型の地割をよく残しており、岸の上遺跡を横断する形で古代南海道も復元されている（金田 1989）。

岸の上遺跡の調査ではその条里型地割の一部がとらえられたほか、遺跡の北には河道跡が確認される。

このほかにも遺跡の南側にも河道の埋没痕跡を地形で確認できる部分もある。

ここで、現在の景観から復元できる調査地周辺の状況を整理しておきたい。

まず、岸の上遺跡の西側および南側に、条里型地割と合致する方向に沿わない地割の乱れが認められる。この箇所は現在も地形の起伏が確認できる埋没河道の痕跡である。それ以外にも、数か所の地割の乱れが周辺に見られる。これらは方向から土器川の旧河道にあたる部分の開発が周囲に比べ遅れ、その形が残された跡である。これらの流路が調査地の南北に流れ、それらに挟まれる形で岸の上遺跡は立地している。調査地西には「真時」といった地名が存在し、周間に遺跡の存在も確認されるのに対し、岸の上遺跡付近は川原と呼ばれており、河道や低地に囲まれた微高地上に岸の上遺跡は位置している。

第2節 歴史的環境

調査地周辺における遺跡の状況を中心にまとめる。

旧石器時代、縄文時代については、明確な遺構は確認されていないものの、岸の上遺跡の北側で調査された北岸南遺跡では、縄文時代の石器が確認されている。今回調査でも、この時期に相当する石礫が見つかっている。

弥生時代については、先述の北岸南遺跡において弥生時代の遺構・遺物が見つかっているほか、遺跡の北に位置する飯野山の東側裾付近の、東坂元北岡遺跡や東坂元三ノ池遺跡等で遺構・遺物が確認されている。さらに北上すると、現在の坂出市川津町付近では、下川津遺跡において弥生時代前期～後期～終末期の遺構・遺物が多く確認されているほか、川津一ノ又遺跡などでも、弥生時代中期～後期の遺構が確認される。弥生時代以降の集落が多少の位置の立地の変更是あるものの、存続している状況が確認できる。また、飯野山の山頂についても、当該期の土器が採集されており、いわゆる高地性集落としての可能性が考えられているが、実態は明らかではない。

続く古墳時代については、消失したものも多いが、特に、古墳時代中期～後期以降の古墳が認められる。調査地から東の坂出市との境界には、古墳時代中期～後期の古墳群である城山古墳群、終末期の古墳である弥栄古墳群などが所在する。飯野山の東西裾付近にも古墳群が確認されるほか、岸の上遺跡から南東の丘陵上にも古墳群が点在する。

それとは対照的に、この時期の集落は、岸の上遺跡のほかは、近隣では確認されていない。遺跡の東を流れる大東川の下流域の川津遺跡群においては、古墳時代後期以降の集落が下川津遺跡などで確認される。岸の上遺跡の南の名遺跡において、古墳時代の建物などが検出されている。

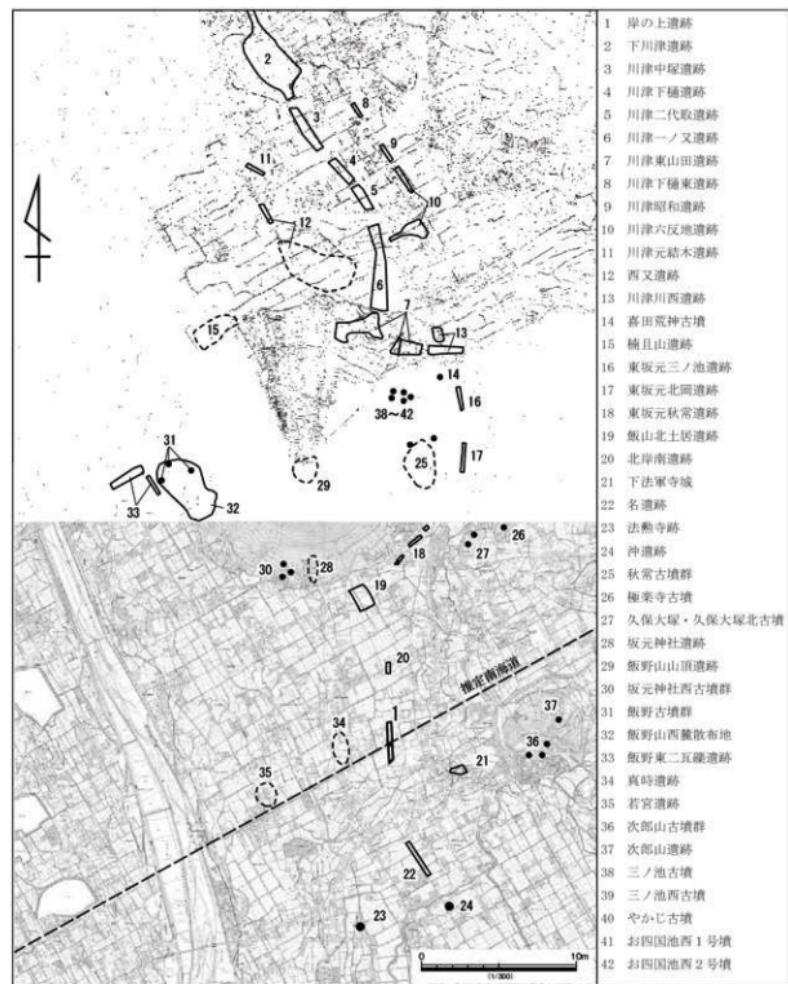
古代以降については、ちょうど岸の上遺跡の中央部分を横断するように、南海道が施工されたと考えられる。丸亀平野の南海道については、土器川以東においては、発掘調査にて確認された事例はないが、岸の上遺跡のこれまでの発掘調査において、道路側溝と考えられる遺構が発見されている。

また、それ以外の遺跡として特筆すべきは、岸の上遺跡から南約700mに、古代寺院である法勅寺が存在する。7世紀末の瓦が採集されており、岸の上遺跡などの官衙的な性格を持つ遺跡との関連が注目される。

このほか、下川津遺跡やその周辺の遺跡においては、古代以降の建物が多く確認されており、特に下川津遺跡では大型のものも含め、通常の集落とはやや異なる配置の建物が検出されているほか、官衙遺跡でしばしばみられる遺物が多く見つかっている。川津一ノ又遺跡でも、同様に規格性を持って並んだ建物群が見つかっている。

中世以降については、遺跡の北側、飯野山の南麓付近の飯山北土居遺跡や東坂元秋常遺跡で、居館の堀や屋敷地が確認されている。調査地の近隣の中世の状況は不明であるが、島田寺や下坂神社などは、中世にさかのぼる可能性もある。

近世以降においては、この地域は大部分が耕作地とされ、寺社のほかは広大な田が広がる景観が形成されていたと考えられる。

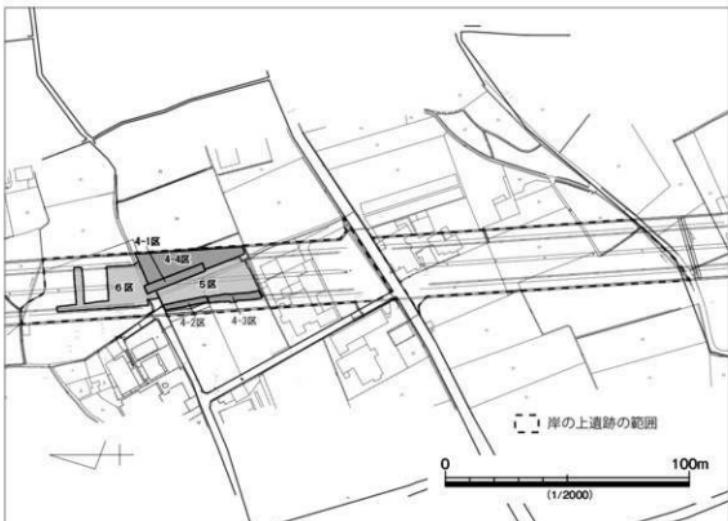


(丸龜市・宇多津町・坂出市都市計画図の一部を縮小して使用)
第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法と調査区の設定

岸の上遺跡の調査区割については、現状の地割を踏襲する形で調査区を設定し、調査工程の都合によりさらにそれらを細分している。調査区の配置については、第3図に示した。これらは調査時の名称を踏襲しており、今回はその中でも、岸の上遺跡の北側にある4～6区の報告を行う。特に4区については、調査時点で4-1区～4-4区まで細分されているが、今回は4区として一括して報告する。また、今回報告範囲より南に位置する調査区については、本報告書では報告しない。



第3図 調査区割

第2節 基本層序

今回報告を行う4～6区の基本的な層序について整理を行う。調査区の南北方向の堆積を示す5・6区の西壁の断面を第4・5図に示し、調査区の東西の堆積については、北端にあたる6区の北壁の断面を第6図に示している。以下に、これらの断面をもとに基本層序について説明する。

基本層序とその理解

岸の上遺跡は、弥生時代～近世までの遺構が確認されるが、それぞれが大別3面の遺構面に分かれで存在している。立地と環境の項でも説明したが、岸の上遺跡は南北端の標高がいずれも下がることから、その部分については堆積状況が近隣の遺跡より比較的残っていたといえる。

各層位の大まかな堆積とその年代について整理し、遺構面の解釈を行いたい。遺跡内の大別の層位に

については、現在の表土も含めて、1～5層に大別し、それらをさらに細分している。1～5層として取り上げた遺物のうち、図化可能なものについては、第7図に示した。

1層は表土及び近現代の耕作土である。

2層とした層については、粒径の粗い粗砂や礫を多く含む。2層は2a層・2b層に細分でき、それらの堆積後の遺構の年代や、2層中に含まれる遺物の年代を考えると、8世紀前半までには堆積していたものと考えられる。調査区の中でも、地形が下がってゆく北へ向かうにつれて、2層の層厚は厚くなる。この2層の上面において、1面が形成される。

3層としたものは褐色の細粒砂を中心としている。この上面を2面とし調査を行った。遺構はあまり形成されていないが、4、5区において畦畔が確認できたことから、水田として利用されたと考えた。詳細は第4章にて報告するが、植物珪酸体分析からも短期間、もしくは残存状況は良好ではない水田耕作の可能性も想定される。3層から出土した遺物については、7世紀前半の年代が考えられる。上面に形成される水田の畦畔からも、同時期の須恵器が確認されており、7世紀前半代に堆積し遺構面が形成されたのち、8世紀初頭までに遺構面が埋没したと想定される。3a層、3b層に細分される。

4層は黒褐色の粘質土を主体とする。4層の上面より弥生時代中期～古墳時代の遺構が形成されており、3面とした。5層からの出土遺物として、弥生土器壺の口縁が出土している。おそらく弥生時代前期のものであり、3面の遺構の年代のうち、これらをさかのぼるものが確認できないため、この土器の年代が4層の堆積年代に近いものと考える。

5層は黄色のシルト層を主体とする。近隣の遺跡においても基盤層としてよく見られるものであり、この層中からの明確な遺物の出土は見られない。周辺の調査や、この上面での遺構検出時に出土した資料から（第7図-6）、縄文時代に形成された層と考える。

以上の大別層位をもとに、遺構面は3面確認された。なお、調査時に各遺構面に帰属している遺構を検出できておらず、下層の遺構面で検出した遺構については、遺物や遺構の性格から報告において帰属面を変更している。各遺構面で検出された遺構の年代幅についてはおおむね以下の通りである。

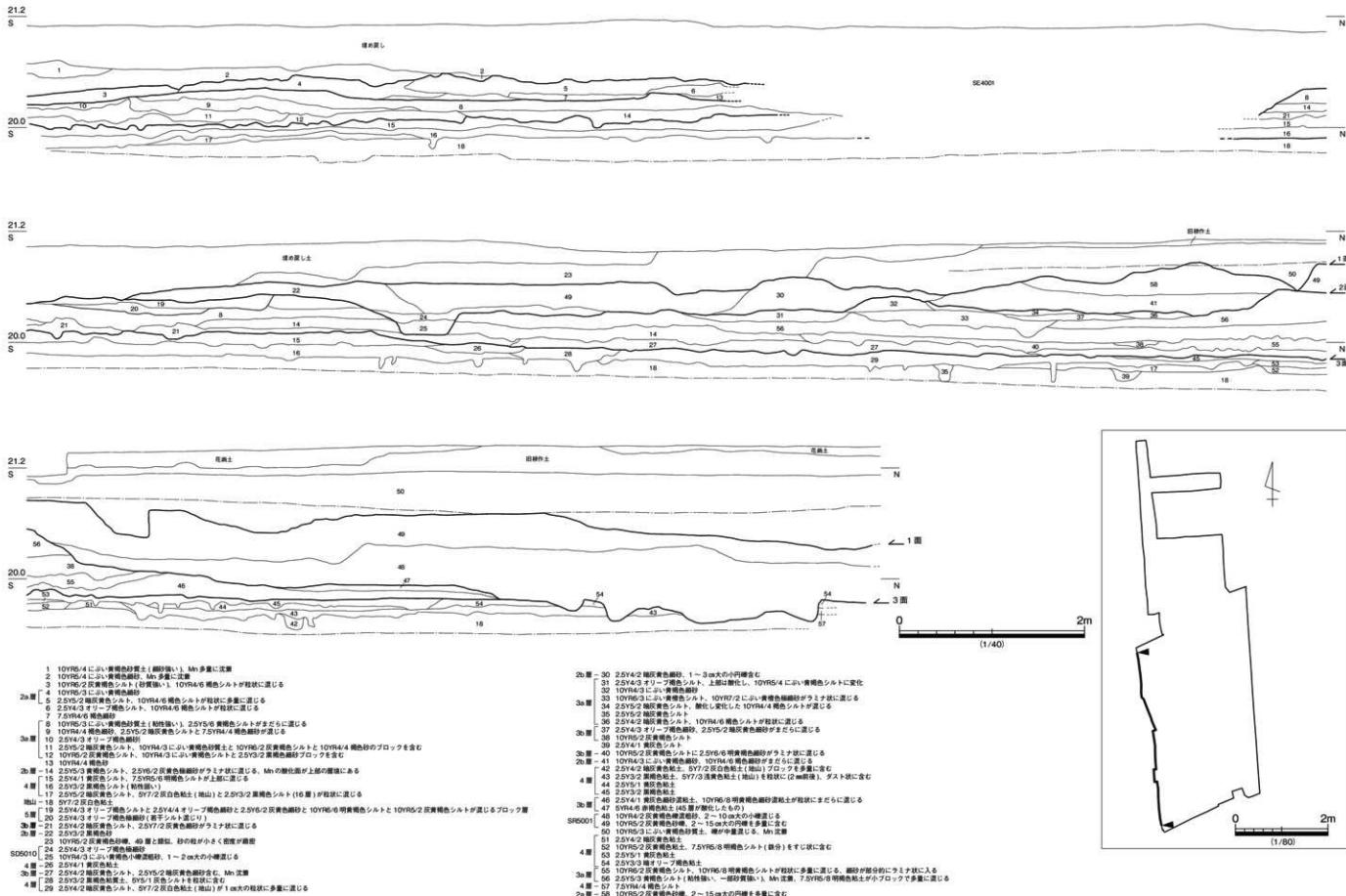
1面…古代～近世

2面…古墳時代終末期

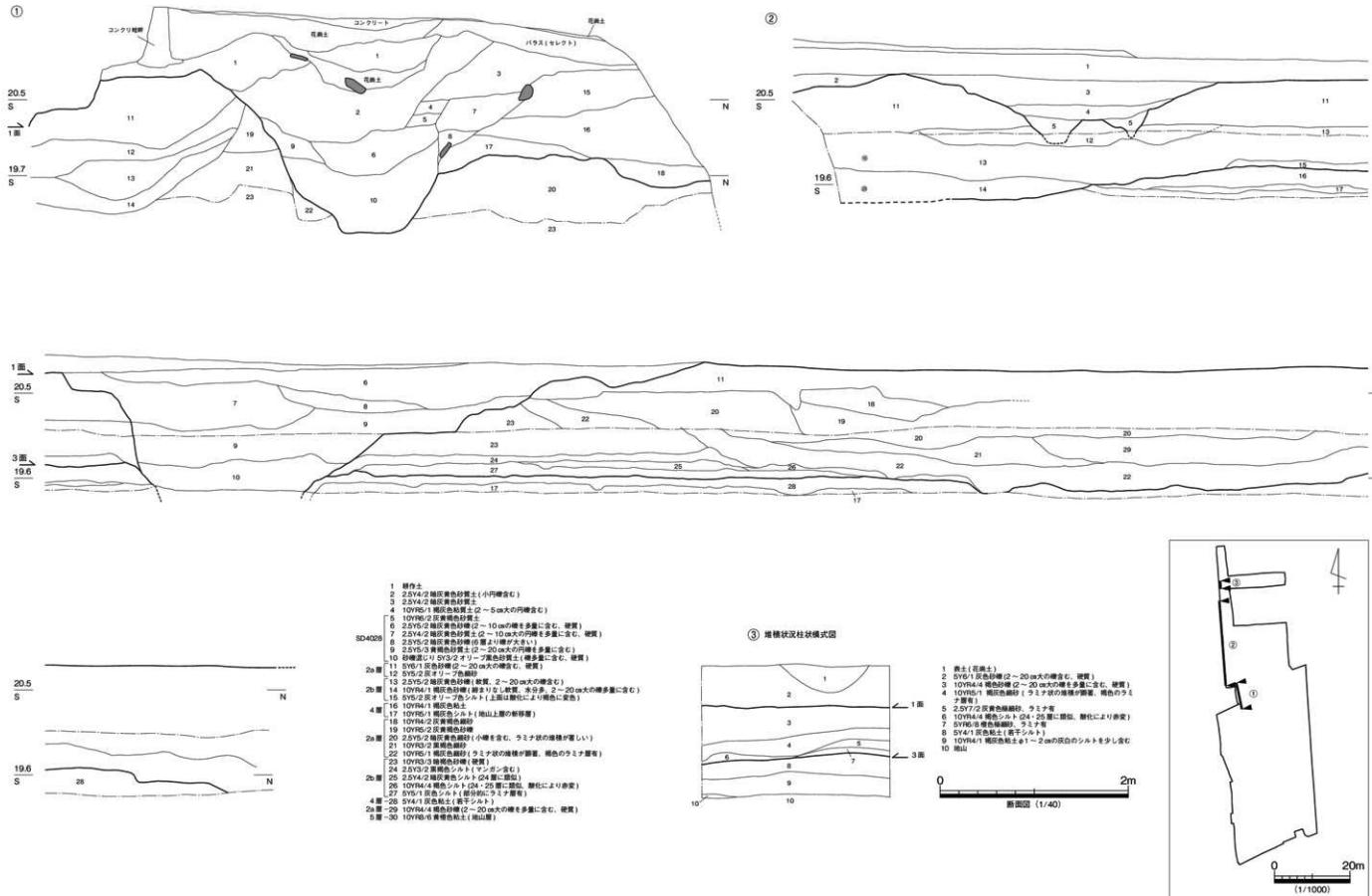
3面…弥生時代中期～古墳時代後期

なお、次節以降の報告に際しては、遺構をさらに大別し、その年代ごとに報告を行う。また、時期が不明なものについては最後に報告する。時代については、1面から報告を行うため、近世から順に時代をさかのぼる順に報告を行う。

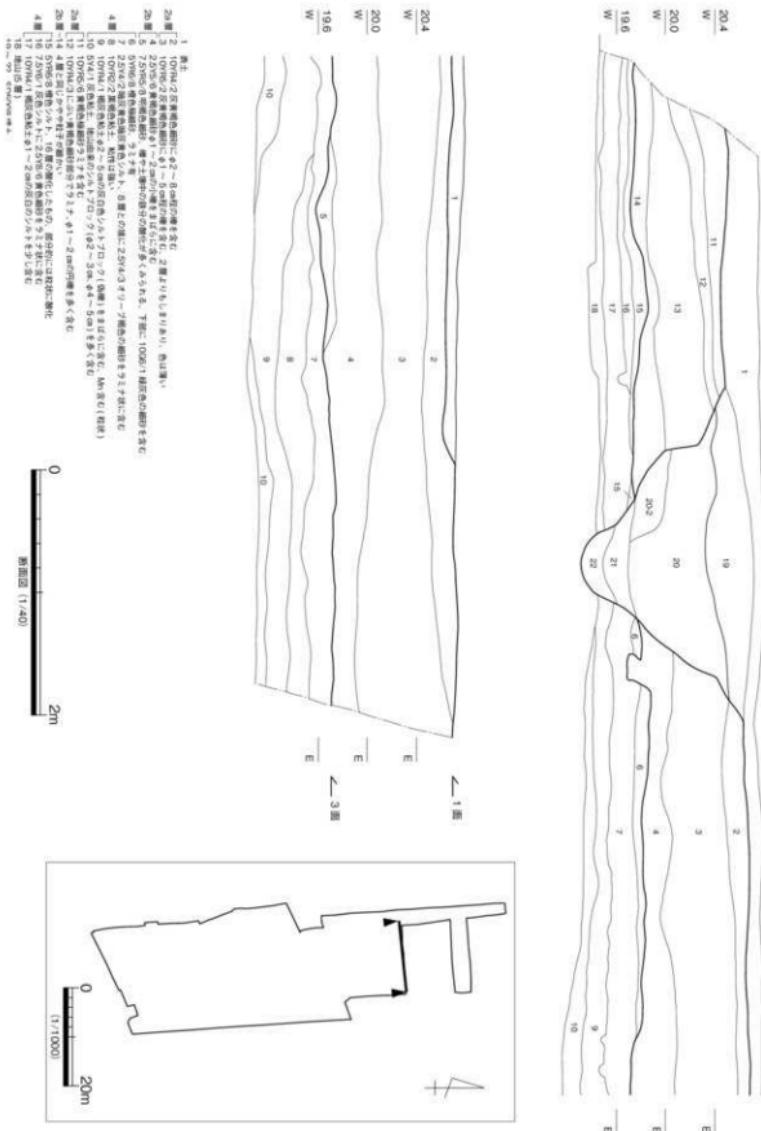
遺物については、遺構の埋没年代と一致しないものについても多数存在したが、残りの良いものは掲載を心掛け、その中でも古代に属するものは特に掲載するよう心掛けた。



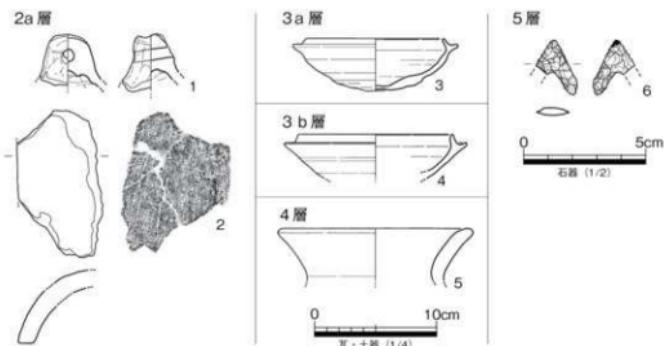
第4図 5区調査区西壁土層断面



第5図 6区調査区西壁土層断面図



第6図 6区調査区北壁土壠断面図



第7図 2a層, 3a層, 3b層, 4層, 5層出土遺物

第3節 4区の調査成果

4区については、基本層序の中で述べた1～3面が確認された。4区は先述のとおり調査工程の都合から4-1～4-4区に分けて調査を行い、4-2、3区については、4区のほかの区画と異なり5区の西側に位置しているが、調査時の遺構名称を踏襲し、4区として報告する。

【1面の遺構】(第8図)

1面については、古代～近世の遺構が検出された。近世・中世・古代の順に報告を行う。

(1) 近世の遺構

溝

SD4001 4-2区の中央部で検出された。検出長は短いが東西方向に流れていることが確認できる。隣接する5区に延長が明瞭に確認されないため、土坑状に収まる長楕円形の遺構となる可能性も考えられる。出土遺物は第9図に示した。

7は須恵器甕である。口縁部が垂直に立ち上がり、頸部から肩部にかけての張りが強い。

小片のため図化できていないが、出土遺物の年代から、18世紀後半以降の埋没が想定される。

SD4002 4-3区の中央部で検出された。南北方向に延びる溝であり、西側の肩のみが検出されている。出土遺物は古代のものが多いが、遺構の検出面や方向から考えても近世以降の遺構となる可能性が高い。出土遺物は第10図に示した。

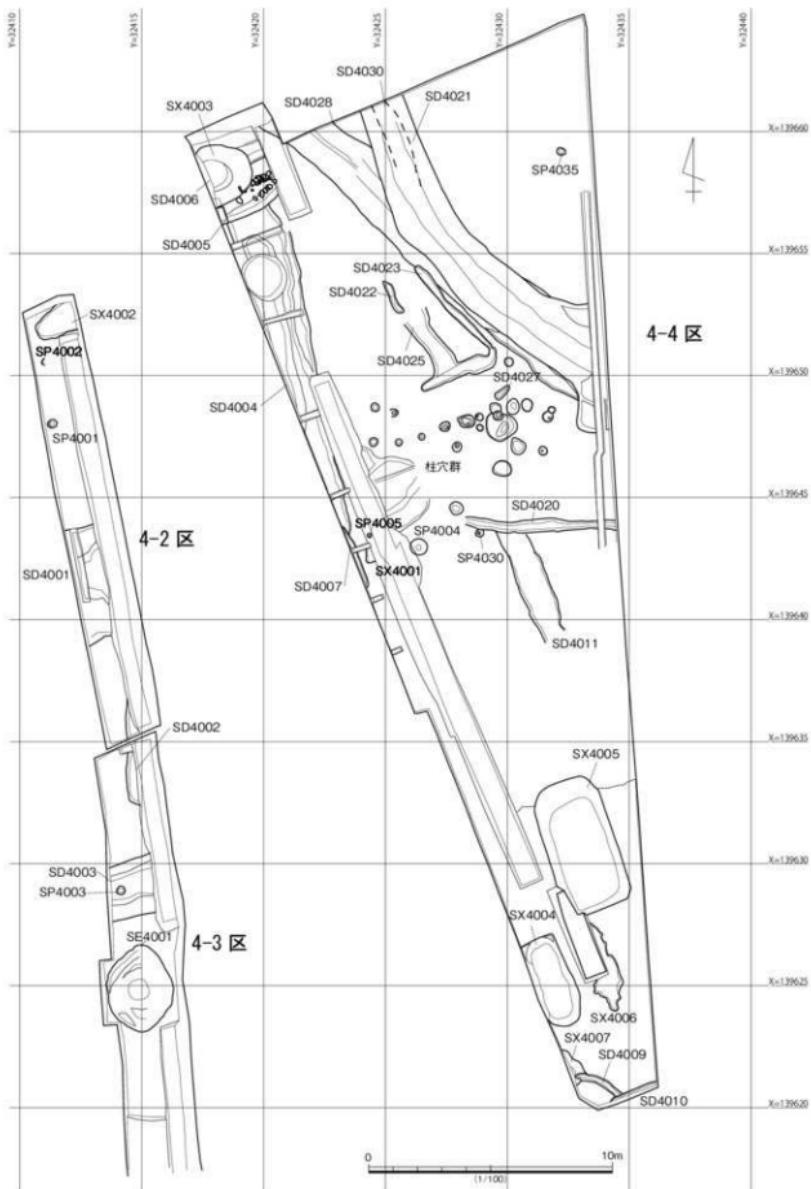
8は土師器皿である。口縁部が屈曲しながら内湾し、端部が立ち上がる。内面に左上がりのミガキによる暗文が残るほか、外面には横方向のミガキを施す。

9は土師器甕である。底部付近の破片であり、端部を断面T字状に拡張する。

10は土師器皿である。口縁部が直線的に外方に延び、端部をやや外方につまみ出す。

SD4003 4-3区の南側で検出された。東西方向に延びる溝であり、埋没年代を特定するような遺物の出土は見られないが、中世以降の開削・埋没が想定される。

SD4005 4-4区の北側で検出された。東西方向に延びる溝である。南側の肩に、礫混じりの裏込めを持つ石列が確認され、溝の護岸を行っている可能性が考えられる。出土遺物は第11図に示した。



第8図 4区1面平面

11は不明土製品である。板状の粘土の両面に線刻を施し焼成する。刻書が読み取れる部分からは、「無量」などの文字が確認でき、仏教に関連する遺物と考えられる。

12は蛸壺であり、穿孔の部分のみが残存する。頂部にナデによる凹みが確認できる。

13は陶器碗である。中国産の白磁であり、口縁部を玉縁状に肥厚させる。

14～17は平瓦である。いずれも古代に属する瓦であり、凹面には布目を残す。端面を垂直にするものと(17)、斜めにするもの(14)がみられる。

18は丸瓦である。凹面には布目が残り、凸面には繩叩きの後ナデを施す。

出土遺物の中で、明確に近世以降に下るものは見られないが、遺構の方向や構造から、近世のものであると判断した。

SD4006 4-1区の北側で検出された。SD4005と同様の方向と位置にあたるが、SD4005に後出することから、SD4005埋没後に機能した地境の溝と考えられる。

SD4011(第12図) 4-1区で検出された。条里方向に合致する溝であるが、深度も浅く流水の痕跡も確認できないため、水路としての機能は想定しがたい。出土遺物は第12図に示した。

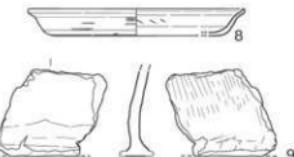
19は土師質土器足釜である。口縁端部は丸くおさめ、下方に下がる帯を巡らせる。

出土遺物からは中世後半の年代が想定できるが、遺構の深度や方向から考えても、近世に下る可能性が高い。

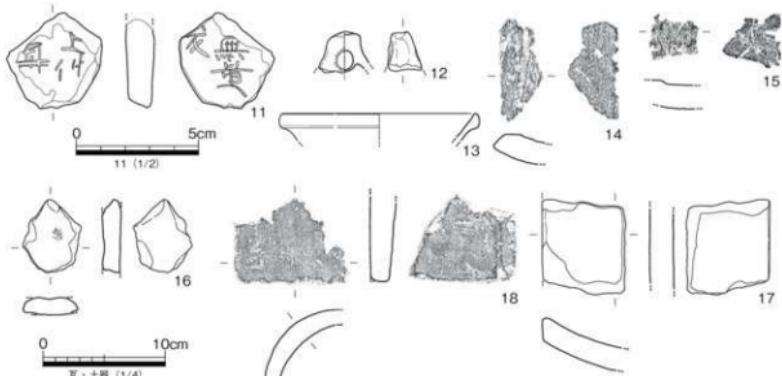
SD4020 4-4区中央で検出された。東西方向に延びており、深度は浅い。SD4011を切ることから、それに後出する近世の溝であると考えられる。



第9図 SD4001出土遺物



第10図 SD4002出土遺物



第11図 SD4005出土遺物

井戸

SE4001 (第13図) 4—3区で検出された。検出時は直径3mほどとの堀方を持ち、中心部には底面に向けすばまる石組みを持ち、それを井戸側としている。石組は一重であり、その裏込土には小礫も含め礫を比較的多く混ぜる。深度は2mほどである。

出土遺物は、裏込め土、井戸埋土からそれぞれ出土しており、第14・15図に示した。

20～26は裏込め土（1層）出土の遺物である。

20は土師質土器摺鉢である。外面にはユビオサエの痕跡を残し、内面には摺目が1単位確認できる。

21は平瓦である。凹面、凸面共にナデにより調整を消している。

22は須恵器甕である。体部片であり、外面には格子叩きを施す。

23は土師質土器鍋である。口縁端部を上方につまみ出し、内面には横方向のハケを施す。

24、25は土師質土器足釜である。口縁部下に下方を向く突帯を巡らせる。

26は土師質土器鍋である。やや内傾する口縁部に、貼り付けによって把手を取り付け、穿孔を施す。

27、28は層位不明の遺物である。

27は白磁碗である。体部の破片であり、やや立体感に乏しい蓮弁を持つ。

28は平瓦である。凹面には糸切痕を残し、凸面にはナデを施す。

29～38は井戸埋土（3層）出土の遺物である。

29は土師質土器足釜である。脚部の取り付く部分であり、内面は斜め方向のハケ、外面は長いストロークのナデを施す。

30は土師質土器皿である。底部は回転へら切りによって切り離し、外面には回転ナデを施す。

31は土師質土器摺鉢である。内面に間隔をあけた摺目を持ち、外面にはユビオサエの痕跡が残る。

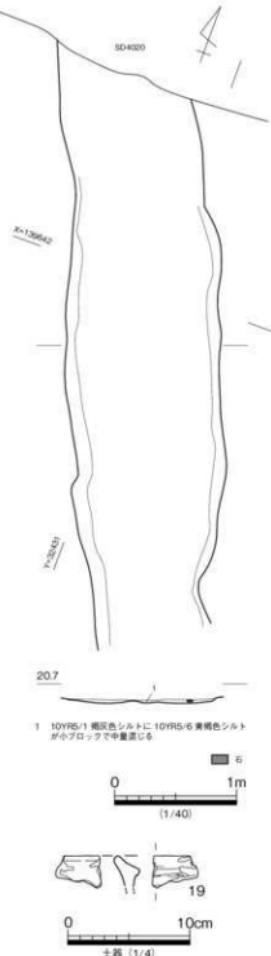
32～35は丸瓦である。いずれも凹面にはコビキ痕を残し、そののちにナデやケズリを施すものがある。凸面は叩きの痕跡をナデによって消している。

36は軒丸瓦である。凸面には瓦当に垂直にストロークの長いナデを施す。文様は珠文と巴文であり、中近世に多く見られる文様構成である。

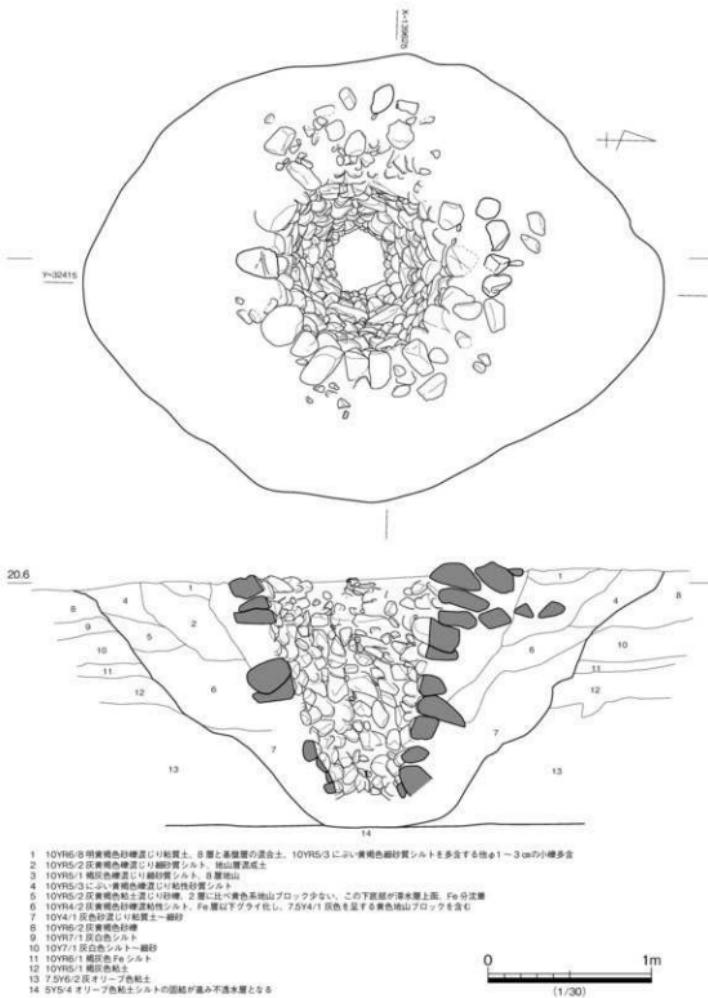
37、38は平瓦である。凹面には糸切痕（ユビキ A）を残し、凸面はナデにより叩きなどの調整を消している。出土遺物から、SE4001は近世以降に埋没したと考えられる。

柱穴

SP4001・SP4002 4—2区で検出された。柱穴間の間隔は広くなるが、SP4001とSP4002が組み合う可



第12図 SD4011 平・断面 出土遺物



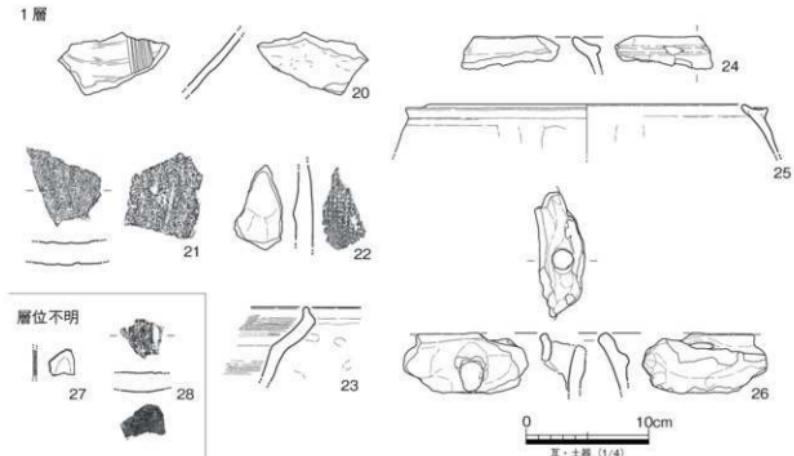
第13図 SE4001 平・立面

能性が高い。その場合、柱穴の並びが現在の地割と同一の方向を示すことから、近世の遺構であると判断した。

SP4003 4-3区で検出された。SD4003 を切ることから、近世以降の遺構である可能性が高い。

不明遺構

SX4001 4-1区で検出された。大半がトレンチによって切られており、詳細は不明である。



第14図 SE4001 出土遺物 1

SX4002 4-2区北端で検出された。平面楕円形の浅い遺構である。出土遺物は古代のものが多いが、遺構の検出面や、ほかの遺構との切り合いからも、近世の遺構であると判断した。出土遺物は第16図に示した。

39は灰釉陶器壺である。体部の破片であり、体部上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリを施す。

40は平瓦である。端部は残存していないが、凹面にはナデ、凸面にはケズリを施す。

SX4004 4-2区南端で検出された。南北方向に長い長楕円形の平面形を呈する。地境の近辺にあることや、その平面形態や出土遺物から、近世に掘削された廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第17図に示した。

41は須恵器壺である。口縁部に2条沈線を施す。

42は土師器壺である。外反する口縁を持ち、口縁端部は面を持つ。

43は須恵器横瓶である。口縁端部は内溝し、体部は樽状の形態をもつ。焼成がやや甘く、内外面に多くユビオサエの痕跡を残す。

44は丸瓦である。凸面には襷叩きの後ケズリ、凹面にはナデを施す。

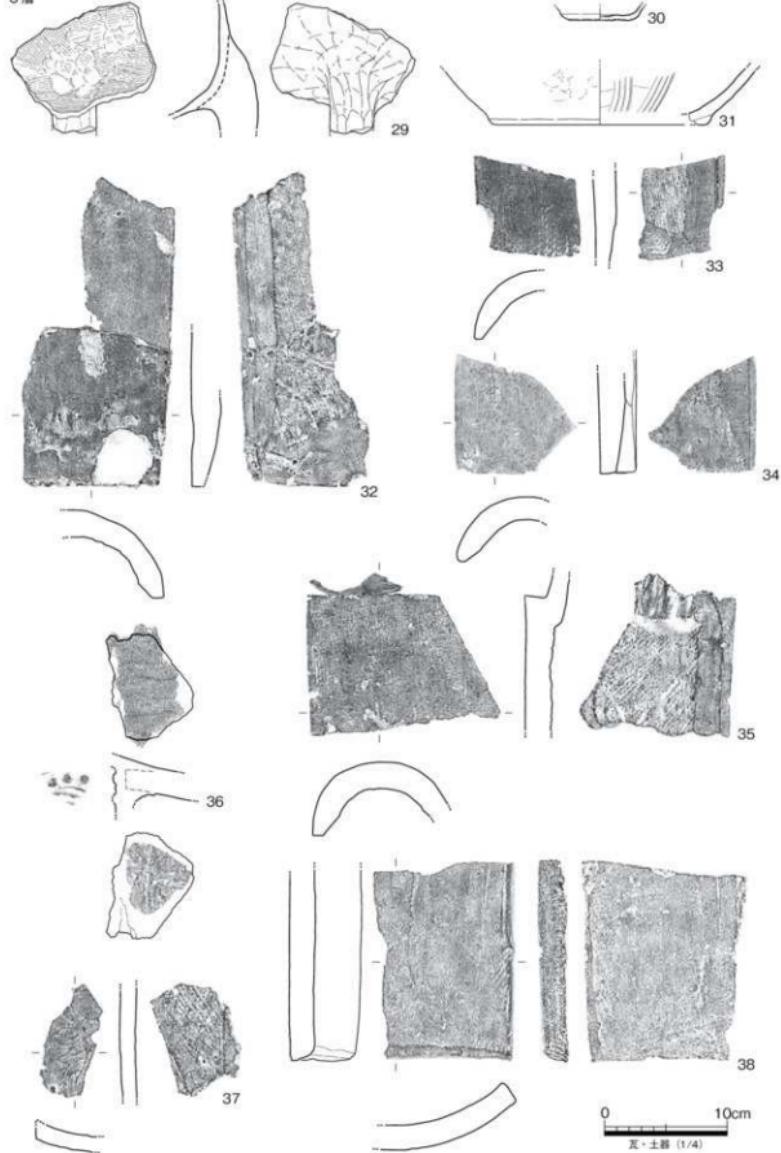
45は焙烙である。岡本産の焙烙であり、体部下半にはほとんど調整の痕跡もみられず、体部上半との境界が明瞭となるため、下半は型による成形の可能性が高い。胎土に雲母を含むといった特徴からも、岡本産の可能性が高い。大きく開く口縁部をもち、端部にやや丸みをもたせる。

出土遺物から、近世の遺構であると考えられる。

SX4005 4-4区で検出された。平面形態は隅丸の長方形状を呈し、埋土は礫を多く含む。調査地周辺の地割と同一の方向で掘削されていることからも、近世の廃棄土坑であると判断した。

SX4006 (第18図) 4-4区南端で検出された。平面形態は不整形であり、深度も0.1mほどと浅い。時期を示す遺物は出土していないが、長軸の方向がSX4005と同一方向であることからも、近世の遺構であると判断した。

3層



第15図 SE4001出土遺物2

SX4007 4-4区南端で検出された。大半が調査区外に広がり、詳細は不明である。

(2) 中世の遺構

溝

SD4004 4-1区で検出された。南北方向に延びる溝であり、調査区を挟み5区にも続いている。

SD5001と一部連続する可能性もある。遺構の大半は5区に続くが、これらはおおむね現在の地割と合致している。出土遺物については、大半が古代の土器であるが、少量中世後半の土器を含む。出土遺物から中世の遺構であると判断した。出土遺物は第19図に示した。

46は土師質土器皿である。外面に細かい単位のナデを施す。

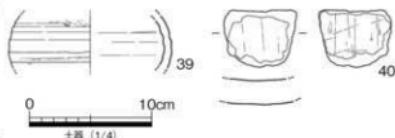
47は土師質土器杯である。やや内湾気味の口縁部を持ち、内外面とも回転ナデを施す。底部はヘラ切りによって切り離す。

48は土師器椀である。口縁端部がやや肥厚する。

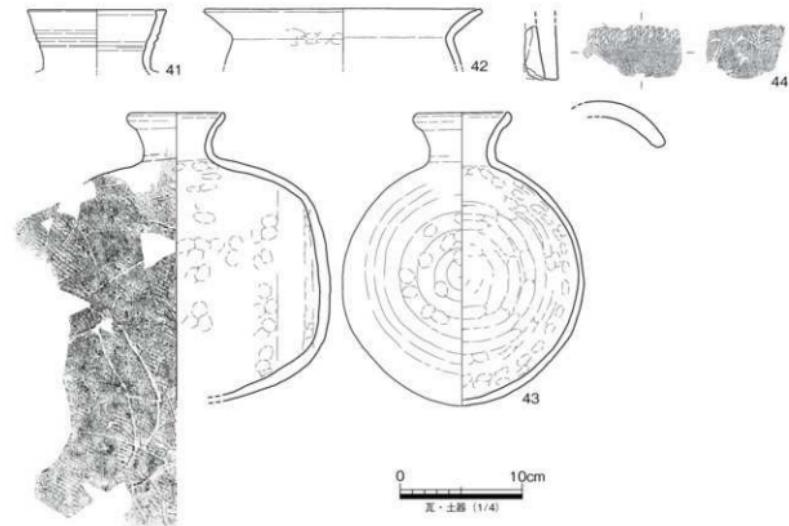
49は青磁椀である。龍泉窯産であり、外面には蓮弁を表現する。

50は白磁碗である。底部の破片である。

51は白磁皿である。口縁端部でやや屈曲する。



第16図 SX4002 出土遺物



第17図 SX4004 出土遺物

52は須恵器楕である。西村産の楕であり、口縁端部のみ残存している。

53は土師器楕である。体部で屈曲し、口縁端部にかけて外反する形態を呈する。西村型土器楕と考えられる。

54は須恵器楕である。西村産の須恵器楕であり、内面に横方向のミガキを施す。

55～57は土師器楕である。いずれも高台が残存している。55、56は高台の先端がとがり、やや外方に踏ん張る形態を呈する。57は断面U字型の高台を貼り付ける。西村型土器楕の可能性が高い。

58は瓦器楕である。和泉産の瓦器楕であり、高台は低い断面V字状のものが取り付く。体部外面にはユビオサエの痕跡が残り、内面にはミガキをまばらに施す。

59は須恵器甕である。亀山焼の甕であり、59-1～6は同一個体であると考えられる、いずれも外面に格子叩き、内面に同心円状の当て具痕を残す。

SD4007 4-1区で検出された。SD4004を切っているが、詳細は不明である。出土遺物は第20図に示した。

60は須恵器楕である。西村産の須恵器であり、口縁端部のみ残存する。

SD4009 (第21図) 4-4区で検出された。小規模な溝であり、やや湾曲しつつ北西方向に延びる。足釜の脚部片などが出土しており、中世後半の遺構である可能性が高い。

SD4010 4-4区で検出された。SD4009を切る溝である。出土遺物は第22図に示した。

61は土師質土器足釜である。外面にほぼ水平方向に取り付く突帯が巡り、口縁部は垂直に立ち上がる。

SD4022・SD4023・SD4024・SD4025 (第23図) 4-4区で検出された。調査時はそれぞれを個別の遺構として検出したが、本来的には同一の遺構であったと考えられる。溝の幅に対して、深度は0.1mほどと浅い。SD4023が、SD4021と同方向に延びており、近似する時期の遺構である可能性が高いことから中世の遺構であると判断した。出土遺物は、第24・25図に示した。

62は土師質土器皿である。口縁部にかけて外反し、口縁端部にはナデにより面を作る。底部の切り離し方法は、切り離し後にナデを行い不明である。

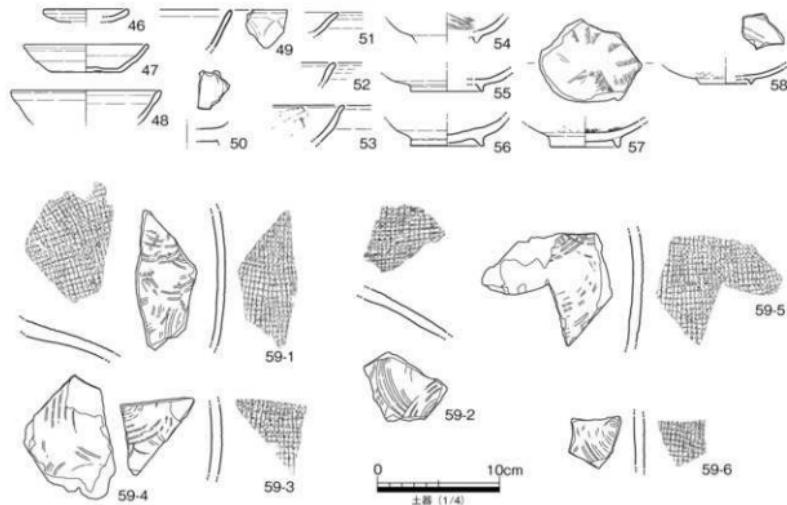
63は土師質土器杯である。体部外面には回転ナデ、内面には不定方向のナデを施す。

64は土師器楕である。断面U字形の高台をもち、高台はやや外方に広がる。

SD4021 (第26図) 4-4区北側で検出された。湾曲しながら北西方向に流下する溝であり、6区にも延長が確認できる。深度は0.5mほどであるが最大幅は2mを測り、埋土からは顕著な流水の痕跡は確認されなかった。溝の規模や、流下の方向から、灌溉に伴う水路としての機能が考えられる。出土遺物



第18図 SX4006 平・断面



第19図 SD4004 出土遺物

は第27・28図に示した。

65は瓦器椀である。和泉産であり、口縁部が大きく開く。

66は黒色土器椀である。高台が外方に踏ん張る形態を呈する。

67は土師器壺である。口縁部がやや肥厚する。

68～72は土師質土器皿である。68は口縁部がやや内湾する。69、70、72は口縁部が直線的に外方へ開く。いずれも底部は回転ヘラ切りによって切り離す。71は急角度で立ち上がる。底部はヘラ切りによって切り離す。

74～76は土師器椀である。いずれも断面U字状の高台がやや外方に開くように貼り付けられる。

77は黒色土器椀である。外方に強く開く高台を貼り付け、高台高が低い。口縁部も外方に大きく開く。

78は白磁皿である。外縁は細かい単位のナデが残る。見込みには圈線を持つ。

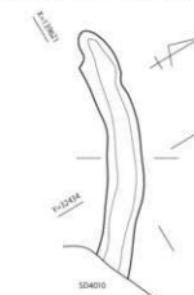
79は土師質土器杯である。口縁部が外反し、体部には細かい単位のナデを施す。

80、81は土師質土器椀である。胎土は精良であり、口縁部下に沈線を施す。体部下半にはユビオサエの痕跡が残る。81は吉備系の白色土器碗であり、やや浅い器形を持つ。

82は須恵器椀である。西村産の須恵器であり。口縁部が外反する。内



第20図 SD4007 出土遺物



1 10Y95/2 黒葉緑色シルトに 10Y95/3
による深緑色シルトがまだらに混じる



第21図 SD4009 平・断面

外面ともに横方向のミガキを施す。

83、85、87～89は瓦器碗である。いずれも和泉産の瓦器碗である。

83は断面台形の低い高台を持つ。85は外方に広がる高台を持ち、体部下半にユビオサエの痕跡を持つ。87は体部中位で屈曲し、口縁端部まで直線的に伸びる。内外面に密にミガキを施す。88は低い高台をもち、不整方向のミガキを見込みに施す。89は口縁部に強いヨコナデを施し、高台は外方に大きく開く。

84は黒色土器碗で、内面のみ黒化する黒色土器A類の碗である。高台のみ残存するが、高台は低く、見込みに密にミガキを施す。

86は陶器碗である。いわゆる山茶碗である。底部を回転糸切りによって切り離したのちに、断面三角形の高台を貼り付ける。口縁部はやや外反する。

90は須恵器蓋である。口縁部のみ残存し、端部は屈曲するが、明瞭な面をもたず丸みを帯びる。

91は須恵器皿である。口縁部が外反し、端部が細くとがる。内面に火櫻が残る。

92は須恵器杯である。高台を持つ杯Bであり、口縁部まで直立気味に立ち上がる。高台は低く、やや外方に踏ん張る形態を呈する。

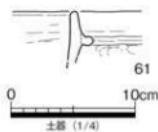
93は土師器高杯である。浅い杯に断面多角形状の脚部がとりつく形態が想定される。口縁端部はやや上方に曲がり、内面には右上がりのミガキを施す。

94、95は須恵器平瓶である。94は口縁部であり、口縁端部は丸くおさめる。95は把手の部分である。

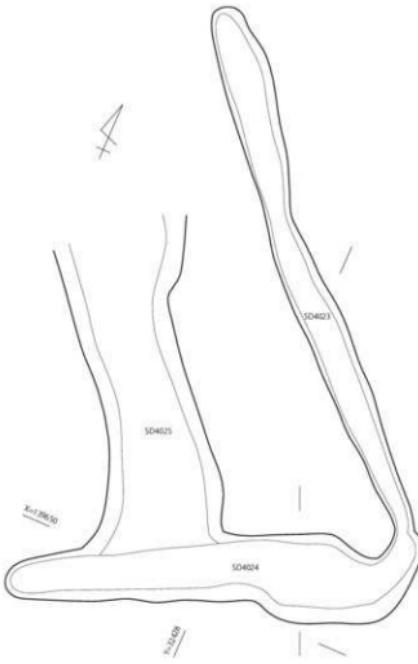
96は蛸壺である。穿孔部上面に、穿孔方向に直行する形でナデを施しへこませる。

97は不明土師器である。底部の破片であるが、器種などは不明である。

98は須恵器甕である。外面に格子叩き、内面に同心円状の当て具痕を残す体部の破片であるが、内面に墨の痕跡を残すことから、硯として転用されたものと考えられる。



第22図 SD4010出土遺物

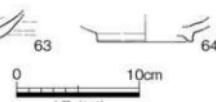


第23図 SD4024 平・断面

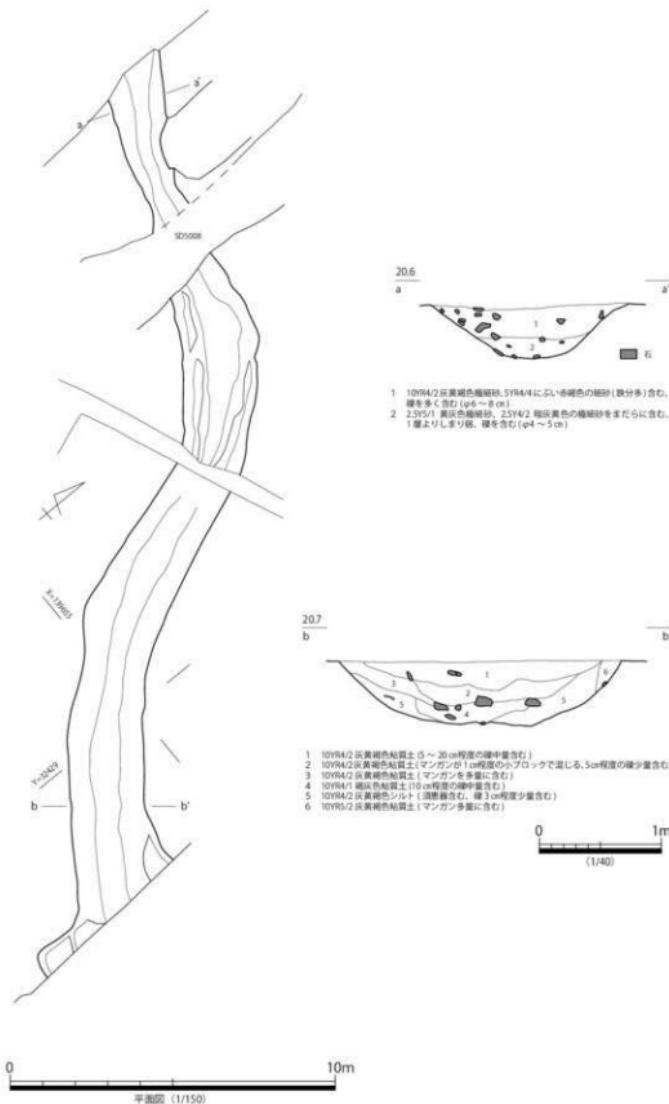


第24図 SD4024

出土遺物



第25図 SD4025出土遺物



第26図 SD4021平・断面

99、100は須恵器壺である。99は口縁部であり、口縁端部に向けて外反する形態を呈する。100は体部である。内面に回転ナデの痕跡を残す。

101は土師器甕である。口縁部下に水平に伸びる鋸を巡らせる。口縁端部はナデにより、内方・外方に少しづつみ出したような形態を呈する。

102は須恵器甕である。頸部から口縁部が残存しており、内面には同心円状の当て具痕が残る。

103は須恵器鉢である。外面には格子タタキとヨコナデの痕跡が残る。摺鉢の底部である可能性が高い。

104～108は土師器甕である。いずれも厚い器壁を持ち、口縁部が屈曲し、外方に直線的に伸びる形態をもつ。104はややとがり気味の口縁端部を持つ。105は体部が袋状となる。105～107は口縁端部に面を持ち、107は端部をやや上方につまみ出す。108は口縁端部が欠損しているが、口縁端部のつまみ出しが強い。

109は須恵器甕である。体部の破片であるが、外面に平行叩きを施し、内面は叩きの痕跡をヨコナデによって消している。

110は平瓦である。凸面に格子叩き、凹面には布目を残す。

111、112は丸瓦である。111は凸面の調整は不明であるが、凹面には布目を残し、端面はナデを施す。112は凸面にナデ、凹面には布目を残し、端面はケズリによって面取りを行う。

SD4021の出土遺物は、古代の遺物も含みながら、最新段階の遺物の年代観を参照すると、中世前半の埋没が想定される。特に瓦器椀などの年代を評価すれば、13世紀前半の埋没が想定される。溝自体の流下方向が、中世後半以後の遺構に見られるような地割とはかなり異なった方向を示すことや、時期的に遡るが、SD4028といった古代の水路と同様の方向性を示し、それよりやや低地へ向かう北側に位置することから、低地の埋没に伴い、古代の水路の方向を踏襲しながら、地形に合わせて開削された水路と考えられる。

土坑

SK4001（第29図）4-4区で検出された土坑である。SD4021に直交する方向に集中する柱穴群に切られている。径1.3m程の掘方を持つ。出土遺物は第33図に示した。

113は土師質土器皿である。小皿であり、口縁部付近でやや屈曲し、端部は垂直気味に立ち上がる。

114、115は瓦器椀である。いずれも和泉産の瓦器椀であり、114は内外面ともにミガキを施す。115は体部下半にユビオサエの痕跡を残す。

116は土師器甕である。口縁部で屈曲し直線的に外方へ延びる。口縁端部はやや肥厚するが、端面を明瞭に持つ。

出土遺物からは、中世前半に埋没した遺構であると考えられる。

SK4002（第30図）SK4001のすぐ南で検出された径0.8m程の深い土坑である。出土遺物は第33図に示した。

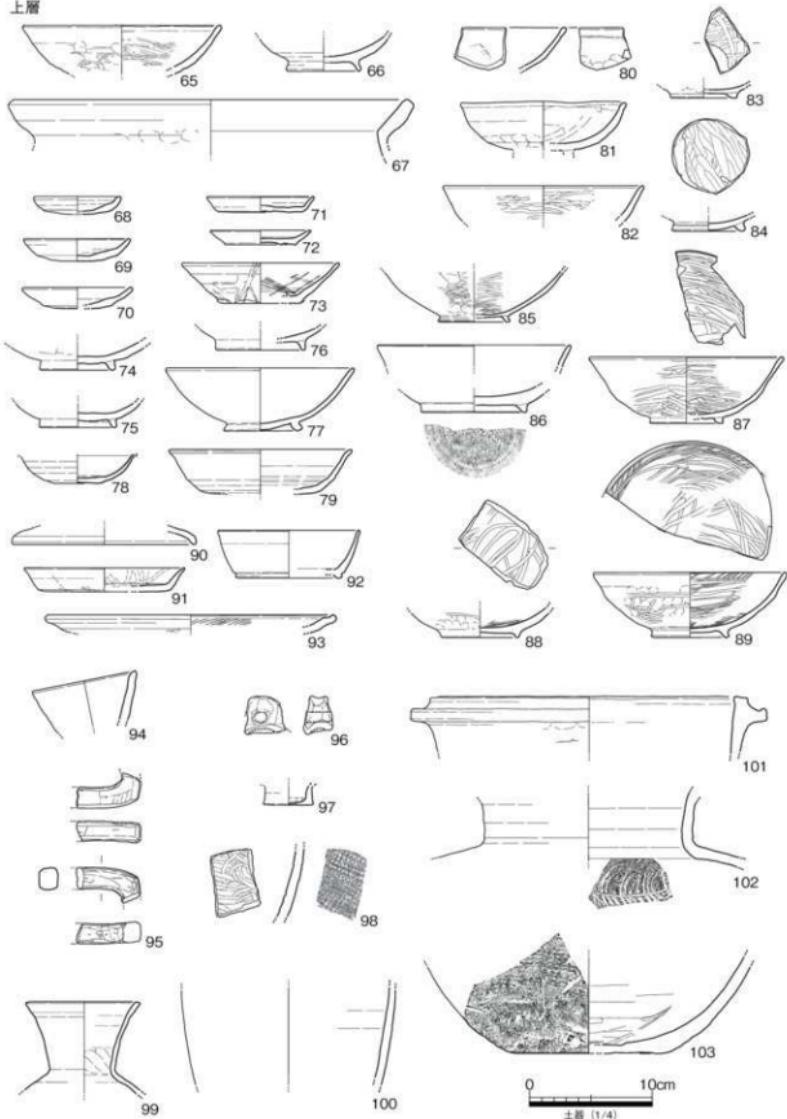
117は土師器高杯である。脚部の破片であるが、断面多角形の脚部に、浅い杯がとりつく形態の高杯となることが想定される。

118は瓦器椀である。和泉産の瓦器椀であり、外面にはヨコナデとユビオサエの痕跡を残し、内面には横方向のミガキを施す。

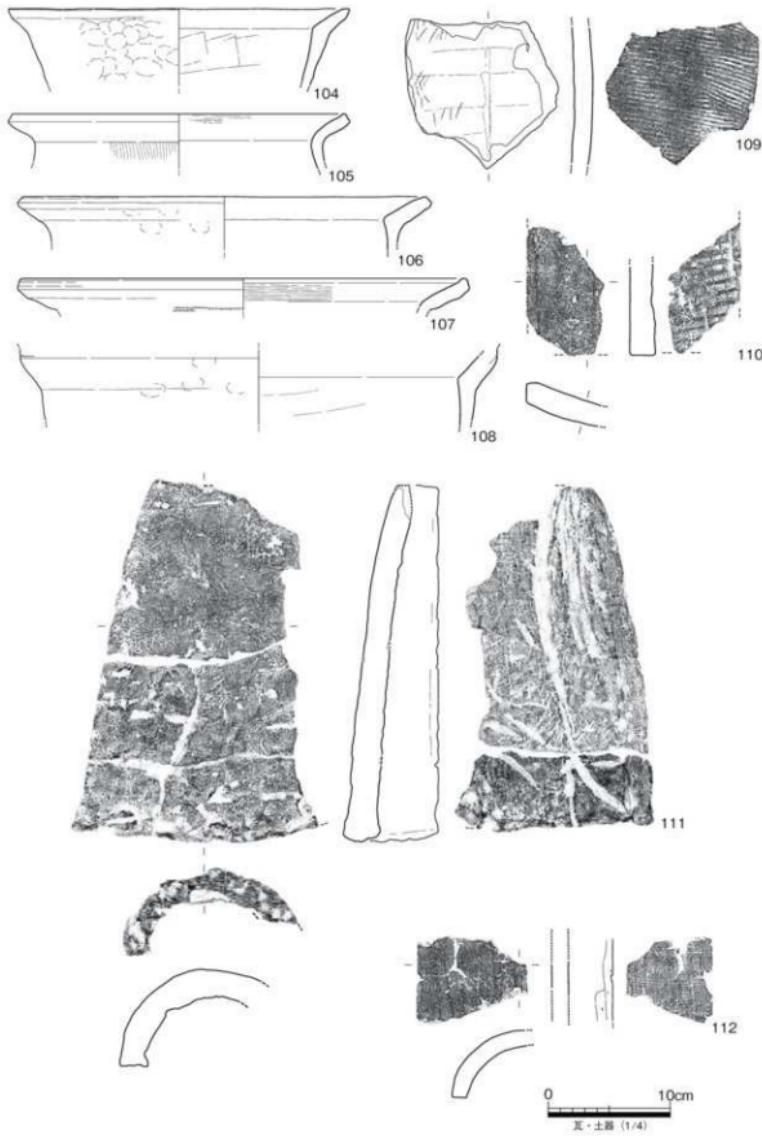
出土遺物からは、中世前半の遺構であると考えられる。

柱穴

上層



第27図 SD4021出土遺物1



第28図 SD4021出土遺物2

柱穴は4-4区で集中して検出された。それらは建物などを構成するようなものとはならないが、柱穴の集中する範囲が、SD4021などの溝と同一の方向に分布することから、大半が中世前半にあたると考えられる。

SP4004 (第33図) 4-4区で検出された。SD4021に直交する方向に集中する柱穴群の一つである。直径は0.3mを測る。出土遺物は第33図に示した。

119は土師質土器皿である。小皿であり、底部が平坦でなく丸みを帯びる。

120、121は土師器碗である。いずれも焼成は不良であるが、西村型の土器碗に類似する。

SP4006 (第33図) 柱穴群よりやや南で検出された。径0.3mの柱穴である。出土遺物も第33図に示した。

122、123は瓦器碗である。いずれも和泉型の瓦器碗であり、口縁部にヨコナデを施し、やや外反気味の口縁部形態を呈する。123は強いヨコナデを施し、ミガキはやや粗となる。

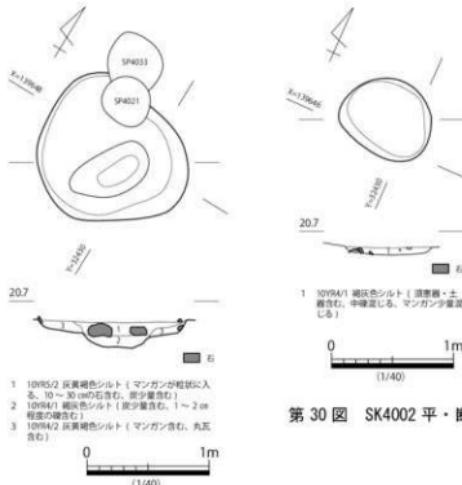
SP4007 (第33図) 柱穴群の

西側で検出された、径0.3m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

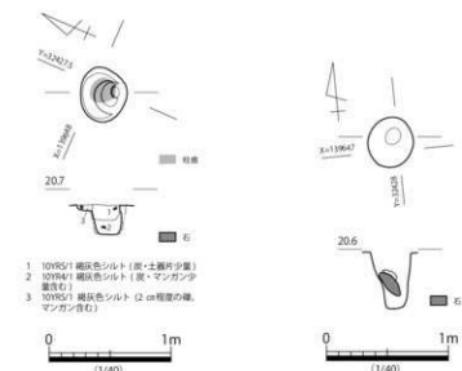
124は灰釉陶器碗である。体部のみが残存する。

SP4016 (第33図) 柱穴群の西側で検出された。径0.3m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。125、126は土師質土器皿である。いずれも底部はへら切りによって切り離すが、125は全体に丸みを持ち、126は底部との境界が明瞭で口縁部は直線的に伸びる。

SP4017 (第31図) 柱穴群の中央部付近で検出された柱穴である。2段掘り状の形態を呈するが、掘方は径0.45m程となる。出土遺物は第34図に示した。



第29図 SK4001 平・断面



第30図 SK4002 平・断面

第31図 SP4017 平・断面

第32図 SP4024 平・断面

127は瓦器椀である。和泉型の瓦器椀であり見込みには密にミガキを施す。

128は土師器椀である。外面に回転ミガキを施す西村型の土器椀である。

SP4018（第33図）SP4017の東側で検出された柱穴である。SP4017と同様2段掘り状の形態を呈する。出土遺物は第34図に示した。

129は土師質土器皿である。浅い器形に大きく開く口縁部を持つ。底部の切り離し方法は摩滅により不明である。

130は土師器甕である。口縁部がくの字状に屈曲し、直線的に外方へ延びる形態を呈する。口縁部は外面がやや肥厚し、端部は不明瞭ながら面を持つ。

SP4021（第33図）柱穴群東側で検出された。径0.3m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

131は瓦器椀である。和泉型の瓦器椀であり、口縁部がやや内湾する。

SP4022（第33図）柱穴群東側で検出された。径0.6m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

132は黒色土器椀である。外面にはヨコナデ、内面には横方向のナデを施す。

SP4024（第32図）柱穴群中央で検出された。径0.3m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

133は土師器鍋である。丸みを帯びる体部から、口縁部は屈曲し外方に開く。口縁端部はナデにより面を持つ。

134は平瓦である。凸面に繩タタキ、凹面に布目を残す。側面まで布目の痕跡が確認できる。

SP4025（第33図）柱穴群の東端で検出された。SP4026に切られる柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

135は土師器椀である。口縁部は内湾気味となる。調整は摩滅により不明である。

SP4026（第33図）柱穴群の東端で検出された小柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

136は土師器椀である。明瞭ではないが、口縁端部付近がヨコナデによりややへこんでいる。

SP4027（第33図）柱穴群の東側で検出された、平面形態が不整形な遺構であるが、周囲の遺構の状況から柱穴と判断した。出土遺物は第34図に示した。

137は土師質土器皿である。器高は低いが、口縁部は強く外反する。底部はへら切りによって切り離す。

138、140は土師器椀である。いずれも外面にヨコナデの単位が確認できる。西村型の土器椀の可能性が高い。

139は土師質土器杯である。口縁端部はやや先細りの形態を呈する。

SP4029（第33図）柱穴群の南で検出された。径0.6m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

141は土師器椀である。外面にヨコナデの単位が数単位確認できる。胎土の特徴はやや異なるが、西村型の土器椀に類似する。

SP4030（第33図）柱穴群の南で検出された小柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

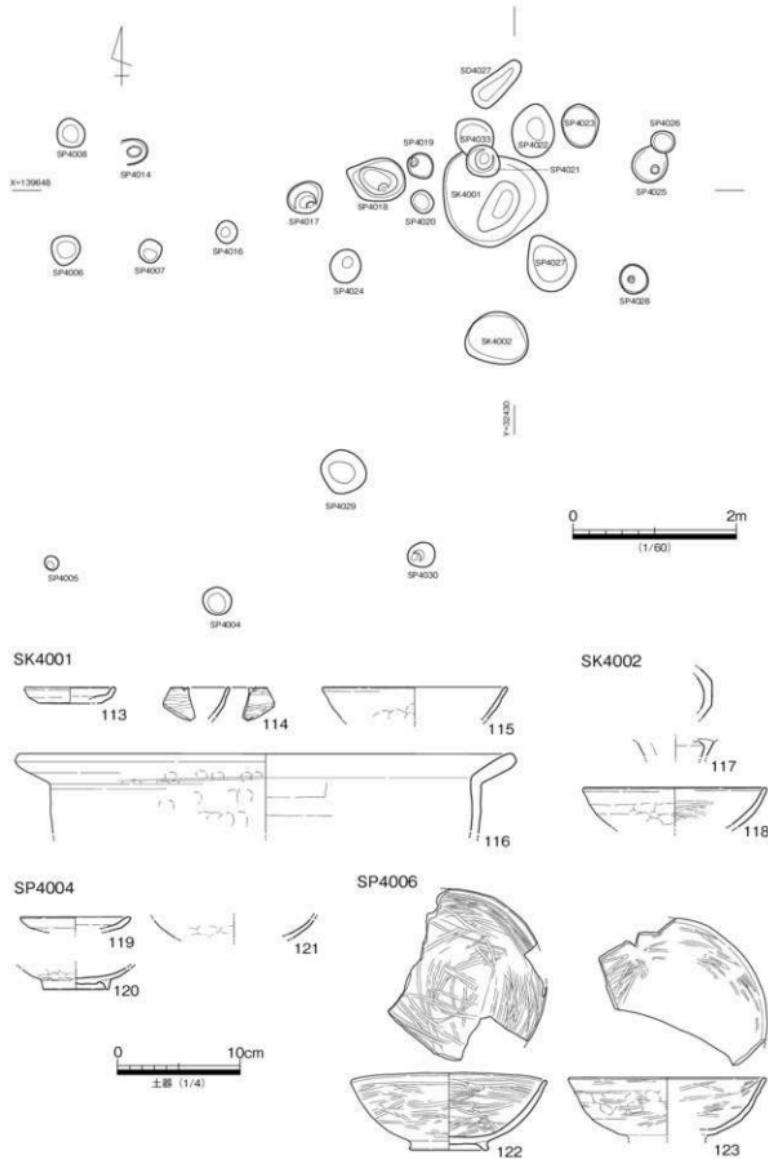
142は土師質土器杯である。口縁部の開きが強く、端部が先細りする。

143は瓦器椀である。和泉産の瓦器椀であり、内面には不整方向のミガキが残る。

SP4033（第33図）柱穴群の東側で検出された。SP4021に切られる柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

144は瓦器椀である。外面に、比較的密に横方向のミガキが施される。

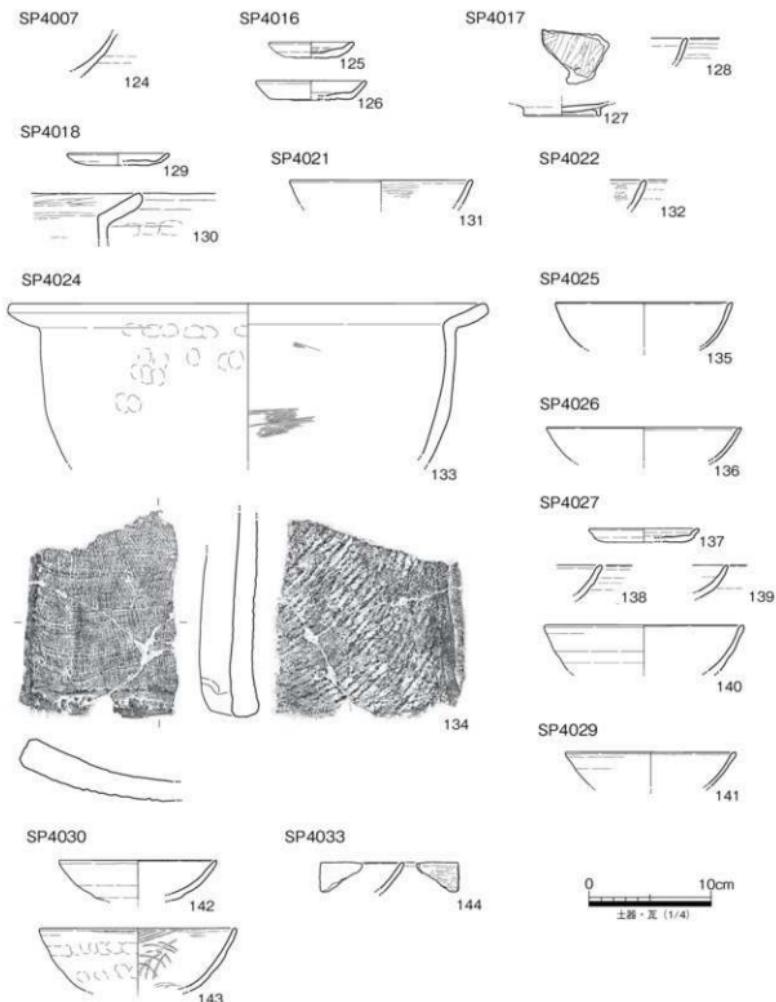
SP4035（第35図）直径0.3m、深さ0.1mほどの柱穴である。中心に須恵器壺（148）を据えられたような状態で検出した。出土遺物は第36図に示した。



第33図 4区1面 柱穴群平面・出土遺物1

145は土師質土器皿である。底部の切り離し方法は不明である。口縁部は、直線的に外方へ大きく開く。
 146、147は土師器碗である。146は口縁端部のみ残存する。147は外面に細かい単位のナデを施し、下部にはケズリ状の調整の痕跡が確認される。

148は須恵器壺である。口縁端部を上方につまみ出す。体部上半に回転ナデ、下半に回転ヘラ削りを施す。
 柱穴群の年代については、出土土器の傾向から、おむね中世前半にまとまるようである。その中で



第34図 4区1面 柱穴群出土遺物2

も、和泉型の瓦器の年代を参考にすれば、13世紀前半ごろの年代が考えられる。

(3) 古代の遺構

溝

SD4028 (第37～39図) 4-4区北側で検出された溝である。調査時は3面で検出されているが、1面まで掘り込み面が上がる。北西方向に流下し、平面形態は、ほぼ直線的に流れる。断面図作成位置から最大幅は3.4mとなり、最大深度1.6mを測る大型の溝である。溝の断面の形態はほぼV字状となり、底面付近はかなり幅が狭くなる。

埋土は大別して3層に分けられる。最上層・上層は、礫を多く含む褐色系統の細粒砂を中心とし、中層は灰色～黒色の極細砂、ないしはシルトで構成される。下層は黒色・灰色の粘質土からなり、部分的に粒径の粗い堆積物の層が混じるほか、ラミナが確認できる部分もあり、下層については流水の痕跡が認められる。

なお、中層において、木柵と考えられる木製品が流下方向に平行して検出されおり、中層埋没段階で、掘り直しが行われている (SD6006 や5～12層相当の溝) ことが明らかである。中層堆積後～上層堆積までにはある程度の時間差が想定される。

出土遺物は第40～53図に示した。

最上層出土遺物

149は須恵器蓋である。杯の蓋であり、口縁端部に面をもち、外面上半には回転ヘラケズリを施す。径3.3cmほどの低いつまみがとりつく。

上層出土遺物

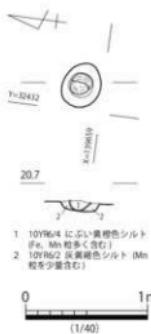
150、152～154、156、157は須恵器杯である。150は口縁部が直線的に立ち上がり。外面には回転ナデを施す。底部については、へら切りのうちに、ナデを施す。152は口縁部が外反する。153は底部がやや丸みを帯びる。154、157は高台がとりつく杯である。154は断面方形の高台がやや外方に開く。156は高台が外方に開く。157は高台が欠損している。見込みには細かいナデの痕跡を残し、底部にはミガキを施す。

153は土師器杯である。内外面ともに回転ナデを施し、底部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。158は須恵器壺である。長頸壺の口縁部が欠損したものであり、体部下半に回転ヘラケズリを施す。高台は貼り付けであり、底部には爪による圧痕が残る。

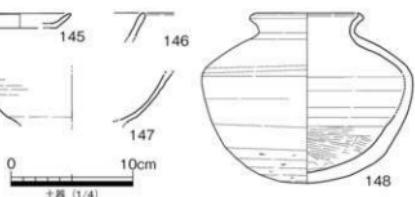
159は須恵器甕である。口縁端部が垂直気味に立ち上がる形態を呈する。

160は土師器鍋である。鉢状の体部に、外方へ大きく開く口縁部を持つ。口縁端部はナデにより面を持つ。

161は丸瓦である。凸面にはナデ、凹面には布目を残す。端面については、ケズリによって面取りを行う。



第35図 SP4035 平・断面

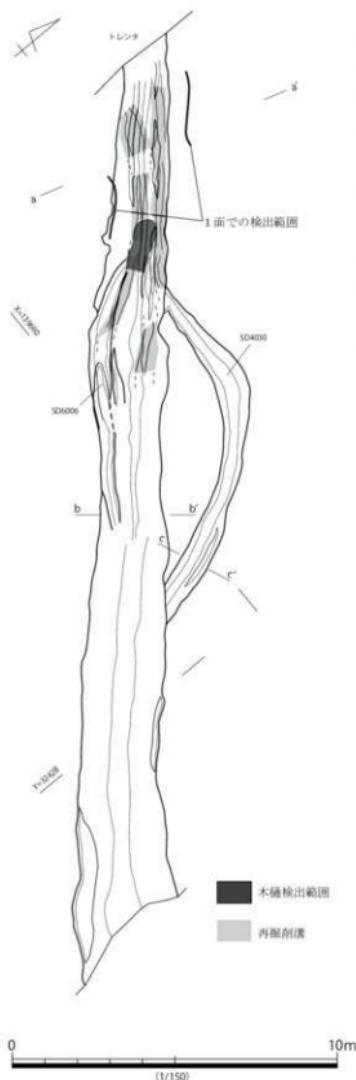


第36図 SP4035 出土遺物

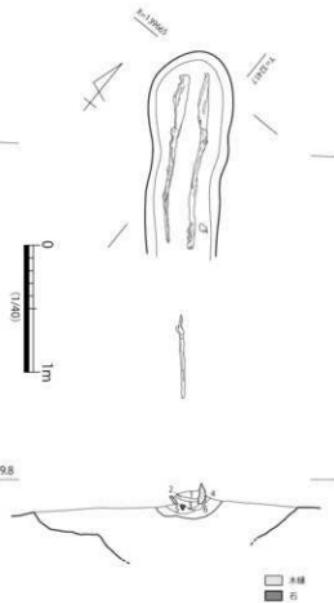
中層出土遺物

162～167は須恵器蓋である。いずれも杯に伴う蓋であるが、162は宝珠形のつまみがとりつき、高台を持つ杯Hの蓋である。口縁部にかえりをもち、外面上半には回転ヘラケズリを施す。163はかえりを持つ杯Gに伴う蓋であり、外面は全面ナデを施し、天井部が高くなる。164、165は宝珠形のつまみを持つ蓋である。高台を持つ杯Bに伴うものであり、口縁端部をナデにより面を作り、端部をやや下方につまみ出す。166、167は扁平なつまみを持つと想定される。167は外面上部にのみ回転ヘラケズリを施す。

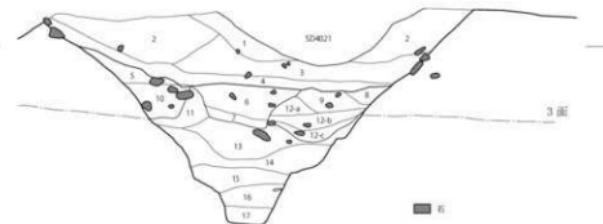
168～176は須恵器杯である。168～172は高台を持たない杯Aであり、169、171は直線的に伸びる口縁部を



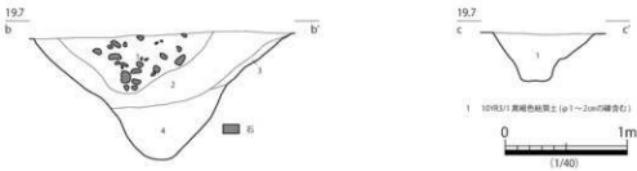
第37図 SD4028・SD4030・SD6006 平面



第38図 SD4028 木柵出土状況



- 上層**
- 1 10YR5/3に近い黒褐色細粒時に10YR3/4細褐色細粒を含む。φ1~2cmの礫を含む。
 - 2 10YR5/3に近い黒褐色細粒時に10YR3/4細褐色細粒を含む。φ4~5cmの礫を含む。
 - 3 2.5Y4/5 黒褐色細粒砂、φ1~2cmの礫を含む。
 - 4 2.5Y4/5 黒褐色細粒砂、φ1~2cmの礫を含む。
 - 5 2.5Y3/0 黄オリーブ褐色細粒砂、礫を少く含む。
 - 6 SYV1/オリーブ褐色細粒砂、φ4~5cmの礫を含む。
 - 7 SYV1/オリーブ褐色細粒砂、φ1~2cmの礫を含む。
 - 8 SYV1/灰色細粒時に散在した石を含む。しまりなく砂子。
 - 9 SYV1/オリーブ褐色細粒砂、φ1~2cmの粘土の粘土ブロックを含む。
 - 10 2.5Y4/5 オリーブ褐色細粒砂、φ1~2cmの礫を含む。
 - 11 SYV1/オリーブ褐色細粒砂をわずかに含む。オリーブ褐色細粒砂を草状に含む。
 - 12 4 2.5Y4/5 黒褐色細粒砂、φ1~2cmの礫を含む。
 - 12.4 SYV1/オリーブ褐色細粒砂シート、2.5G7/6 オリーブ褐色細粒砂をうミナ状に含む。
 - 12.4 SYV1/オリーブ褐色細粒砂シート。
 - 13 SYV1/オリーブ褐色細粒砂、φ1~2cmの礫を含む。
 - 14 7SY3/1 オリーブ褐色細粒と SY2/1 黒色の粘土。地山表面の黄色ブロックを含む。φ2~3cmの礫を含む。
 - 15 7SY3/1 オリーブ褐色細粒、SY2/1 黒色の粘土。地山表面の黄色ブロックを含む。
 - 16 SY4/1 灰色細粒砂、φ2~3cmの礫を含む。
 - 17 31S1 黄色粘土。部分的に細砂・小礫を含む。
- 下層**



- 1 10YR2/2 黒褐色砂礫（粘質強、1cm~10cm程度の礫多量に含む）
- 2 10Y4/7 粘灰砂
- 3 10Y4/2 灰黑色セメントシルト（細粒多量に含む）
- 4 10Y4/2 黑褐色砂（1cm程度の礫多量に含む、5~7cm程度の礫少量含む、粘土部分がφ10cm程度含む。青灰色シルトブロック含む。暗灰色シルトがうミナ状に入る）

第39図 SD4028・SD4030・SD6006 断面

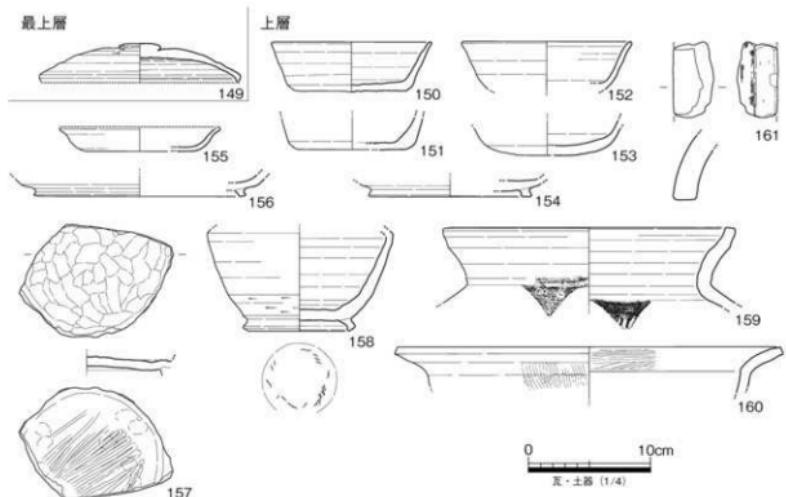
もつ。169はやや丸みを帯びる底部を持つ。172は底部径が9cmを測り、底部はヘラ切りによって切り離している。173~176は高台を持つ杯Bであり、173は方形の高台が貼り付けられ、174は断面台形の高台がやや外方に踏ん張るように貼り付けられる。175は高台が外方に広がるが、端部がやや内突する。176は高台径14.2cmを測るやや大きめの杯である。高台は断面方形で、やや外方に踏ん張る。見込みには不定方向の板ナデを施す。

177は須恵器蓋である。口径25.6cmを測り、法量からも皿に伴う蓋であると考えられる。口縁端部はナデにより面を持つ。

178は須恵器盤である。底部との境界に回転ヘラケズリを施す。

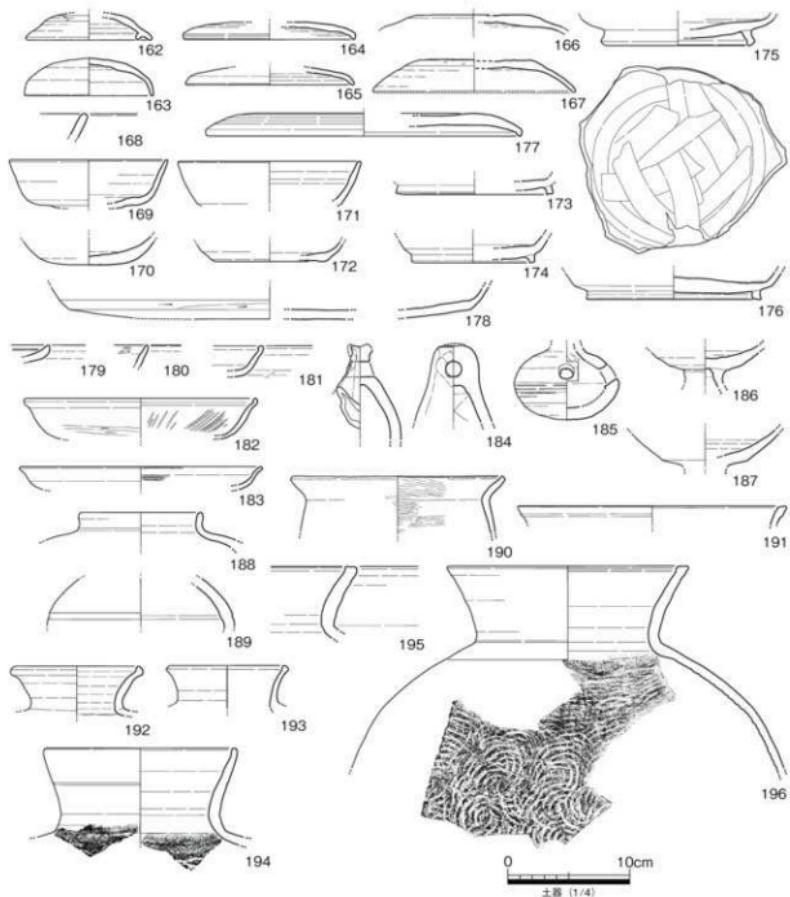
179、183は土師器皿である。179は口縁端部が上方に立ち上がる。破片のため口径は不明である。183は口縁部が端部付近で外反する。口縁部内面には、横方向のミガキを密に施す。

180~182は土師器杯である。180は直線的にのびる口縁部であり、口縁端部内面には横方向のミガキを施す。181は口縁端部が内側に肥厚し、外面底部付近にはケズリを施す。182は口縁端部を少し内側



第40図 SD4028 上層・最上層出土遺物

- に折り返し、外面底部付近にはケズリを施す。口縁部内面には見込み放射状にミガキを施す。
- 184は蛸壺である。穿孔部分の上部に穿孔方向と直交する形でナデを施し、へこみを作り出している。
- 185は須恵器はそうである。口縁部が欠損しており、楕円形の体部に穿孔を持つ。体部外面下半には、回転ヘラケズリを施す。
- 186、187は須恵器高杯である。いずれも脚部と杯部の一部が残存しており、屈曲を持ち直線的に外方へ広がる杯部を持つ。
- 188、189は須恵器壺である。いずれも短頭壺であり、188は直立気味に短く立ち上がる口縁部をもち、肩が強く張る。189は体部中央に凹線状の凹みをもつ。
- 190は土師器甕である。くの字状に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部はナデにより、やや上方に摘み上げたような形態を呈する。
- 191は須恵器甕の口縁部の破片である。残存部が少ないため詳細は不明であるが、口縁端部上面に面を持つ。
- 192、193は横瓶である。口縁部のみ残存しているが、口径が小さく、端部を上方につまみ上げることから横瓶と判断した。
- 194～196は須恵器甕である。194は垂直気味に立ち上がる口縁部を持つ。195は口縁端部上面をナデにより平坦にする。196は口縁端部をやや内側につまみ出す。体部は肩の張りが弱く、外面の調整は自然軸により不明であるが、内面には同心円状の當て具痕が残る。
- 197は丸瓦である。凸面にはナデ、凹面には布目を残し、端面にはケズリを施す。広端部の端面はへら切りによって仕上げている。



第41図 SD4028 中層出土遺物1

下層出土遺物

198、199は須恵器蓋である。いずれも杯に伴う蓋であり。198は口縁端部を下方につまみ出し、面を持たせる。199は扁平なつまみをもつ。

200～208は須恵器杯である。200、201はおそらく杯Bである。口縁が直立気味に立ち上がる。202は底部外面にケズリを施す。203は直線的に口縁部が外方に開く。204は口径が小さく、深い器形を持つ。205は底部が明瞭でない。206は底部切り離し後、細かい単位のナデによって調整を行う。207、208は杯Bであり、いずれも外方に開く高台を持つが、207は端部を丸くおさめ、208は面を持たせる。

209～215は土師器杯である。

216、217は土師器皿である。いずれも内面に暗文を持つ畿内系の土師器である。217は口縁部が内湾し、端部がやや内側に肥厚する。外面底部との境界にはヘラケズリを施す。

218、219は須恵器蓋である。いずれも皿に伴う蓋であり、口縁端部を下方につまみ出し、面を持たせる。

220、221は須恵器皿である。いずれも屈曲し直線的に外方へ広がる口縁部を持つ。

222、223は須恵器鉢である。222は口縁端部付近でくの字状に折れ曲がる形態を呈する。223は内溝する口縁部を持つ。

224、225は須恵器平瓶である。いずれも口縁部のみ残存する。

226～228は須恵器高杯である。椀型の杯部をもつ高杯であり、226は杯部の破片である。227、228は脚部の破片であり、228は脚部端に面を持たせる。

229は土師器高杯である。内外面にハケ目を残す。

230は須恵器甕である。口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部外面には格子叩き、内面には同心円状の当て具痕を残す。

231は須恵器横瓶である。胴部のみ残存し、風船状に一方所をあけた胴部を作り出したのちに粘土板で閉塞している。

232～234は土師器鍋である。把手を持つ鍋であり、232は把手のみ残存し、233は垂直気味に外反する口縁部を持つ。234は口縁端部に面を持つ。

235は土師器瓶である。筒状の体部から口縁端部まで直線的に伸びる形態を呈する。

236、237は蛸壺である。236は穿孔部分の上部に、穿孔方向と直行する方向の凹みがみられる。237は穿孔部の形態が三角形状を呈する。

238は製塙土器である。体部の破片であるが、詳細は不明である。

239はふいご羽口である。筒状の形態が、裾広がりに広がる形態を呈する。すぼまる側の外面には被熱の痕跡がわずかであるが確認できる。

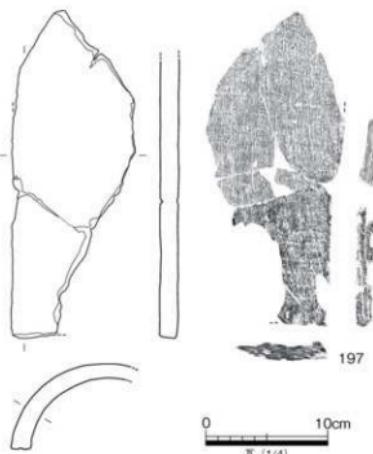
240は須恵器杯である。口縁端部はわずかに外反する。

241は土師器甕である。口縁部が大きく外反する。内面の頸部の口縁部と体部の境界が明瞭である。

再掘削溝1～3

中層埋没後に再掘削された小規模な溝群（第39図の5～12層に相当）を検出している。小溝同士にも切り合いが認められるが、遺物の取り上げの際には、峻別して取り上げることはできなかった。

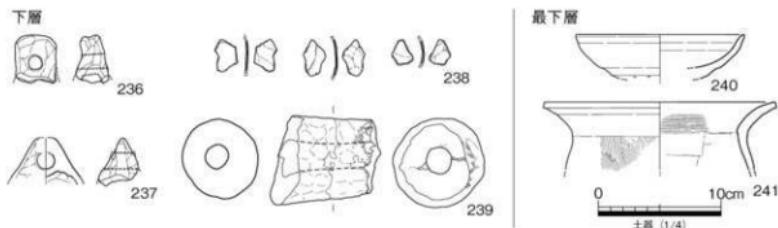
242～245は須恵器杯である。242、243は高台を持つ杯Bである。242は外方へ踏ん張る高台が取り付き、243は断面三角形の高台が外方へ開くように取り付く。244は口縁端部が外反する。245は口縁部が直線的に外方へ開く。



第42図 SD4028 中層出土遺物2



第43図 SD4028 下層出土遺物 1



第44図 SD4028 下層出土遺物2・最下層出土遺物

246は須恵器盤の可能性が高い。口縁端部上面に面を持たせる。247は須恵器壺である。頸部の破片である。

248は鉢壺である。穿孔部は円形を呈し、上面には穿孔方向と直行するへこみをなでによって作る。

249は土師器甕である。体部が直線的になる甕であり、口縁端部は面を持たせ、やや内湾する。

250は土師器皿である。口縁部が外反し、端部が上方につまみ上げられる。外面には横方向のミガキを施す。

251、252は須恵器甕である。251は小型の甕の口縁部であり、端部の上面がナデにより平坦に仕上げられる。252は口縁が直立気味に上方へ延び、端部がわずかに外反する。

253は須恵器杯である。断面方形の高台が外方に開くように貼り付けられる。

254は須恵器甕である。口縁端部を拡張し、ナデを施し凹線状のへこみを作る。

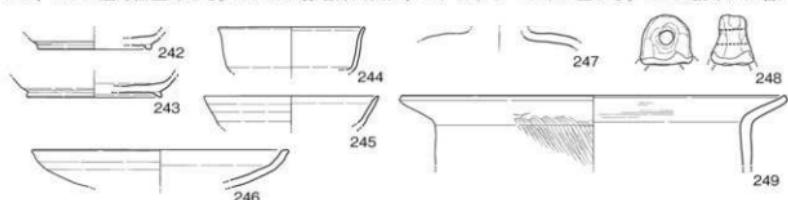
255は須恵器壺である。肩部に緩い稜を持つ。

層位不明遺物

256は須恵器蓋である。口縁端部が下方に折り曲げられ、端部に面を持つ。

257、258は須恵器杯である。257はやや口径が小さく、深手の器形を持つ。258は高台が外方へ開き、端部がナデによりわずかに拡張される。

259、260は土師器皿である。259は口縁端部内面に、ナデによりへこみが生じる。260は緩やかに屈曲



第45図 SD4028 再掘削溝出土遺物

する器形を持ち、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともにヨコ方向のミガキを施すが、全体的には回転ナデにより成形を行っている。

261は須恵器壺である。おそらく細い口縁部が取り付く。底部付近はケズリによって調整する。

262、263は土師器壺、鍋、瓶等の取手である。

264は土師器甕である。口縁端部は上方につまみ上げ、面を持たせる。

265は須恵器壺である。口縁部が短く垂直に立ち上がる壺である。肩部にはカキ目を残し、その上から列点文を施す。

266は須恵器鉢である。片口の鉢であり、口縁部が内湾する。口縁端部はナデにより面を持たせる。

267は平瓦である。凸面の調整は不明であるが、凹面には布目を残す。

268は須恵器甕である。体部の破片であるが、内面に墨痕をもつため、硯として転用された可能性が考えられる。

中層出土木製品

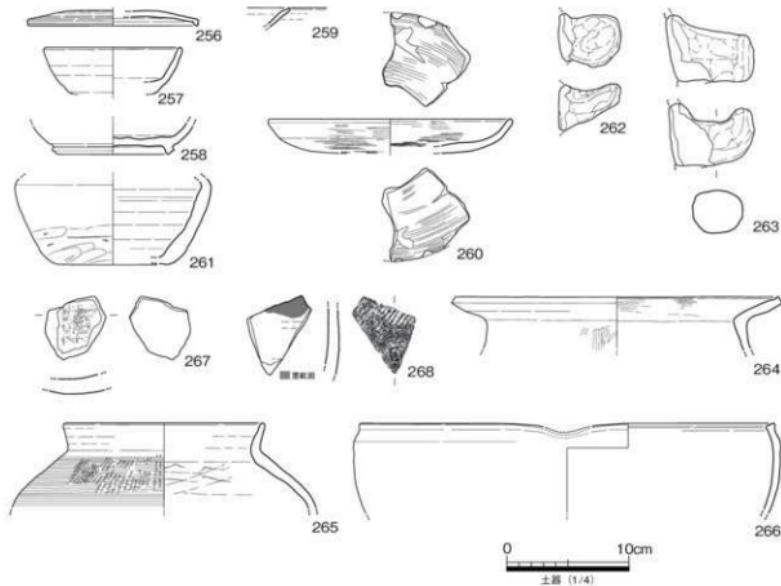
269、270は丸棒である。いずれも破片であるが、加工の痕跡は確認できる。

271～275は角棒である。いずれも太さは数cm程度の小型のものである。

276は削片である。明瞭な加工などは確認できない。

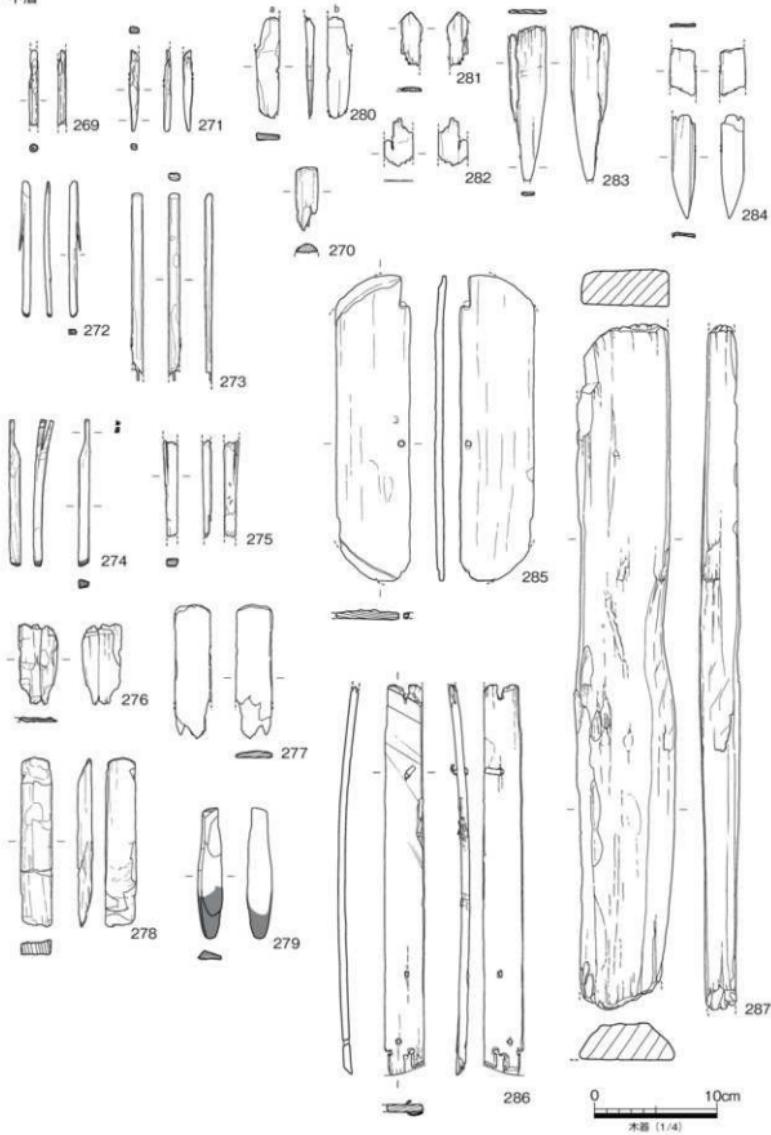
277、278は板材である。277は厚さ0.5cmほどの薄い板であり、隅丸の長方形を呈する。278は厚さ1.2cmを測り、両端が斜め方向に削られている。

279はへら状の木製品である。明瞭な加工痕は確認できないものの、形状はへら状となり、何かしらの器具として使用された可能性もある。下端には焦げが確認できる。



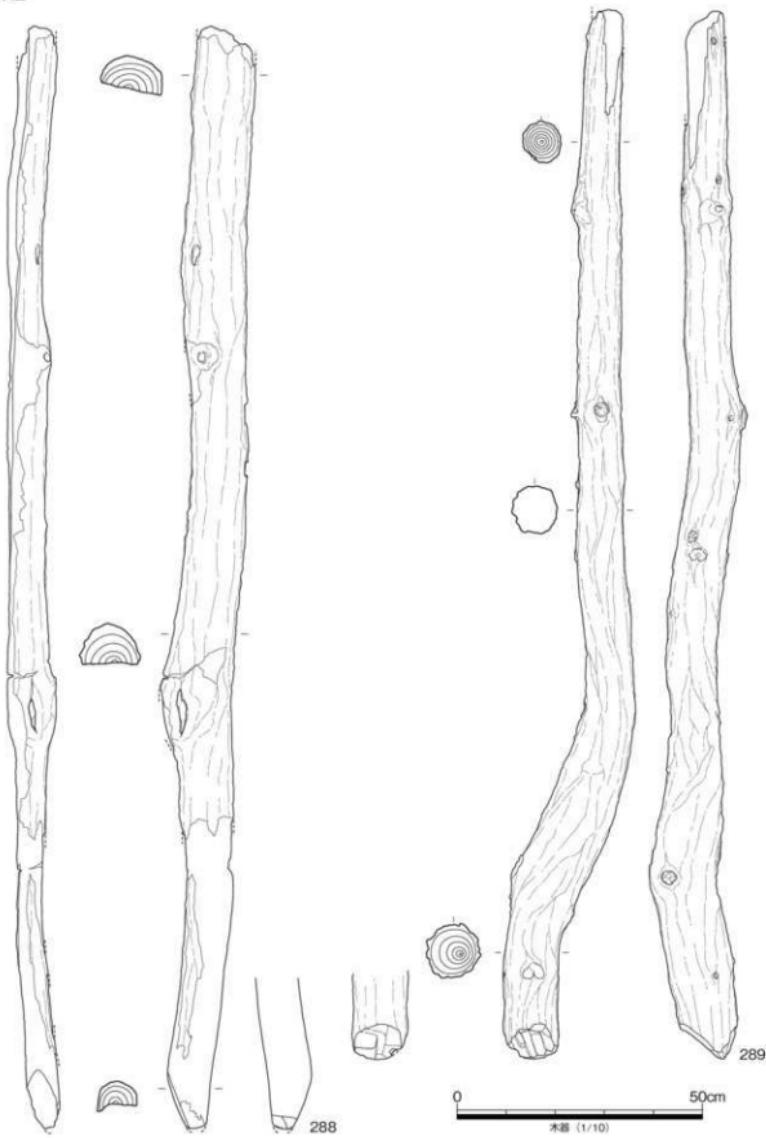
第46図 SD4028層位不明遺物

中層



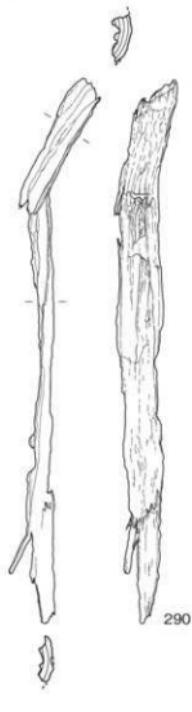
第47図 SD4028 中層出土木器 1

中層

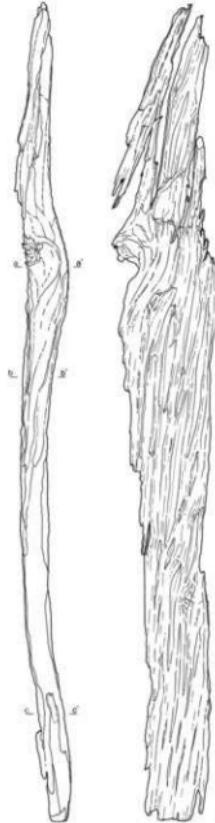


第48図 SD4028 中層出土木器2

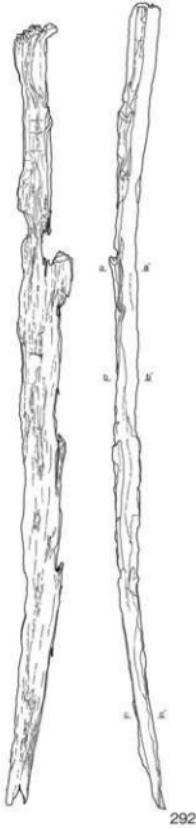
中層



290



291



292



第 49 図 SD4028 中層出土木器 3

280 は不明破片である。おそらく角材の破片であり、側面などに加工の痕跡が残る。

281～284 は斎串である。いずれも破片であり全体形状を復元できるものではない。281 は頂部であり、山形に整形されている。282 は部位の特定も困難であり、厚さも極めて薄いが、斎串であると判断した。283、284 は下端が残存しており、いずれも左右対称ではなく、片側に先端が偏る。

285、286 は曲物である。いずれも底板の破片である。285 は穿孔や、側板を据えるためのへこみが確認できるが、経じに使用した材は残らない。286 は樺による継じの痕跡が残る。

287 は板材である。大型の板材であり、部分的には断面台形状となるが、おおむね断面長方形に切り出されている。一部に未加工の面を残す。

288、289 は加工木である。いずれも材の端部のみを加工している。

290～292 は木樋である。いずれも一本の外周のみ樹皮を残し、内側にのみ加工を行っている。291、292 は溝の中層に据えられた状態で検出されたため、当初の位置や機能を反映しているものではないと考えられるが、一本を割り抜いて作られた木樋が投棄されたものと考えられる。290 も近接し出土した木製品であり、明瞭な加工の痕跡は見られないが、おそらく木樋の一部であると考えられる。

下層出土木製品

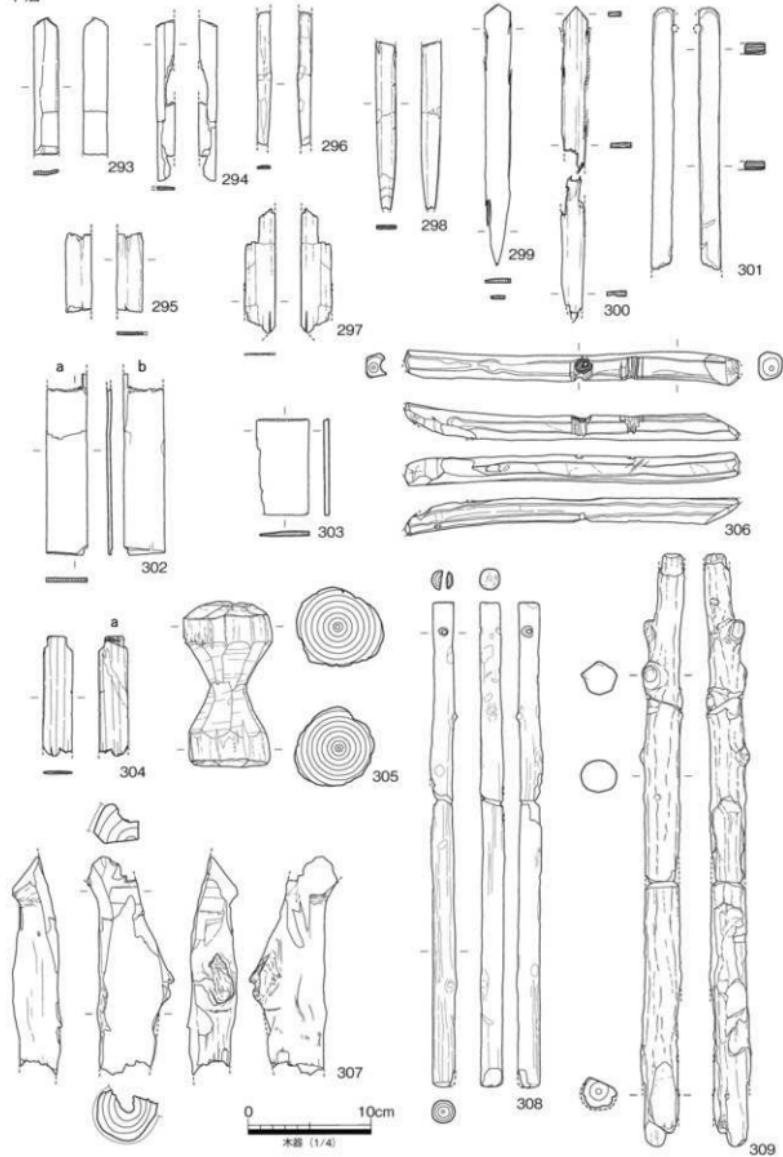
293～300 は斎串である。293 は頂部が残存する。磨滅はほとんどなく、上端に加工面が見られ、段差を持つ切込みを施す。294 板材の可能性も考えられる。工具痕は見られないが表裏とも平滑に加工されている。片面中央には稜をもつ、側面の片面は割れ面である。年輪の乱れは見られない。断面図の位置では、14 本の年輪を確認できる。295 は両面とも平滑であり、摩滅はあまりないが、加工痕を確認することはできない。柾目材であり、確認できる年輪は1本のみである。296 は上端部がやや摩滅している。加工痕が確認できる。左面をやや山形状に成形しており、年輪については不明である。297 は全体的にやや摩滅している。加工痕は認められない。下端部の斜め方向の加工については、古い折面の可能性がある。298 は全体的にやや摩滅している。加工痕は確認できない。3.0 mm で 4 年分の年輪を確認できる。299 は全体的にやや摩滅している。上端及び側縁は刃物による加工と考えられるが、広い面は割り面のまとまと見える。左下の切り込み状に見える部分は新しい割れによるものである。300 は摩滅はほとんど見られない。両側縁に切り込みが複数ある。4 mm の間に 3 本の年輪を確認できる。

301 は板材である。全体やや摩滅し、加工痕は見えない。板目で 1.5 mm 間隔で 6 本の年輪を確認した。

302～304 は木筒である。文字の現時点での解釈等について、まとめの部分で言及することとし、この章では、製品自体の情報を中心に報告する。302 は残存長 14.7 cm、幅 3.3 cm、厚さ 0.3 cm を測るほぼ平面長方形の木筒である。上端部より上が欠損している。上端は折られた可能性もある。下端は折り、左右両辺は削りを施す。墨の跡は a 面にのみ認められる。a 面を下にした状況で埋没し、土圧により少し折れがみられる。文字が解読できる部分は少ないが、墨の残存状況から、2 行にわたり文字が書かれていたと考えられる。303 は残存長 7.8 cm、幅 4.3 cm、厚さは最大で 0.4 cm を測る。長方形の短冊状の平面形態を呈しており、上端は切り折り、下端と左右には削りを施すが、左側が一部欠損している。断面形態からも確認できるように、剥ぎ取られたかのように、左側が薄くなっているが、墨痕なども全面にわたって確認でき、表面に荒れなども見られないため、この状態で使用されたものと考える。

304 は下半が欠損している。残存長 9.8 cm、幅 2.8 cm、厚さ 0.2 cm を測る。表面の摩滅が顕著であり、加工の痕跡は確認できない。文字の痕跡は確認できず、わずかに墨痕が認められる程度である。上端を削り、くびれ状に抉りを作る。抉りの部分に使用痕は認められないが、木筒であれば、荷札木筒である

下層



第 50 図 SD4028 下層出土木器 1

と考えられる。

305は木製槌である。

全体的に摩滅はほとんど認められない。加工面には鉄器の刃こぼれによる線条痕が見られる。中心から1~3.5mmの間で5~8本の年輪を確認できる。

306は火鑽臼である。

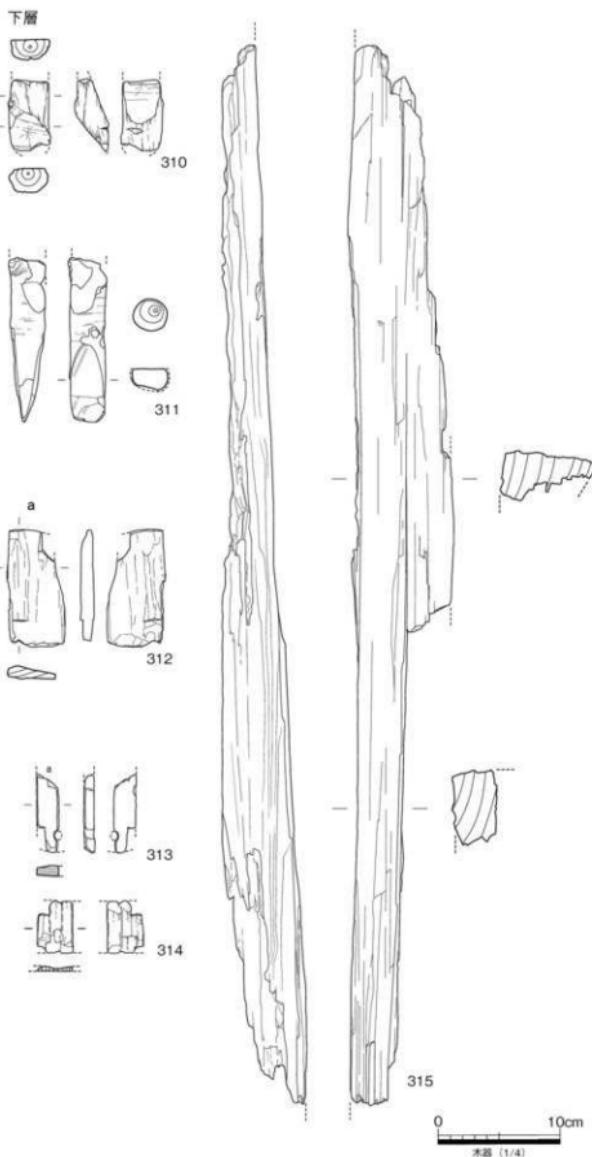
摩滅はほとんどなく、加工痕が確認できる。枝の四面を平らに皮ハギし、そのうち1面のみ切り込みを入れたのち、火鑽臼として利用していたと想定できる。もう1か所切り込みが確認できるが、この部分については、使用に伴う痕跡は確認できない。

307は先端が加工された丸太である。加工痕が確認でき、その中には鉄器の刃こぼれ痕が見える。

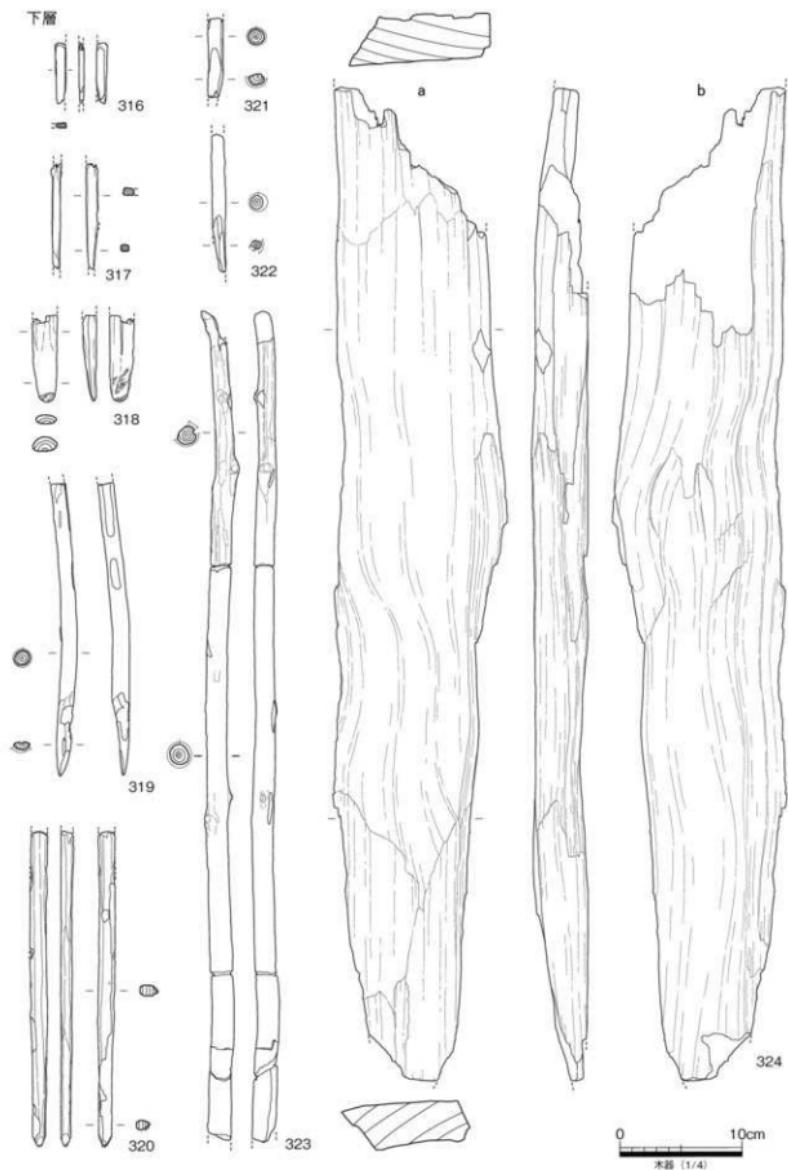
308は丸棒である。全体的にやや摩滅している。細かい面取り状の加工が全体に見られる。

309は杭である。下端には斜めに切断した面があり、上端は折れている。枝部分は根元で枝払いを行っている。

310は切断片である。摩滅はほとんどなく、



第51図 SD4028 下層出土木器2



第 52 図 SD4028 下層出土木器 3

工具痕がみられる。

311は杭状の木製品である。摩滅はほとんどない。

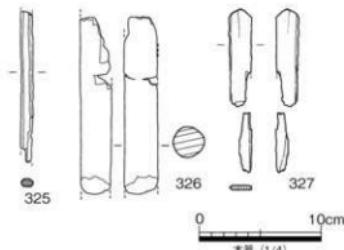
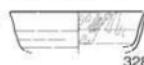
加工痕は先端に見られ、工具の刃こぼれによる線状痕が確認できる。

312は不明木製品である。加工痕が一部に見られる。

図左側縁は割れ面の可能性もあり、下端は面取りが見られる。

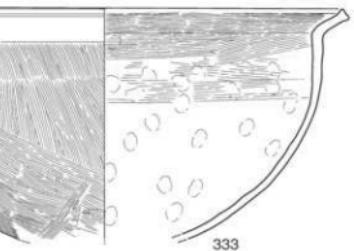
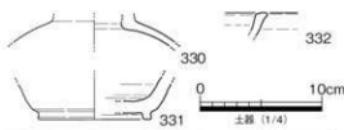
313は板材である。加工痕は見られない。a面左侧も折れ面である可能性が高い。

314は削片である。上下端に斜目に切削した面があり、手斧による切断痕と考えられる。



第53図 SD4028 層位不明木器

315は角材である。加工痕は見えない。割り材と考えられる。



第53図 SD4028 層位不明木器

316は板材である。表裏両面とも平滑であるが、加工痕は見えない。1側面及び上下端は折損している。

317は角棒である。全体的にやや摩滅している。加工痕はa面下部にある。

318はへら状木器である。摩滅はほとんどなく、加工痕は上半に見られる。下端には使用痕と考えられる線状痕がある。

319は先端加工木である。全体的にやや摩滅しているが一部加工痕有り。

320は角棒である。全体的にやや摩滅しているが加工痕は確認できる。断面多角形状を呈する。

321～323は先端加工木である。321は全体的にやや摩滅している。下端に加工面を持つ。322は全体的にやや摩滅。下端部に加工面あり。

323は上半部に加工痕がある芯持ち材で、枝払いが確認できる。

324は割板材である。b面はやや摩滅している。加工痕は見えない。

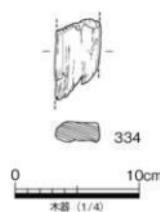
層位不明木製品

325は棒状製品（斎串）である。全体的に摩滅しているが、加工痕は見えない。断面は六角形を呈する。

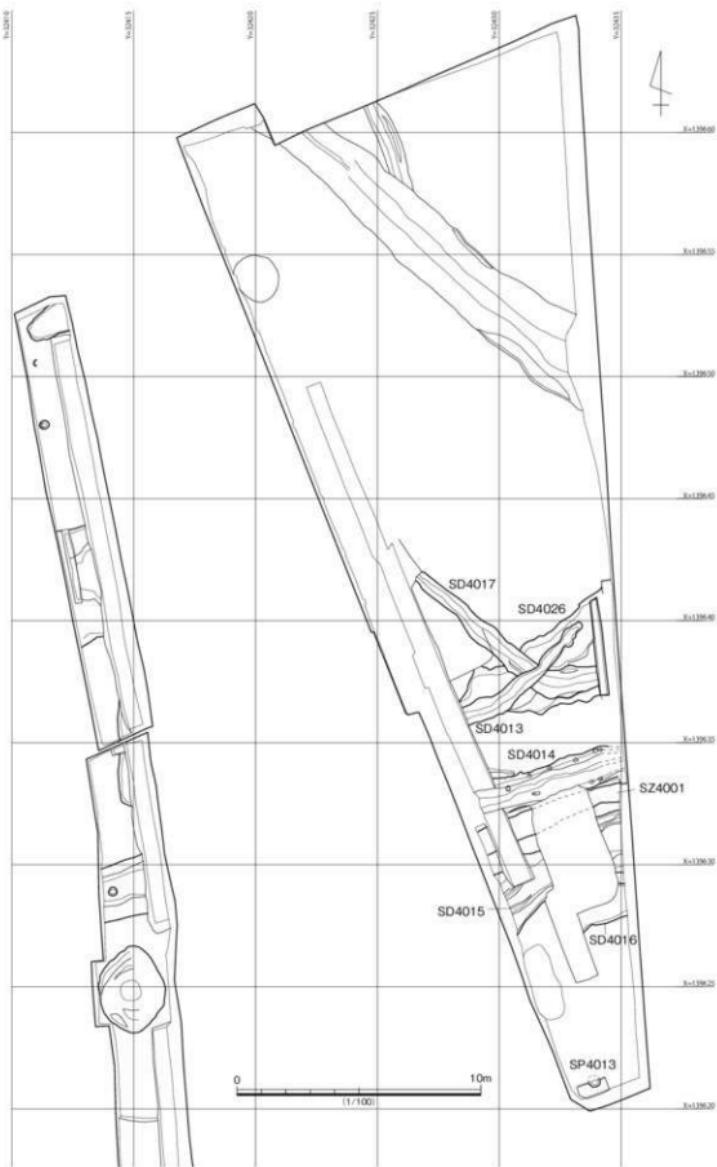
326は柄である。全体にやや摩滅している。加工痕は見られない。

327は斎串である。全体的に摩滅している。加工痕は確認できない。

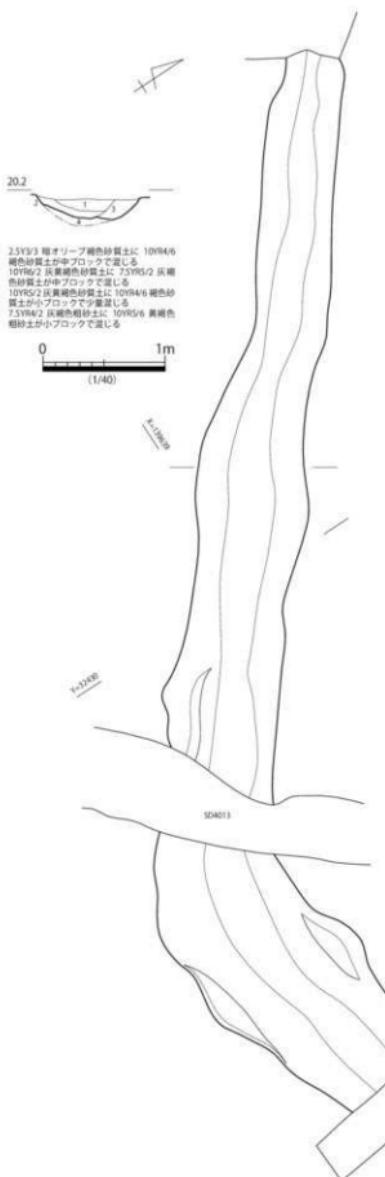
SD4028については、上層～下層において、7世紀末～9世紀初頭までの遺物が確認されている。このうち下層は、最新の遺物である須恵器杯Bの形態から、8世紀前半の埋没が考えられる。中層についてもおおむね同様の埋没が考えられるが、上層については、杯Aの形態から、8世紀末、ないしは9世紀



第55図 SD4030 出土木器



第 56 図 4 区 2 面平面



第 57 図 SD4017 平・断面

初頭の年代が想定され、中層埋没～上層埋没までの間に一定の期間があった可能性があり、その間に再掘削が行われたのであろう。

SD4030 (第 37 図) SD4028 の西側から派生し、再び SD4028 に合流する溝である。両者の埋没については、SD4030 の埋没が、SD4028 中層の埋没に先行していることから、機能的に設けられた複線のような溝が、SD4028 先行して埋没したものと想定できる。出土遺物は第 54・55 図に示した。

328、329 は須恵器杯である。328 は底部が欠損しているが、おそらく高台が伴う杯 B であり、内面には火襷が残る。329 は断面方形の低い高台を持つ。

330、331 は須恵器壺である。330 は頸部の破片であり、垂直に立ち上がる口縁部を持つ。331 は底部片であり、体部は直線的に伸び、断面方形の高台がとりつく。

332 は須恵器甕である。口縁部のみが残存しており、端部上面が平坦になる。

333 は土師器鍋である。半球状の体部に、屈曲し外方に直線的に伸



第 58 図 SP4013 平・断面

びる口縁部を持つ。口縁端部はナデにより、上方、下方にそれぞれ拡張する。

334は木器角材である。全体に表面の残存状況が悪く、加工の痕跡が不明瞭であるが、おそらく割材の一部であると考えられる。

出土遺物からは8世紀前半の埋没が想定できる。

【2面の遺構】(第56図)

溝

SD4013 4-4区中央で検出された、東西方向に流れる溝である。5区のSD5010につながり、2面の水田に関連する遺構と考えられる。

SD4014 調査区中央で検出された。ほぼ東西方向に流れる溝である。5区のSD5009と同一の遺構である。

SD4015・SD4016 4-4区の南側で検出された溝である。大部分が上面の遺構によって削平されているため、その詳細は不明である。時期を示すような遺物などもほとんど出土していない。

SD4017 (第57図) 4-4区北側で検出された溝である。東西方向に延びるもののが、調査区中央付近で北西方向に進路を変えている。最大幅は1.3m、深さ0.2cmを測る。出土遺物などは見られないが、畦畔とそれに伴う溝に先行する。

柱穴

SP4013 (第58図) 調査区南端で検出された。平面形態はほぼ円形の柱穴である。直径0.4m、深さ0.2mを測る。柱痕と掘方が確認できるが、調査範囲の中で、建物や柱穴列を構成するような組み合わせは確認できない。

畔

SZ4001 (第57図) SD4014に隣接して検出された。5区のSZ5001に対応する畔である。畦畔としての隆起を最も明瞭に確認でき、SD4014に並行して伸びることからも、水路との境界に位置する大畦畔であると考える。

【3面の遺構】(第59図)

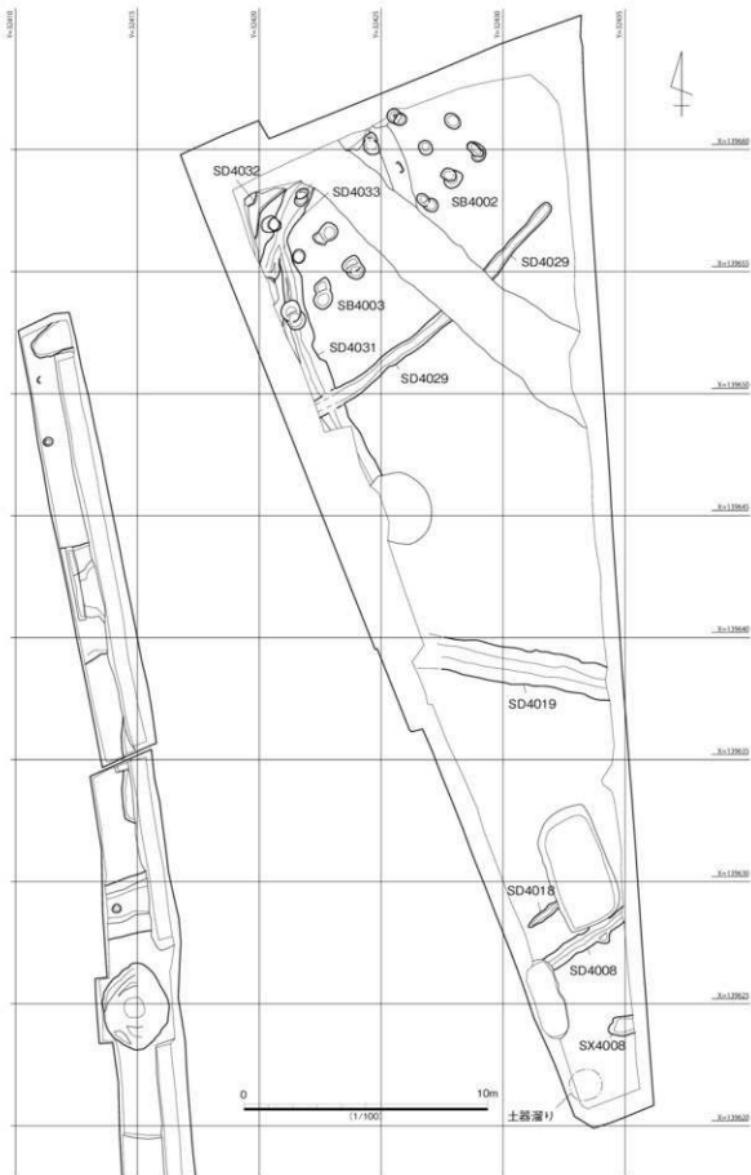
建物

SB4002 (第60~62図) 4-4区北端で検出された、2×2間の総柱建物である。検出されたのは2×2間であるが、隣接するSB4003が2×3間であることから、建物の西側のSD4028が掘削された範囲においてもう1間分柱穴が存在していた可能性が高い。また、現在確認できている最も西側の柱穴列については、中央の柱穴の規模が南北の側柱の柱穴よりやや小さく、それが東柱となり2×3間の総柱建物となりうる可能性を示唆している。柱穴は側柱と東柱の柱穴で規模が異なり、側柱の柱穴については、大きなもので直径0.75mを、東柱については直径0.5mを測る。柱穴間の距離は、柱痕が判明する部分で梁行1.75m、桁行1.5mを測る。側柱については大半に抜き取りの跡が確認でき、そのいずれも建物の中心側から掘削されている。東柱には抜き取りは確認できない。柱穴の中でも柱痕の周りの裏込め土については、いずれも2~3層程度に分層でき、ブロック土を多く含む土が堆積している。

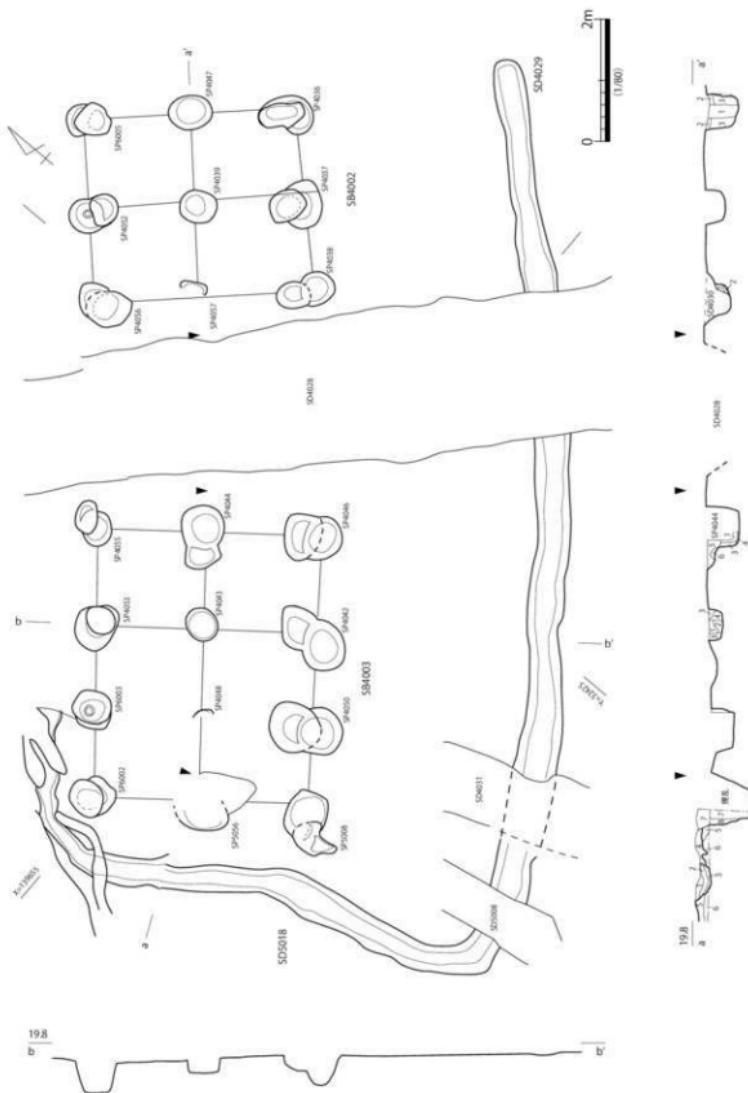
出土遺物については、最も北側に位置するSP6005とSP4037から出土している。第65図に示した。

336は弥生土器壺である。底部のみ残存しており、明瞭な底部を持ち底部から体部にかけや膨らみを持ちながら伸びる、弥生時代後期のものであると考えられるが、建物の時期を示すものではなく、混入したものであると考えられる。

337は不明土製品である。SP4037から出土した粘土に蔓などの植物を混和した状態のものであり、壁土な



第59図 4区3面 平面



第 60 図 SB4002, SB4003, SD5018, SD4029 平・断面

SB4043 1 10YR 4/1 黒褐色粘土上に 2.5YR 1/1 白色粘土がブロック状に重なる 2 10YR 4/1 黑褐色粘土上に 2.5YR 1/1 白色粘土がブリック状に重なる 3 7.5Y 7/1 底白色粘土上に 2.5YR 2/1 黄褐色粘土が重り、10YR 4/1 桐色粘土が 小ブロックで重なる 4 7.5Y 6/2 底オーリーブ色粘土と 2.5Y 4/1 黃褐色粘土が混じる	SP4057 1 2.5Y 6/2 底オーリーブ色粘土上に 2.5Y 6/6 明黄色粘土が重なる 2 2.5Y 6/2 底オーリーブ色粘土上に 5Y 3/1 オーリーブ色粘土がまだらに重なる
SB4044 1 10YR 3/1 黑褐色粘土上に 2.5Y 7/1 明オーリーブ色粘土がブロック状に重なる 2 10YR 5/1 桐色粘土と混じる 3 10YR 5/1 桐色粘土と混じる 4 7.5Y 6/2 底白色粘土上に 2.5Y 6/2 底オーリーブ色粘土が重なる 5 7.5Y 6/2 底オーリーブ色粘土上に 2.5Y 6/2 底オーリーブ色粘土がブロック状に重なる 6 7.5Y 7/1 底白色粘土上に 2.5Y 6/6 黄褐色粘土が重なる	SD5018 1 2.5Y 3/2 黑褐色シルト、顆分を多く含む(斑紋状) 2 2.5Y 5/2 黑褐色シルト、ペース由来のブロック(φ2~4cm)をわずかに含む 3 2.5Y 6/2 黑褐色シルト、ペース由来のブロック(φ1~2cm)を含む SD5020 墓土 1 2.5Y 1/2 黑褐色粘土、しまり土 2 2.5Y 1/2 黑褐色粘土、ペース土層 3 2.5Y 1/2 黑褐色粘土、ペース土層 基盤層 1 5Y 3/1 オーリーブ色粘土とペース由来のφ2~3cmのブロックを多く含む(柱穴堆积) 2 5Y 3/1 オーリーブ色粘土とペース由来のφ2~3cmのブロックを多く含む(柱穴堆积) 3 5Y 3/1 オーリーブ色粘土とペース由来のφ2~3cmのブロックを多く含む(柱穴堆积) SP5056 1 10YR 3/2 黑褐色シルト、φ4~8cmの底白色シルトブロックを多く含む
SP4047 1 10YR 4/1 黑褐色粘土上に 2.5Y 7/1 明オーリーブ色粘土がブロック状に重なる 2 10YR 4/1 黑褐色粘土上に 5Y 6/1 明オーリーブ色粘土が重なる 3 2.5Y 6/1 オーリーブ色粘土と 2.5Y 4/1 黄褐色粘土がブロック状に重なる	

第 61 図 SB4002, SB4003, SD5018, SD4029 平・断面 (2)

どに使用されていたものと考えられる。掘方ではなく、抜き取りからの出土であること、建物の廃絶などに伴い埋土に混入した可能性を補強するものといえる。

SB4002 からは建物の時期を示すような遺物は出土しなかったが、SB4003 との関係から、同時期である古墳時代後期後半に位置づけられる可能性が高い。

SB4003 (第 60・63・64 図) SB4002 の西側に位置する総柱建物である。2 × 3 間であり、東西方向に桁行がある。平面積は 15.7 m² である。SB4002 と比べ、やや軸が西側に傾く。しかし、2 棟の柱筋の通り方や、両者の位置関係、2 棟を囲むように巡る SD4029 の存在からも、SB4002 と SB4003 は同時併存していた可能性が高い。柱穴規模は側柱の大きなもので直径 0.7 m、東柱で直径 0.5 m を測る。柱穴間距離についても、梁行 1.75 m、桁行 1.5 m と SB4002 とはほぼ同一である。

遺物は SP4053 から出土しており、第 65 図に示した。

335 は須恵器蓋である。かえりを持つ杯に伴うものであり、天井部が高く、天井部から口縁部まで、明瞭に屈曲する部分が存在しない。外面天井部では、回転ナデのうちに回転ヘラケズリが施される。ケズリの範囲や全体の形状、法量から、TK43 期に位置づけられると判断した。

SB4003 は、出土遺物の特徴から 6 世紀後半の遺構であると判断した。これに伴い、SB4002、およびこれらを囲む SD4029 についても、同様の年代を考えることができる。

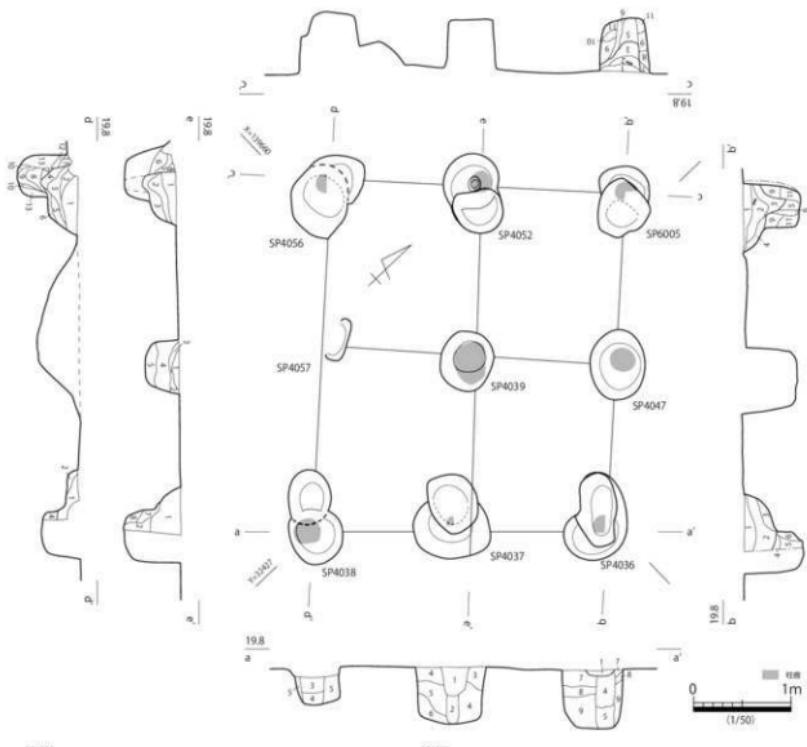
SB4002、4003 については、同時期の県内の掘建柱建物と比較しても、平面積や柱穴の規模といった点で卓越しており、また周囲に溝を持つ点においても特異なものである。また、総柱建物についても、県内の事例においては、2 × 2 間のものが古墳時代に卓越したのちに、7 世紀ごろから間数が増加し、平面系が長方形になるものが増加する。そして古代以降には、間数のバリエーションが増えるだけでなく、ほかの側柱建物と異なり、平面形態が正方形に近くなり差異が生じるという変化がある。SB4002、SB4003 は古墳時代～古代にかけての総柱建物の変化のうちの初期のものといえる。

土器溜まり (第 66 図) 4 区南端で検出された遺構である。明瞭な掘方などは確認できなかったが、後述する須恵器甕をはじめとした土器類がまとまって出土している。地形としてもそれらの遺物がたまりやすいような場所でもなく、遺物の分布状況からも、人為的に投棄されたような状況が考えられたため、これらの土器の集合を遺構として判断した。出土遺物は第 67 図に示した。

338 は須恵器杯である。杯身であり、やや内側に傾き伸びる口縁部と、短く突出するかえりをもつ。

339 は土師器甕である。口縁部はくの字状に曲がる。外面、内面ともにナデとユビオサエの痕跡が多く残る。

340 は須恵器甕である。頸部から上の部分は残存していなかったが、体部はおおむね残存している。倒卵形の体部をもち、底部には回転糸切りの痕跡が残る。外面には平行叩きがタテ方向に残る。内面には



SP4036

柱面

- SY4/2 オリーブ褐色粘土に 2.5Y7/1 明オリーブ灰白色粘土がブロック状でわずかに混じる
- SY2/2 オリーブ褐色粘土
- SY4/1 黄褐色粘土と 2.5Y6/6 明褐色粘土が混じり、SY2/1 黄褐色粘土が明褐色に混じる
- SY4/2 オリーブ褐色粘土に 2.5Y7/1 明オリーブ灰白色粘土がブロックで少量混じる
- SY4/1 黄褐色粘土
- SY7/1/1 灰白色粘土と SY4/1 黄褐色粘土が混じる
- SY7/1/2 灰白色粘土砂質粘土と 2.5Y6/6 明褐色粘土が混じり、SY2/1 黄褐色粘土が混じる
- SY4/1 黄褐色粘土に SY7/1/1 明オリーブ灰白色粘土が少量混じる
- SY4/1 黄褐色粘土と 2.5Y6/6 明褐色粘土が混じる
- SY4/1 黄褐色粘土と SY2/1 黄褐色粘土が少量混じる

平面

SP4037

柱面

- SY4/1 黄褐色粘土と 2.5Y3/1 黑褐色粘土が混じる
- 2.5Y1/1 黑褐色粘土に 2.5Y6/1 オリーブ色粘土がブロック状でわずかに混じる
- SY4/1 黄褐色粘土と 2.5Y6/1 オリーブ色粘土が混じる
- SY4/1 黄褐色粘土に 2.5Y6/2 黄褐色粘土が混じる
- SY4/1 黄褐色粘土に 2.5Y6/2 黄褐色粘土がブロック状で混じる
- SY4/1 黄褐色粘土と 2.5Y6/1 オリーブ色粘土が混じる
- SY4/1 黄褐色粘土と 2.5Y6/1 オリーブ色粘土の混潤度が混じる
- SY4/1 黄褐色粘土と 2.5Y7/2 黄褐色粘土が混じる
- SY3/1 オリーブ褐色粘土

平面

SP4038

柱面

- 2.5Y4/2 黄褐色粘土に 2.5Y1/1 黑褐色粘土がブロック状に混じる
- 2.5Y4/3 黄褐色粘土に 2.5Y7/1 明褐色粘土がブロック状で混じる
- 2.5Y4/2 黄褐色粘土に 2.5Y3/2 黄褐色粘土がブロック状に混じる
- 2.5Y4/2 黄褐色粘土に 2.5Y6/4 に、黄褐色粘土がブロック状で少量混じる
- 2.5Y3/1 黑褐色粘土に SY4/2 黄褐色粘土が大ブロックで混じる

平面

SP4039

柱面

- 2.5Y2/1 黑褐色粘土と 2.5Y7/3 深褐色粘土に 10Y7/1 灰白色粘土がブロック状に混じる
- SY4/1 オリーブ褐色粘土に 5G9/1/1 明オリーブ灰白色粘土がブロック状で少量混じる
- 5G9/1/1 明オリーブ灰白色粘土に 2.5Y6/1 黄褐色粘土が混じる
- 2.5Y3/1 黑褐色粘土に 5G9/1/1 明オリーブ灰白色粘土がブロック状に混じる
- 5G9/1/1 明オリーブ灰白色粘土と 2.5Y7/2 黄褐色粘土が混じる

平面

SP4052

柱面

- 2.5Y4/1 黑褐色粘土と SY5/1 黄褐色粘土が混じり 7.5Y7/1 灰白色粘土がブロック状に混じる
- 10Y3/1 黑褐色粘土と 10Y2/2 黄褐色粘土が混じる
- 2.5Y6/1 黄褐色粘土と 10Y4/2 黄褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/4/2 黄褐色粘土が混じる
- 2.5Y6/2 オリーブ色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土がブロック状に混じる
- 2.5Y6/6 明褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる

平面

SP6005

柱面

- SY2/2 オリーブ色粘土に 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘土がブロック状に混じる
- 2.5Y4/2 略暗黄色細粒砂質粘土に 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘土がブロック状に混じる
- SY2/2 オリーブ色粘土に 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘土がブロック状に混じる
- SY2/2 オリーブ色粘土に 7.5Y6/2 黄褐色粘土がブロック状で少量混じる
- SY2/1 黄褐色粘土に 2.5Y5/6 黄褐色粘土が混じる
- SY7/1/2 黄褐色粘土と 7.5Y6/2 黄褐色粘土が混じる
- SY5/1/1 黄褐色粘土と 7.5Y6/2 黄褐色粘土が混じる
- SY5/1/1 黄褐色粘土と 7.5Y6/2 黄褐色粘土が混じる

平面

SP4039

柱面

- SY5/1 黄褐色粘土と SY6/6 オリーブ色粘土がブロック状に混じる
- 10Y2/2 黑褐色粘土と 10Y9/4/1 灰褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土がブロック状に混じる
- SY5/1 黄褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- SY5/1 黄褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- SY5/1 黄褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる

平面

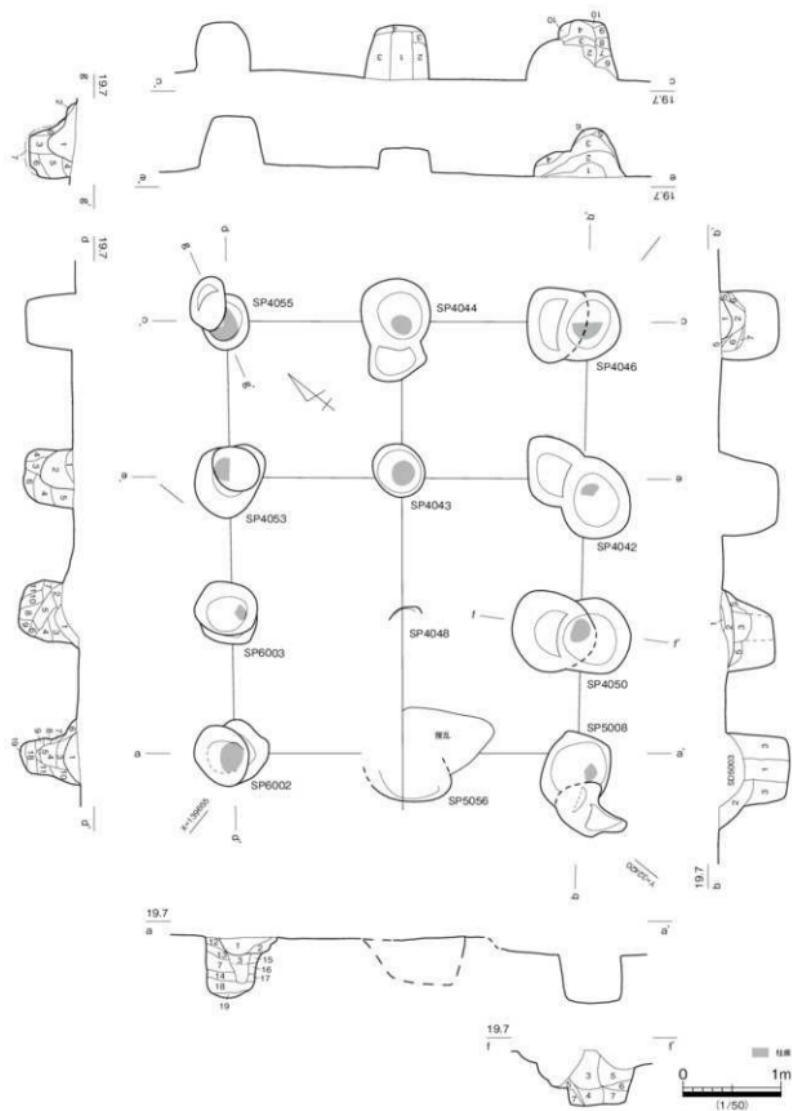
SP6005

柱面

- SY5/1 黄褐色粘土と SY6/6 オリーブ色粘土がブロック状に混じる
- 10Y2/2 黑褐色粘土と 10Y9/4/1 灰褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土がブロック状に混じる
- SY5/1 黄褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- SY5/1 黄褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- SY5/1 黄褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- 10Y9/2/2 黑褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- 2.5Y6/6 明褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる
- 2.5Y6/6 明褐色粘土と 10Y9/2/2 黄褐色粘土が混じる

平面

第 62 図 SB4002 平・断面

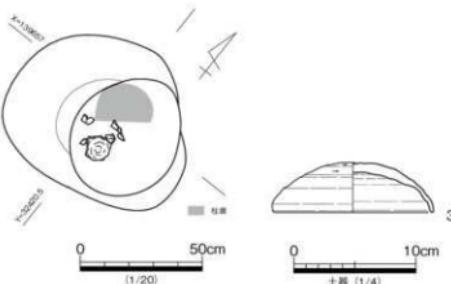


第63図 SB4003 平・断面

SB4042		1 10YR4/1 黒褐色粘土質土と 7.5Y6/1 白色粘土質土が混じる 2 7.5Y6/1 黑褐色粘土質土と 10YR7/1 白色粘土質土が混じる。柱間に少量漂土による 3 10YR3/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y6/1 黑褐色粘土質土が混じる。柱間に少量漂土による 4 5Y5/3 黑褐色粘土質土と 5Y5/1 オリーブ色粘土質土が混じる。 柱間に少量漂土による 5 7.5Y6/2 黑褐色粘土質土と 5Y2/2 オリーブ色粘土質土が混じる。 柱間に少量漂土による 6 2.5Y9/1 オリーブ色粘土質土と 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる。 柱間に少量漂土による	柱面 -1 10YR3/1 黑褐色粘土質土と 2.5Y7/1 明オリーブ色粘土質土がブロック状に混じる 2 2.5Y7/1 明オリーブ色粘土質土と 2.5Y5/6 黑褐色粘土質土が混じる。2.5Y3/1 黑褐色粘土質土 3 10YR5/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 4 7.5Y6/1 黑褐色粘土質土と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる
SP4044		柱面 -1 10YR3/1 黑褐色粘土質土と 2.5Y7/1 明オリーブ色粘土質土がブロック状に混じる 2 2.5Y7/1 明オリーブ色粘土質土と 2.5Y5/6 黑褐色粘土質土が混じる。2.5Y3/1 黑褐色粘土質土 3 10YR5/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 4 7.5Y6/1 黑褐色粘土質土と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる	柱面 -1 10YR3/1 黑褐色粘土質土と 2.5Y7/1 明オリーブ色粘土質土がブロック状に混じる 2 2.5Y7/1 明オリーブ色粘土質土と 2.5Y5/6 黑褐色粘土質土が混じる。2.5Y3/1 黑褐色粘土質土 3 10YR5/1 黑褐色粘土質土。地山由来のブロックを非常に多く含む(φ5~6cm)
SP4046		柱面 -1 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 10YR7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 2 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土 3 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土 柱面 -1 10YR4/1 黑褐色粘土質土 2 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土 3 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土 4 5Y5/3 黑褐色粘土質土と 5Y2/2 黑褐色粘土質土がブロック状に混じる 5 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 6 10YR3/1 黑褐色粘土質土と 5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 7 10YR5/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 8 5Y5/1 黑褐色粘土質土と 5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 9 5Y2/1 黑褐色粘土質土 10 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土と 5Y2/1 黑褐色粘土質土が混じる	柱面 -1 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 10YR7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 2 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土 3 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土 4 5Y5/3 黑褐色粘土質土と 5Y2/2 黑褐色粘土質土がブロック状に混じる 5 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 6 10YR3/1 黑褐色粘土質土と 5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 7 10YR5/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 8 5Y5/1 黑褐色粘土質土と 5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 9 5Y2/1 黑褐色粘土質土 10 7.5Y7/1 黑褐色粘土質土と 5Y2/1 黑褐色粘土質土が混じる
SP4050		柱面 -1 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y6/1 白色粘土質土が混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘土質土 柱面 -1 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 2 7.5Y6/1 白色粘土質土と 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 3 7.5Y6/1 白色粘土質土(2~3cmのブロック)と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土(2~3cmのブロック)が混じる 4 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 10Y7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 5 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 10Y7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 6 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 10Y7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 7 7.5Y7/1 白色粘土質土と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる。上層あたり。 10YR4/1 黑褐色粘土質土が混じる	柱面 -1 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y6/1 白色粘土質土が混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘土質土 柱面 -1 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 2 7.5Y6/1 白色粘土質土と 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土が混じる 3 7.5Y6/1 白色粘土質土(2~3cmのブロック)と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土(2~3cmのブロック)が混じる 4 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 10Y7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 5 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 10Y7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 6 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 10Y7/1 白色粘土質土がブロック状に混じる 7 7.5Y7/1 白色粘土質土と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる。上層あたり。 10YR4/1 黑褐色粘土質土が混じる
SP4053		柱面 -1 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y5/1 白色粘土質土が混じる 2 7.5Y3/1 黑褐色粘土質土 柱面 -1 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 2 7.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 3 7.5Y4/1 黑褐色粘土質土(2~3cmのブロック)と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる 4 7.5Y7/1 白色粘土質土と 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土が混じる 5 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 6 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる	柱面 -1 10YR4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y5/1 白色粘土質土が混じる 2 7.5Y3/1 黑褐色粘土質土 柱面 -1 2.5Y7/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 2 7.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 3 7.5Y4/1 黑褐色粘土質土(2~3cmのブロック)と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる 4 7.5Y7/1 白色粘土質土と 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土が混じる 5 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 7.5Y7/1 白色粘土質土が混じる 6 2.5Y4/1 黑褐色粘土質土と 2.5Y7/6 明黄色粘土質土が混じる

第64図 SB4003 平・断面 (2)

SB4003



335

同心円状の当て具痕が残る。

古墳時代後期に形成された可能性が高い。

溝

SD4029 (第60図) SB4002、4003を囲繞する溝である。幅は最大0.7m、深さは0.25mを有する浅い溝である。建物2棟を囲むように南側がやや広い台形に巡るが、北辺は一部のみしか残存しておらず、東辺については詳細な状況は不明である。建物との関係でみると、西側については建物の柱穴と0.5mほどしか離れておらず、かなり近接するが、南面については、幅2.8mほどのスペースがある。その空間にはほかに遺構は形成さ

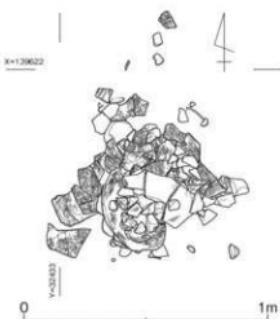
SB4002



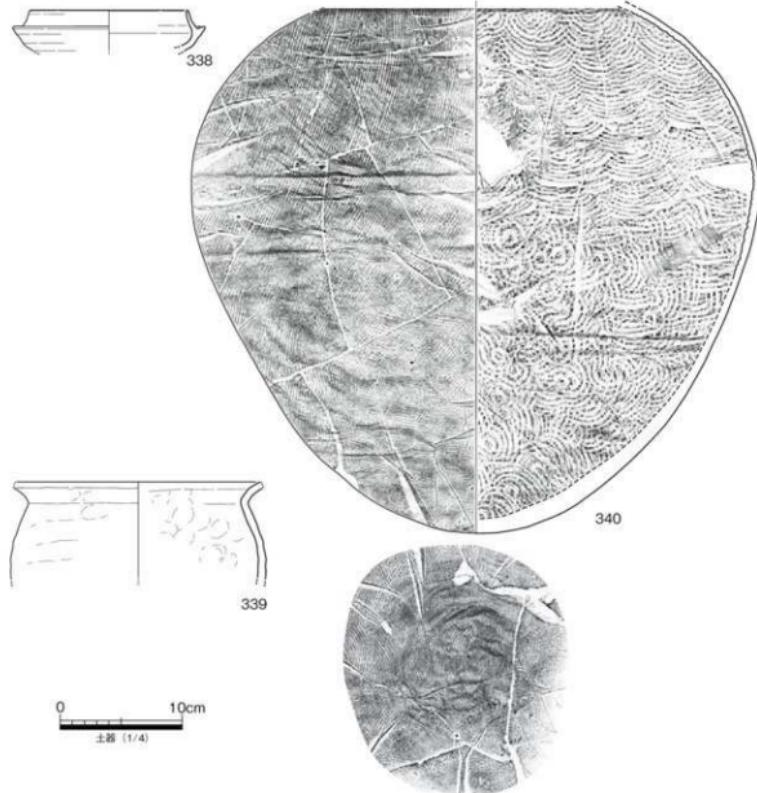
第65図 SB4003(SP4053) 平面・出土物 SB4002 出土遺物

れておらず、建物の機能に関連する空間であった可能性が高い。対照的に、西側部分については、建物との位置関係から雨落ち溝のような機能も想定できるが、溝の断面や埋土の特徴からは、それらを示すような痕跡は見られなかった。遺物についても出土量は僅少である。

SD4019、SD4100、SD4033（第68図） 調査区の中央で検出された溝である。ほぼ東西方向に流れており、浅い掘方に皿状の断面を持つ。5区においてはSD5020につながると考えられる。SD5020は5区の中で90度方向を変え、溝は北東方向に向かう。SD4033はSD5020から北東方向に向かう続きの部分となり、途中でSD4031が合流するような格好となる。出土遺物は第69図に示した。



第66図 3面土器溜り



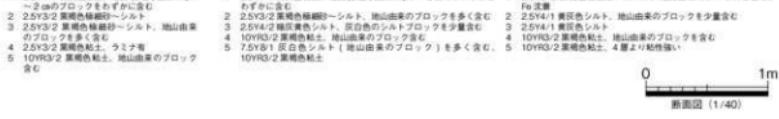
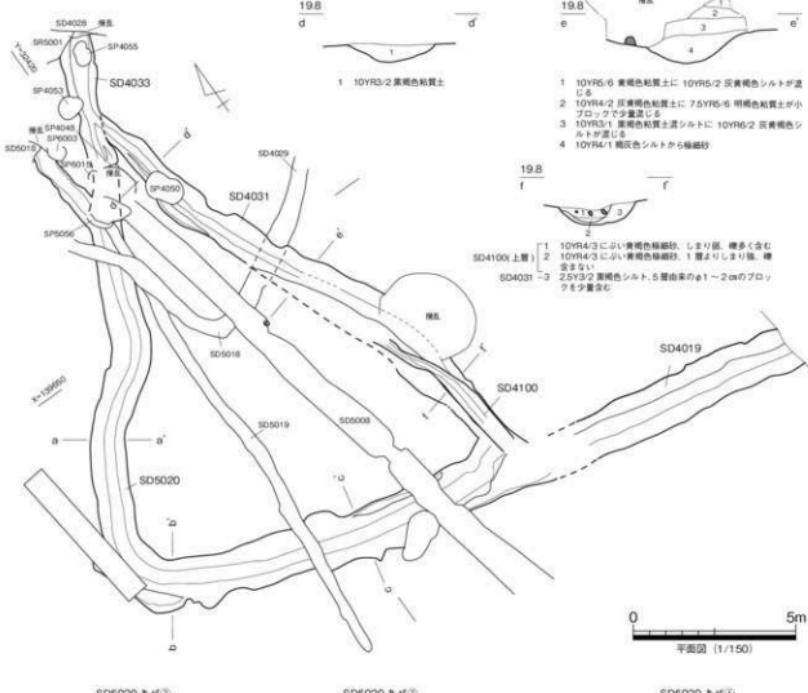
第67図 4区土器溜まり出土遺物

341は弥生土器甕である。口縁部がくの字状に折れ曲がり、端部を上方につまみ上げる。

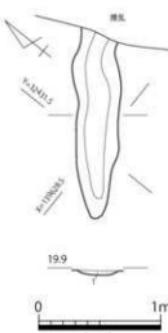
これらの溝については、出土遺物やほかの遺構との切り合い関係から、弥生時代後期以降に埋没したと考えられる。

SD4031(第68図) 調査区北側で検出された。調査区周辺の地割に沿っている。SD4029を切ることから、これに後にする遺構である。北側でSD4033に合流するが、両者の埋没に明確な先後関係は認められない。

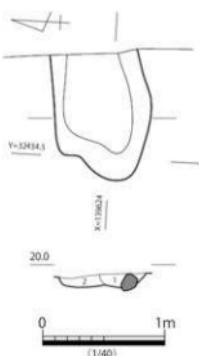
SD4018(第70図) 4-4区南で検出された。北東方向に流下する。幅は0.4m程度であるが、深さは0.1mに満たない浅い溝である。



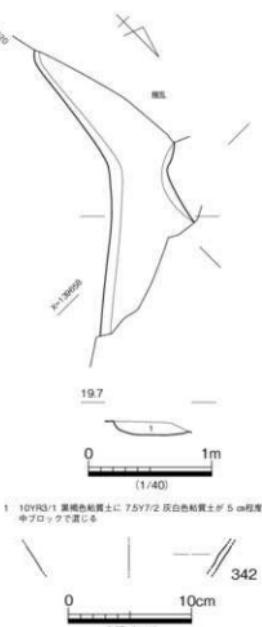
第68図 SD4100, SD4031, SD4033, SD5020 平・断面

第69図 SD4019
出土遺物

第70図 SD4018 平・断面



第71図 SX4008 平・断面



第72図 SD4032 平・断面・出土遺物

SD4032(第72図)4-4区北端で検出された。大部分をほかの遺構に切られており、詳細は不明である。深さは0.1mを図る。

342は須恵器杯である。外方に広がる口縁部を持つ。

不明遺構

SX4008(第71図)4-4区南端で検出された。調査区の東側に伸びると考えられ平面形は長楕円形を呈する。深さは0.1mと浅く、出土遺物も僅少であり、時期については不明である。

遺構外出土遺物

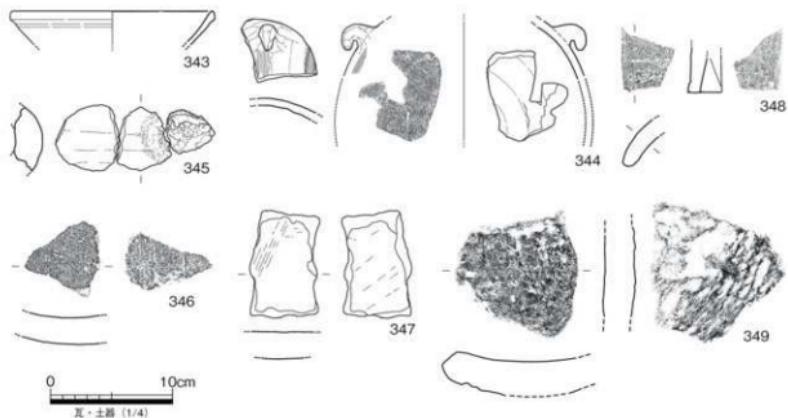
4区の遺構外から出土した遺物については、第73図に示した。

343は白磁碗である。口縁端部が玉縁状に肥厚する。口縁部下に沈線状のへこみを有する。344は須恵器提瓶である。肩部の把手が円でつながらない。体部にはカギ目が施される。

345はふいご羽口である。

346、347、349は平瓦である。346は凸面にナデ、凹面に布目を残す。349は凸面に斜め方向の縄目叩き、凹面に布目を残す。端面はケズリにより面取りを行う。347は調整が不明瞭であるが、凹面に糸切り状の痕跡を残す。347のみ中世以降の瓦の可能性があるが、それ以外は古代の瓦である可能性が高い。

348は丸瓦である。凸面には縄叩きのちナデを施す。凹面にはナデの痕跡が残る。



第73図 4区遺構外出土遺物

第4節 5区の調査成果

5区の調査においても3面の遺構面が確認された。おおよその遺構面の解釈は4区と共通しており、4区と同様の順番で報告を行う。なお、調査区の境界付近では同一遺構として解釈できる遺構も存在しているが、それらについては対応関係を示しながら、それぞれ個別に報告している。

【1面の遺構】(第74図)

(1) 近世の遺構

溝

SD5001(第75図) 調査区東端で検出された。南北方向に流下する溝であり、幅は両方の肩が判明する部分で最大で1.2mを測るが、深度は0.15mと比較的浅い。埋土の観察からは明瞭な流水の痕跡は確認できない。溝の方向は現在の地割と合致する。出土遺物の大半は古代の土師器・須恵器であるが、それらに混ざるように、中・近世の遺物が確認できる。出土遺物の最新のものの年代観によると、溝の埋没は18世紀以降となり、近世段階の地割の溝の可能性が高い。出土遺物は第75図に示した。

350～352は上層出土遺物である。

350は石製の鍋である。滑石製の石鍋の口縁部であり、口縁端部の下部が水平方向に突出する。器面の荒れなどから、本来の用途で使用されたのちに、温石として利用された可能性が高い。

351、352は平瓦である。いずれも凸面に繩目叩きを施し、凹面の調整は不明である。

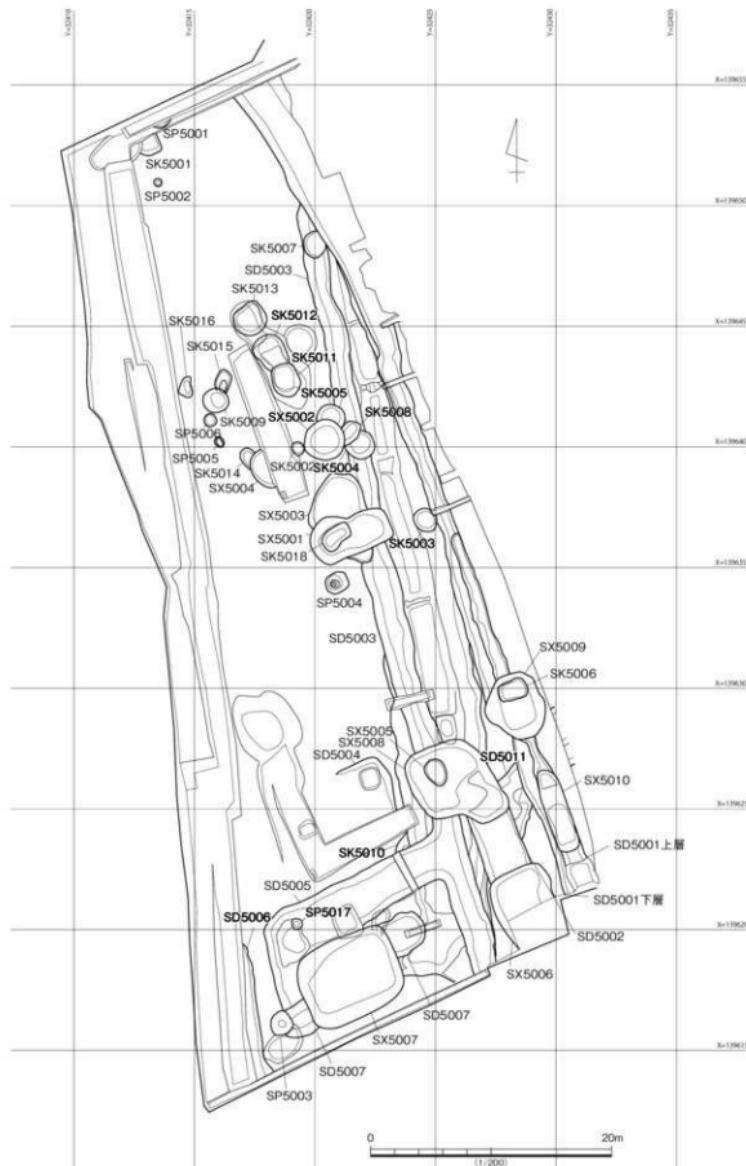
353～355は下層出土遺物である。

353は土師器椀である。断面U字状の高台が外方に開くようになりつく。体部下半で弱い稜を形成する。

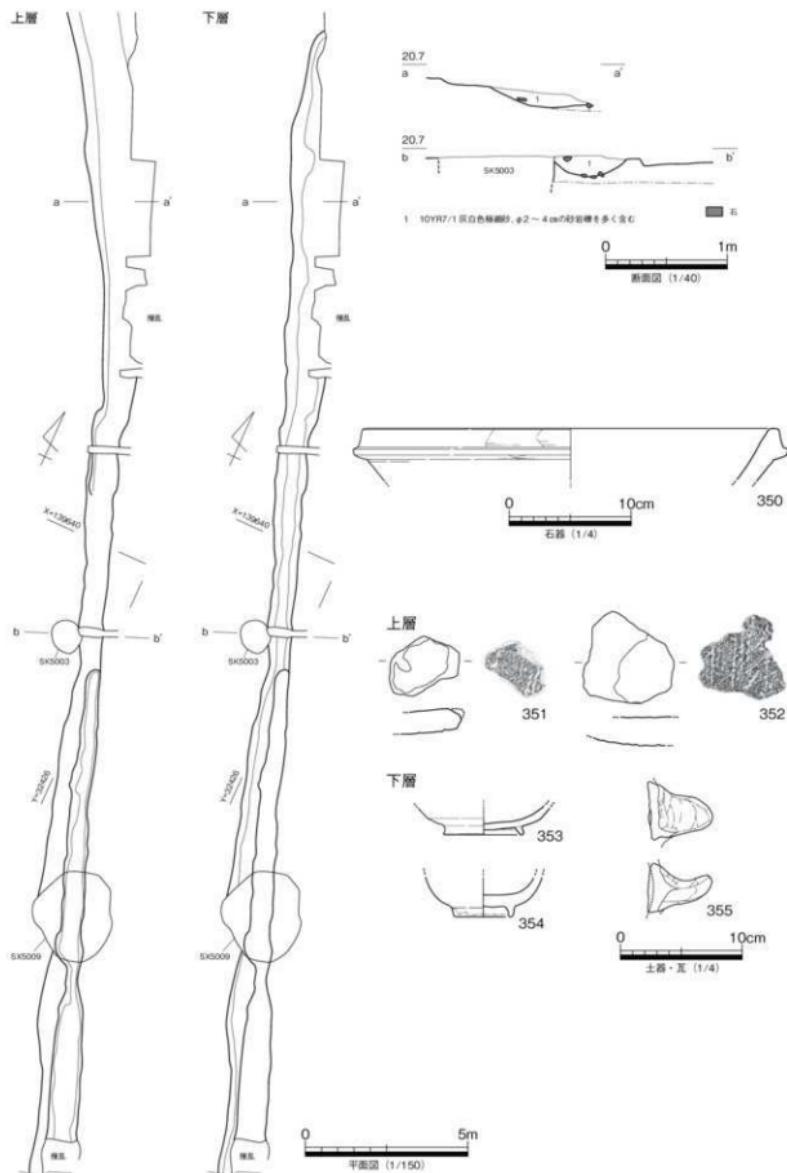
354は磁器椀である。あまり腰の張らない丸椀であり、高台部分では釉薬のふき取りがみられる。胎土の特徴や形態から、18世紀後半以降の年代が考えられる。

355は土師器鍋である。把手の破片であり、先端はやや上方に向けて上がる。

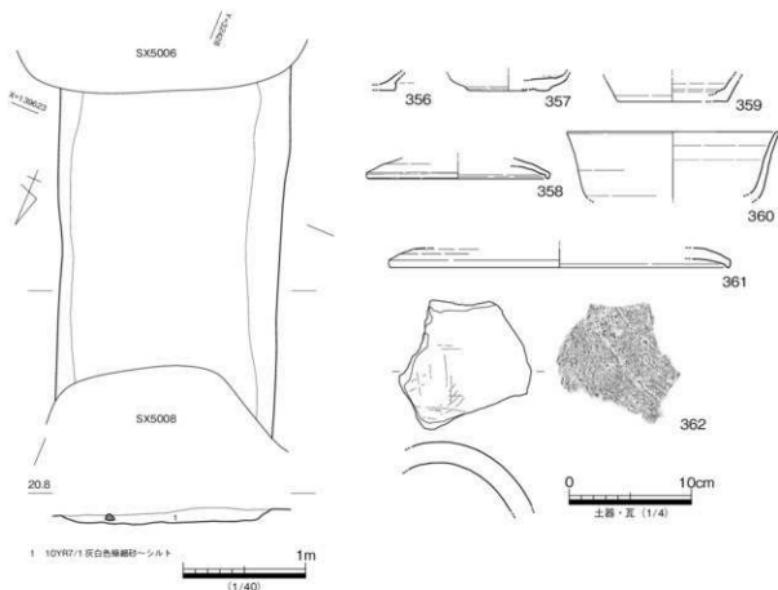
出土遺物については、古代の遺物も多く混じる状態であるが、下層から出土した陶磁器などの年代から、



第74図 5区1面 平面



第 75 図 SD5001 平・断面



第76図 SD5002 平・断面

18世紀後半以降の埋没を想定する。

SD5002・SD5004（第76、77図）調査区東側で検出された。基本的には南北方向に近い向きで流下するが、部分的には東北方向へ曲がる。近世の遺構に間を切られ連続性は確認できないが、遺構の深度や配置から、SD5002とSD5004は一連の遺構であると考えられる。

356、357は土師質土器杯である。底部が突出する形態を呈する。底部の切り離し方法は不明である。

357は腰が張るタイプの杯であり、調整等は摩滅により不明である。

358は須恵器蓋である。天井部までが比較的高く、口縁端部を折り返し、端部に面を持たせる。

359は須恵器壺である。底部から体部にかけて直線的に外方に広がる。

360は須恵器杯である。口縁部が緩く外反し、器高が深い杯である。

361は須恵器蓋である。皿に伴う蓋であり、口縁端部をナデにより下方につまみ出し面を持たせる。

362は丸瓦である。凸面は最終調整のナデが確認できる。凹面には布目が残る。

出土遺物は古代～中世のものが多い。土師質土器の杯の年代や遺構を切るSD5001の年代を参考にすれば、埋没年代としては中世後半に比定されるが、溝の方向などから考えると、近世以降の可能性が高い。

363は須恵器皿である。底部と口縁部の境界が緩やかに屈曲するほか、内面では強いナデのためにへこんだような形態を呈する。

364は須恵器壺である。外方に聞く高台を持つ。

365は土師器甕である。口縁端部にナデにより面を持たせる。

366はふいごの羽口である。正確な部位などは不明であるが、内径部分も残存しており、胎土には多く

砂粒を混ぜる。被熱痕跡が部分的に見られる。

SD5007(第78図) 調査区南端で検出された。北東方向に延びる土坑状の溝であり、中央部が擾乱によつて分断されている。深度は最大で0.3mを測り、埋土には少量の礫を含む。出土遺物は第78図に示した。367は土師質土器杯である。底部から口縁部まで大きく開く形態を呈し、底部の切り離し方法は不明である。

368は土師器碗である。断面U字状の高台がとりつき、高台が内側に向かってすぼまるために、外側では高台との境界がやや不明瞭である。

369、370は須恵器杯である。369は杯Bの高台であり、断面方形の低い高台が貼り付けられる。370は杯Aであり、口縁部が直線的に伸びる。

371は須恵器皿である。口縁部がやや内湾気味となり端部がとがる。内面に火捺が残る。

372は土師質土器甌である。側面の切開部の破片である。

373は平瓦である。凸面に格子叩きを施し、凹面には布目を残す。

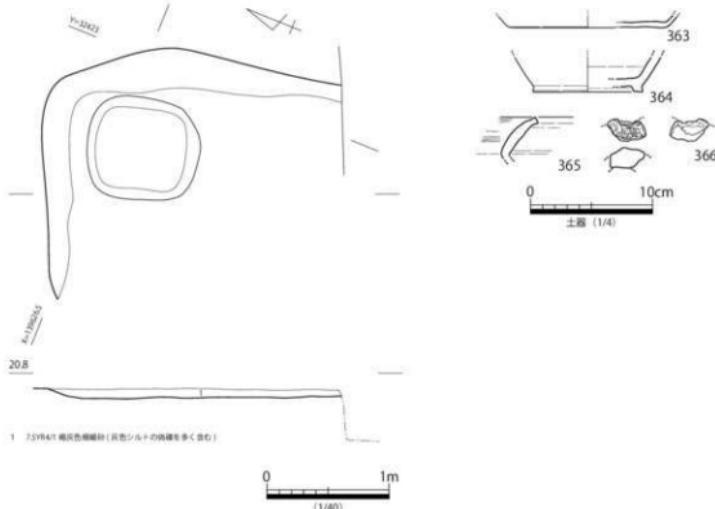
出土遺物の大半は古代の土器であるが、一部367、368のような中世土器も確認される。ただし、遺構の切り合いなどから、近世に埋没した遺構と判断した。

土坑

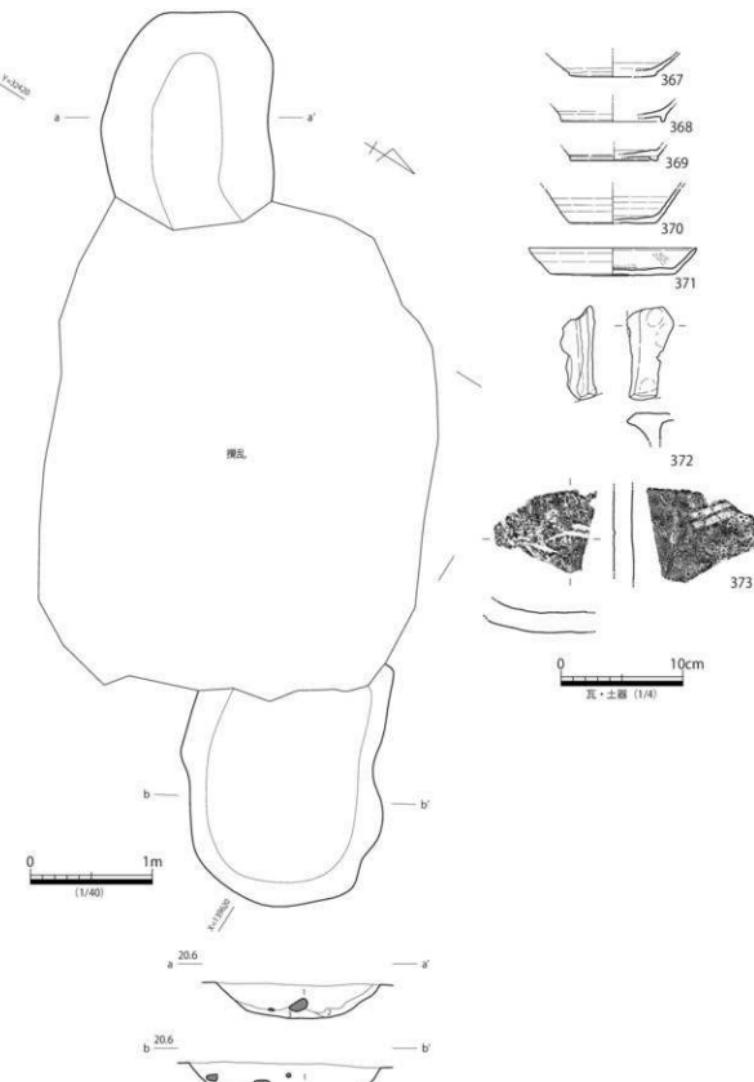
SK5002 調査区中央部付近で検出された。平面形態はほぼ円形を呈する。深度は浅い。出土遺物は第79図に示した。

374は須恵器蓋である。扁平なつまみがとりつく杯蓋である。

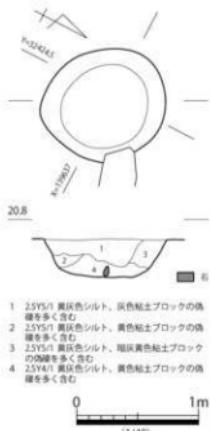
SK5003(第80図) 調査区中央部で検出された。ほぼ円形の平面形態を呈し、皿状の断面形態をもつ。底面は平坦になる。埋土に多くブロック土を含むため、人為的な埋め戻しがなされたものと考えられる。出土遺物は第81図に示した。



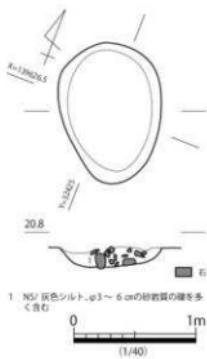
第77図 SD5004 平・断面



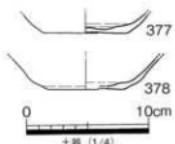
第78図 SD5007A・B 平・断面



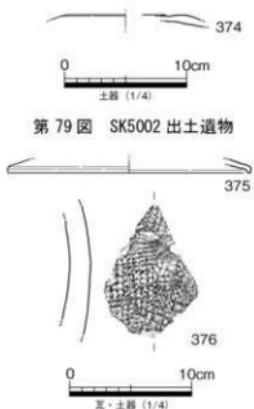
第 80 図 SK5003 平・断面



第 82 図 SX5005 平・断面



第 83 図 SK5007 出土遺物



第 79 図 SK5002 出土遺物

375は須恵器蓋である。口縁端部を折り返し、面を持たせる。

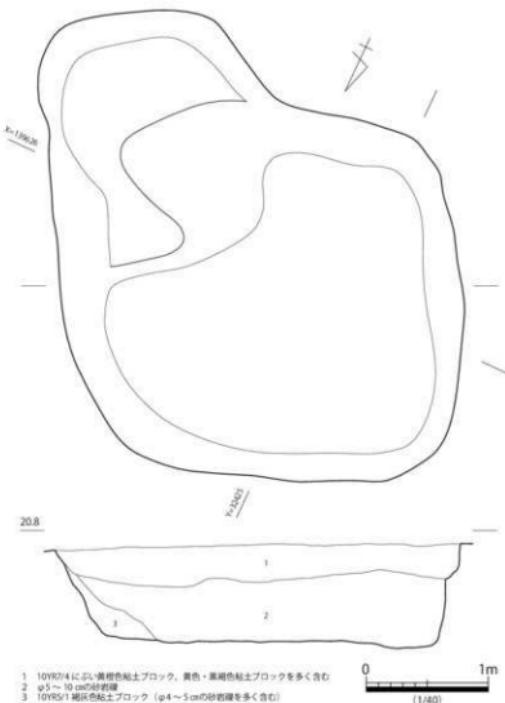
376は須恵器甕である。亀山焼の甕であり、外面には格子タタキを持つ。

出土遺物からは中世前半の年代が想定されるが、遺構の切り合いからは近世以降に埋没した可能性が高い。

不明遺構

SX5005（第 82 図） 調査区南部で検出された。小規模な楕円形の遺構であるが、近世の廃棄土坑と考えられる SX5008 を切ることや、埋土に礫を多く含むことから、近世の廃棄土

第 81 図 SK5003 出土遺物



第 84 図 SX5008 平・断面

坑と判断した。

SX5007 調査区南端で検出された。平面形態は東西方向に長い隅丸の長方形を呈する。出土遺物は第83図に示したが、図示していないものに近世のものを含み、遺構自体は近世の廃棄土坑であると考えられる。

377、378は土師質土器杯である。いずれもやや内湾気味に口縁部が立ち上がる。底部の切り離し方法は不明である。中世の土師質土器杯の可能性が高いが、さらに時期が下る可能性もある。

SX5008 (第85図) 調査区南部で検出された不整形な遺構である。断面方形で、底面が平坦になる。埋土には礫を多く含むことから、近世に耕作地として利用した際の礫などの廃棄に使用された土坑であると考える。出土遺物は第85図に示した。

379は青磁碗である。口縁端部まで直線的に伸びる。文様などは確認できない。

380は土師器皿である。口縁部は外反し、口縁端部が内側に肥厚する。内面には回転ナデのうちに右上がりのナデを施す。外面については、判然としないが底部付近で調整が変化している痕跡がみられ、ケズリを行っている可能性もある。

381は平瓦である。凹面に布目を残す。

382はふいごの羽口である。残存状況が良好ではないが、外径と、内径が部分的に認められる。外面にはあまり被熱等の痕跡はみられない。

383は丸瓦である。凹面に布目を残す。

384は須恵器甕である。口縁部が外反し、端部に面を持つ。外面には格子タタキを施す。

385は須恵器蓋である。杯に伴う蓋であり、口縁端部をつまみだし、面を持たせる。

386は土師質土器鉢である。残存部分では、内面に摺り目等は確認できないが、摺鉢の可能性が高い。口縁端部に面を持たせ、それ以下についてはユビオサエの痕跡が顕著に残る。

387は須恵器甕である。体部の破片であり、外面には平行叩き、内面には同心円状の当て具痕が残る。

388は土師質土器足釜である。やや内側に向かって立ち上がる口縁部と、口縁部下に垂れ下がり気味にめぐる突帯を持つ。

389は土師器甕である。鉢型の体部から、屈曲し内湾気味に外方へ延びる口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ出す。

390～393は平瓦である。392は調整が摩滅により確認できないが、凸面に関しては390が格子叩き、391がナデ、393が繩叩きを施す。凹面は布目が残される。

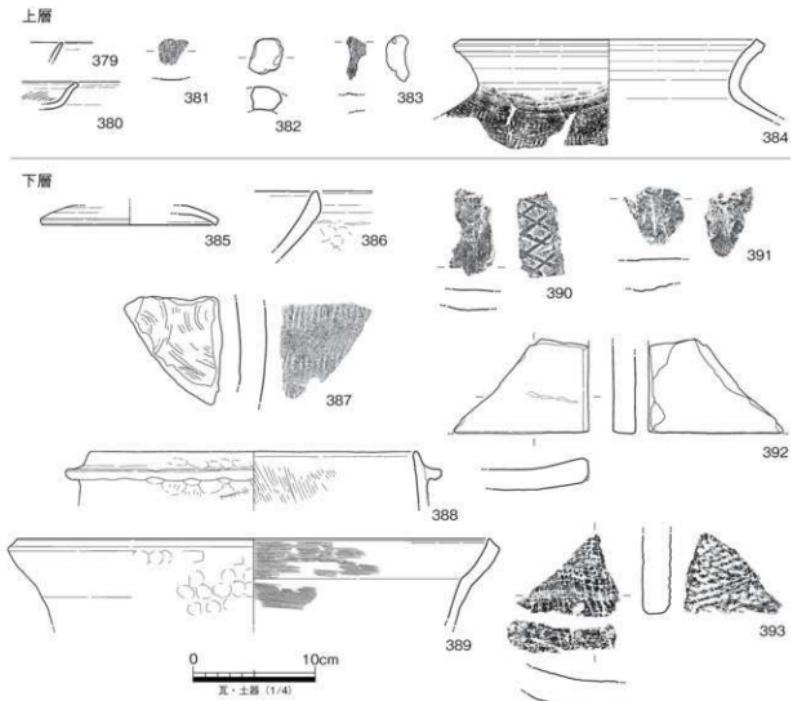
SX5009 調査区南東部で検出された。梢円形の土坑状の遺構であり、近世の遺構と考えられるSD5001を切ることからも、近世の廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第86図に示した。

394は須恵器蓋である。杯に伴う蓋であり、本来はつまみが存在していた。口縁端部が折り返され、端部に面を持つ。天井部外面は回転ヘラケズリを施す。

395は須恵器壺である。断面方形の高台が、外側に広がる形態を呈する。高台内には、爪圧痕が弧を描くように残されている。

396、397は丸瓦である。397は凹面に布目を残す。398は凸面に繩叩きを施し、凹面に布目が残る。端部の調整は摩滅により不明瞭であるが、ケズリによって面取りしていた可能性が高い。

398は平瓦である。凸面はナデ、凹面は布目が残る。穿孔が一か所確認できる。端面はナデによって成形する。



第 85 図 SX5008 出土遺物

SX5010 調査区南端で検出された。地割に沿うように南北に長い平面形態を呈する。SD5001 を切ることからも、近世以降の廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第 87 図に示した。

399 は木製の下駄である。表面が摩滅しているが、裏面の一部に刀子等による線状痕がある。半截材を用いており、24mm の間に 7 本の年輪が確認できる。

400 は漆器椀である。漆の膜面はややはがれかけている。広葉樹を横木取りしている。

(2) 中世の遺構

溝

SD5003・SD5005 (第 88 図) 調査区を南北方向に縦断する溝である。SD5001 に切られるが、その流下方向はおおむね一致している。調査区の南側で SD5005 と合流する。SD5005 は 2 本に分かれており、それぞれの深度や埋土に大きな差は見られない。地境付近に設けられた水路ないしは溝と判断した。出土遺物は SD5003 部分については上層・下層に分けて取り上げ、第 89 図に示した。

上層出土遺物は 401 ~ 410 である。

401, 402 は土師質土器杯である。いずれも底部のみが残存し、底部は回転へら切りによって切り離されている。

403は須恵器椀である。西村型土器椀の特徴をもち、口縁端部でナデにより若干の屈曲を持ち、内面には板ナデを施す。ミガキの痕跡は見られない。

404、405は土師器椀である。焼成は土師質であるが、西村型の土器椀である。404は口縁部が大きく開き、口縁端部は丸みを帯びる。405は断面U字状の高台が垂直にとりつき、底部付近にヘラケズリを施す。

406は須恵器杯である。直線的な口縁部が、垂直気味に立ち上がる。

407～409は須恵器壺である。407は断面方形の低い高台がとりつく。高台は削り出しによって作り出す。408は算盤玉状の形態を呈する長頸壺の体部である。409は頸部であり、口縁部が垂直に立ち上がる。

410は不明須恵器である。口縁部の破片の可能性が高いが、残存部が少なく断定できない。

下層出土遺物は411～452である。

411は瓦器椀である。口縁端部が強いナデにより外反する。内外面ともに横方向の細かいミガキを施す。和泉産の瓦器椀である。

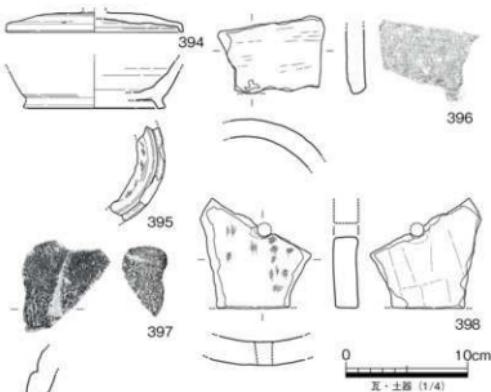
412は黒色土器椀である。断面台形の高台が外方に広がるようにとりつく。内面にミガキの痕跡が僅かに確認できる。

413、414、415は須恵器蓋である。413は宝珠形が退化したようなつまみを持つ。414は天井部外面にヘラケズリを施し、口縁端部を下方につまみ出し面を持たせる。415は口径からも皿に伴う蓋の可能性が高い。

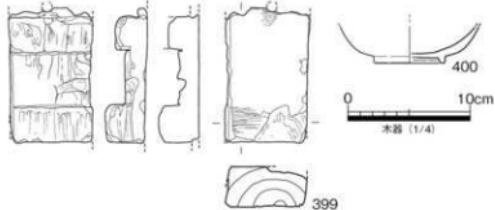
416は須恵器甕である。大形の甕の頸部であり、口縁部は外反する。

417～419は土師質土器皿である。417は内面における底部との境界が明瞭であるが、418、419についてはナデによりつまみ出したような断面三角形の口縁部形態を有する。いずれも底部はへら切りによつて切り離す。

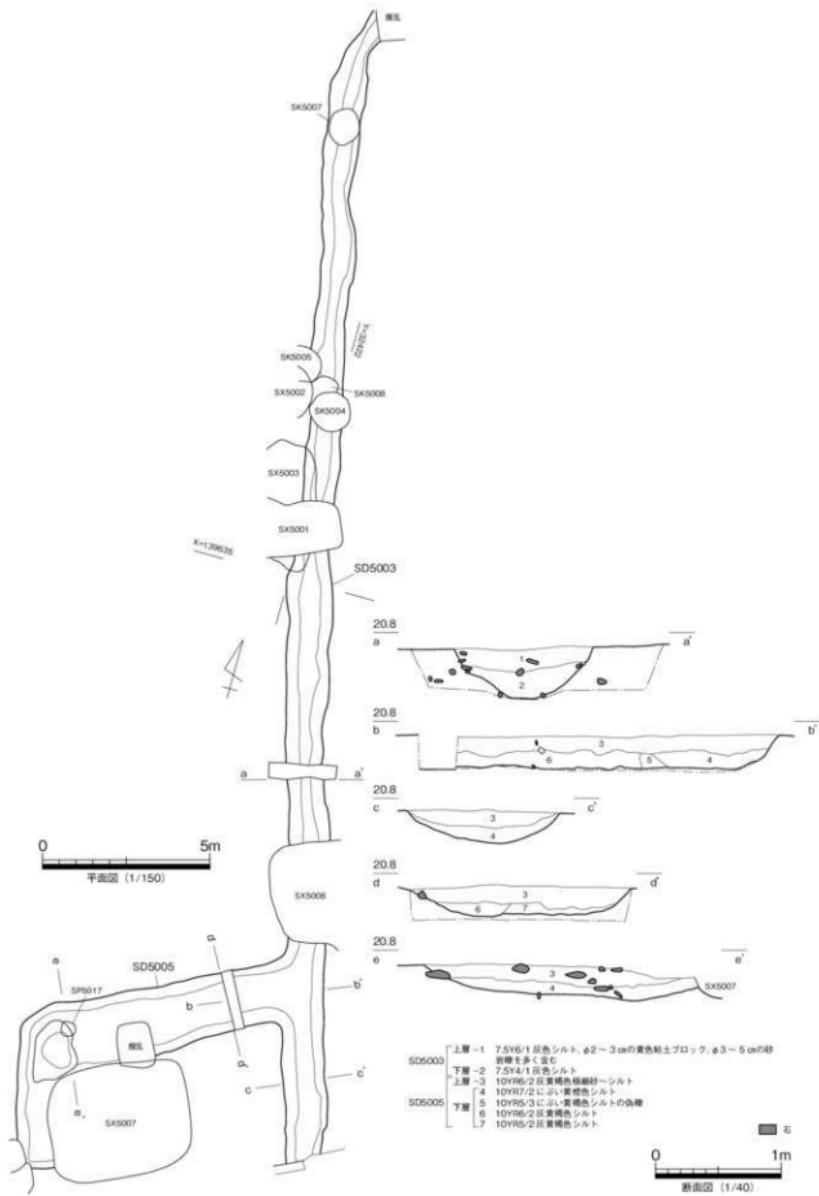
420～426は土師質土器杯である。いずれも底部はへら切りによって切り離す。421は屈曲し口縁部が外反する。422は口縁部がやや内湾気味に外方へ延びる。423は底部から強く外反している。口縁端部が欠損している。424は口縁部が直線的に外方へ延びる。425は口縁部の立ち上がりが強く、端上面に若干の面をもつ。見込み中央部がへこむ。426は深手の杯であり、口縁部がやや内湾す。



第86図 SX5009 出土遺物



第87図 SX5010 出土木器



第88図 SD5003, SD5005 平・断面

427～429は黒色土器碗である。いずれも断面方形の高台が、外方へ開くようにとりつく。高台高が低く、底部が押し出されたような形態を呈する。

430～433は土師器碗である。西村型土器碗の特徴を有しており、焼成が土師質になったものと考えられる。430はやや外方に踏ん張る形態の高台をもつ。431、432は焼成が悪く、摩滅も著しいため詳細は不明である。433は碗の底部をへら切りによって切り離したのに、断面三角形の低い高台を貼り付ける。

434、435は白磁碗である。434は底部の破片であり、高台をケズリ出しによりわずかに作り出す。435は口縁部であり、断面三角形状に口縁端部を肥厚させる。

436は土師器壺である。小型の短頸壺である。比較的精良な胎土を用いており、肩部から直線的に頸部に至り、垂直に短く口縁部が立ち上がる。機能などは不明である。

437は土師器甕である。口縁端部が外方に肥厚する。

438、439は亀山焼甕である。438は内面に横方向のナデを施し、ユビオサエを施す。439は外面に太筋の平行叩きの痕跡が残る。底部端が、やや外方に突出する。

440は白磁碗である。残存部分においては、外面に施釉は行わず、回転ヘラケズリの痕跡が残る。内面にはやや黄色がかかった釉薬を施し、見込みには圈線が施される。

441、442は土師質土器足釜である。441は口縁部が内傾し、突帯が上方に向かって延び、端部は強いナデで凹線状にへこませる。底部には格子叩きを施す。442は口縁部がやや内傾し、端部の上をナデにより平坦にする。突帯はほぼ水平に伸び、内外面ともにハケ目を顕著に残す。底部には格子叩きを施す。

443～448は土師器杯である。いずれもあまり明瞭ではない平底に、内溝する口縁が伴う。443は口縁端部をナデにより、やや直立気味にしている。445、447は口縁端部をナデにより外反させる。

449は須恵器鉢である。口縁部が直線的に延び、口縁端部をとがらせる。

450はふいごの羽口である。外面には被熱の痕跡がみられる。

451、452は平瓦である。凸面には繩目叩きを施し、凹面には布目を残す。側面まで布目が残る。452は凸面ナデによって仕上げ、凹面はミガキ状の調整によって表面を平滑化する。

SD5005出土遺物は、上層、下層に大別し、一部最下層の7層を別に取り上げている。

上層出土遺物は453～468である。

453～455は土師質土器杯である。453は判然としないが、454と455は底部をへら切りによって切り離す。口縁部は外反するものと想定される。

456は須恵器皿である。底部がやや上げ底状となる。

457は須恵器蓋である。つまみがとりつく蓋であり、短頸壺に伴うものであると考えられる。天井部からほぼ直角に下方へ曲がる。

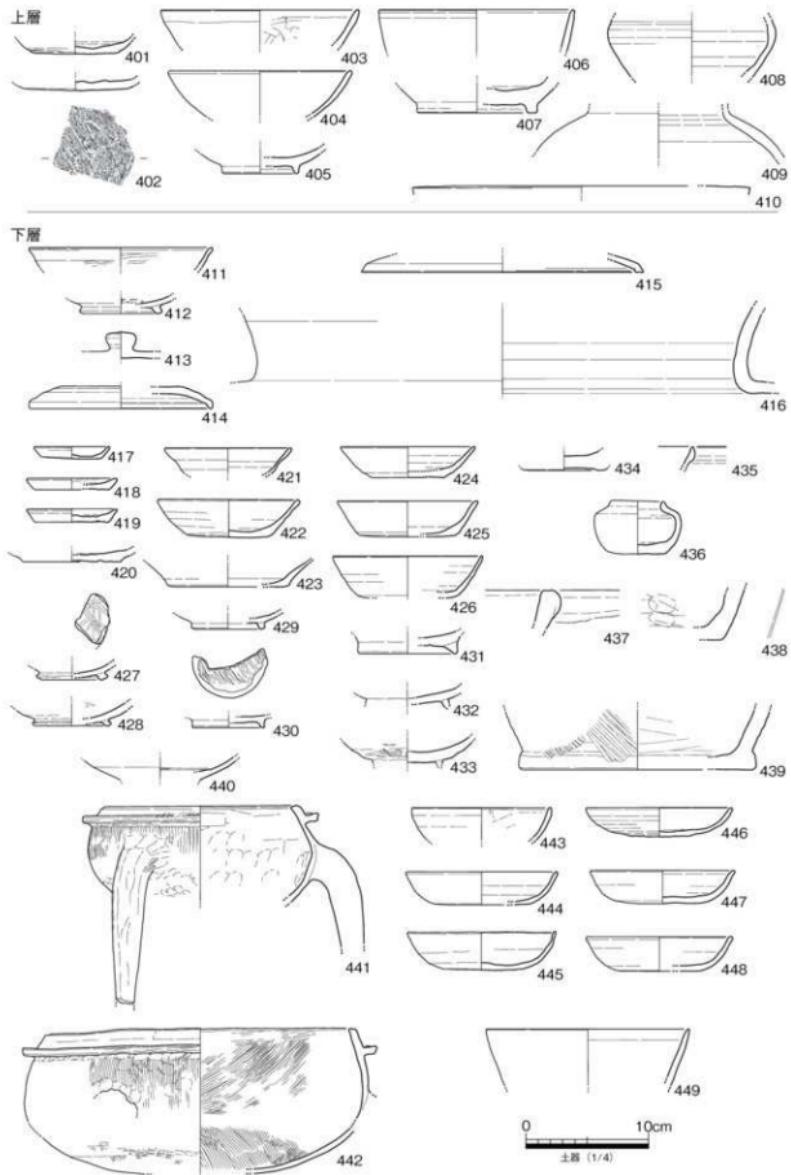
458は須恵器高杯である。脚端部の破片であり、端面を下方につまみ出す。

459は瓦器皿である。和泉型の瓦器皿であり、体部で屈曲し、屈曲の下にはユビオサエの痕跡を残す。

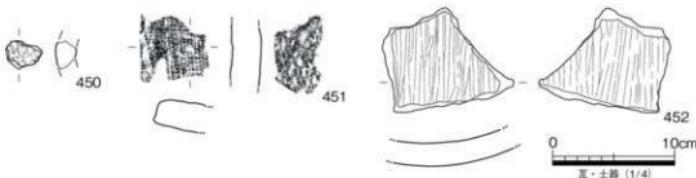
460、461は土師質土器杯である。高台付の杯であり、いずれも外方に開く、高い高台を持つ。460は外面に細かいナデを施し、高台は貼り付けによって作る。

462は須恵器壺である。底部の破片である。

463は須恵器硯である。円面硯の脚部であり、強く外反する脚部に、上方、下方ともに拡張する端部を持ち、端部には面を持つ。透孔が一か所確認でき、間隔等が不明であり数の復元ができないが、下端が



第 89 図 SD5003 出土遺物 1



第90図 SD5003 出土遺物2

直線的になるため、おそらく長方形状の透孔をもつ。

464、465は土師器羽釜である。いずれも鋤がほぼ水平にとりつき、465は端面にナデによって面を作る。口縁部は体部から直線的に屈曲し外方に広がると考えられる。

466は須恵器甕である。外面に平行叩きの痕跡が残り、内面には同心円状の當て具痕が残される。

467、468は須恵器壺である。長胴の壺である。外面には格子叩きを施し、内面にはユビオサエ痕が顕著に残る。468は外面の底部と体部の境界に、へら状の工具で面取りを行う。

下層出土遺物は469～476である。

469は須恵器杯である。外方に大きく開く口縁部を持つ。

470は土師質土器杯である。深い器形に、口縁端部が僅かに肥厚する。

471は瓦器椀である。見込みに格子状のミガキを施す。

472は黒色土器椀である。断面三角形の高台を持つ。内面の黒色化が全体に及んでいない。

473は須恵器杯である。底部をへら切りによって切り離し、体部は内渦気味になる。外面に火摺が残る。

474は土師器甕である。口縁部が屈曲し、端部にナデによって面を作る。

475、476は須恵器甕である。口縁端部が屈曲し水平となる。476は体部片であり、外面に格子叩き、内面には平行叩きの痕跡のような圧痕が残る。内面の圧痕は叩きに伴う當て具の痕跡である可能性が高い。最下層出土遺物は477～479である。

477は土師器椀である。内傾する高台を持つ。胎土の特徴からは西村型の土器椀とは判断できない。

478は須恵器壺である。中型の壺であり、断面方形の高台が外方に踏ん張る形態を呈する。

479は土師器高杯である。脚柱部が断面多角形状を呈する高杯である。外面はケズリを施し、内面には粘土接合痕を顕著に残す。

SD5006 調査区南西隅で検出された。おおむね現在の地割の方向に平行する溝である。4区に西側を切られ、全体幅は不明である。出土遺物は第92図に示した。

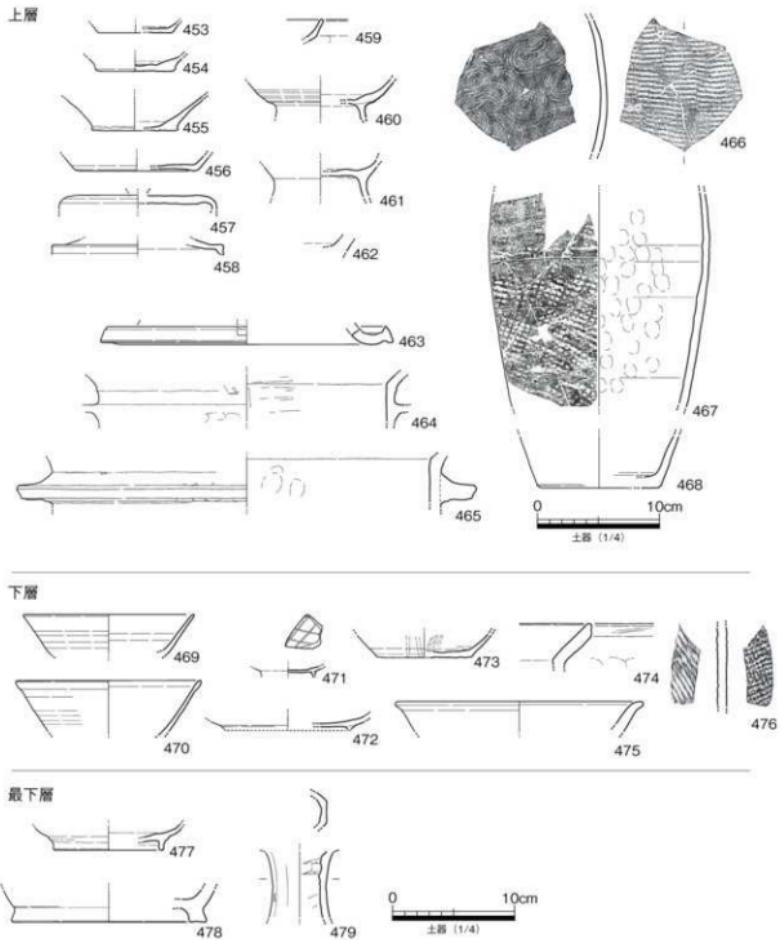
480は土師器椀である。全体に摩滅が著しく、調整などは不明。断面逆三角形の高台を貼り付ける。

481は須恵器壺である。胴部下半の破片である。

482は須恵器甕である。体部の破片であり、外面に格子叩き、内面はユビオサエの痕跡が残る。

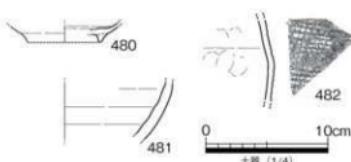
SD5008 (第93図) 調査区中央部を南北方向に流下する。南端では溝の端が収束しているが、北側は6区に至るまで検出されているが、6区での検出範囲はきわめて小さく、6区における同遺構と出土遺物についても、あわせて報告する。

遺構の検出幅は、最大で4m程である。断面形状は、多少変化はあるものの、おおむね断面逆台形状を呈し、底面は比較的平坦となる。特徴として、3～5mごとに、障子堀り状に、溝の底面が高くなり、壁のように溝に直行する仕切りのような部分が生じる。これらの機能については、仕切りより下部の堆

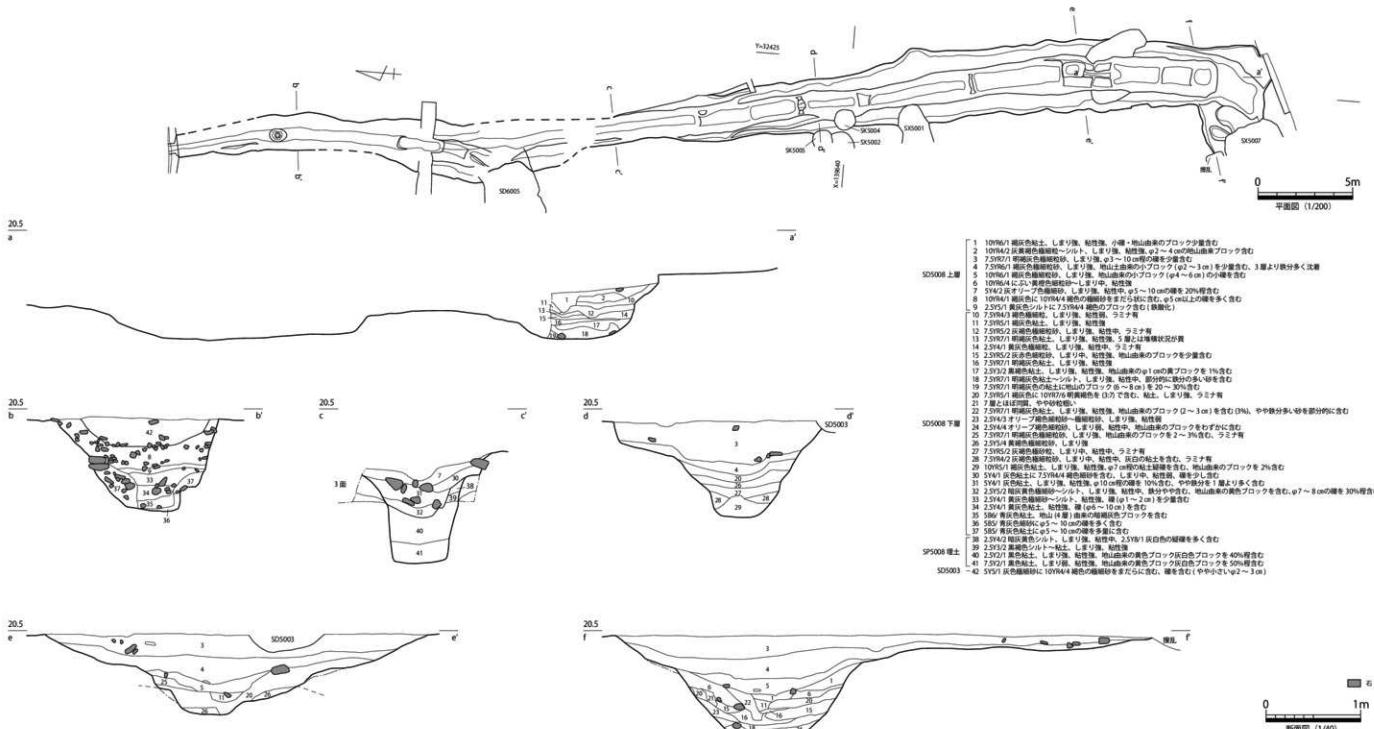


第91図 SD5005 出土遺物

積状況を観察すると、いずれもラミナが明瞭に認められ、流水があったことが想定されることから、灌漑に用いられたものであると想定する。そして、仕切り状の部分は、配水の際などの流量の調整のための施設の可能性が考えられる。このほかに、溝の機能にかかわる施設や構造は確認できなかつ



第92図 SD5006 出土遺物



第93図 SD5008 平・断面

た。

仕切り状の部分より下位の流水が確認できる部分を下層、それより上位を上層として遺物の取り上げなどを行った。出土遺物は第94～96図に示した。

上層出土遺物は483～503である。

483は瓦器椀である。外面下半にユビオサエ痕跡を持ち、見込みには不整方向のミガキを施す。高台は断面逆三角形に近いが、端部のみつまみ出したような形態を呈する。

484～486は土師器椀である。484は、調整は摩耗により判然としないが、外面に粘土接合痕がみられる。高台は断面台形のものが、外方に開く。底部は下方に押し出されたような形態を呈する。485は外面における高台との境界が不明瞭で連続するような形態を呈する。外面は強いヨコナデにより弱い段を形成する。486は高い高台を持ち、高台の端部がやや外方に広がる。

487は土師質土器杯である。底部はへら切りによって切り離し、底部から口縁部にかけて緩く外反する。

488～490は須恵器蓋である。488は宝珠形のつまみを持つ杯蓋であり、口縁部にかいりを持つ。489は扁平なつまみを持つ。490は皿などに伴う蓋であり、口縁端部がやや内側につまみ出される。

491は須恵器壺である。短頸壺であり、肩部に水平方向の列点が施される。口縁部がやや外方に広がる。

492～494は須恵器甕である。492は口縁部の破片であり、端部にナデにより面を持たせ、少し上方に摘み上げる。

495、496は土師器甕である。屈曲し外方に広がる口縁部を持つ。いずれも口縁端部に、ナデにより回線状のへこみを作る。

497はふいごの羽口である。端面が残存しており、外面と端面に被熱の痕跡がみられる。

498は不明須恵器である。おそらく杯の底部であろうが、断定はできない。底面に刻書を施す。刻書の内容は不明である。

499は不明陶器である。扁平な板状の土製品で、平瓦の可能性もあるが、厚さや曲がりの弱さなどからも、別のもの可能性がある。調整や文様なども認められない。

500は平瓦である。凸面には繩叩き、凹面には布目を残す。側面や端面の調整については、摩滅により判然としない。

501～503は丸瓦である。501は凸面にはナデ、凹面には布目の痕跡を残す。側面の調整は不明である。

502は凸面にはナデ、凹面には布目を残す。503は凸面にはナデ、凹面には布目を残す。

下層出土遺物は504～508である。

504、506は土師質土器杯である。504口縁部は緩く外反する。底部は回転へら切りによって切り離されており、内面には煤のような付着物が残る。外面にこのような痕跡が認められることから、灯明具として使用された可能性も考えられる。506は底部を回転へら切りによって切り離すが、全体として丸みをもつ。胎土は精良である。

505は土師器椀である。体部には屈曲部が認められ、白色系の胎土を用いていることから、吉備系の土師器椀であると考える。

507は須恵器高杯である。杯部下半に回転ヘラケズリを施す。脚部の貼り付けの痕跡が認められ、透孔の痕跡も確認できる。

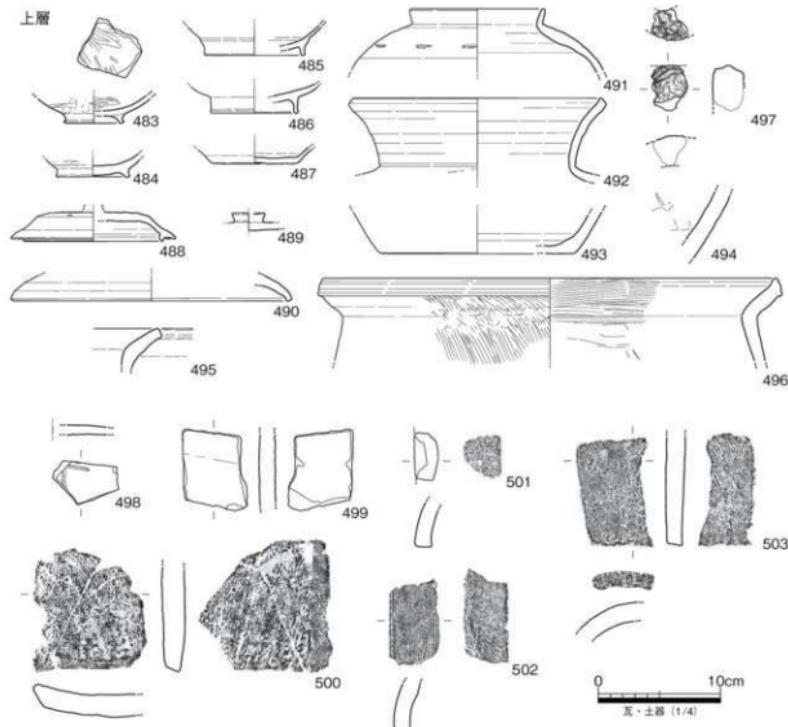
508は平瓦である。凸面には格子叩きを施し、凹面には最終調整としてナデを施している。側面はケズリによって面取りし、端面も同様の方法を用いている。

なお、SD5008 出土遺物の中で、層位不明の遺物についても 509 ~ 544 に示した。なお、木製品については、大部分が下層出土の可能性が高い。

509は土師器椀である。口縁部が外反し、外面にはヨコナデを施す。内面には横方向のミガキが確認できる。西村型の土器椀とは特徴が異なる。

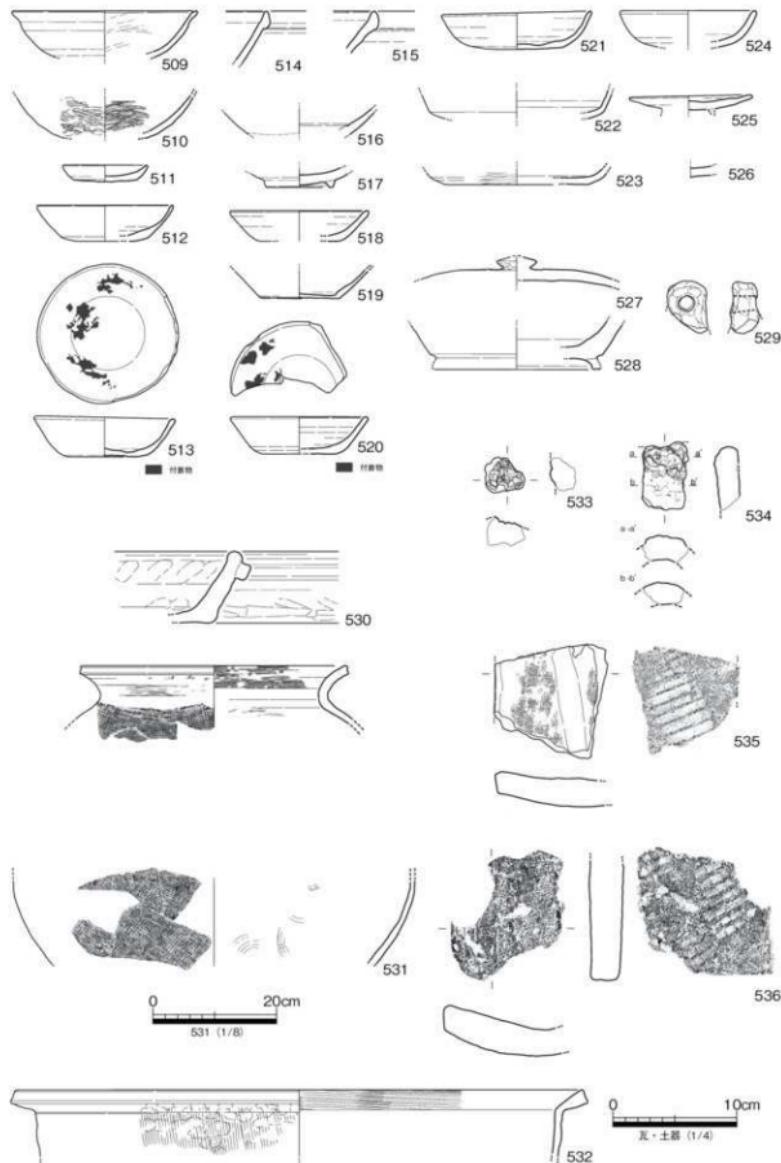
510は須恵器椀である。西村型の土器椀であり、内外面に横方向のミガキを顕著に残すほか、外面にはユビオサエの痕跡が確認できる。

511は土師質土器皿である。口縁部は内湾気味に短く伸びる。底部はヘラ切りによって切り離す。

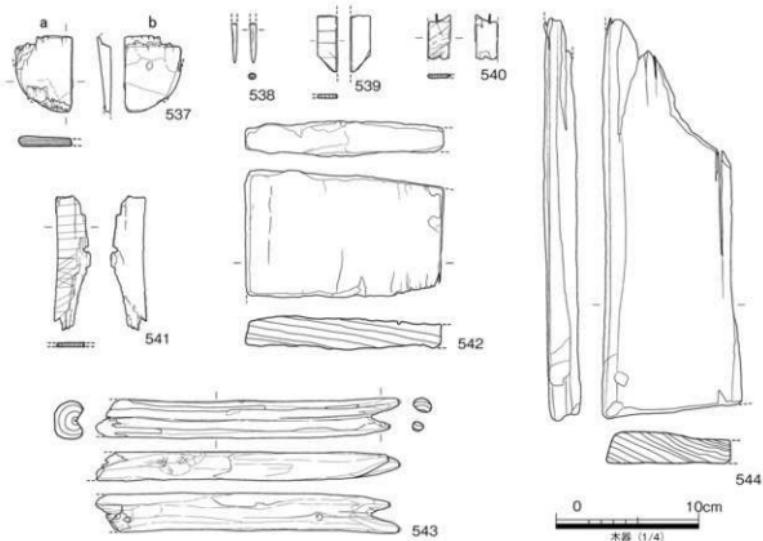


第 94 図 SD5008 出土遺物 1

- 512、513、518～521は土師質土器杯である。いずれも底部は回転へら切りによって切り離す。512は口縁部が内湾し見込み中央部がへこむ。513は内面に煤のような付着物がみられる。灯明皿として使用されたか。518、519は口縁部が直線的に外方へ開く。520は口縁部が直線的に外方に開くほか、513のような付着物の痕跡が確認できる。521は全体的に丸みを持ち、口縁部がわずかに外反する。
- 514は白磁碗である。口縁部であり、端部が断面三角形状に肥厚する。
- 515は須恵器鉢である。東播磨系の摺鉢であり、口縁端部が丸みを持ちながら肥厚し、口縁端部付近のみ黒色化する。
- 516は白磁碗である。外面上部は施釉される。内面には一重の圓線を巡らせる。
- 517は土師器碗である。断面台形の高台を貼り付け、底部が下方に押し出されたような形態を呈する。
- 522は須恵器杯である。底部から緩やかに曲がり、直線的に傾斜を持って立ち上がる。
- 523は土師器皿である。内外面に赤彩を施し、外面下半にはヘラケズリを施す。部分的にミガキが確認される。
- 524は土師器杯である。丸底に近い形態を呈し、口縁部はやや内湾する。
- 525は土師質土器皿である。浅い皿に高台が取り付くタイプの皿である。口縁端部内面はナデによってへこませる。
- 526は不明陶器である。内面には薄い緑色系の釉薬が施される。底部の破片であり、底部はケズリ出しによって成形される。
- 527は須恵器蓋である。杯に伴う蓋であり、宝珠形のつまみが取り付く。自然釉により調整は不明瞭であるが、内・外面部共に回転ナデにより成形されている可能性が高い。
- 528は須恵器壺である。断面方形の高台が、外方に踏ん張るように開く。
- 529は蛸壺である。穿孔部のみが残存し、上部に穿孔方向と直行するへこみをナデによって作る。
- 530は土師器鉢である。断面台形状の浅い鉢であり、口縁部下に下方に向かう突帯が取り付く。底部付近には板ナデの痕跡が顕著に残り、内面にはユビオサエの痕跡が顕著に残る。
- 531は須恵器甕である。口縁部が外反し、端部にはヨコナデにて凹線状のへこみをもたせる。体部外面には、格子叩きを施す。
- 532は土師器甕である。口縁部が明瞭に屈曲した後に外方に広がり、口縁端部は上下に肥厚し、端面にはナデにより面を持たせる。
- 533、534はふいごの羽口である。533は外面に被熱した痕跡が残る。534は端面が残存しており、特に被熱痕跡が顕著に残り、ガラス化した飴物等が付着している。
- 535、536は平瓦である。535は凸面に、平行叩きを施す。おそらく繩叩きであろう。凹面には布目が残る。側面の調整は不明である。536は凸面に格子叩きを施し、凹面には布目を残す。側面にはケズリを施し面取りを行う。
- 537は不明木製品である。弧を描く部分を残す。b上面上端は切り込みを入れたあと折っていると考えられる。a上端は斜めにカットされているものの、折り取りとの前後関係は不明である。加工痕は一部見られる。
- 538は箸状木器である。炭化材となっており、摩滅部分はほとんどない。明瞭な加工痕は見られない。
- 539～541は曲物側板である。539は片面に刀子によるけびきが見られることから曲物側板と考えられる。全体的に摩滅しているため、工具、加工痕は見られない。540は片面にケビキ痕を残す。そのほか刀子



第95図 SD5008 出土遺物 2



第96図 SD5008出土木器

等による線状痕がある。541はけびき痕が多数残される。

542は木製の板材である。明確な加工痕跡は摩滅により確認できない。

543は木製の布巻具である。棒状の素材の両端に抉りをついている。全体的にやや摩滅しているが、部分的に加工痕が認められる。

544は板材である。全体として摩滅している部分が多いが、側面部に加工痕が残される。全体に焼痕があり、側面以外は割面と考えられる。

土坑

SK5004 (第97図) 調査区中央部よりやや北で検出された。平面形態はほぼ正円形を呈し、掘り込みはほぼ垂直に掘り込まれる。掘り込みの形状から、廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第98図に示した。

545は土師質土器皿である。口縁部が短く立ち上がりやや外反する。底部はへら切りによって切り離す。

546は土師器椀である。断面台形の細い高台が取り付く。西村型の土器椀であると考えられる。

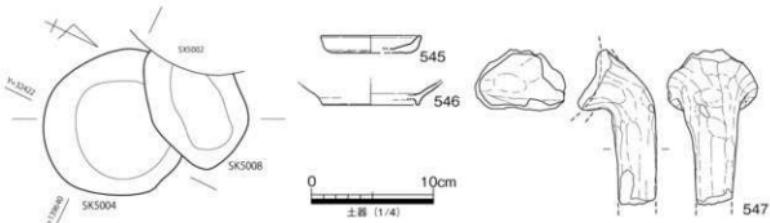
547は土師質土器足釜である。脚部のみが残存し、内面にはユビオサエの痕跡が残る。

SK5005 調査区北側で検出された。ほぼ円形の土坑である。近世の遺構であるSX5002に切られるほか、中世の遺構であるSD5003を切る。出土遺物は第99図に示した。

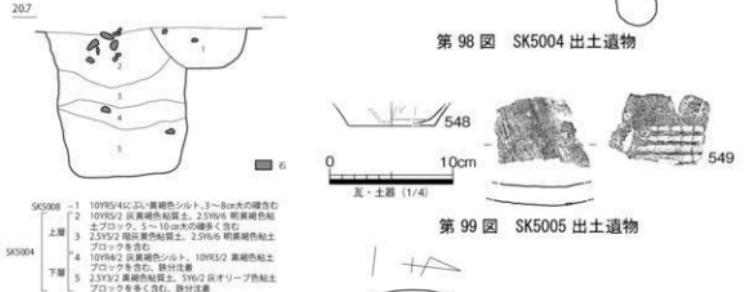
548は須恵器杯である。底部はへら切りによって切り離されており、内外面に火捺が残る。

549は平瓦である。凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。

SK5007 (第100図) 調査区北側で検出された。楕円形状の平面形に、ほぼ垂直の掘り込みを持ち、深さは0.4mを測る。出土遺物は第97図に示した。



第98図 SK5004出土遺物



第99図 SK5005出土遺物

SK5008
上層 1 10YR5/4C 黒褐色シルト、3-Box木の埋在右
2 10YR5/2 黒褐色粘質土、2.5%赤、明黄色粘
土コロイド、3~10mmの砂多く含む
3 2.5%赤の鉄分を含む粘土、2.5%赤
4 10YR4/2 黒褐色シルト、10YR3/2 黑褐色粘土
5 2.5%赤の黒褐色粘質土、5Y6/2 黒オリーブ色粘土
プロトヨリ多。(吉G、株付) 番



第97図 SK5004, SK5008 平・断面

550は土器碗である。断面三角形の高台が取り付く。

551は黒色土器碗である。断面三角形の低い高台が取り付く。内外面ともに摩滅により調整は不明である。

552~554は瓦器碗である。552は口縁部片であり、内外面に横方向のミガキを施す。553も同様に横方向のミガキを施す。

555は不明須恵器である。端部の破片であり、上部に回線を施す。

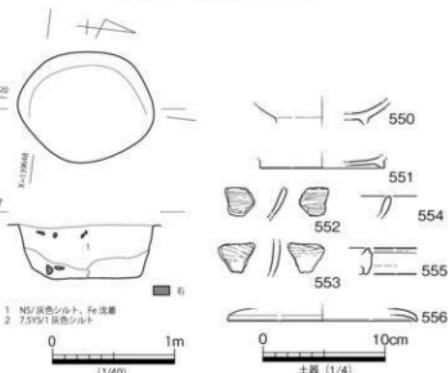
556は須恵器蓋である。口縁端部を下方につまみ出し、面を持たせる。

SK5010 調査区南側で検出された。遺構の大部分を SD5005 に切られており、遺構としての詳細は不明である。出土遺物は第102図に示した。

557は土器器皿である。口縁端部が内側に少し肥厚する。赤彩が確認でき、内面には図化できないが、ミガキの痕跡が確認できる。

558は土器高杯である。脚部であり、裾が大きく開く。外面にはミガキの痕跡が残る。

SK5001(第103図) 調査区北端で検出された。平面は楕円形を呈し、深度は0.2mを測る。埋土に多



第100図 SK5007 平・断面

第101図 SK5007出土遺物



1 NS/灰色シルト、Fe沈着
2 7.5%T 黒色シルト

0 1m
(1/40)

0 10cm
(1/4)

土器

[1/4]

くの礫を含む。近世の遺構である SX4002 に切られる。出土遺物は第 103 図に示した。

559 は須恵器杯である。口縁部が直線的に延び、立ち上がりの角度が強い。

SK5017 調査区中央より少し東で検出された。検出された面は 3 面であるが、出土遺物の年代からは、1 面の遺構であると考えられたため、1 面の遺構として報告する。ほぼ円形の土坑であり、直径 0.5 m を測る。出土遺物は第 104 図に示した。

560 は土師質土器杯である。底部の切り離し方法は不明である。内外面ともに煤の付着が確認でき、なおかつ破面にも付着が確認されるため、破損のうちに、灯明具として転用されたものと考えられる。

561 は須恵器壺である。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。

【2面の遺構】(第 105 図)

溝

SD5009 (第 108 図) 調査区中央部付近で検出された。ほぼ東西方向に延びる溝であり、東側の 4 区では、SD4014 につながる。断面からも比較的垂直に掘り込まれた溝であることがわかる。埋土には流水の痕跡が確認でき、水路として機能していたものと考えられる。南側に SZ5001、北側に SZ5003 が隣接しており、それらの畦畔との関係からも、水田に関連する灌漑用の水路であると考えられる。出土遺物は第 106 図に示した。

562 は不明須恵器である。底部の破片であり、ナデの痕跡が確認できる。

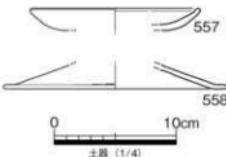
563 は須恵器甕である。小型の甕であり、口縁部が外反する。

SD5010 (第 108 図) 調査区中央で検出された。SD5009 と同方向に延びており、東側の 4 区では、SD4013 につながる。平面規模や断面形状、方向などが SD5009 と類似するが、SD5010 については、SD5009 に伴う畦畔である SZ5002 を切って掘削されたため、時期差のある遺構であると考えられ、新たに掘削された水路である可能性が高い。

柱穴

SP5007 (第 107 図) 調査区南側で検出された。一部擾乱によって平面形態が不明であるが、おそらく楕円形の平面形を持つ。出土遺物は第 102 図に示した。

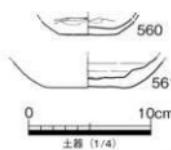
564 は土師器杯である。底部をヘラ切りのち、ナデを施す。外面底部との境界に、面取り状に強いナデを施す。口縁部は強く外反する。



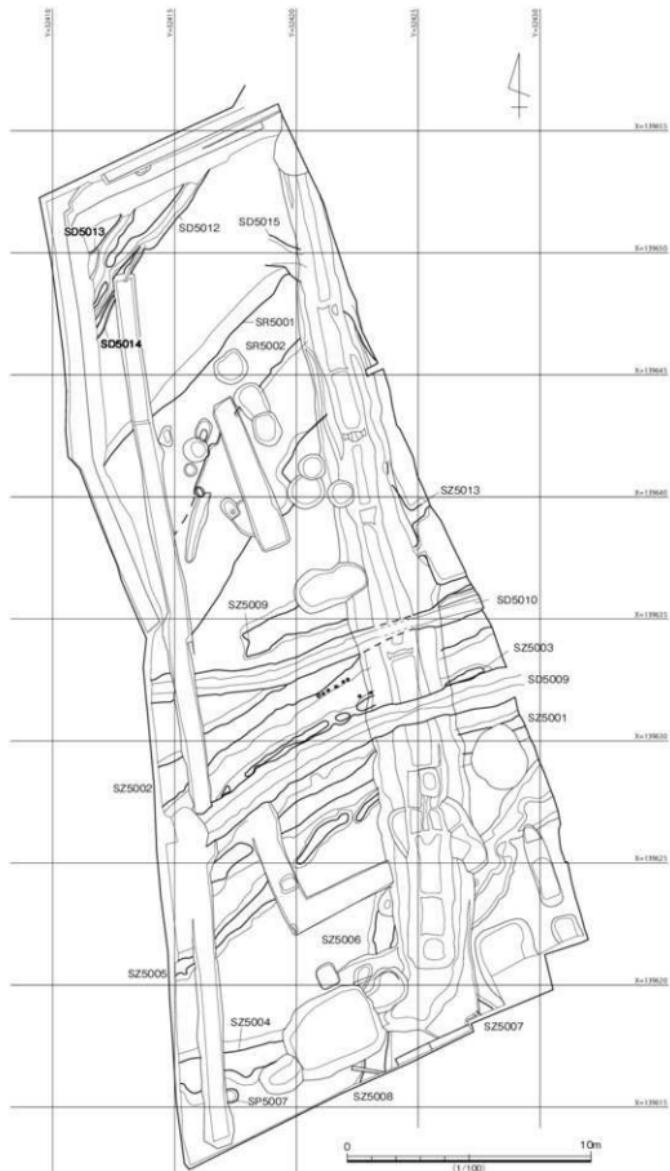
第 102 図 SK5010 出土遺物



第 103 図 SK5001 平・断面



第 104 図 SK5017 出土遺物



第 105 図 5 区 2 面 平面

畦

調査地内では、大小さまざまな畦畔が検出されている。水田の耕土層と判断できるものは少なく、偽畦畔状に検出されたものが多い。なお、SZ5001などの溝に隣接する規模の大きな畦畔については、水田耕土との区別が可能で、造りつけられた痕跡が明瞭に確認できる。

SZ5001（第108図） 調査区中央付近で検出された。同時期の灌漑水路であるSD5009に接しており、ほぼ同一方向に延びる。畔自体も0.2mほどの高さをもち、ほかの畦畔と比較しても規模も大きな畦畔である。水路からの導水のための水口等の施設は確認できない。SZ5001に近接するSZ5002、SZ5003、SZ5005についても、方向が揃っており、それぞれとの間に、明確な水田の区画などは見られないため、畦畔によって囲まれた導水、ないしは排水のための浅い水路の両岸の畔の可能性も考えられる。

SZ5006（第110図） 調査区南側で検出された。北東方向に向かって伸びており、水路や大畦畔（SZ5001）との接続部分については、後世の遺構によって切られているため、同時に存在していたのかなどについては不明である。

SZ5008（第111図） 調査区南端で検出された。1面の遺構に切られ分断されているが、SZ5006につながる畦畔である可能性が高い。

SZ5009（第112図） 調査区中央で検出された。SD5010から少し離れた場所に所在する。SD5010と同方向に延びることから、これに伴う畦畔の可能性も考えられる。

SZ5013（第113図） 調査区中央よりやや北で検出された。いずれも畔の高さとしては低いが、南北方向の畦畔と、それに直交するような東西方向の畔が東側にとりつく状況が確認できた。これらに囲まれる範囲が、小区画の水田であった可能性が高い。出土遺物は第113図に示した。

565は須恵器杯である。畦畔の直上、ないしは畦畔中から1個体のみが出土している。杯身であり、底部は回転ヘラ切りを施し、口縁部付近はナデを施す。口縁部は垂直に立ち上がり、端面は丸くおさめる。口径に比して深さが深い。口径の大きさと、口縁部の立ち上がりなどから、7世紀前半のものであると考えられ、水田の埋没時期に近い資料であると評価できる。

流路

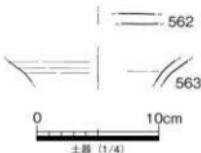
SR5001・SR5002 調査区北側で検出された。いずれも北東方向に向かって流下しており、埋土は1面の構成土と同様、疊を多量に含むことから、2面を覆うような氾濫作用により、この遺構も埋没したものと考えられる。埋没時期を示すような出土遺物は確認できなかった。

【3面の遺構】（第114図）

（1）古墳時代の遺構

溝

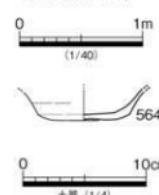
SD5018（第60図） 調査区北部で検出された。4区のSB4002、SB4003を囲繞する溝の西辺である。



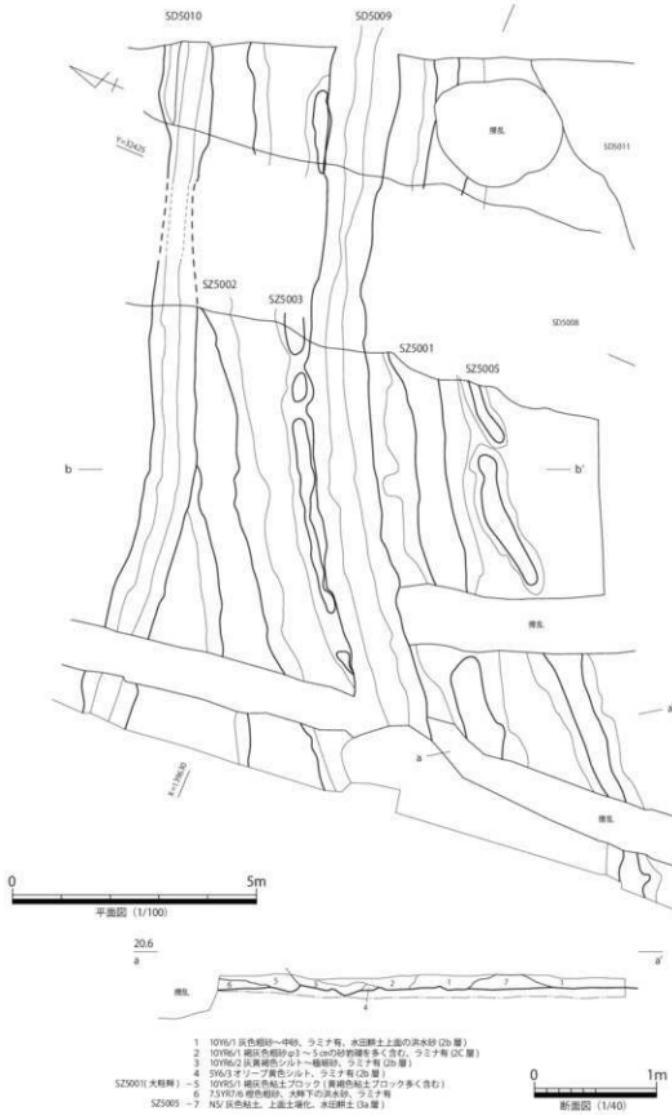
第106図 SD5009出土遺物



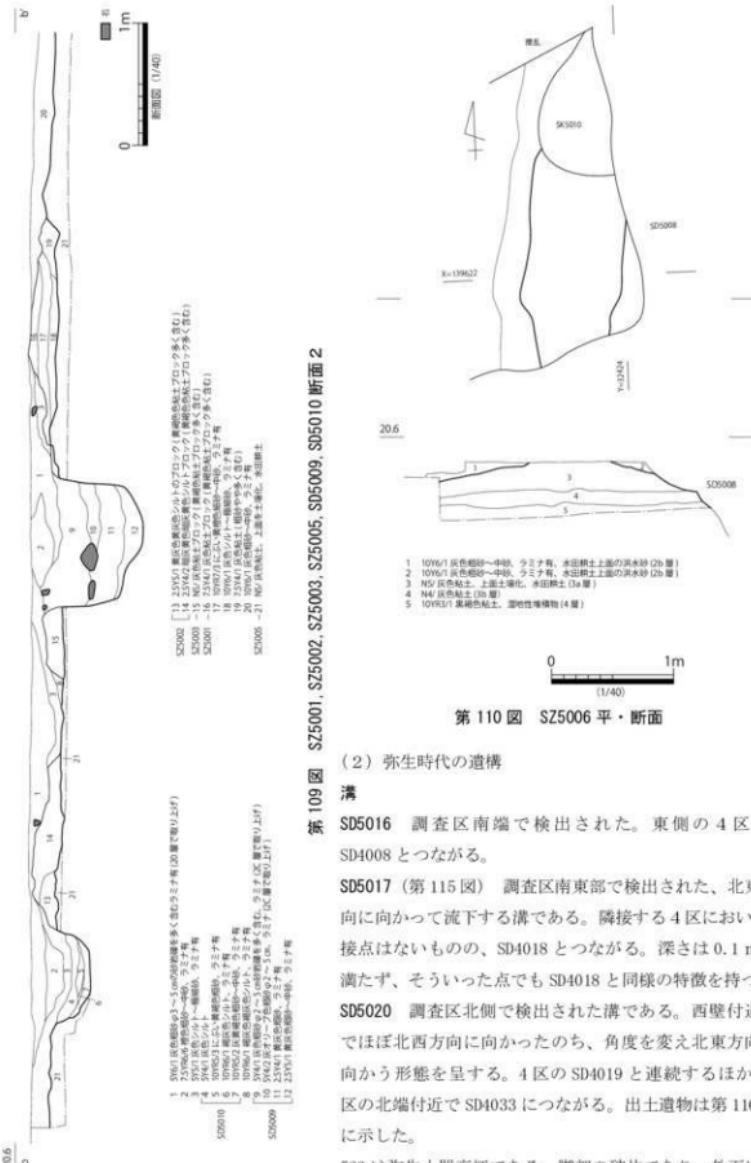
1 7.5YHG: 橙灰色シルトブロック
(繊維有、炭化物多く含む)



第107図 SP5007平・断面



第108図 SZ5001, SZ5002, SZ5003, SZ5005, SD5009, SD5010 平・断面 1



縦方向のミガキ、内面にはナデを施す。

567は弥生土器甕である。平底の底部であり、底端部が少し突出する。

出土遺物から詳細な年代を推定することは難しいが、弥生時代中期の埋没が想定される。

SD5019 (第 117 図) 調査区中央より北で検出された。幅 0.3m、深さ 0.1 ~ 0.2 m ほどの小規模な溝である。出土遺物はないが、弥生時代の遺構である SD5020 を切り、古墳時代の建物に切られるため、弥生時代の遺構であると判断した。

SD5021 (第 118 図) 調査区南端で検出された。SD5016 から分岐し、ほぼ南北方向に延びる。出土遺物には、年代を特定できるものはない。

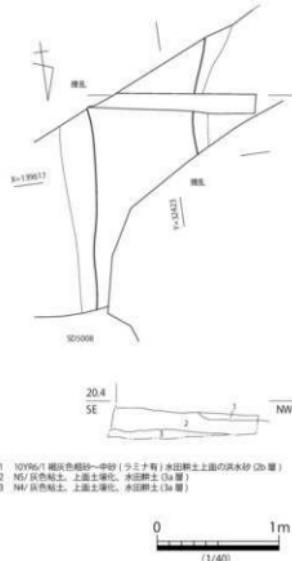
SD5023 (第 119 図) 調査区北端で検出された。ほぼ南北方向に延びる溝であり、南端は丸く收まる。深さも 0.1 m に満たない。出土遺物も僅少で、年代を特定するに至らなかった。

土坑

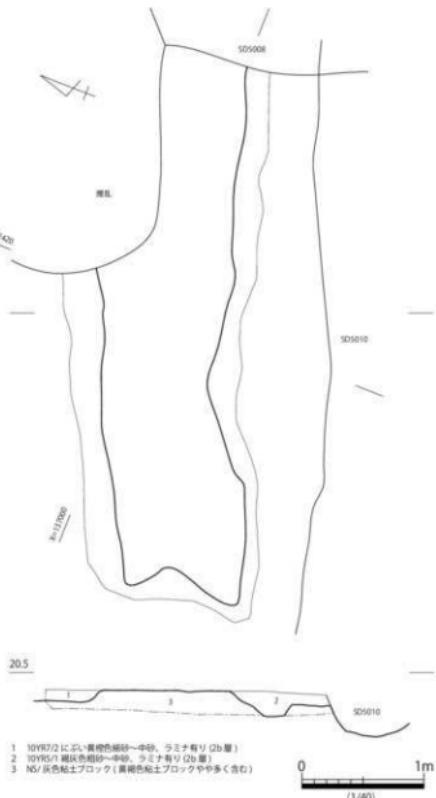
SK5018 (第 120 図) 調査区中央で検出された。東西方向に長い長楕円形の土坑である。埋土は複数の埋没の単位が存在することを示すが、時期を示すような遺物の出土ではなく、遺構の年代は不明である。

柱穴 (柵列)

SA5001 (第 121 図) 調査区南壁沿いで検出された柱穴列である。おおむね地割と同一方向に東西に並ぶが、一部間の柱穴



第 111 図 SA5001 平・断面



第 112 図 SZ5009 平・断面

が確認できない。確認できるところにおいては、柱穴の間隔は0.68mを測る。それぞれの柱穴の深度も非常に浅く、列の向きが条里の方向に類似することも含めて、3面に帰属する遺構であるか決定する根拠に欠ける。出土遺物もない。

SA5002（第122図） 調査区南部で検出された。南北方向に並ぶ柱穴列であり、北から30°強西に傾く。柱穴間の間隔はおよそ0.6mである。近隣の条里型地割の方向と類似するが、出土遺物や、検出面の年代からは年代を特定できない。

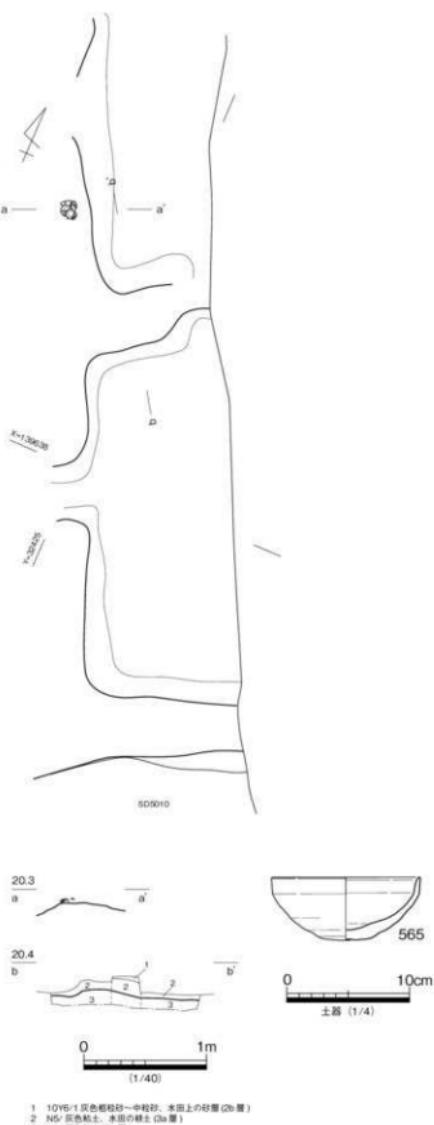
なお、SA5001、SA5002に隣接する形で、柱穴がいくつか検出されている。詳細は第123図～第127図に示すが、いずれも直径0.2～0.3mの直径をもち、深さが0.1mに満たない小規模な柱穴である。

SP5047・SP5048（第128図） 調査区南部、SA5002の西側で検出された。2基の遺構が近接して切り合っており、平面形態も隅丸方形に近く、直径0.6mほどの規模を持つことから、当初建物を構成する柱穴の可能性も考えながら調査を行った。しかし、いずれも深度0.1mにも満たず、3面のほかの建物を構成する柱穴と明らかに異なる。

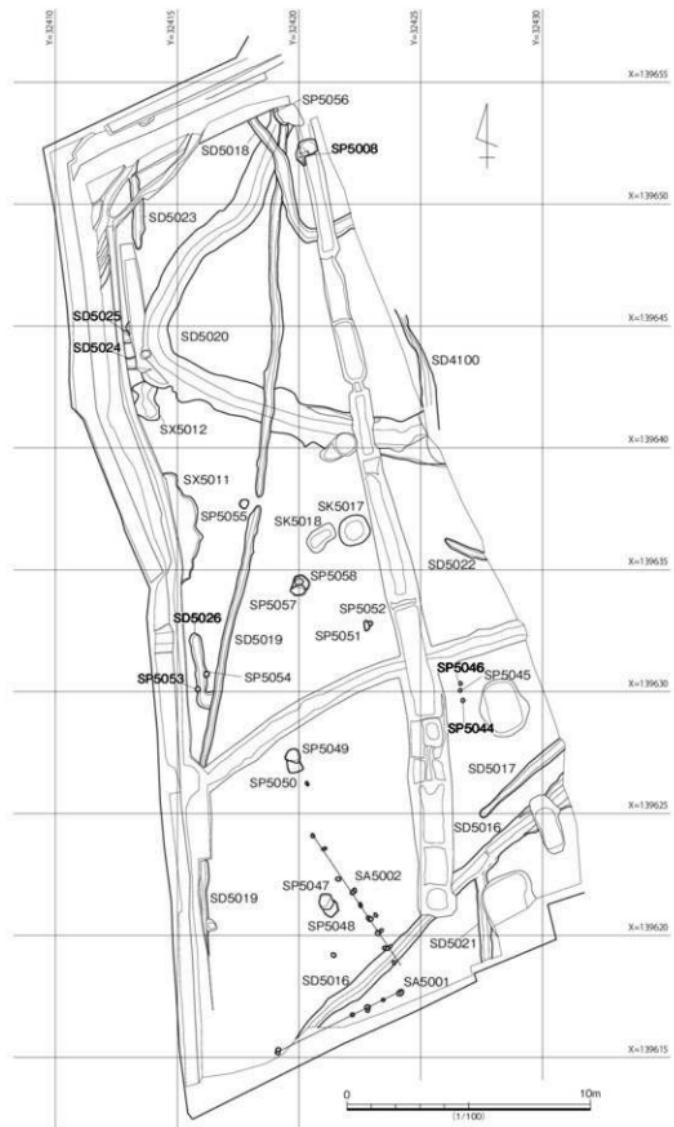
SP5049・SP5050（第129図） 調査区南部で検出された。SP5047・SP5048と同様に2基の遺構が近接して切り合っている。これらも深度が非常に浅く、対応する柱穴も見られないと判断した。時期を決定しうるような遺物の出土もない。

SP5051・SP5052（第130図） 調査区中央部で検出された。2基が近接し切り合っている。周囲に建物を形成するような柱穴の組み合わせは見られない。

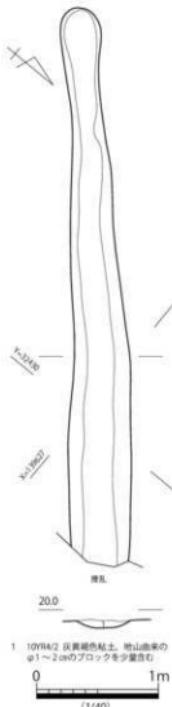
SP5053・SP5054（第131・132図） 調査区中央部、西壁沿いで検出された。いずれも直径



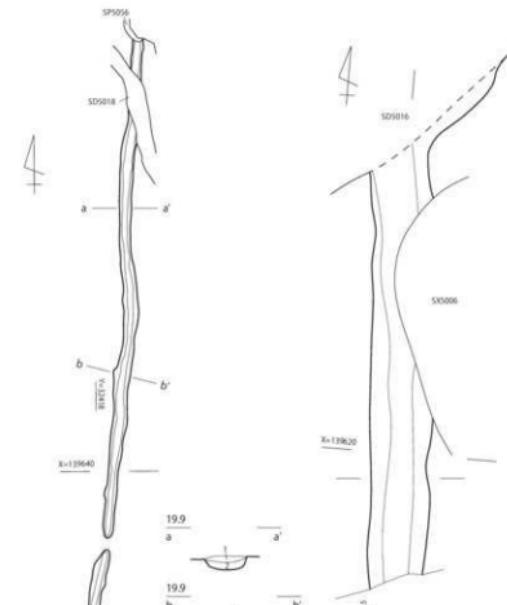
第113図 SZ5013 平・断面



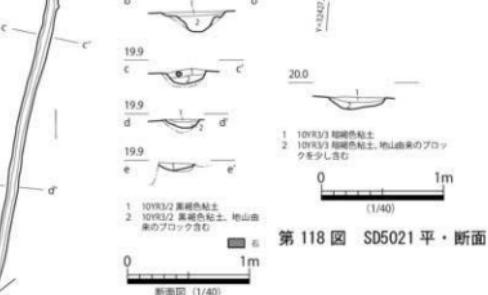
第114図 5区3面 平面



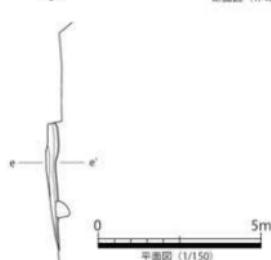
第115図 SD5017 平・断面



第116図 SD5020 出土遺物



第117図 SD5019 平・断面



第118図 SD5021 平・断面

第119図 SD5019 平・断面

0.2 m ほどの小規模な柱穴である。

SP5055 (第 133 図) 調査区中央部で検出された。直径 0.36 m の浅い遺構である。

SP5057・SP5058 (第 134 図)

調査区中央部で検出された。長軸が 0.6 m 程の非常に浅い遺構が 2 基近接して切り合っている。

不明遺構

SX5011 (第 135 図) 調査区西壁沿いで検出された。平面形態は不整形であり、深度も浅い。出土遺物も僅少であり、時期を特定するに至らなかつた。

SX5012 (第 136 図) 調査区西壁沿いで検出された。SD5020 に切られる不整形な遺構である。遺物も見られず、深度も非常に浅い。

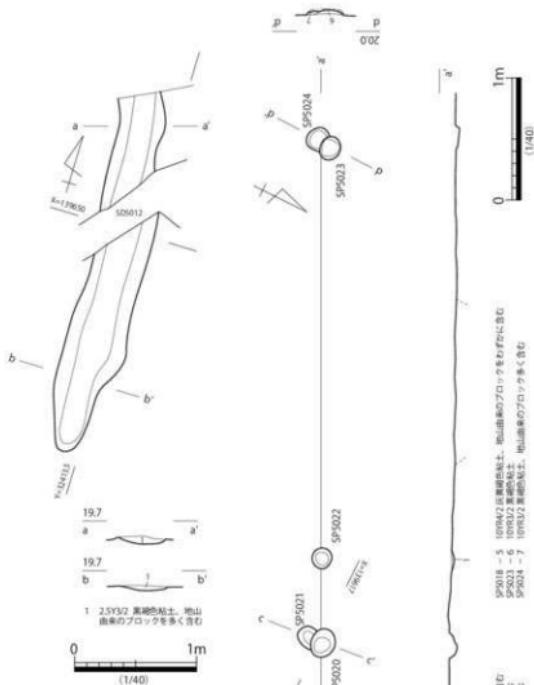
遺構外土遺物

568 は土師器甕である。口縁部の破片であり、屈曲し垂直に立ち上がる。

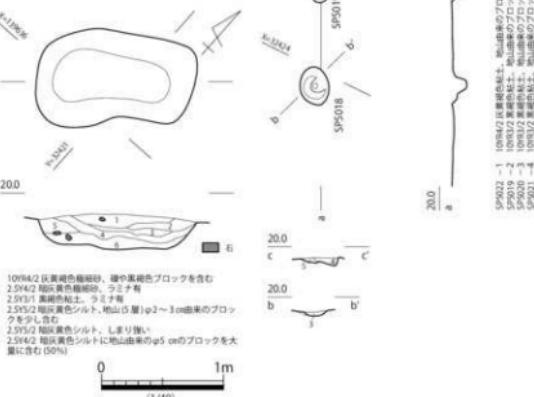
569、570 は須恵器杯である。

569 は口縁部が直線的に外方へ延びる。570 は底部のみへラ切を行い、他は回転ナデを施す。口縁部が垂直に立ち上がる。

571 は須恵器蓋である。宝珠形のつまみを持つ、杯に伴う蓋である。572 は須恵器壺である。底部から垂直気味に体部が延びることから、長胴の壺の可能性が高い。



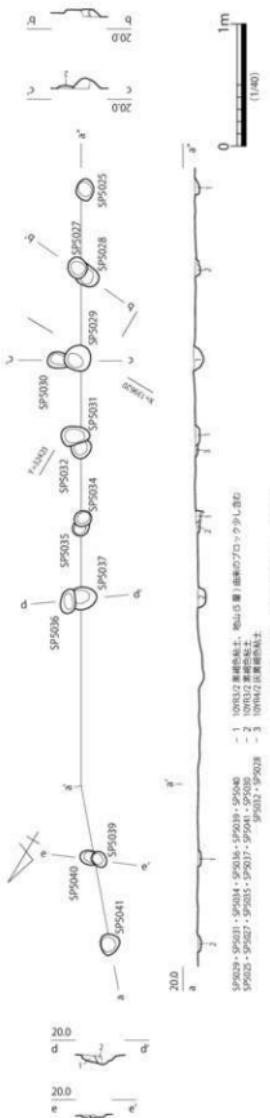
第 119 図 SD5023 平・断面



第 120 図 SK5018 平・断面

第 121 図 SA5001 平・断面

1. 10W42/2 黄褐色細粒砂、礫や真緑色ブロックを含む
2. 2.5W42/2 順次黄色細粒砂、ラミナ有
3. 2.5Y3/1 黄褐色細粒土、ラミナ有
4. 2.5Y3/2 地山黄色シルト、地山5層φ2~3cm由来のブロック
5. 2.5Y3/2 地山黄色シルト、しりり割れ
6. 2.5Y3/2 地山黄色シルトに地山由来のφ5 cmのブロックを大量に含む(59%)

第123図 SP5033
平・断面

平

・断面

第124図 SP5038 第125図 SP5042
平・断面

平

・断面

第126図 SP5043
平・断面

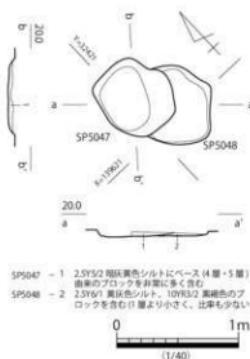
平

・断面

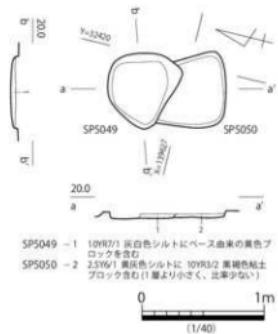
第127図 SP5044, SP5045, SP5046
平・断面

平

・断面



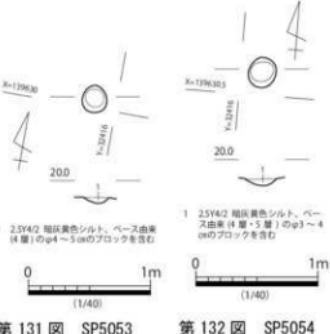
第128図 SP5047, SP5048 平・断面



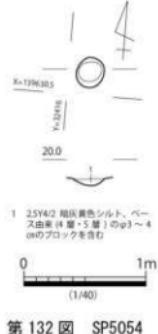
第129図 SP5049, SP5050
平・断面



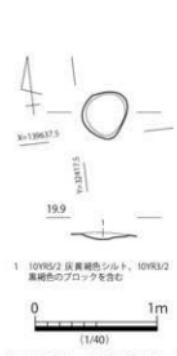
第130図 SP5051, SP5052
平・断面



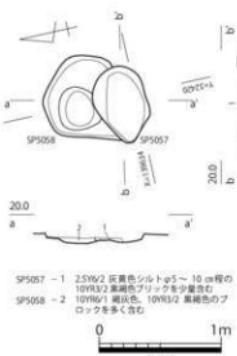
第131図 SP5053
平・断面



第132図 SP5054
平・断面



第133図 SP5055 平・断面



第134図 SP5057, SP5058 平・断面

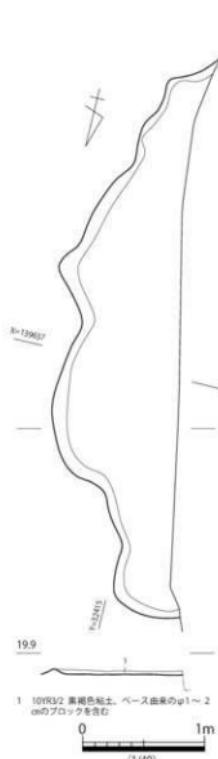
573は土師器杯である。外面下半にはユビオサエの痕跡が残り、内面には板ナデを施す。全体に半球形の形態を呈する。

574は須恵器杯である。やや内湾する口縁部を持つ。口縁端部が少し外反する。

575は土師質器皿である。底部を回転ヘラ切りによって切り離し、突出させる。

576、577は土師器碗である。576は断面三角形の高台を貼り付ける。577は断面方形の細い高台を貼り付ける。調整などは摩滅により不明である。

578は土師器杯である。浅い杯に高台が取り付く形態のもので、高台はケズリ出しによって作り出す。



第135図 SX5011 平・断面

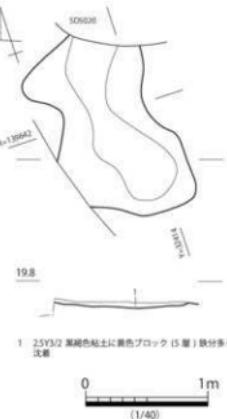
579、580は須恵器碗で、いずれも円面碗である。579は上部の破片であり、天井部が直線的でなく、中央へ少し高くなる形態を呈する。方形の透孔が確認できる。580は脚端部の破片であり、下方へ外反する形態を呈する。端部は下方につまみ出し、端面は面を持たせる。透孔が確認でき、詳細な形態は不明であるものの、楕円形の透孔が入ると考えられる。

581は須恵器鉢である。円盤状の底部に、グラス状の体部が取り付く。口縁端部は下方につまみ出し、面を持たせる。外面に回線に挟まれた文様帶をもち、内部には列点文を施す。

582は須恵器甕である。外反する口縁部であり、端部を上方に摘み上げ、回線状のへこみを持たせる。

583、584は丸瓦である。584は凸面にナデを施し、凹面には布目が残る。

585は角材である、摩滅により加工の痕跡は不明瞭である。



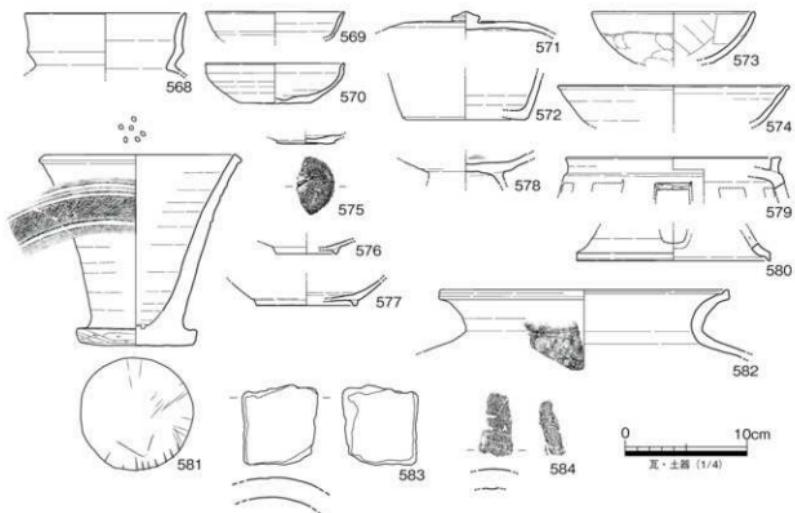
第136図 SX5012 平・断面

第5節 6区の調査成果

6区は、岸の上遺跡の中でも、最も北側の調査区となる。調査については、1面、3面において調査を行ったが、2面については、南側の調査区から土層の堆積状況を確認しても、2面を構成する層の堆積が認められない。また、調査区の北へ向かうにつれ、遺構面の標高がかなり下がり、低地に至る様子が確認できた。

【1面の遺構】(第139図)

(1) 近世の遺構



第137図 5区遺構外出土遺物

土坑

SK6001 調査区南隅で検出された土坑である。多量に遺物を含み、垂直に掘り込まれていることなどから、廃棄のための土坑であると考えられる。遺物の大半は近代以降のものであり、埋没時期についても近代以降のものであると考えられる。出土遺物の中で、近代以前のものについては第140図に示した。

586は弥生土器壺である。細頸壺の口縁部であり、口縁端部がやや内湾気味となる。

587は須恵器皿である。外面に火拂が残る。

588は丸瓦である。玉縁の跡が確認できるため、端部の破片であろう。凸面の調整は不明であるが、凹面には布目が残る。古代の瓦である可能性が高い。

SK6002（第142図） 調査区東側で検出された。東西方向に長い長楕円形の土坑である。出土遺物に、遺構の年代を決めるような遺物は見られない。

SK6003 調査区南端で検出された。楕円形の平面形態を持ち、深度は浅い。地境の付近に掘削されていることや、平面形態の特徴から近世の廃棄土坑であると判断した。出土遺物は第143図に示した。

589は平瓦である。凸面には繩叩きの痕跡が確認できる。凹面については、摩滅しているため詳細は不明である。

SK6004 調査区南端で検出された。SK6003に切られる土坑である。出土遺物は第144図に示した。

590は須恵器杯である。口縁端部が下方に折れ曲がる。

（2）中世の遺構

溝

SD6004 調査区西側で検出された。複数の遺構に切られており、その全長や幅がわかる部分では、幅1.2mを測る。出土遺物は第145図に示した。

591、594は土師器碗である。断面台形の細い高台が取り付き、端部が外方に折れ曲がる。594は断面台形の高台を貼り付ける。端部に段をもたせ、高台が踏ん張る形態を呈する。

592は須恵器杯である。底部はヘラ切りによって切り離す。

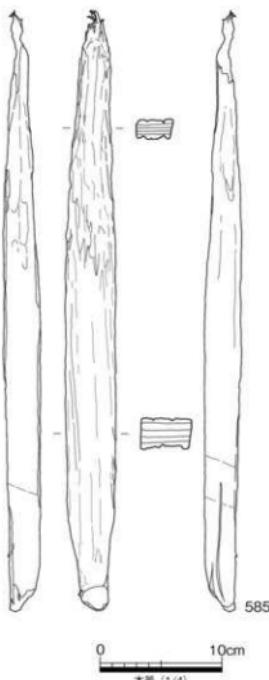
593、595は土師質土器杯である。593は底部を回転ヘラ切りによって切り離す。595は器壁が薄く、大きく外反する口縁部を持つ。

596は土師質土器皿である。口縁部が直線的に大きく開き、浅い皿に外方に開く高台を持つ。

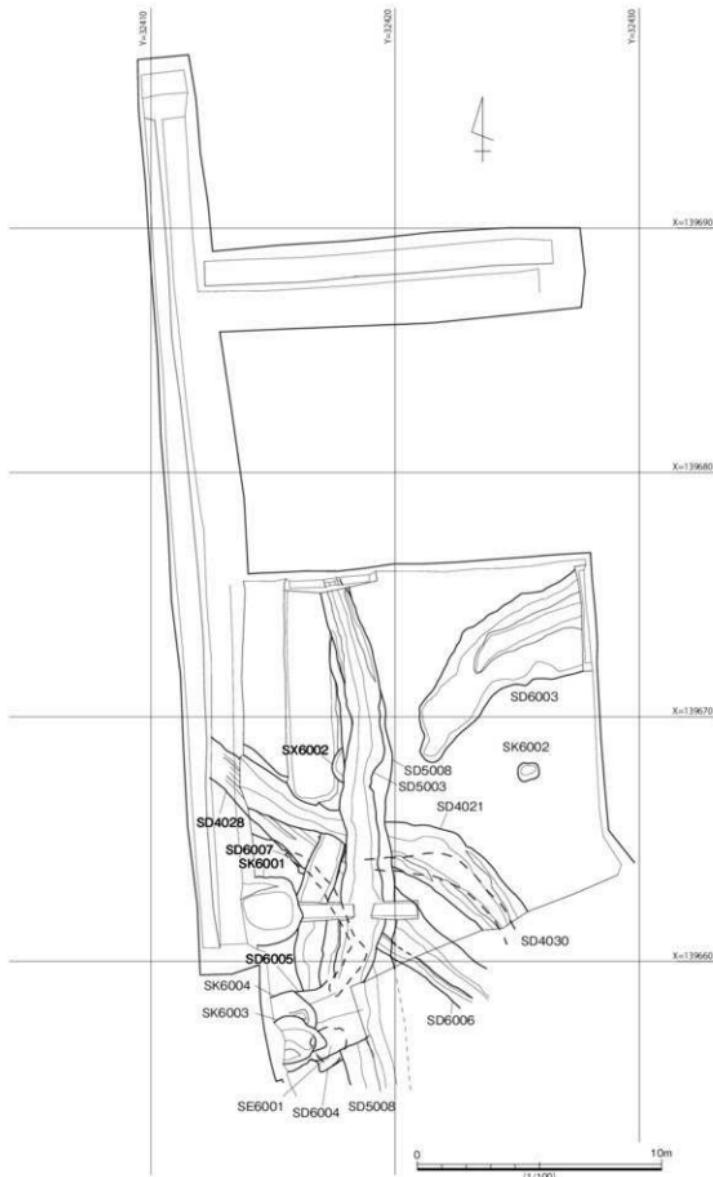
597は陶器皿である。

598は須恵器壺である。底部の破片であり、ケズリにより低い高台を作り出す。外面には格子叩きの痕跡が残る。

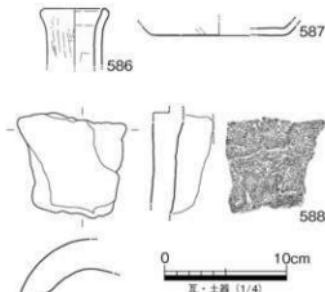
599、601は須恵器甕である。599は口縁部、601は頸部から体部の破片である。599は口縁端部



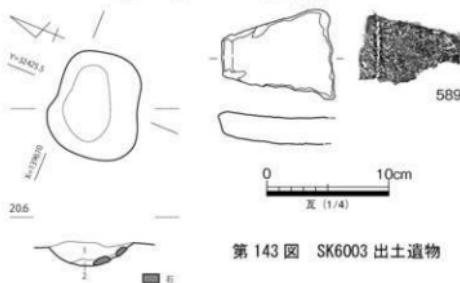
第138図 5区遺構外出土木器



第139図 6区1面 平面



第140図 SK6001出土遺物



第143図 SK6003出土遺物

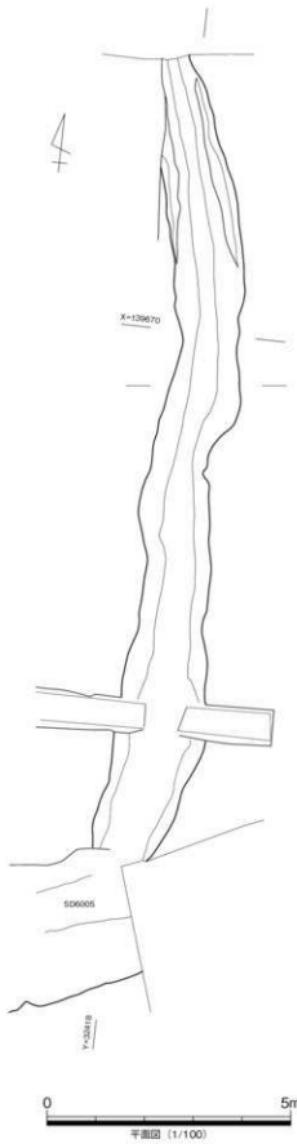
- 1 10YR5/2 深黄褐色地網状に 10YR4/4 褐色の
縦筋付を板状に生む。
- 2 10YR5/2 深黄褐色地網状に 10YR4/6 褐色の
縦筋付、ベース 15 層曲率の黄色ブロックを
少量含む。φ10cm以上の塊を含む。



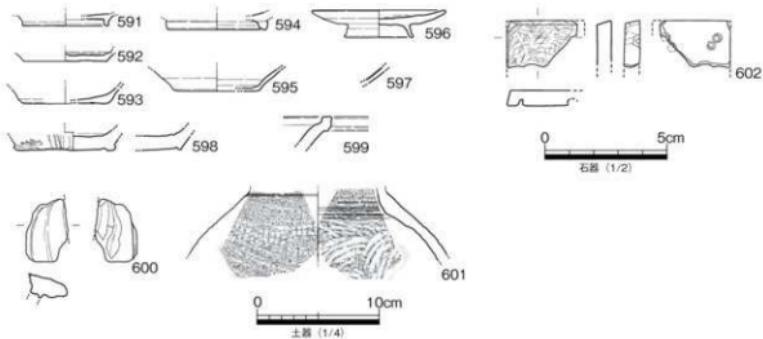
第142図 SK6002平・断面 第144図 SK6004出土遺物

が、上方に突出する。端部下端にはナデにより、段を形成する。
601は外面に格子叩き、内面に同心円状の當て具痕を残す。
600は土師器壺である。側面の破片であり、端部を拡張している。
602は石帶である。本来は方形であり、片方の面には穿孔が四隅に2箇所確認できる。表面には細かい擦痕が確認できる。
SD6005 調査区南西隅で検出された。かつて地境があつた方向と同方向に流れる。近世の廃棄土坑に切られているが、中世段階の遺物なども埋土に含まないことから、中～近世の遺構と評価しておく。

603～605については、SD6005、SD6006、SK6004のいずれか



第144図 SD5003平・断面



第145図 SD6004出土遺物

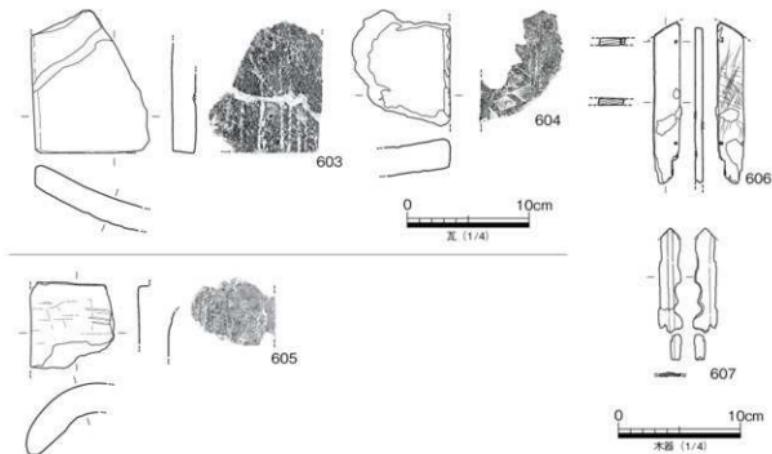
に属する遺物である（第146図）。正確にどの遺構に帰属するかについては不明であるが、いずれも本来の遺構の年代よりさかのぼる古代の遺物であるため、一括して取り扱う。

603、604は平瓦である。603は凸面に斜め方向の繩叩きを施す。凹面の調整および側面の調整は不明であるが、端面はケズリの痕跡が確認できる。604は凸面に格子叩きを施す。凹面の調整は不明である。側面についても、摩滅により調整は不明である。

605は丸瓦である。玉縁との境界付近の破片であり、凸面にはナデを施し、凹面には布目が残る。側面については、明瞭に面などを作らないが、ナデを施す。

SD6004から確実に出土したと考えられる遺物については、中世前半の遺物が目立つ。このほか、古代の遺物も一定量みられる。

SD6006 調査区南端付近で検出された。4区から延びるSD4028の埋没中に掘削されている溝である。



第146図 SD6005・SD6006・SK6004出土遺物

第147図 SD6006出土木器

出土遺物を第147図に示した。

606は木製曲物である。底板の破片であり、全体的に摩滅している。明瞭な加工痕は見えないが、片面にのみ刃物による線状痕が認められる。2カ所の穿孔が確認できる。

607は木製畜串である。頂部は山型に切り落とされている。全体的に摩滅しており、上部端面のみ加工する。

表裏面とも割面の状態である。

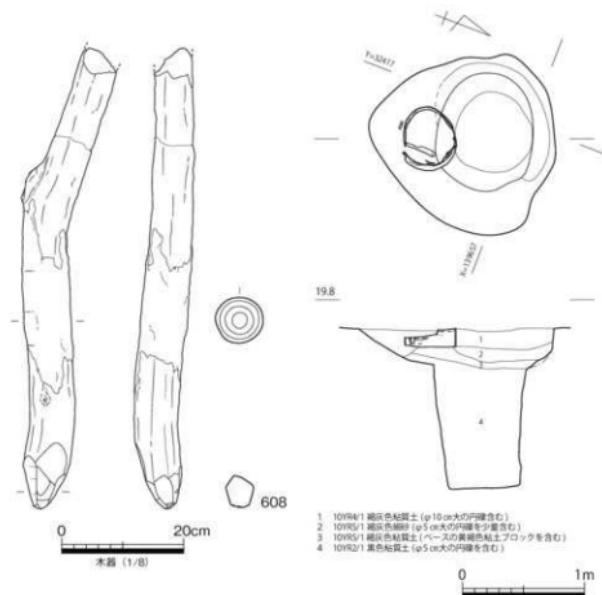
SD6007 調査区南

側で検出された。SD4028の掘削中に検出された溝状の遺構である。明瞭に検出・掘削できていないが、おそらくSD4028中層堆積後に掘削されたものであると考えられる。出土遺物は第148図に示した。

608は木製杭である。樹皮が残る部分が多く、先端のみ加工の痕跡が確認できる。

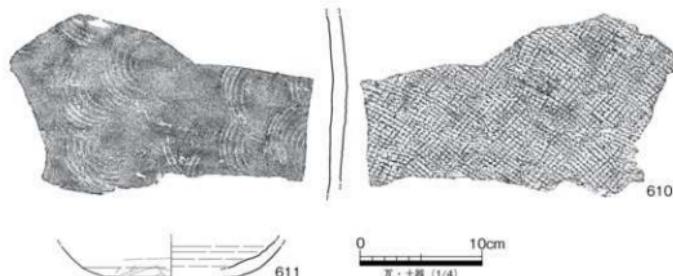
井戸

SE6001(第149図) 調査区南端で検出された。現状の地割の直下に位置する。検出時は最大径1.52mほどであるが、0.3mほど掘り下げをしたのちに、0.8mほどの井筒を据えていた場所が確認できる。

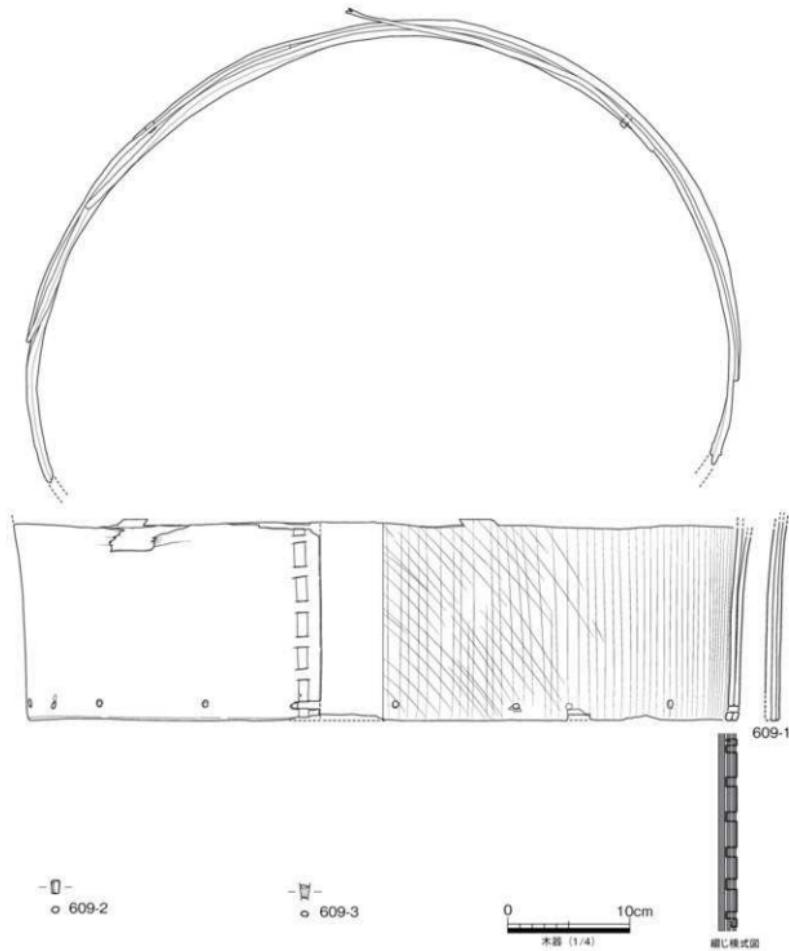


第148図 SD6007 出土木器

第149図 SE6001 平・断面



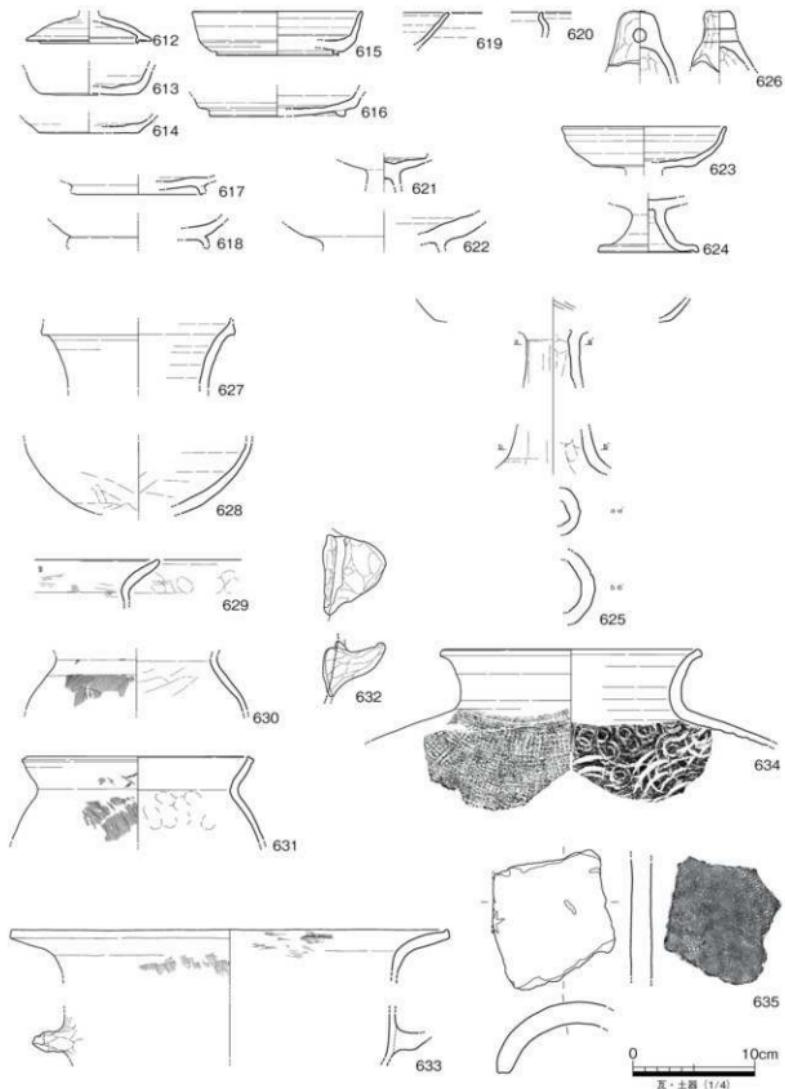
第150図 SE6001 出土遺物



第151図 SE6001出土木器

本来の位置の井戸本体の痕跡は確認できなかったが、検出面において、曲物が置かれている状態が確認できた。本来の井戸の堀方と対応しておらず、井戸側の据え直しの可能性が考えられる。井戸側は第151図、それ以外の出土遺物は第150図に示した。

609は木製曲物である。遺構内に据え置かれており、井戸側として利用されていたものであろう。上部が欠損しており、本来の高さは不明であるが、継じの痕跡からは本来の形態に近いものと考えられる。内面には、垂直および左上がりのけびき痕が残る。底板固定用の目釘が1点側板にあり、2点側板から



第 152 図 SD6003 出土遺物

遊離した目釘がある（609-2、609-3）。内板・内面炭化処理を行う。610は亀山焼甕である。外面には格子叩きを施し、内面には同心円状の当て具痕を残す。

611は須恵器鉢である。底部のみ残存し、法量や形態から、鉢である可能性が高い。

出土遺物の特徴からは、中世前半に機能していたものであると考えられる。

（3）古代の遺構

SD6003 調査区北東部で検出された。やや湾曲しながら北東方向に流下する溝である。深度は浅く、溝の南部についても丸く収まるものであるが、遺物を比較的多く含む。出土遺物は第152図に示した。

612は須恵器蓋である。口縁部にかえりを持ち、欠損しているが宝珠形のつまみを持つ。

613～618は須恵器杯である。613、614は須恵器杯であるが、613は口縁部までの立ち上がりが強く、614は大きく開く。いずれも底部はへら切りによって切り離されている。615～618は高台を持つ杯Bであり、口縁部が垂直気味に立ち上がる。616は高台の作りがやや粗雑である。617、618は外方に踏ん張る高台を持つ。

619は須恵器杯の可能性が高い。口縁部内外面にヨコナデの痕跡を残す。

620は須恵器壺である。短頸壺であり、短く口縁部が垂直に立ち上がる。

621は須恵器高杯である。622は須恵器壺である。細い高台が取り付く。623、624は須恵器高杯である。低脚の高杯であり623は口縁部が直線的に伸びる。624は脚端部を下方につまみ出し、端部に面を持たせる。

627、628は須恵器壺である。627は口縁端部を上方に摘み上げる。

628は丸底の底部である。

629～631は土師器甕である。いずれも球形の胴部に、屈曲し直線的に伸びる口縁部が取り付くものである。629は口縁端部を丸くおさめる。630は胴部のみであるが、外面に継方向のハケを施す。631は口縁端部を上方につまみ上げ、端部にナデにより凹線を作る。

632、633は土師器鍋である。632は把手部分の破片である。633は接点がないものの口縁部と把手を持つ胴部の破片であり、口縁部が大きく外反し、端部を上方につまみ上げる。

634は須恵器甕である。口縁部が外反する。外面に格子叩き、内面は同心円状の当て具痕が残る。

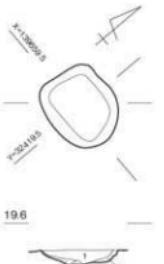
635は丸瓦である。凸面の調整は摩滅により不明である。凹面には布目を残す。

SD6003 の出土遺物については、7世紀段階のものを含むが、須恵器杯の型式などを考えると、8世紀前半の埋没が想定される。

SD6008 調査区南部で検出された。北東方向に向かって流れる溝である。流れの方向が、後述する通り



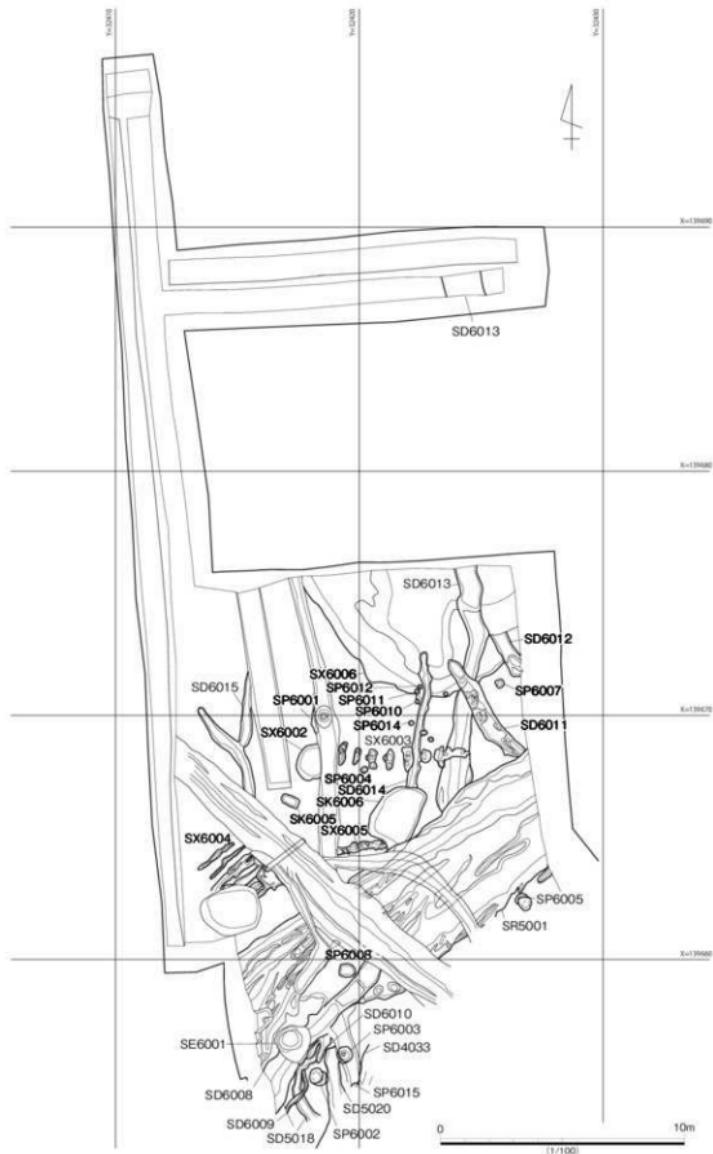
第153図 SD6008 出土木器



1. 7.SYR3/1 黒褐色シルト (φ3~10cm大)
2. SYR3/2 銅瓦頭跡
3. 7.SYR3/4 漆黒褐色シルト



第154図 SP6008 平・断面



第 155 図 6 区 3 面 平面

自然流路と同様であること、SD4028 に切られることから古墳時代後期～奈良時代前半の埋没が考えられる。出土遺物は第 153 図に記した。636 は木製曲物である。側板の破片であり、けびき痕が片面に確認できるほか、穿孔が一ヵ所確認できる。

柱穴

SP6008 (第 154 図) 調査区南側で検出された。流路である SR5001 の埋没後に掘られていることは確実である。直径 0.6 m ほどで、深さは 0.1 m ほどである。出土遺物は第 154 図に示した。

637 は土師器楕である。おそらく断面台形の高台が貼り付けられ、外方に広がる。出土遺物からは、中世前半の埋没が考えられるが、その場合の 1 面からの掘り込みの深さを考えると、おそらくは 3 面に属する遺構であり、637 は混入と判断した。

【3面の遺構】(第 155 図)

(1) 弥生時代の遺構

溝

SD6011 (第 156 図) 調査区北側で検出された。北西方向に延びる溝である。底面は所々土坑状にへこみ、埋土にはシルトブロックを含む。遺物の出土はほとんどなく、年代を決定することが困難であるが、埋土の特徴から、弥生時代の遺構であると考えられる。

SD6013 (第 157 図) 調査区北東部で検出された。やや蛇行しながらもほぼ北へ向かって流れる。6 区の北側で東西方向にトレンチ状に開けた調査区においても、溝の続きを確認されている。出土遺物は、第 157 図に示した。

638 は打製石包丁である。両端に抉りが施されるが、片側が欠損している。

出土遺物の特徴、溝の埋土の特徴から、弥生時代、特に弥生時代後期の遺構である可能性が高い。

SD6014 (第 158 図) 調査区の中央部で検出された。ほぼ南北に伸びており、幅 0.4 m、深さは 0.1 m ほどの小規模な溝である。遺物もほとんど含まないため、年代は不明である。

SD6015 (第 159 図) 調査区西側で検出された。南北方向に延び、途中で 2 方向に分岐する溝である。出土遺物などの、年代を示す資料はないため、遺構の年代については不明である。

土坑

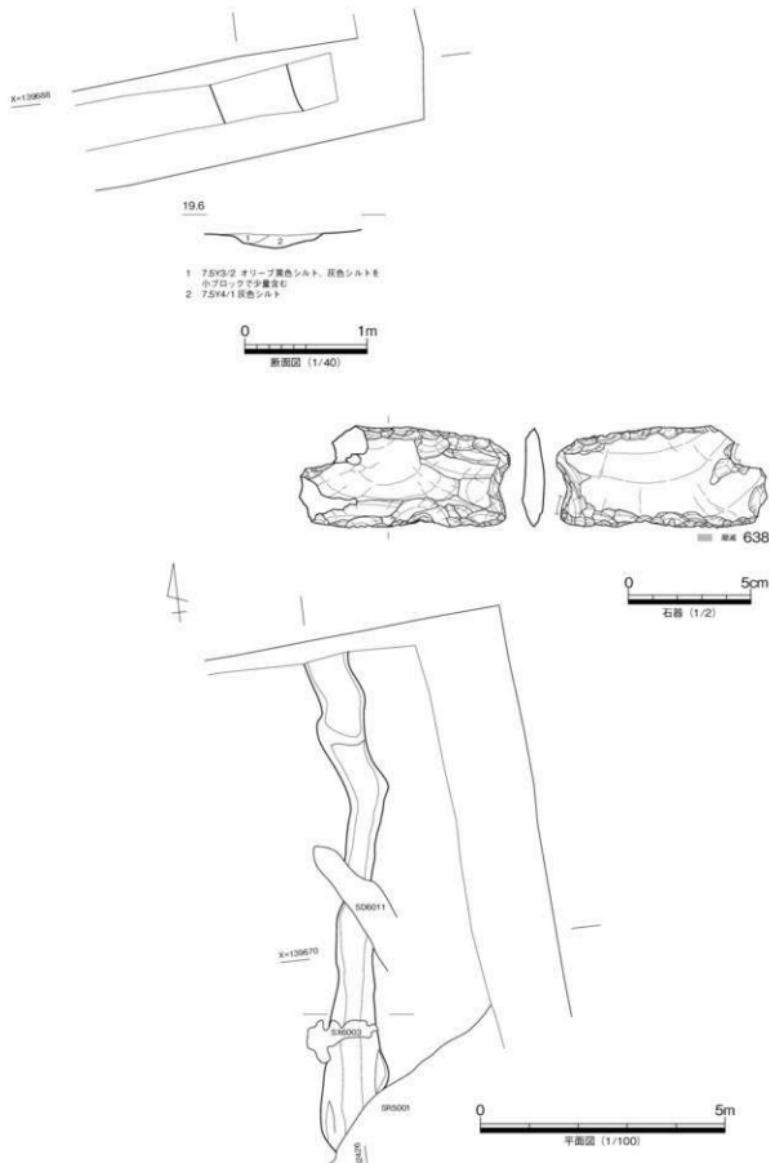
SK6005 (第 160 図) 調査区西側で検出された。平面形態は長楕円形を呈し、深さは 0.15 m を測る。埋土に炭化物などを含むが、時期を表すような遺物を含まないため、遺構の年代は不明である。

SK6006 (第 161 図) 調査区中央で検出された。長楕円形を呈する土坑である。掘り込みは逆台形状を呈し、底面は平坦になる。埋土にブロック土などを含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられるが、時期を表すような遺物の出土はなく、遺構の年代は不明である。

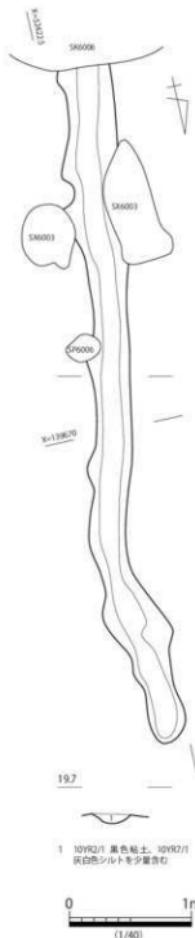
SP6001 (第 162 図) 調査区中央部で検出された。その大半を SD5008 に切られているた



第 156 図 SD6011 平・断面



第 157 図 SD6013 平・断面



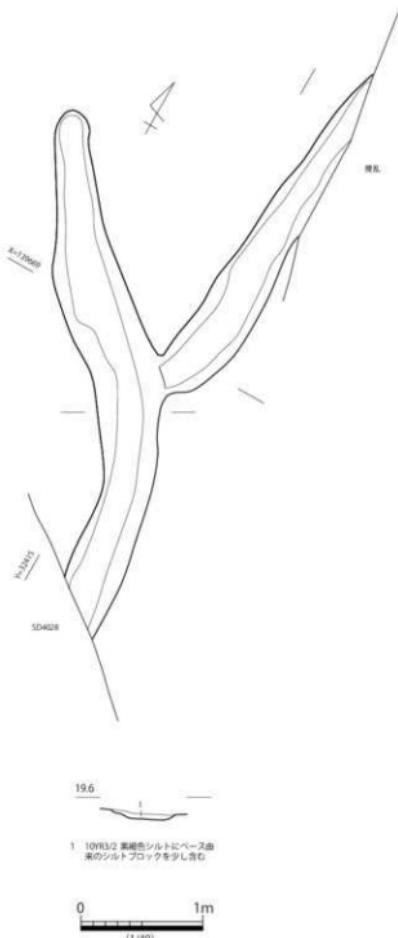
第158図 SD6014 平・断面

め、詳細は不明である。

SP6007 (第163図) 調査区北東部で検出された。やや角ばった平面形態を持つ。周囲に建物を構成するような柱穴はない。

不明遺構

SX6002 (第164図) 調査区北部で検出された。梢円形の平面形態を持ち、深さは0.1mほどであり、底面は平坦である。



第159図 SD6015 平・断面

SX6003 (第165図) 調査区中央部からやや北で検出された。ほぼ東西方向に、南北に長い不整形の遺構が並ぶ。いわゆる波板状圧痕と呼ばれる。道路遺構の痕跡かと考えられたが、それぞれの遺構の埋土を観察すると、地盤沈下防止のための礎等はほとんど含まれておらず、道路状遺構とは考え難い。性格不明の遺構である。遺物もほとんど出土しない。

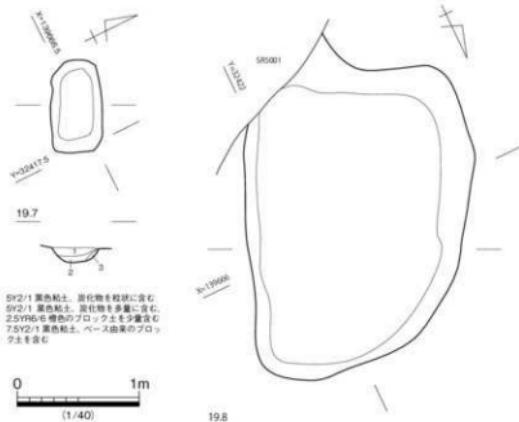
SX6004 (第166図) 調査区西側で検出された。1面のSD4028と同じ方向で、横長の遺構が並んでいる。こちらの遺構については、埋土に少量ではあるが礎を含み、道路状遺構の可能性もあるが、それぞれの深度が極めて浅いことや、遺構の長軸が、南を流れる流路であるSR5001に並行することからも、それらに関連する溝状の遺構である可能性もあり、詳細は不明である。

遺構外土器遺物 (第167図)

639は土師質土器皿である。底部を静止系切りによって切り離す。口縁端部にナデにより面を持たせる。

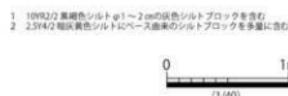
640、641は土師質土器杯である。底部をヘラ切りによつて切り離し、口縁部は外方へ大きく開く。

642は瓦器椀である。内外面のミガキについて確認でき

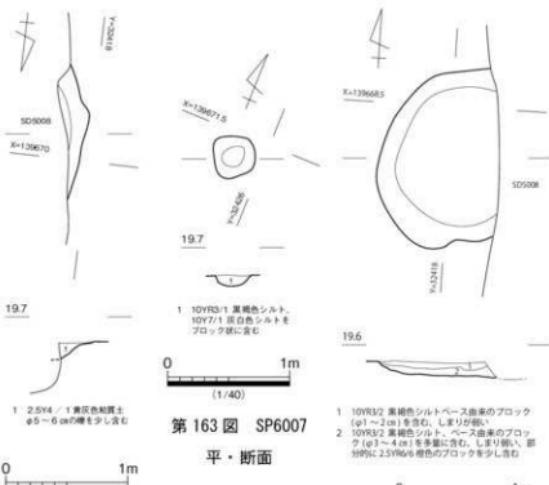


第160図 SK6005

平・断面



第161図 SK6006 平・断面



第163図 SP6007

平・断面

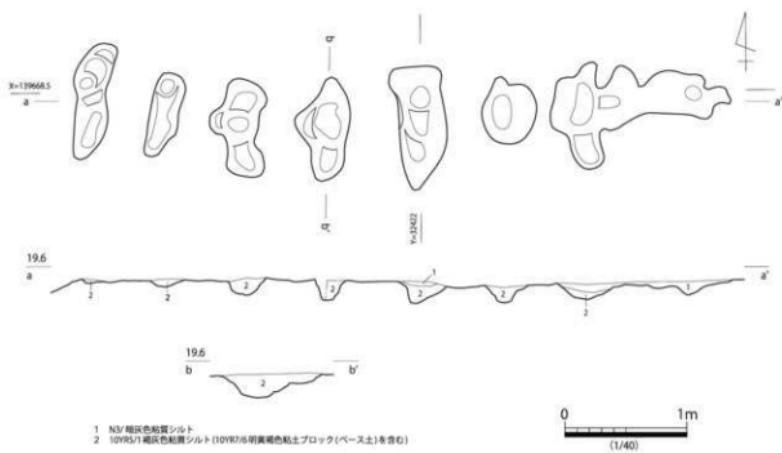
1. 10YR3/2 黒褐色シルトベース由来のブロック (q1 ~ 2cm) を含む。しまり弱い。
2. 10Y8/2 黒褐色シルト、ベース由来のブロック (q1) ~ 4cm) を多量に含む。しまり弱い。部分的に 2.5YR6/6 黑褐色のブロックを少し含む

第162図 SP6001

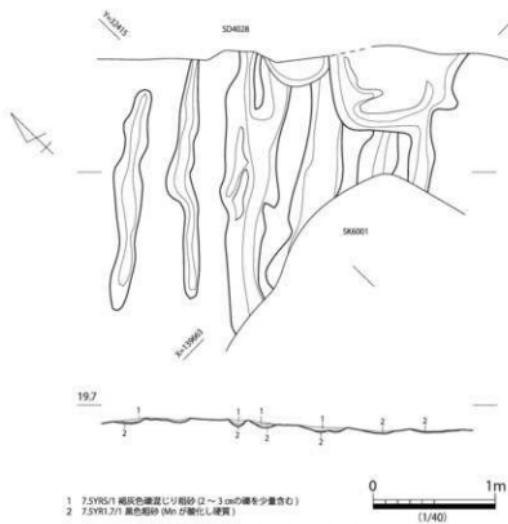
平・断面



第164図 SX6002 平・断面



第165図 SX6003 平・断面



第166図 SX6004 平・断面

ず、外面にはユビオサエ痕を残す。

643は土師器椀である。断面が丸みを持った三角形の高台を持つ。

644は須恵器蓋である。杯の蓋であり、口縁部端に面を持たせる。

645、646、648～651は須恵器杯である。いずれも杯Bであり、645、646、648、649は高台が外方に開く。650、651は断面方形の低い高台が取り付く。

647は須恵器皿である。口縁部が少し外反する。

653は白磁碗である。口縁部の破片であり、端部外面を肥厚させる。

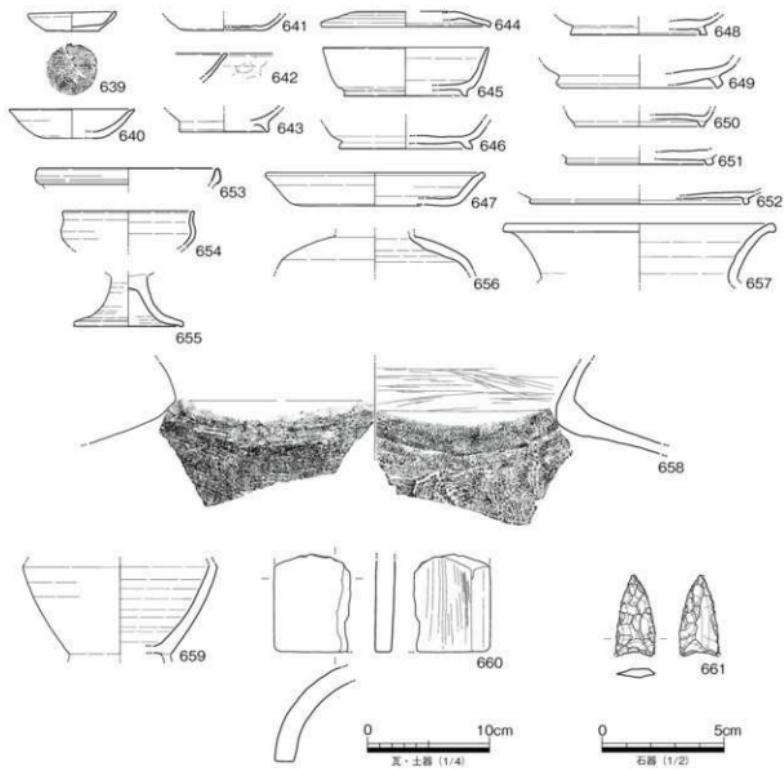
655は須恵器高杯である。脚部であり端部は面を持たせ下方につまみ出す。

656、659は須恵器壺である。656は頸部の破片であり肩部に緩い稜を持つ。659はおそらく長頸壺の胴部であり、外方へ開く高台を持つ。

657、658は須恵器甕である。657は口縁部であり端部を下方に拡張する。658は頸部であり、外面に格子叩き、内面に同心円状の當て具痕を残す。

660は丸瓦である。凸面および側面、端面の調整は摩減により判然としない。凹面については、糸切り痕のような縱方向の条痕がみられる。

661は石鐵である。無茎式の打製石鐵であり、形態からは弥生時代中期後半の年代が考えられる。



第167図 6区追横外出土遺物

第4章 自然科学的分析の成果

第1節 岸の上遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000, 杉山 2009）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

分析試料は、4-4 区西壁 A 地点の 3 層、4 層、6 層、7 層、10 層、17 層、26 層からブロック状に採取された試料 1～試料 7 の計 7 点である。このうち、3 層と 4 層は 8～9 世紀、6 層と 7 層は 7～8 世紀、10 層と 17 層は 6 世紀前半とされ、6 層（粘質土）については発掘調査の所見から水田耕作土の可能性が指摘されていた。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 40 μm のガラスピーズを約 0.02 g 添加（0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレバラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレバラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。タケア科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 168 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、Bタイプ

〔イネ科ークサ科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

4-4区西壁A地点では、3層（試料1）、4層（試料2）、6層（試料3）、7層（試料4）、10層（試料5）、17層（試料6）、28層（試料7）の計7試料について分析を行った。その結果、3層（試料1）から10層（試料5）までの層準からイネが検出された。このうち、水田耕作土の可能性が指摘されていた6層（試料3）では密度が700個/gと低い値であり、その下位の7層（試料4）と10層（試料5）でも600個/gおよび1,400個/gと低い値である。また、上位の3層（試料1）と4層（試料2）でも密度が2,000個/gおよび1,900個/gと比較的低い値である。

イネの密度が低い原因としては、1) 稲作が行われていた期間が短かったこと、2) 土層の堆積速度が速かったこと、3) 採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および4) 上層や他所からの混入などが考えられる。ここでは、土層の堆積状況などから1) や2) の要因が大きいと考えられるが、その他の要因も想定されることから、地点数や試料数を増やすなどさらに詳しい分析調査が必要と考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題したい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位の26層から17層にかけては、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、チャヤザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。10層では、イネ、キビ族型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科が出現し、ネザサ節型やメダケ節型などのタケ亜科は減少している。7層から6層にかけては、ネザサ節型などのタケ亜科がさらに減少し、4層から3層にかけてはイネがやや増加している。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、とくに下位の26層と17層で多くなっている。また、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、下位の26層から17層にかけては、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹苞類が多く分布し、ススキ属やウシクサ族、キビ族などのイネ科草本類も見られたと推定される。

10層では、ヨシ属が生育するような湿潤なところを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が開始されたと考えられ、メダケ属（おもにネザサ節）などの竹苞類は減少したと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられる。7層から3層にかけても、おおむね同様の状況であったと推定されるが、メダケ属（おもにネザサ節）などの竹苞類はさらに減少したと考えられる。

6.まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、水田耕作土の可能性が指摘されていた6層（7世紀）、およびその下位の7層（7世紀）と10層（6世紀）では少量のイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。また、上位の3層（8～9世紀）と4層（8～9世紀）でも比較的少量のイネが検出され、稲作の可能性が認められた。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったことや、土層の堆積速度が速かったことなどが想定される。

各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して10層の時期に調査地点もしくはその近辺で水田稲作が開始されたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹苞類をはじめ、ススキ属、ウシクサ族、キビ族などのイネ科草本類が生育していたと考えられ、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと推定される。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史、第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社, p. 189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）一数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

表1 岸の上遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個/g)

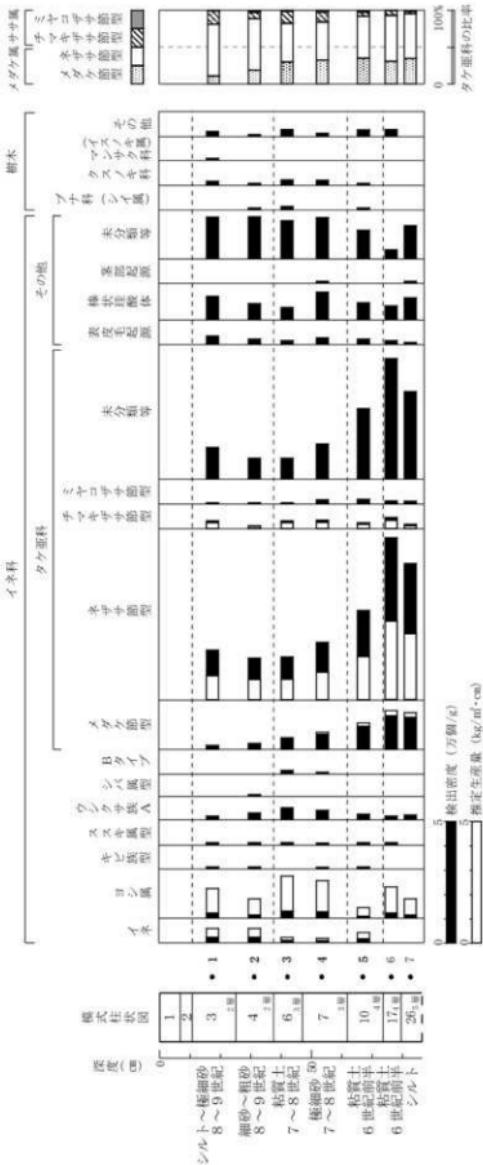
地点・試料	4-4 区西壁 A 地点	学名	試料 No.						
			1	2	3	4	5	6	7
分類群									
イネ科		Gramineae							
イネ		Oryza sativa	20	19	7	6	14		
ヨシ属		Phragmites	20	13	28	25	7	21	13
キビ族型		Paniceae type	7	6		6	7		
ススキ属型		Misanthus type	7	6	7	6	7	7	
ウシクサ族A		Andropogoneae A type	14	26	49	37	21	14	19
シバ属型		Zoysia type		6					
Bタイプ		B type			14	6			
タケ亜科		Bambusoideae							
メダケ節型		Pleoblastus sect. Nipponocalamus	14	19	42	62	96	141	134
ネザサ節型		Pleoblastus sect. Nezasa	211	174	183	243	377	683	574
チマキザサ節型		Sasa sect. Sasa etc.	34	13	35	37	27	49	19
ミヤコザサ節型		Sasa sect. Crassinodi	7	6	7	19	21	14	13
未分類等		Others	129	84	84	143	288	493	357
その他のイネ科		Others							
表皮毛起源		Husk hair origin	34	19	14	25	21	14	6
棒状珪酸体		Rodshaped	95	64	49	112	68	56	89
茎部起源		Stem origin				6			6
未分類等		Others	170	167	155	168	116	35	134
樹木起源		Arboreal							
ブナ科(シイ属)		Castanopsis		6	14		7		
クヌキ科		Lauraceae	14	13	21	19	7		
マンサク科(イスノキ属)		Distylium	7						
その他		Others	20	6	28	12	27	28	
植物珪酸体総数		Total	802	649	739	934	1109	1556	1364

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m² · cm) : 試料の仮比重を 1.0 と假定して算出

イネ	Oryza sativa	0.60	0.57	0.21	0.18	0.40		
ヨシ属	Phragmites	1.29	0.81	1.78	1.57	0.43	1.33	0.80
ススキ属型	Misanthus type	0.08	0.08	0.09	0.08	0.08	0.09	
メダケ節型	Pleoblastus sect. Nipponocalamus	0.16	0.22	0.49	0.72	1.11	1.63	1.55
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nezasa	1.01	0.83	0.88	1.17	1.81	3.28	2.75
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.26	0.10	0.26	0.28	0.21	0.37	0.14
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.02	0.02	0.06	0.06	0.04	0.04

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleoblastus sect. Nipponocalamus	11	19	30	32	35	31	35
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nezasa	70	71	53	52	57	62	61
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	18	8	16	13	6	7	3
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	1	2	1	3	2	1	1
メダケ率	Medake ratio	81	90	83	85	92	92	96



第168図 岸の上遺跡 4—4区西壁における植物珪酸体分析結果



第169図 岸の上遺跡の植物珪酸体

第2節 岸の上遺跡出土木製品の樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岸の上遺跡は香川県丸亀市に所在する。本報告では、溝跡から出土した8世紀と考えられている木製品について樹種同定を行い、木材の利用について検討する。

1 試料

試料は、4区・6区のSD4028より出土した斎串5点、薦桶、器・底、木桶、不明各1点の合計9点である。

2 分析方法

刻刀を用いて、木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、（島地・伊東1982）、（Wheeler他1998）、（Richter他2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、（林1991）や（伊東1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

表2 樹種同定結果

地区	遺構	層位	報告番号	木取り	器種	時代	種類
4区	SD4028	下層	299	柾目	斎串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	305	芯持丸木	薦桶	7世紀末～8世紀	ヒノキ科
6区	SD4028	中層	285	板目	器・底	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	298	板目	斎串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	中層	284	板目	斎串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	—	327	板目	斎串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	293	柾目	斎串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	304	板目	不明	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	中層	291	破片	木桶	7世紀末～8世紀	コナラ属コナラ亜属コナラ節

3 結果

樹種同定結果を表2に示す。木製品は、針葉樹2分類群（ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹1分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。解剖学的特徴等を記す。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は

單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

4 考察

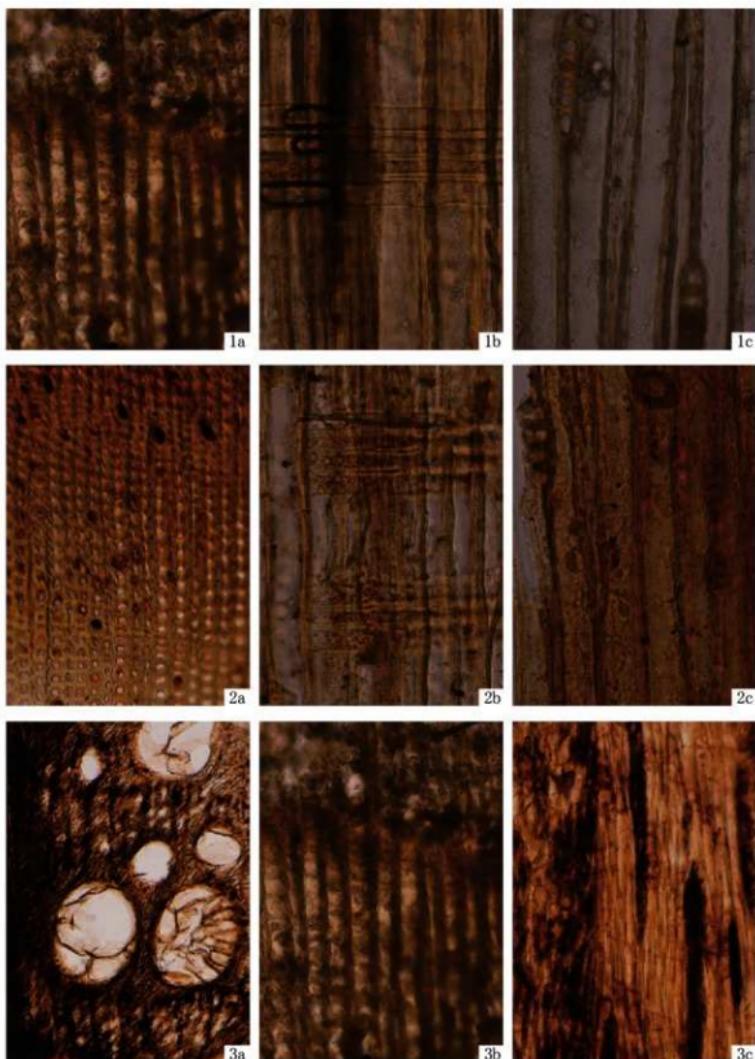
SD4028 から出土した木製品は、いずれも 8 世紀と考えられている。樹種同定を実施した資料は、(伊東・山田 2012) の木器分類を参考にすると、編み具・紡織具（萬能）、容器（器・底）、祭祀具（斎串）施設材・器具材（木桶）、その他（不明）に分けられる。これらの木製品の樹種同定では、合計 3 種類が確認された。同定された各種類についてみると、針葉樹のヒノキは、山地・丘陵地等に生育する常緑高木であり、木材は木理が直通で割裂性・耐水性が高い。ヒノキ科には、ヒノキのほか、サワラやアスナロ等の有用材が含まれる。いずれも山地等に生育する常緑高木であり、木材はヒノキと同様に木理が直通で割裂性と耐水性が高い。広葉樹のコナラ節には、コナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワの 4 種がある。平地の二次林、山地・丘陵地の落葉広葉樹林などに生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。器種別にみると、萬能（コモヅチ）は芯持丸木で、ヒノキ科が利用されている。組織をみると、年輪が詰まっていること、手に持った際の重さは一般的なヒノキ科に比べて重いことから、アテ材など、通常より重く硬い部位を用いている可能性がある。

容器の器・底は、円形を呈する板の一部と考えられ、曲物や結物等の底板の一部と考えられる。樹種は、ヒノキに同定され、分割加工が容易で耐水性の高い木材を利用したことが推定される。なお、本資料は板目板であるが、板目は細胞の密度が高い晚材部が層状に重なることから、柾目板に比べて保水性が高いとされ、容器の用途を反映している可能性がある。斎串 6 点と不明 1 点も全てヒノキに同定された。器種は異なるが、いずれも板状を呈していることから、器・底と同様に割裂性が高く、分割加工が容易な樹種を利用したものと考えられる。(伊東・山田 2012) のデータベースによれば、香川県内で調査された古代の曲物・結物の底板では、ヒノキの利用が圧倒的に多い。また、斎串では、下川津遺跡でヒノキが大多数を占め、コウヤマキ、サワラ、スギ、ツガ属が少数混じる組成が確認されている他、多肥松林遺跡ではコウヤマキを主体としてヒノキが混じる組成が報告されている。遺跡によって種類構成に多少の違いはみられるが、割裂性や耐水性が高い針葉樹材を利用している点では共通しており、今回の結果とも調和的である。

木桶は、樹種同定用の破片試料のため、全体の木取りは不明である。広葉樹のコナラ節に同定され、強度の高い木材を木桶として利用したことが推定される。香川県内で古代の木桶について樹種を同定した例をみると、郡家一里屋遺跡でニレ科、川津一ノ又遺跡で針葉樹とヒノキ、尾端遺跡でコウヤマキとヒノキの報告例がある(伊東・山田 2012)。これらの結果をみると、木桶が確認された 3 遺跡のうち、2 遺跡で加工性・耐水性の高い針葉樹材を利用している。今回の結果は、広葉樹材が利用されている点で、郡家一里屋遺跡の事例に似ている。

参考文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 39-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I., and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz



1.ヒノキ(SD4028;W4002)

2.ヒノキ科(SD4028;W6136)

3.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SD4028;W6030-1)

a:木口, b:板目, c:板目

100 μ m:3a

100 μ m:1-2a,3b,c

100 μ m:1-2b,c

第170図 岸の上遺跡出土木材

- I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 国説木材組織, 地球社, 176p.
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・
 佐伯 浩 (日本語監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of
 Microscopic Features for Hardwood Identification].

第3節 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定

株式会社イビソク

1.はじめに

丸亀平野の東端の微高地上に立地する岸の上遺跡から出土した木製品・木材について、樹種同定を行なった。

2.試料と方法

試料は、SD4028 から出土した生の木製品・木材 56 点と炭化材 1 点、計 57 点である。遺構の時期は、7 世紀末～8 世紀末頃と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

生材の樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で削断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後オシスバッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

表3 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定結果一覧

樹種 / 器種	柄	火鑄臼	布巻具	下駄	漆器	漆器	曲物側板	箒状木器	斎串	板材	丸棒	角棒	角材	杭	杭状木器	ヘラ状木器	加工材	加工木	角材削片	割れた破片	削片	不明	合計	
モミ属		1																					1	
マツ属複維管束亞属			1																				1	
ヒノキ				4	2	3	9	1	4	1									1	1	2	28		
アスナロ						1	3			2	1				1							8		
サクラ属																				1			1	
クマヤナギ属										1													1	
エノキ属															1								1	
スダジイ						1																	1	
コナラ属アカガシ亜属	1														1								2	
コナラ属クヌギ節																				1			1	
アカメガシワ								2										1					3	
サカキ									1					1					1				3	
ツバキ属			1												1								2	
トネリコ属トネリコ節											1												1	
モチノキ属		1							1									1					3	
合計	1	1	1	1	1	4	2	1	4	1	12	3	3	6	2	2	1	1	1	1	1	2	1	57

3.結果

同定の結果、針葉樹のモミ属とマツ属複維管束亜属、ヒノキ、アスナロの4分類群と、広葉樹のサクラ属とクマヤナギ属、エノキ属、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、アカメガシワ、サカキ、ツバキ属、トネリコ属トネリコ節（以下、トネリコ節）、モチノキ属の11分類群の、計15分類群がみられた。ヒノキが28点で最も多く、アスナロが8点、アカメガシワとサカキ、モチノキ属が各3点、アカガシ亜属とツバキ属が各2点、モミ属とマツ属複維管束亜属、サクラ属、クマヤナギ属、エノキ属、スダジイ、クヌギ節、トネリコ節が各1点であった。同定結果を表4に、一覧を付表3に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡および走査型顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 第171図 1a-1c(No. 543)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には、高標高地に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高地に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 第171図 2a-2c(No. 399)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第171図 3a-3c(No. 275)、4a-4c(No. 295)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(4) アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 第171図 5a-5c(No. 316)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2～13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野に2～4個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また、精油分が多く、耐朽性に優れている。

(5) サクラ属（広義） *Prunus s.l.* バラ科 第171、172図 6a-6c(No. 314)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と区別できないため、広義のサクラ属とは

モモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(6) クマヤナギ属 *Berchemia* クロウメモドキ科 第172図 7a-7c(No. 308)

やや大型の道管が2~4個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有する。放射組織は平伏、立方、直立細胞が混在する異性で、幅4~10列となる。また放射組織は1mm異常の高さとなる。

クマヤナギ属にはクマヤナギやオオクマヤナギ、ホナガクマヤナギなどがあり、ホナガクマヤナギは日本海沿岸の山地に多く分布する落葉低木の広葉樹である。現在では材利用は顕著に行われていない。

(7) エノキ属 *Celtis* アサ科 第172図 8a-8c(No. 608)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は單穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~3列が方形となる異性で、幅1~5列となる。放射組織には鞘細胞がみられる。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとまって生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(8) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 第172図 9a-9c(No. 538)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 第172図 10a-10c(No. 326)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(10) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 第172図 11a-11c(No. 310)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(11) アカメガシワ *Mallotus japonicas* (Thunb. ex Murray) Muell. Arg. トウダイグサ科

第172、173図 12a-12c (No. 321)

やや厚壁で丸い道管が、晩材部に向けて徐々に径を減じ、晩材部では小道管が放射方向に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状である。道管の穿孔は单一である。放射組織は単列の異性である。

アカメガシワは宮城県および秋田県以西の温帯から暖帯に分布する落葉高木で、日当たりのよい二次林に普通に生育する。材は軽軟で、耐久性が低い。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. モッコク科 第 173 図 13a-13c(No. 323)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は 20 ~ 40 段程度の階段穿孔となる。放射組織は上下端 1 ~ 4 列が直立する異性で、單列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強韌、堅硬で、切削加工は困難である。

(13) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 第 173 図 14a-14c(No. 318)

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1 ~ 3 列が直立する異性で、幅 1 ~ 3 列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(14) トネリコ属トネリコ節 *Fraxinus sect. Ornus* モクセイ科 第 173 図 15a-15c(No. 269)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ~ 2 列並び、晚材部では径を減じた道管が単独ないし数個複合して配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅 1 ~ 3 列となる。

トネリコ属トネリコ節にはヤマトアオダモやマルバアオダモなどがあり、一般的なマルバアオダモは日本各地の丘陵地や山地で普通に見られる落葉高木の広葉樹である。材はトネリコ属シオジ節より重いが、乾燥は比較的容易で、切削加工等は容易である。

(15) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 第 173 図 16a-16c(No. 307)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は 20 ~ 40 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1 ~ 3 列が直立する異性で、幅 1 ~ 5 列となる。

モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

4. 考察

同定の結果、ヒノキをはじめとする針葉樹が多くみられた。針葉樹は全般的に木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良く（伊東ほか 2011）、木製品に多く利用されていたと考えられる。また、さまざまな広葉樹が一部の木製品や杭、棒状の木製品などに使用されていた。サクラ属やエノキ属、スダジイ、アカガシ属、クヌギ節、サカキ、ツバキ属、トネリコ節、モチノキ属は比較的堅硬な樹種であり、アカメガシワとマタタビ属は比較的軽軟な樹種である（伊東ほか 2011）。

香川県域の 7 世紀末～中世頃の出土例では、居石遺跡の古墳時代末期～平安時代頃の布巻具がヒノキである。また、下川津遺跡では古墳時代末～平安時代頃の下駄にヒノキが最も多く利用される一方で、平安～鎌倉時代頃の漆器椀にはトチノキが多くみられ、今回の岸の上遺跡の下駄や漆器椀とは異なる樹種が利用されていた（伊東・山田編 2012）。下川津遺跡の古墳時代末～平安時代頃の曲物の側板と底板には、ともにヒノキが多く利用されており（伊東ほか 2011）、今回の岸の上遺跡と傾向が一致する。

香川県域の古代～中世の棒および杭には、多様な針葉樹および広葉樹が利用されており（伊東・山田編2012）、多様な広葉樹がみられた今回の岸の上遺跡は地域の傾向と一致する結果を示した。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和德（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p、海青社。

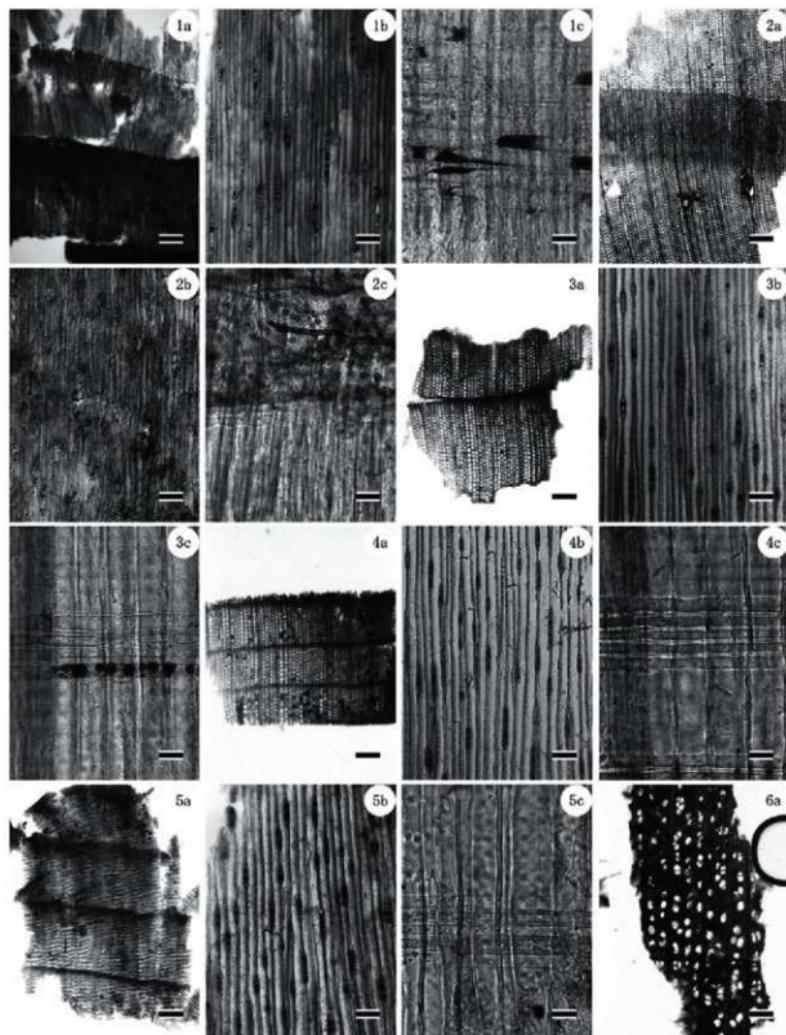
技術協力

小林克也（バレオ・ラボ）

表4 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定結果

報文番号	出土遺構	器種	樹種	木取り	備考	時期
269	SD4028	丸棒	トネリコ属トネリコ節	芯持丸木		7世紀末～8世紀
270	SD4028	丸棒	ヒノキ	芯去削出		7世紀末～8世紀
271	SD4028	角棒	ヒノキ	角材		7世紀末～8世紀
272	SD4028	割れた破片	ヒノキ	割れ		7世紀末～8世紀
273	SD4028	角棒	アスナロ	芯去削出		7世紀末～8世紀
274	SD4028	角棒	アスナロ	角材		7世紀末～8世紀
275	SD4028	角棒	ヒノキ	角材		7世紀末～8世紀
276	SD4028	削片	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
277	SD4028	板材	ヒノキ	板目	薄板状（加工痕有）	7世紀末～8世紀
278	SD4028	板材	アスナロ	板目	加工痕有	7世紀末～8世紀
279	SD4028	ヘラ状	アスナロ	板目		7世紀末～8世紀
280	SD4028	角材削片	サカキ	板目		7世紀末～8世紀
281	SD4028	斎串	アスナロ	板目		7世紀末～8世紀
282	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
283	SD4028	斎串	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
286	SD4028	曲物底板	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
287	SD4028	板材	ヒノキ	追板目		7世紀末～8世紀
294	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
295	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
296	SD4028	斎串？	モチノキ属	板目		7世紀末～8世紀
297	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
300	SD4028	斎串	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
301	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
306	SD4028	火鑄臼	モチノキ属	芯持丸木		7世紀末～8世紀
307	SD4028	加工材	モチノキ属	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
308	SD4028	丸棒	クマヤナギ属	芯持丸木		7世紀末～8世紀
309	SD4028	杭	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	枝払い	7世紀末～8世紀
310	SD4028	切断片	コナラ属クヌギ節	芯持丸木		7世紀末～8世紀
311	SD4028	杭状	サカキ	芯持丸木		7世紀末～8世紀
312	SD4028	不明	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
313	SD4028	板材	アスナロ	板目		7世紀末～8世紀
314	SD4028	削片	サクラ属	板目		7世紀末～8世紀
316	SD4028	板材	アスナロ	板目		7世紀末～8世紀
317	SD4028	角棒	ヒノキ	角材		7世紀末～8世紀
318	SD4028	ヘラ状木器	ツバキ属	芯去削出		7世紀末～8世紀
319	SD4028	加工木	アカメガシワ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
320	SD4028	角棒	ヒノキ	芯去削出	先端加工	7世紀末～8世紀
321	SD4028	棒	アカメガシワ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
322	SD4028	棒	アカメガシワ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
323	SD4028	棒	サカキ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀

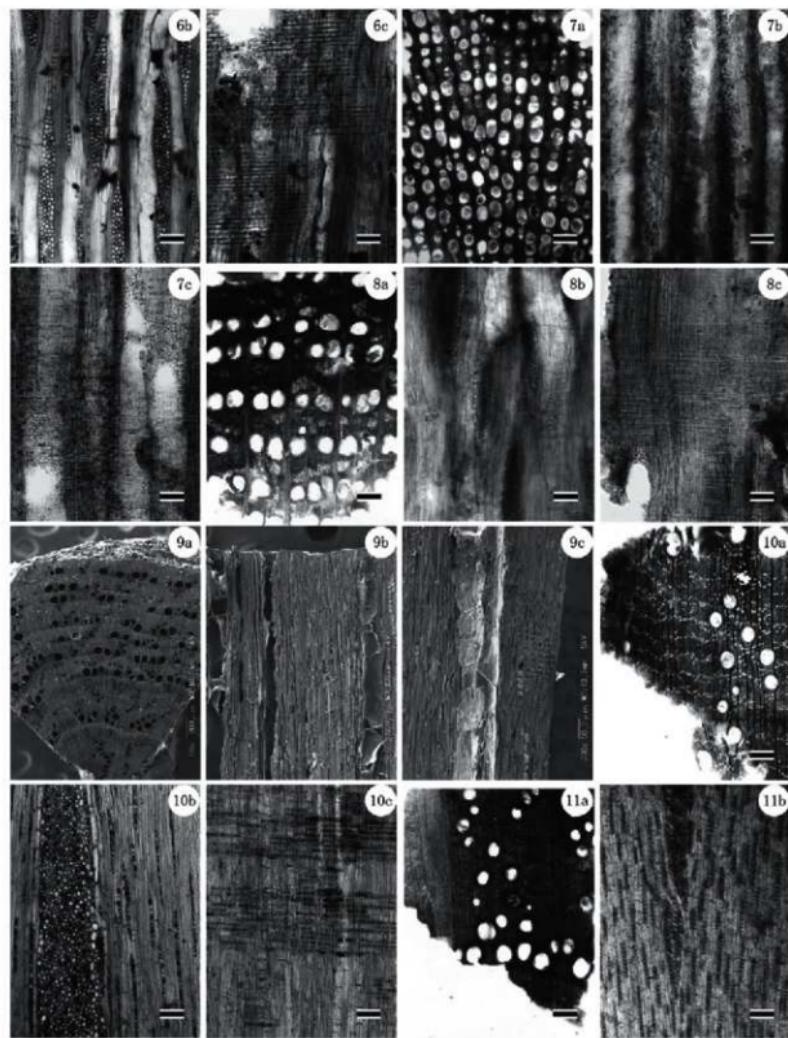
325	SD4028	斎串	ヒノキ	芯去削出	棒状	7世紀末～8世紀
326	SD4028	柄	コナラ属アカガシ亜属	芯去削出		7世紀末～8世紀
334	SD4030	角材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
399	SX5010	下駄	マツ属複維管束亜属	板目		中世？～近世
400	SX5010	漆器挽	ツバキ属	横木取り		中世？～近世
537	SD5008	不明	ヒノキ	板目		中世
538	SD5008	箸状木器	スダジイ	芯持丸木		中世
539	SD5008	曲物側板	ヒノキ	柾目		中世
540	SD5008	曲物側板	ヒノキ	柾目		中世
541	SD5008	曲物側板	ヒノキ	柾目		中世
542	SD5008	板材	ヒノキ	板目		中世
543	SD5008	布巻具	モミ属	芯持丸木		中世
544	SD5008	板材	ヒノキ	板目		中世
585	遺構外	角材	アスナロ	角材	先端加工	中世？
606	SD6006	曲物底板	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
608	SD6007	杭	エノキ属	芯持丸木		7世紀末～8世紀
636	SD6008	曲物側板	ヒノキ	柾目		7世紀末～8世紀



1a-1c. モミ属 (No. 543)、2a-2c. マツ属複維管束亞属 (No. 399)、3a-3c. ヒノキ (No. 275)、4a-4c. ヒノキ (No. 295)、
5a-5c. アスナロ (No. 316)、6a. サクラ属 (No. 314)

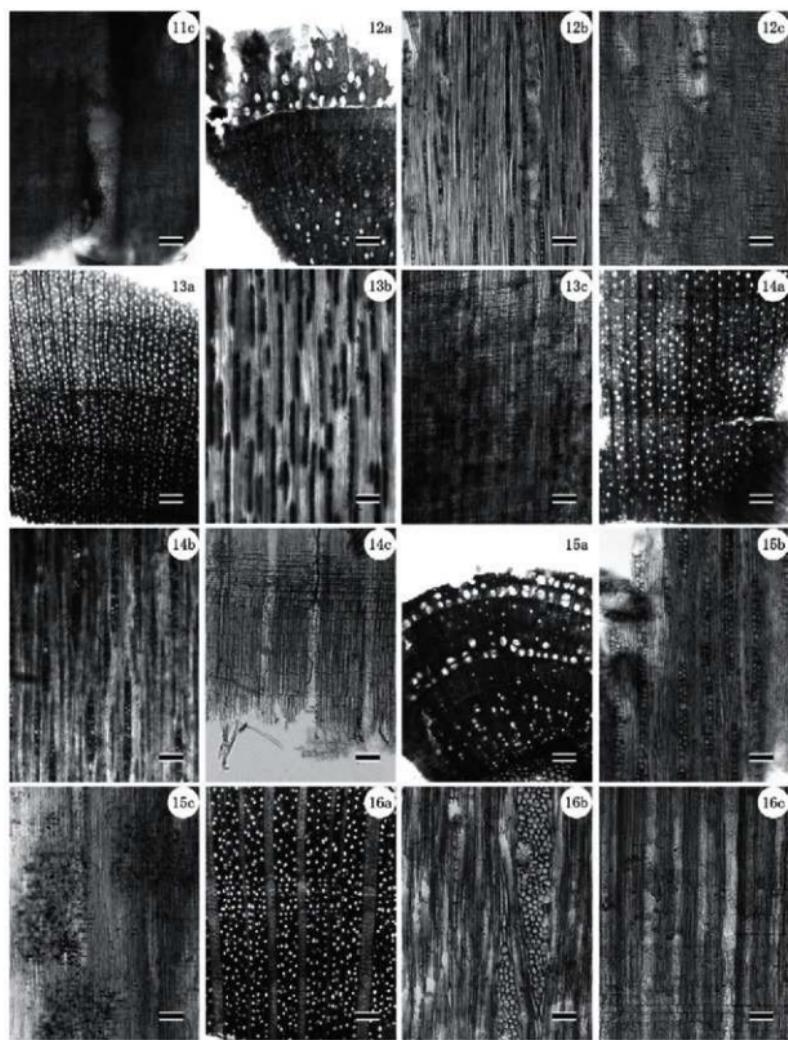
a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=25 μm)

第 171 図 岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 1



6b-6c. サクラ属(No. 314)、7a-7c. クマヤナギ属(No. 308)、8a-8c. エノキ属(No. 608)、9a-9c. スダジイ(No. 538)、10a-10c. コナラ属アカガシ亜属(No. 326)、11a-11c. コナラ属クヌギ節(No. 310)
a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=6, 7, 9, 10:100 μm)

第 172 図 岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 2



11c. コナラ属クヌギ節(No. 310)、12a-12c. アカメガシワ(No. 321)、13a-13c. サカキ(No. 323)、14a-14c. ツバキ属(No. 318)、15a-15c. トネリコ属トネリコ節(No. 269)、16a-16c. モチノキ属(No. 307)
a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=100 μm)

第173図 岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真3

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

今回報告する岸の上遺跡の調査においては、弥生時代から近世までの遺構・遺物が確認された。

ここでは、各時代の遺構の状況について整理し、まとめとする。

縄文時代以前

遺構は確認されていない、一部に縄文時代にさかのぼる可能性がある石鏃などが出土している。

弥生時代（第174図）

3面において確認される。遺構は散漫であり、居住域は確認できない。遺構の大半は溝であり、一部平面形態が不明な遺構が確認できる。SD5020といったように、幅も比較的広く、途中で溝が大きく屈曲するような遺構が認められるが、大半は北東方向に向かって流下する。

これらの遺構からは遺物の出土も少量であり、その大半は弥生時代中期後半～後期にかけてのものである。周辺に当該期の居住域が存在していた可能性も高いが、今回調査範囲とは少し離れていた、ないしは短期的なものと考えられる。

なお、3面を構成する4層から弥生時代前期のものと考えられる土器が出土している。

古墳時代（第174、175図）

3面においてSB4002、SB4003とそれに付随する遺構が確認できるほか、2面の水田層で確認された畦畔及びそれらに付随する溝についても古墳時代終末期の遺構である可能性が高い。

3面の建物は、いずれも、古墳時代後期の中でもTK43期に建物が埋没していることから、6世紀後半の遺構である可能性が高い。当該期の遺構については、これまでの調査において、より南方の微高地に比較的時期が近い堅穴建物が検出されている。それらの近隣には2×2間の総柱建物が存在しており、建物の軸が堅穴建物と一致するといったように、一般的な集落と類似する内容を示す。

香川県下の古墳時代後期前後の集落を見ると、太田下・須川遺跡（北山・森下 1995）は5世紀に相当し、佐古川・鶴田遺跡（山元 2007）、吉野下秀石遺跡（西岡 2007）などでも6世紀代の総柱建物が存在するが、2×2間のものが多い。堅穴建物に近接する特徴も認められる。古墳時代後半期の集落遺跡では、堅穴建物と掘立柱建物の分布域が明瞭に分離される状況は少なく、混在しているような分布状況を示すものが大半である。

しかし、今回検出された建物は、周間に溝を持つといった構造、2×3間の建物2棟が並列している状況からも、通常の集落に伴うものとは異なる。遺跡の中で堅穴建物が集中する範囲とも離れている。岸の上遺跡の周辺には、周囲の集落遺跡の調査例はないものの、岸の上遺跡自体が周辺の集落と比べ規模が大きく、そういう状況の表れとして、このような大規模な建物が作られたと考えられる。

古墳時代終末期には、3面が埋没し4・5区においては2面が形成される。2面の大部分は古墳時代終末期の遺構であり、小規模な柱穴や溝のほかは、水田畦畔とそれらに伴う溝の存在が確認されている。畦畔の方向は、残存状況や後にする流路により削平されていることから、明確な畦畔で囲まれた区画は検出できていない。しかし、周辺の条里型地割とは一致しない方向の溝や畦畔が見られることや、一つ一つが均整な区画とならない状況であり、より古墳時代以前の水田畦畔区画に類似しているといえる。

これらの水田については、植物珪酸体分析の結果や、遺構自体の重複が少ない点、3面の最新段階の

遺構と、1面の最古段階の遺構、並びに各面を構成する堆積土の年代からも、かなり短期間に操業されたものであると考えられる。

古代（第175図）

最も多量の遺物が出土する時期である。地形の状況から、南側の微高地より次第に下がる地形はまだ続き、遺跡の北端付近では低地部へと移り替わる。

そういう状況の中で、地形に直行するような形で大型の溝SD4028が掘削されるほか、小規模な溝などが確認できる。SD4028は北東方向へと地形が下がる境界付近で、北西方向に流下するように流れる。

SD4028からは、7世紀後半～9世紀初頭に至るまでの土器の他、木製祭祀具や木簡等の官衙遺跡を想起させる遺物が出土している。官衙遺跡内部の施設を囲む溝であれば、地割や建物に沿った方向に開削される、深度の浅いものが多く、今回検出された溝とは異なる特徴が多い。

中世以降にも同一の方向の水路（SD4021）が開削されること、流水痕跡が確認でき、木橋等が出土することから、水路としても一時機能していた可能性が高い。中世の水路と方向が類似することもその傍証となろう。

ただし、低地への落ち際という微高地の縁辺に開削されることからも、官衙外縁部を囲む溝となる可能性も多い。各地の郡衙遺跡の発掘調査事例の中でも、諸施設の存在する範囲の外周を囲む溝が存在する例があり、地割に沿わないことや、深度などの規模の特徴からSD4028も、囲まれた内部の状況は不明なもの、官衙の諸施設の存在する広大な範囲の周囲を巡る溝とも考えられる。後の遺構からも出土する多数の古代の遺物は、内部の諸施設で使用されたものが、官衙域の範囲に広く分布していたことを示しうる。遺跡の所在する鶴足郡において、明確な郡衙が遺跡として見つかっていないことや、推定南海道との位置関係からも、岸の上遺跡とその周辺が鶴足郡衙となる可能性も考えられよう。

なお、SD4028の埋没後については、今回調査範囲においては、遺構が形成されないうえに、8世紀後半以降の遺物の出土も極めて少なくなる。遺跡の存在する微高地上での、建物配置などのプランの変更、ないしは規模の縮小といった可能性を考えたい。

中世（第176図）

中世の遺構・遺物については、今回調査範囲の中では、溝、柱穴、井戸が確認されている。溝は現在の地割に近いものと、そうでないもの（SD4021）に分かれ、地割に合致しないものについては、その大半が中世前半のものであり、柱穴が集中する部分についても同様である。

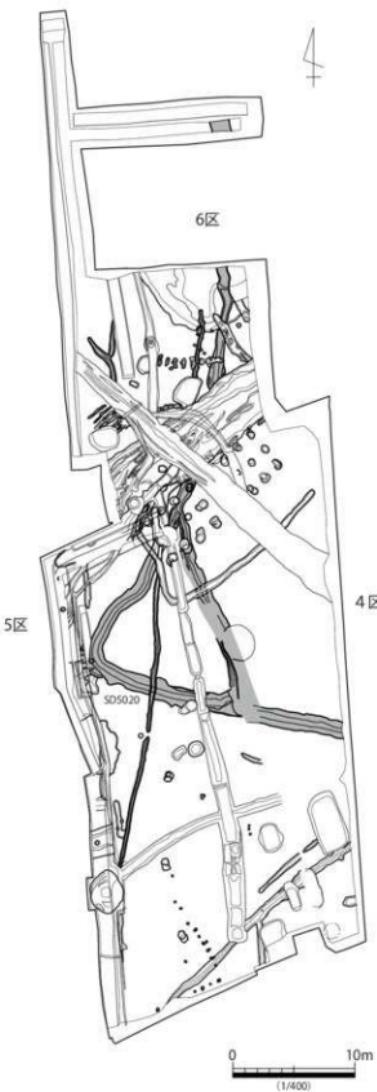
中世後半以降については、おおむね地割に合致する形で遺構が形成される。それを端的に示すのがSD5008であり、流量調整機能をもつ灌漑水路が南北方向に流れるようになり、大まかではあるが中世前半と後半の間において、条里型地割に近い遺構が形成されるなどの変化が認められる。

近世（第176図）

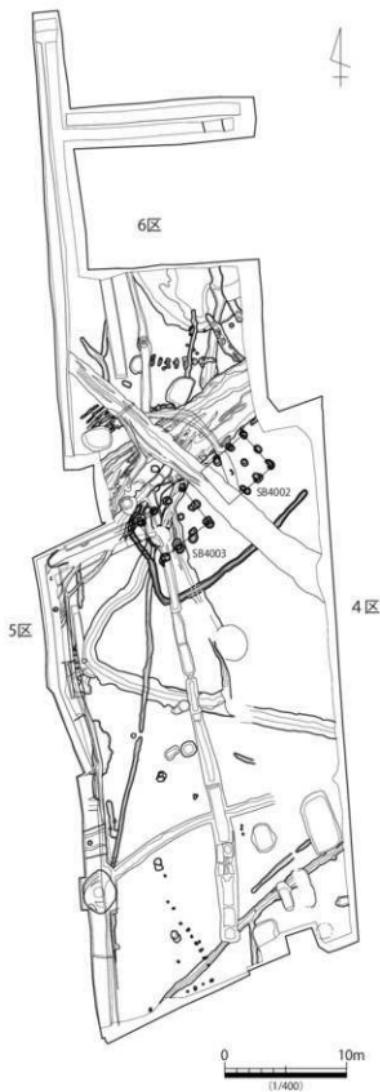
地割に合致する溝が確認でき、これらに前後するように地割周辺に地割線同方向の土坑状の遺構が形成される。これらの埋土に多数の礫が含まれることから、耕作に伴い出てくる礫などを投棄した廃棄土坑であると判断し、近世は現代と同様に、近隣には田畠が展開されていたと考えられる。

土坑出土遺物については、今回報告の中では十分に遺物が掲載できていないが、おおむね18世紀後半以降のものが多い。岸の上遺跡が高松藩領に位置することからも、熔炉や土師質土器皿には、東西それぞれの特徴がみられるほか、陶磁器についても、擂鉢に壠産のものが入り、椀類も良質なものではない陶器が中心となることから、近世の香川県内の農村部の生活状況や流通状況を知るうえでは興味深い。

弥生時代

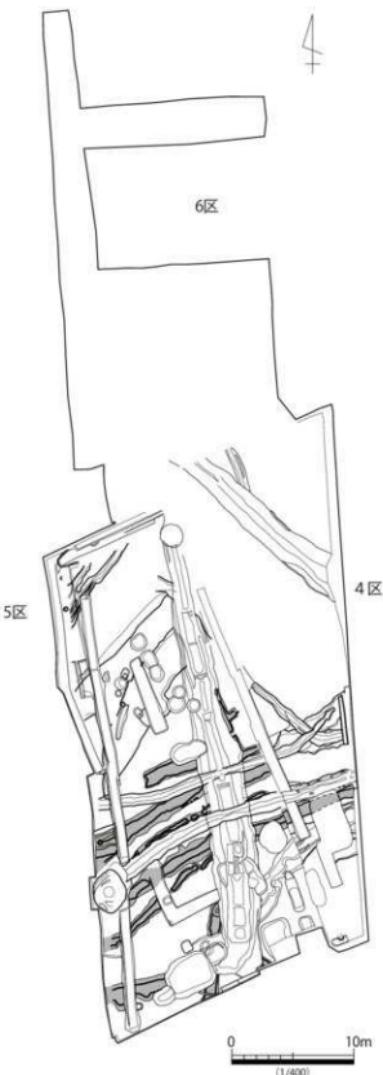


古墳時代後期

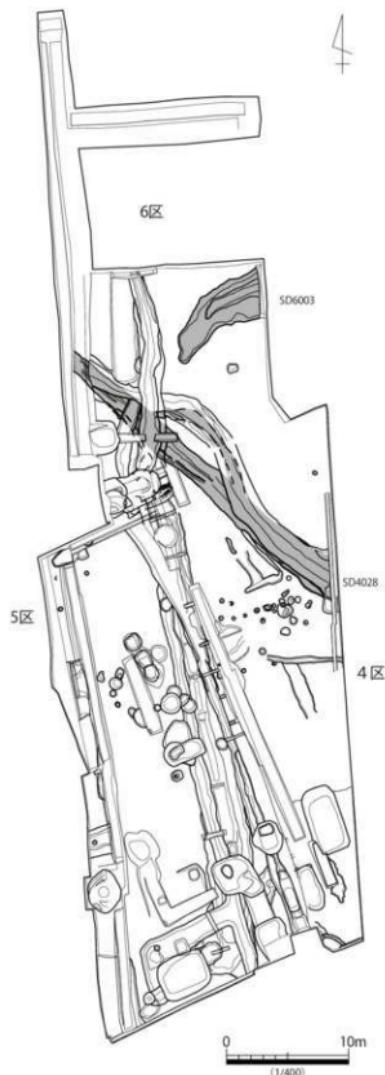


第 174 図 遺構の変遷 1

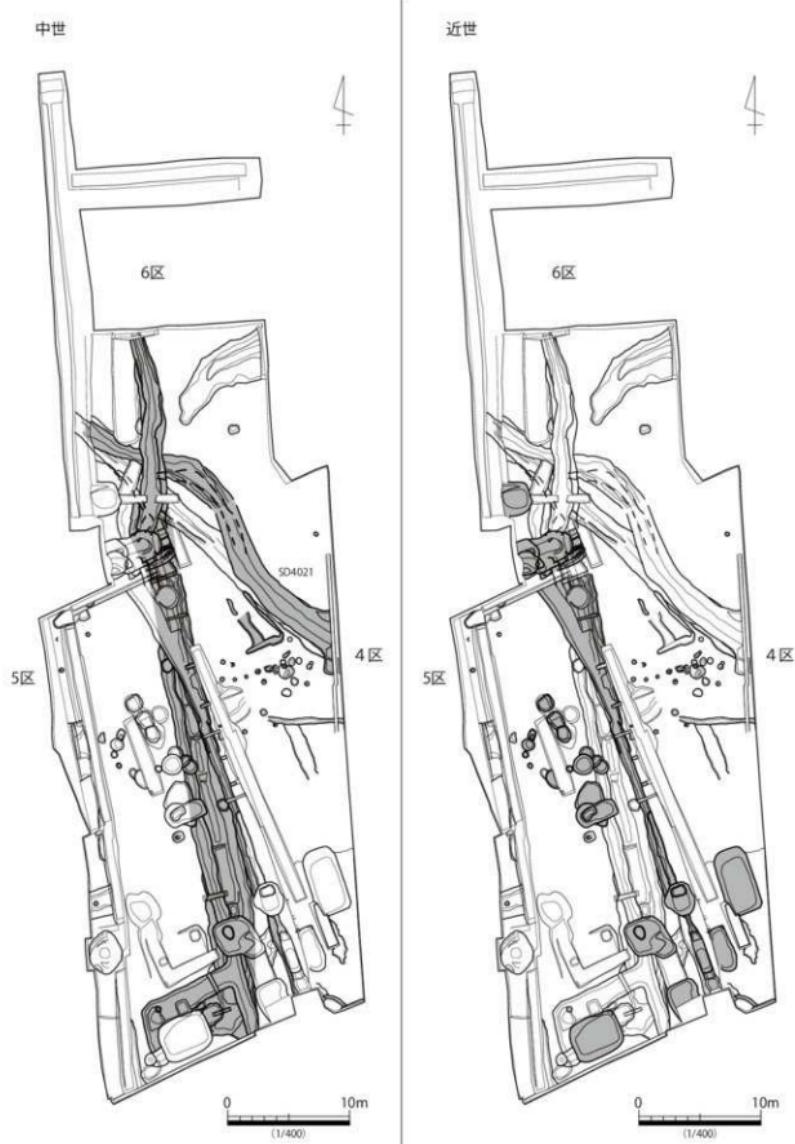
古墳時代終末期



古代



第175図 遺構の変遷2



第176図 遺構の変遷 3

第2節 SD4028 出土木簡と木製品について

今回調査において、特筆すべき遺物として、SD4028出土の木簡が挙げられる。県内の古代遺跡の調査では、坂出市下川津遺跡で墨書がある木製品（転用品）及び刻書された木板が出土しているのみである。今回、奈良文化財研究所資料研究室のご協力のもと、木簡の赤外線写真撮影及び判読できる部分の釈文を行い、そのうちの判読成果、それを受けた木簡の評価を行いたい。

木簡 1 (報告番号 303)

SD4028 下層で出土した。上端切り折り、下端削り、右辺削り、左辺上部削り、左側下半破損。樹種はヒノキ。読み下しについては以下のとおりである

〔於井里丁八十一
〔此里力〕

短冊型

以上の判読からこれらが農業経営、ないしは郡レベルでの地域経営にかかわる内容を記載したものであった可能性が高い。

特に、鶴足郡には9箇所の郷があったとされるが、そのうちの一つ井上郷（木簡内では里として表記）に對しての記載があることから、さらに上位の鶴足郡衙、ないしはそれらに深くかかわる遺跡において出土する性格のものと考えられる。

出土状況については、投棄されたものが上流より流れ着いた状況ではなく、近隣にて投棄されたと考えられる。岸の上遺跡の今回調査・報告範囲の中では、官衙に相当する施設は確認できていないが、木簡以外の官衙を想起させるような遺物の存在や、南側で建物が多数復元されている状況から、郡衙の存在を遺跡の近辺に想定することが可能であろう。

岸の上遺跡の南側は、推定南海道を隔てて大型の建物が検出されており（香川県埋蔵文化財センター2018）、それらの存在や遺跡の所在する微高地がさらに西側に続く状況を考えると、このような内容の木簡が出土する性格の遺跡が周間に展開していたと考えられる。

また、井上郷の表記が里であることからも、郷という名称が使用される715年以前のものである可能性が高く、SD4028 下層の埋没時期であると想定される7世紀末～8世紀前半とおおむね一致する。



第177図 SD4028出土木簡1 赤外線写真

木簡 2 (報告番号 302)

木簡 1 と同じく SD4028 下層で出土した。読み下しについては以下のとおりである。樹種はヒノキ科である。



短冊形 019 型式

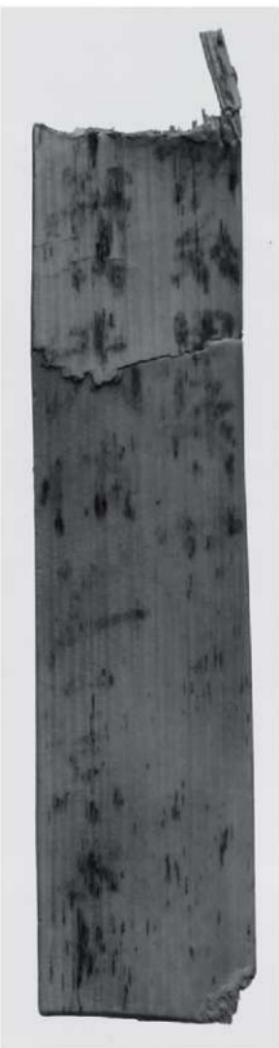
判読できる部分については墨痕が確認でき、字数については想定できるものの、現状では判読できる文字はない。2行取りであることは判明しており、一部の文字については、「俵」「束」といった文字の可能性もある。

大きさからも元々文書等が記載されていたものと考えられる。上部は欠損しているが、埋没時や調査時の折れというよりは、木簡廃棄時に意図して折られたような状態であり、出土状況からも破片が周囲には確認できない。そういう状況も鑑みると、意図的に折られたものである可能性は高いといえる。

木簡を再利用することなく、意図的に破棄している状況が確認できるのであれば、これまで県内で見つかっている下川津遺跡などとは扱いが一部異なる。再利用可能なものを投棄することは、文書の管理がより厳密に行われているという考え方もある。また、当初の木簡の法量についても、意図的な折りを想定するのであれば、倍の大きさである長さ 30cm ほどになり、比較的大型の部類のものとなりえる。

木簡 3 (報告番号 304)

肉眼では墨痕が確認できない。赤外線写真にて観察すると、部分的ではあるが墨痕が確認できる。行や字数などを検討する材料は全くないが、その形態については上部に抉りをもち、荷札木簡である可能性が高い。



第 178 図 SD4028 出土木簡 2
赤外線写真

以上のような特徴を持つ木簡であるが、その特徴について整理すると、①文書や地域経営にかかる内容のものであること②使用時から廃棄されるまでにほかの木製品として再利用された痕跡が見られない

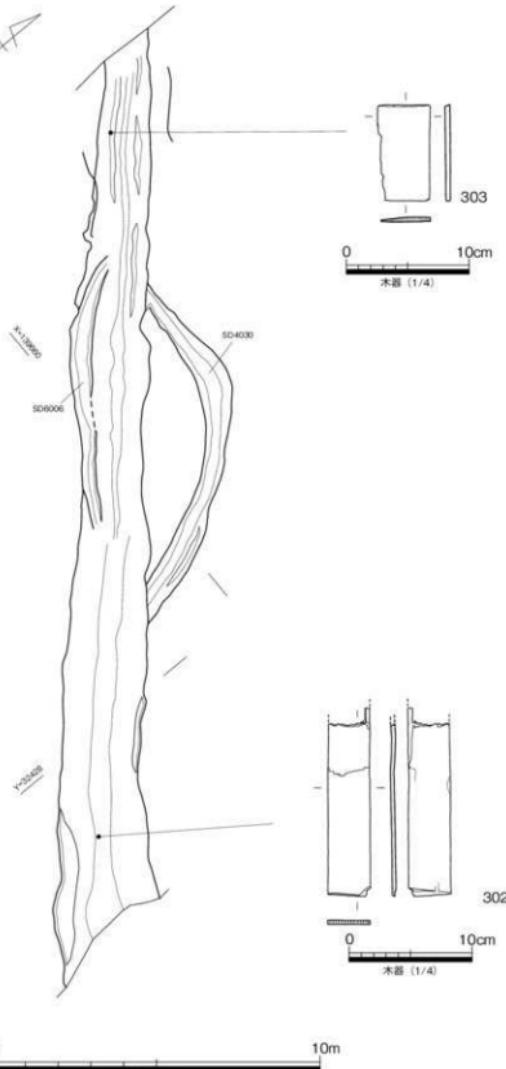
いことがあげられる。

木筒が出土したSD4028から
は、同一層から古代の祭祀具も
含めた木製品が出土しているほ
か、ふいご羽口、製塩土器、蛸
壺、暗文が施された土師器など、
一般集落であまり見られない資
料が散見される。

この他、後世の遺構からでは
あるが、石帯や瓦もSD4028付
近で出土している。

このうち土師器皿について
は、一部に川津一ノ又遺跡・下
川津遺跡などで類似する特徴を
持つ一群の土師器が出土してお
り、これらは讃岐産土師器と位
置付けられている（片桐 1996）。
鶴足郡内の遺跡に多く確認され
ており、岸の上遺跡については、
遺跡全体の様相が不明な部分も
多いが、川津遺跡群での出土量
と比較すると、おそらくは川津
遺跡群周辺から持ち込まれたも
のであろう。官衙に関連する遺
物が出土するのみでなく、製塩
土器や蛸壺など、遺跡の立地に
かかわらず、様々なモノが集
まっている状況も、岸の上遺跡
の特徴であるといえる。

なお、岸の上遺跡が所在する
鶴足郡内において、木筒が出土
し、最も状況が近い下川津遺跡
では、文字が書かれた木筒も転
用され、使用し続けられている。
こういった状況と岸の上遺跡に
みられる状況は、県下全体に敷
衍できるものではないが、少な
くとも同一郡の中での官衙的性



第179図 SD4028 木筒出土地点

格を持つ遺跡間の差異としてとらえられる可能性があり、今後周辺の遺跡の実態解明と合わせ、検討していくべき課題である。

【主要参考文献】

- 尾上実 1983 「南河内の土器査」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 北山健一郎・森下友子 1995 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4集 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会
- 西岡達哉 2007 『一般国道32号瀬戸内海バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3集 吉野下秀石遺跡』香川県教育委員会
- 木下晴一 2016 『国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 東坂元北岡遺跡 飯山北土居遺跡』香川県教育委員会
- 片桐孝浩 1997 「讃岐の土師器」『香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要V』香川県埋蔵文化財調査センター
- 金田章裕 1989 「条里と村落生活」『香川県史 第1巻 原始・古代』香川県
- 藏本晋司 2017 『国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 北岸南遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
- 佐藤竜馬 1998 「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』古代学協会四国支部
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第4集 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2016 「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1）9世紀前葉～11世紀前葉の供穀器種」『香川県埋蔵文化財センター一年報 平成26年度』香川県埋蔵文化財センター
- 香川県立ミュージアム 2017 『讃岐びと 時代を動かす - 地方豪族が見た古代世界 -』
- 藤好史郎・西村尊文・大久保徹也ほか 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊 下川津遺跡』香川県教育委員会
- 松村恵司 1983 「古代の稻倉について」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所30周年記念論文集刊行会
- 丸亀市教育委員会 2014 「第Ⅲ章 飯山町上真時字早川地区試掘調査」『丸亀市内遺跡発掘調査報告書』第11集
- 山下平重 1997 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第26冊川津一ノ又遺跡」香川県教育委員会
- 山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』培文房
- 山中敏史 1995 「国府・郡衙跡調査研究の成果と課題」『文化財論叢II』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会
- 山本信夫 1995 「〔2〕中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山元素子 2007 『一般国道32号瀬戸内海バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1集 佐古川・塙田遺跡』香川県教育委員会
- 香川県埋蔵文化財センター 2018 『香川県埋蔵文化財センター一年報 平成28年度』

表5 土器観察表1

圖文 番号	地区名	遺跡名	層位	種類	形相	調整		色調		胎土		法量(cm)				
						外側	内面	外部	内面	石英 長石	赤色熟 陶母	母粒	口径 (cm)	底径 (cm)	幅 (cm)	高 (mm)
1	6区	包含層	土胎器	瓶	口徑 直筒	指子ナデ	指子ナデ	7.5YR6.6	7.5YR6.6	-	-	細・多	-	-	-	
3	5区	包含層	須恵器	杯	口縁・体：圓板ナデ 内輪ナデ	圓板ナデ	5YR6.5灰	N7灰白	-	-	-	-	-	-	-	
4	5.5区	包含層	須恵器	杯	口縁・体：圓板ナデ 内輪ナデ	圓板ナデ	N7灰白	N7灰白	-	-	中・少	11.3	43	73	-	
5	5.5区	包含層	須恵器	盤	口縁・体：圓板ナデ 内輪ナデ	圓板ナデ	10YR4.5黄褐	2.5YR3.5淡黃	中・多	無	中・少	12.6	-	-	-	
7	4.2区	SD0001	-	須恵器	盤	口縁：不明(マメツ) 内輪ナデ	圓板ナデ	N6灰	N5灰	-	-	細・少	15.0	-	-	-
8	4.2区	SD0002	-	土胎器	皿	口縁：不明(マメツ) 内輪ナデ	圓板ナデ	5YR6.8灰	5YR6.8灰	-	-	細・少	17.5	22	143	-
9	4.2区	SD0002	-	土胎器	カマド	口縁：不明(マメツ) 内輪ナデ	圓板ナデ	7.5YR6.4±2.5灰	10YR6.2灰黃	-	-	粗・多	-	-	-	-
10	4.2区	SD0002	-	土胎器	瓶	口縁：横ナギ、体 半：指子ナギ、下 半：指子ナギ	圓板ナデ	7.5YR7.3灰黃	10YR7.3灰黃	-	-	中・少	24.2	-	-	-
11	4.1区	SD0005	-	土胎器	不明	口縁 内輪ナデ	不明(マメツ)	7.5YR8.3灰黃	7.5YR8.3灰黃	-	-	細・亞 無	-	-	38	39
12	4.1区	SD0005	-	土胎器	瓶	口縁 内輪ナデ	不明(マメツ)	7.5YR5.4±2.5灰	7.5YR5.4±2.5灰	-	-	中・多	-	-	-	-
13	4.1区	SD0005	-	中国席	輪	輪	輪	7.5YR7.1灰白	5YR7.1灰白	-	-	無	15.7	-	-	-
19	4.4区	SD0011	-	土胎器	杯	口縁：ナギ、他：不明	圓板ナデ	7.5YR7.6灰	7.5YR7.6灰	-	-	中・少	-	-	-	-
20	4.3区	SE0001	1層	土胎器	すり棒	指子ナギナデ 内輪ナデ	圓板ナギ	10YR6.3灰黃	10YR6.3灰黃	-	-	中・多	-	-	-	-
22	4.3区	SE0001	1層	須恵器	蓋子	蓋子ナギナデ 内輪ナギ	蓋子ナギナデ	N5灰	N5灰	-	-	中・少	-	-	-	-
23	4.3区	SE0001	1層	土胎器	瓶	口縁：横 蓋蓋なし(蓋子)	口縁：横 蓋蓋なし(蓋子)	10YR6.3灰黃	10YR6.3灰黃	-	-	中・少	-	-	-	-
24	4.3区	SE0001	1層	土胎器	足端	口縁：横ナギ、口 縫隙：指子ナギ	口縫隙ナデ	5YR7.8灰	2.5YR6.8灰	-	-	中・多	-	-	-	-
25	4.3区	SE0001	1層	土胎器	足端	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	2.5YR7.2灰白	2.5YR7.2灰白	-	-	中・少	25.8	-	-	-
26	4.3区	SE0001	1層	土胎器	瓶	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	10YR7.3灰黃	10YR7.3灰黃	-	-	粗・少	-	-	-	-
27	4.3区	SE0001	-	土胎器	瓶	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	5YR7.8灰	5YR7.8灰	-	-	無	-	-	-	-
29	4.3区	SE0001	3層	土胎器	蓋	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	5YR6.5灰	5YR6.1灰白	-	-	中・少	-	-	-	-
30	4.3区	SE0001	3層	土胎器	皿	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	10YR6.2灰白	10YR6.2灰白	-	-	中・少	-	-	50	-
31	4.3区	SE0001	3層	土胎器	すり棒	指子ナギナデ 内輪ナデ	指子ナギナデ 内輪ナデ	5YR7.1灰白	5YR7.1灰白	-	-	中・少	-	-	176	-
39	4.2区	SK0002	-	灰陶器	壺	口縫隙ナデ 内輪ナデ	口縫隙ナデ 内輪ナデ	N7灰白	N6灰	-	-	粗・少	-	-	-	13.4
41	4.4区	SK0004	-	須恵器	蓋	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	5YR6.5灰	5YR6.5灰	-	-	中・少	11.3	-	-	-
42	4.4区	SK0004	-	須恵器	蓋	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	5YR6.5灰	5YR6.5灰	-	-	中・多	22.4	-	-	-
43	4.4区	SK0004	-	須恵器	盤	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	10YR6.1灰	10YR6.1灰	-	-	細・少	73	239	-	-
45	4.4区	SK0004	-	土胎器	壺	口縫隙ナデ 内輪ナデ	口縫隙ナデ 内輪ナデ	7.5YR6.4±2.5灰	7.5YR6.4±2.5灰	中・少	-	粗・少	47.0	-	-	-
46	4.4区	SD0004	-	土胎器	皿	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	7.5YR8.4灰黃	10YR8.3灰黃	-	-	中・少	66	4.5	-	-
47	4.4区	SD0004	-	土胎器	杯	口縫隙ナデ 内輪ナデ	口縫隙ナデ 内輪ナデ	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	-	-	細・少	98	23	56	-
48	4.4区	SD0004	-	土胎器	壺	口縫隙ナデ	口縫隙ナデ	10YR8.2灰白	10YR8.2灰白	-	-	細・少	12.1	-	-	-
49	4.4区	SD0004	-	龍泉窯	碗	龍泉窯	龍泉窯	5YR7.5灰	5YR7.5灰	胎	-	粗	-	-	-	-

土器観察表 2

編号 名	地区 名	遺跡名	層位	種類	器種	調整		内面	外縁	色調		土	石英 長石	赤色粒 角閃石	雲母 斜方	砂粒	口沿 (cm)	壁 (cm)	底 (cm)	法面 (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	厚 (cm)	$\frac{1}{2}$ の地 (cm)	
						外面	内面			触	触														
50	4.IX	SD004	-	中国窓 白磁	碗	内板ヘタケズリ	触	触	触	5Y6/2灰	触	土	5Y7/2灰白	触	触	触	無	-	-	-	-	-	-	-	-
51	4.IX	SD004	-	中国窓 白磁	皿	鳥袖	触	触	触	5Y7/2灰白	触	土	5Y8/4灰白	触	触	触	無	-	-	-	-	-	-	-	-
52	4.IX	SD004	-	鳥袖窓	碗	ヨコナダ				2.5Y8/1灰白			2.5Y8/1灰白				中・少	-	-	-	-	-	-	-	-
53	4.IX	SD004	-	土師器	碗	口縁：ヨコナ 子、脚：ヨコナ 子	ハケ	ハケ	ハケ	10Y8/2灰白			10Y8/2灰白				細・少	-	-	-	-	-	-	-	-
54	4.IX	SD004	-	西村窓	碗	不明(マツツ)	ハケ	ハケ	ハケ	2.5Y8/1灰白			2.5Y8/1灰白				細・少	-	-	-	-	-	-	-	-
55	4.IX	SD004	-	土師器	碗	高台：ヨコナダ。 底：不明(マツツ)	口縁(マツツ)	口縁(マツツ)	口縁(マツツ)	10Y8/2灰白			10Y8/2灰白				細・少	-	-	-	-	-	-	-	-
56	4.IX	SD004	-	土師器	碗	高台：ヨコナ 子。底：不明(マ ツツ)	ナダ			10Y8/2灰白			7.5Y7/1明褐灰				細・少	-	-	-	-	-	-	-	-
57	4.IX	SD004	-	土師器	碗	脚：中上工藝ナ 子。高台：ヨコナ 子。底：明褐色ナ 子。	板ナダ			2.5Y8/2灰白			2.5Y8/2灰白				中・少	-	-	-	-	-	-	-	-
58	4.IX	SD004	-	瓦器	碗	体：指サエ ナダ	ヘラミガキ			N5 灰			N4/灰				無	-	-	-	-	-	-	-	-
59	4.IX	SD004	-	龜山焼	要	格子タッキ ナダ	圓心Fタッキ			N3 褐灰			N3/褐灰				中・少	-	-	-	-	-	-	-	-
60	4.IX	SD007	-	西村窓	碗	内板ナダ	ナダ			N8 灰白			N8/灰白				細・少	-	-	-	-	-	-	-	-
61	4.IX	SD010	-	土師器	足盤	口縁下：指サエ ナダ。底：不明(マ ツツ)	脚注ナダ			10Y8/2灰白			10Y8/2灰白				中・多	-	-	-	-	-	-	-	-
62	4.IX	SD024	-	土師器	皿	底：輪状ナ 子。脚：ヨコナ 子。	脚注ナダ			2.5Y8/6 緩			2.5Y8/6 緩				中・少	6.9	11	5.1	-	-	-	-	-
63	4.IX	SD025	-	土師器	杯	手：内板ナ 子。下掌：ナダ	ナダ			10Y8/3浅黄精			10Y8/3浅黄精				細・多	-	-	-	-	-	-	-	-
64	4.IX	SD025	-	土師器	碗	不明(マツツ) ナダ	不明(マツツ)			10Y8/1灰白			10Y8/2灰白				細・少	-	-	-	-	-	-	-	-
65	4.IX	SD021	上層	瓦器	碗	内板ヘタ ナダ	指サエ工藝ナ 子			N5 灰			N5/灰				中・少	16.0	-	-	-	-	-	-	-
66	4.IX	SD021	上層	黒色土 器A類	碗	不明(マツツ)	ヘラミガキ			5Y8/4 滲粗			N4/灰				中・少	-	-	-	-	-	-	-	-
67	4.IX	SD021	上層	土師器	杯	口縁：ヨコナ 子。底：ヨコナ 子。	ヨコナダ			10Y8/2灰黄精			10Y8/2灰黄精				中・多	32.0	-	-	-	-	-	-	-
68	4.IX	SD021	-	土師器	皿	口縁：ヨコナ 子。底：ヨコナ 子。	ヨコナダ			10Y8/2灰白			10Y8/2灰白				中・多	6.6	-	5.6	-	-	-	-	-
69	4.IX	SD021	-	土師器	小皿	口縁：ヨコナ 子。底：ヨコナ 子。	脚注ナダ			2.5Y8/2灰白			2.5Y8/2灰白				細・多	8.6	18	6.6	-	-	-	-	-
70	4.IX	SD021	-	土師器	皿	口縁：ヨコナ 子。底：ヨコナ 子。	脚注ナダ			10Y8/2灰白			10Y8/2灰白				中・多	8.7	-	5.6	-	-	-	-	-
71	4.IX	SD021	-	土師器	皿	口縁：ヨコナ 子。底：ヨコナ 子。	脚注ナダ			10Y8/2灰白			10Y8/2灰白				細・少	8.6	13	7.0	-	-	-	-	-
72	4.IX	SD021	-	土師器	皿	口縁：ヨコナ 子。底：ヨコナ 子。	脚注ナダ			2.5Y8/2灰白			2.5Y8/2灰白				中・多	8.0	12	6.0	-	-	-	-	-
73	6.IX	SD021	-	須恵器	杯	口縁：ヨコナ 子。底：ヨコナ 子。	脚注ナ ダ			N6 灰			N6/灰				細・少	12.6	33	6.4	-	-	-	-	-

土壤觀察器 3

地区名	選択名	層位	種類	器種	外面		内面		色調		付土		寸法(cm)	幅(cm)	長さ(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)
					外縁	内縁	外縁	内縁	石英 長石	赤色粒 角閃石	雲母	砂粒					
74 4+ [X] SD4021	-	-	土器胎	楕	体:不明(マメツ)、 高台:輪郭・脚部:ナフ	不明(マメツ)	10Y8S-2灰白	23Y8-1灰白	-	-	中・少	-	62	-	-	-	-
75 4+ [X] SD4021	-	-	土器胎	楕	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10Y8S-2灰白	23Y8-1灰白	5YK7-4/5灰-褐	-	細・少	-	63	-	-	-	-
76 6 [X] SD4021	-	-	土器胎	楕	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10Y8S-2灰白	23Y8-1灰白	5YK7-4/5灰-褐	-	細・少	-	7.0	-	-	-	-
77 7+ [X] SD4021	-	-	黑色土	楕	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10Y8S-2灰白	23Y8-1灰白	7.5Y4-1灰	-	中・少	15.1	52	64	-	-	
78 7+ [X] SD4021	-	-	中乳頭 直絶	皿	口縁:強 底:強	施釉	軸:10Y8-1灰白	軸:10Y8-1灰白	-	-	無	-	39	-	-	-	-
79 7+ [X] SD4021	-	-	土器胎	杯	底:テクチリ?	固出:ナフ	2.5Y6-1黄灰	10YR7-2にぶい黄紫	-	-	細・少	14.8	100	-	-	-	
80 8+ [X] SD4021	-	-	土器胎	楕	口縁:ヨコナデ 底:ヨコナデ	口縁:ヨコナデナフ	23Y8-2灰白	23Y8-2灰白	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-
81 8+ [X] SD4021	-	-	青釉高 土器胎	楕	口縁:体上半部 底:半高台 脚部:ナフ	板ナフ強ナフ	2.5Y8-2灰白	2.5Y8-3浅黃	-	-	中・少	13.4	-	-	-	-	-
82 8+ [X] SD4021	-	-	西村窯 領芭窯	楕	楕ナフ強ヘラミガキ	ヘラミガキ	10Y8S-2灰白	2.5Y7-1灰白	-	-	中・少	16.2	-	-	-	-	-
83 8+ [X] SD4021	-	-	瓦器	楕	底:ヨコナフ	ナフ後ヘリミガキ	N4/灰	N5/灰	-	-	細・少	-	52	-	-	-	-
84 8+ [X] SD4021	-	-	黑色土	楕	ヨコナフ	ナフ後ヘリミガキ	10Y8S-2灰白	N2/黑	-	-	中・多	-	56	-	-	-	-
85 8+ [X] SD4021	-	-	瓦器	楕	指ナフ上工 体上半部:ナフ	ナフ後ヘリミガキ	N7/灰白	N5/灰	-	-	細・少	-	58	-	-	-	-
86 8+ [X] SD4021	-	-	山茶窯	楕	体上半部:ナフ 脚部:ナフ	ナフ後ヘリミガキ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	中・少	-	82	-	-	-	-
87 8+ [X] SD4021	-	-	瓦器	楕	方舟:強 底:ヘラミ	ヘラミガキ	N4/灰	N5/灰	-	-	細・少	15.7	54	60	-	-	-
88 8+ [X] SD4021	-	-	瓦器	楕	ヨコナフ 指ナフ上工 体上半部:ナフ	ナフ後ヘリミガキ	N7/灰白	N5/灰	-	-	細・少	-	63	-	-	-	-
89 8+ [X] SD4021	-	-	瓦器	楕	ヨコナフ 指ナフ上工 体上半部:ナフ	ナフ後ヘリミガキ	N6/灰	N6/灰	-	-	細・少	15.6	53	64	-	-	-
90 9+ [X] SD4021	-	-	須恵器	平底	別出ナフ	別出ナフ	5Y8-1灰白	5Y8-1灰白	-	-	細・少	14.7	-	-	-	-	-
91 9+ [X] SD4021	-	-	須恵器	皿	口縁:固底ナフ 底:ヨコナフ	別出ナフ	5Y6-1灰	5Y6-1灰	-	-	細・少	13.0	20	108	-	-	-
92 9+ [X] SD4021	-	-	須恵器	高台付 刮削	ヨコナフ	ヨコナフ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	11.4	39	87	-	-
93 9+ [X] SD4021	-	-	土器胎	高杯	ヨコナフ 底:ヘラミ	ヨコナフ後ヘリミガキ	10Y8S-2灰白	10YR7-4にぶい黄紫	-	-	無	-	261	-	-	-	-
94 4+ [X] SD4021	-	-	須恵器	平底	不明(自然)	不明(自然)	10Y7-1オリーブ黒	10Y7-1オリーブ黒	7.5Y4-1灰	-	中・少	8.4	-	-	-	-	-
95 6 [X] SD4021	-	-	須恵器	平底	ヨコナフ	ヨコナフ	10YR7-4/5灰-黄	10YR7-4/5灰-黄	7.5Y4-1灰	-	中・少	-	-	-	-	-	-
96 7+ [X] SD4021	-	-	土器胎	脚部	指ナフ	指ナフ	2.5Y8-3浅黃	2.5Y8-3浅黃	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-
97 7+ [X] SD4021	-	-	土器胎	脚部	指ナフ	指ナフ後ナフ	N6/灰	N4/灰	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-

4 表察鏡器土

5 表索搜索器

土器観察表 6

編号 番号	地区 名	遺跡名	層位	種類	基盤	調整		外面	内面	色調	出土	法面 (cm)	幅 (cm)	底辺 (cm)	厚 (cm)	±の範 (cm)
						口縁	ナメ									
160 6 IX	SD4028	上層	土器器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	10YR7.4に近い黄褐色	10YR7.4に近い黄褐色	内底	白英石	赤色粒 角閃石	雲母 斜方輝石	多	31.3	-	-
162 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N6/灰	N6/灰	外縁	-	-	-	少	10.2	-	-
163 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	25Y6.1灰白	25Y6.1灰白	内底	-	-	-	少	10.5	31	-
164 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N5/灰	N5/灰	外縁	-	-	-	少	14.0	-	-
165 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N7/灰白	N7/灰白	内底	-	-	-	少	13.6	-	-
166 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N3/灰白	N3/灰白	外縁	-	-	-	少	13.6	-	-
167 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	5Y7.1灰白	5Y7.1灰白	内底	-	-	-	少	16.3	-	-
168 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N6/灰	N6/灰	外縁	-	-	-	少	12.8	-	-
169 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	25Y7.1灰白	25Y7.1灰白	内底	-	-	-	少	10.0	-	-
170 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N5/灰	N5/灰	外縁	-	-	-	少	8.0	-	-
171 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N6/灰	N6/灰	内底	-	-	-	少	14.8	-	-
172 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N6/灰	N6/灰	外縁	-	-	-	少	9.7	-	-
173 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N6/灰	N6/灰	内底	-	-	-	少	12.9	-	-
174 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	25Y6.2灰黄	25Y6.2灰黄	外縁	-	-	-	少	9.8	-	-
175 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N6/灰	N6/灰	内底	-	-	-	少	12.6	-	-
176 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N7/灰白	N7/灰白	外縁	-	-	-	少	16.1	-	-
177 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	25Y5.1灰黄	25Y5.1灰黄	内底	-	-	-	少	25.6	-	-
178 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	5Y7.1灰白	5Y7.1灰白	外縁	-	-	-	少	33.0	-	-
179 6 IX	SD4028	中層	土師器	直	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	10YR7.2に近い黄褐色	10YR7.2に近い黄褐色	内底	-	-	-	少	18.6	-	-
180 6 IX	SD4028	中層	土師器	直	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	25Y5.6青褐色	25Y5.6青褐色	外縁	-	-	-	少	19.7	-	-
181 6 IX	SD4028	中層	土師器	直	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	7.5YR6.4に近い褐	7.5YR6.4に近い褐	内底	-	-	-	少	15.3	-	-
182 6 IX	SD4028	中層	土師器	直	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	10YR5.3に近い黄褐色	10YR5.3に近い黄褐色	外縁	-	-	-	少	18.6	-	-
183 6 IX	SD4028	中層	土師器	直	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	25Y7.2灰黄	25Y7.2灰黄	内底	-	-	-	少	19.7	-	-
184 6 IX	SD4028	中層	土師器	直	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N5/灰	N5/灰	外縁	-	-	-	少	5.0	-	-
185 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	5Y7.1灰白	5Y7.1灰白	内底	-	-	-	少	13.6	-	-
186 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	N5/灰	N5/灰	外縁	-	-	-	少	13.6	-	-
187 6 IX	SD4028	中層	須恵器	縦	ナメ	口縁：ハケ・カギヨコ ナメ：ハケ・カギヨコ	5Y7.1灰白	5Y7.1灰白	内底	-	-	-	少	13.6	-	-

土器觀察表 7

番号	地区名	遺物名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土		法量(cm)					
						外面	内面	外部	内部	石英	赤色熟	角閃石	漂母	砂粒	H(crn)	W(crn)	L(crn)
188 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N8/灰白	10Y8E1灰灰	10Y8E1灰灰	-	-	細・少	99	-	-	-	-
189 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N8/灰白	10Y8E1灰灰	10Y8E1灰灰	-	-	中・少	-	-	-	-	-
190 6 K	SD4028 中層	土師器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N8/灰白	10Y8E1灰灰	10Y8E1灰灰	-	-	中・多	171	-	-	-	-
191 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N4/灰	N4/灰	N4/灰	-	-	細・少	218	-	-	-	-
192 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N7/灰白	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	-	-	細・少	101	-	-	-	-
193 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N5/灰白	N7/灰白	N7/灰白	-	-	細・少	94	-	-	-	-
194 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	中・少	154	-	-	-	-
195 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	-	-	細・少	-	-	-	-	-
196 6 K	SD4028 中層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	中・少	196	-	-	-	-
197 6 K	SD4028 下層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	5Y6/1灰	-	-	細・少	133	-	-	-	-
198 6 K	SD4028 下層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	-	-	中・多	-	-	-	-	-
199 6 K	SD4028 下層	須恵器	卷	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	-	-	中・少	-	-	-	-	-
200 6 K	SD4028 下層	須恵器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	7S6/1灰白	25Y8/1灰白	25Y8/1灰白	-	-	中・少	128	-	-	-	-
201 6 K	SD4028 下層	須恵器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	7S6/1灰	7S6/1灰	7S6/1灰	-	-	細・少	129	-	109	-	-
202 6 K	SD4028 下層	須恵器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	-	-	中・少	-	87	-	-	-
203 6 K	SD4028 下層	須恵器	高台付	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	細・少	151	-	-	-	-
204 6 K	SD4028 下層	須恵器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	-	-	中・少	86	34	46	-	-
205 6 K	SD4028 下層	須恵器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	-	-	中・少	102	33	69	-	-
206 6 K	SD4028 下層	須恵器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	25Y7/2灰黃	25Y8/1灰白	25Y8/1灰白	-	-	中・少	-	65	-	-	-
207 6 K	SD4028 下層	須恵器	高台付	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	-	-	細・少	126	39	80	-	-
208 6 K	SD4028 下層	須恵器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	-	-	細・少	128	43	88	-	-
209 6 K	SD4028 下層	土師器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	10Y8E4/5灰	10Y8E4/5灰	10Y8E4/5灰	-	-	細・少	103	29	69	-	-
210 6 K	SD4028 下層	土師器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	10Y8E3/5灰	10Y8E3/5灰	10Y8E3/5灰	-	-	細・少	128	39	95	-	-
211 6 K	SD4028 下層	土師器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	5Y5/6明赤陶	5Y5/6明赤陶	5Y5/6明赤陶	-	-	細・少	157	-	-	-	-
212 6 K	SD4028 下層	土師器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	7S5/6灰	7S5/6灰	7S5/6灰	-	-	細・少	126	-	85	-	-
213 6 K	SD4028 下層	土師器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	25Y7/3黃陶	25Y7/3黃陶	25Y7/3黃陶	-	-	細・多	-	-	-	-	-
214 6 K	SD4028 下層	土師器	杯	圓底	圓底子ナメ	口縁～体：圓底子ナメ	5Y8/4/5灰	5Y8/4/5灰	5Y8/4/5灰	-	-	細・少	138	-	-	-	-

8 表格觀察器

土壤觀察表 9

圖文 番号	地区名	遺跡名	層位	種類	藝術	調整		色調		黏土		法量 (cm)				
						外觀	内面	外部	内面	石英 長石	赤色粘 土鉱物	砂粒	PH (cm)	酸 (cm)	W (cm)	干燥 (cm)
243 6 IX	SD028	流路 ₁	須恵器	高付朴 形	体～高台；圓底十 字切口；側面十字切口； 底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口；	N6. 黑	NW/灰	5YR 5/1 黄灰	-	-	-	-	109	-	-	
244 6 IX	SD028	流路	須恵器	杯	高付朴 形	底面十字切口	N6. 黑	NW/灰	5YR 5/1 黄灰	-	-	-	119	-	-	
245 6 IX	SD028	流路	須恵器	杯	高付朴 形	底面十字切口	N4. 黑	NW/灰	5YR 5/1 黄灰	-	-	-	142	-	-	
246 6 IX	SD028	流路	須恵器	皿	高付朴 形	底面十字切口	N4. 黑	NW/灰	5YR 5/1 黄灰	-	-	-	208	-	-	
247 6 IX	SD028	流路	須恵器	碗	不明 (自然釉)	底面十字切口	N4. 黑	NW/灰	7.5/4.2 黑オリーブ	-	-	-	142	-	-	
248 6 IX	SD028	流路	土師器	瓶	燒成後 朱	口縁：ヨコナメ 子母：ハケメ後 子母：ナガメ	N4. 黑	NW/灰	10YR 3/3 黄い黄青	10YR 7/2 黄い黄青	-	-	-	-	-	-
249 6 IX	SD028	流路	土師器	甕	燒成後 朱	ヨコナメへミカギ ヨコナメ	N4. 黑	NW/灰	2.5/6.3 黄い黄	2.5/6.3 黄い黄	-	-	-	-	-	-
250 6 IX	SD028	流路	土師器	皿	燒成後 朱	ヨコナメへミカギ ヨコナメ	N4. 黑	NW/灰	10YR 3/3 黄い黄青	10YR 7/2 黄い黄青	-	-	-	-	-	-
251 6 IX	SD028	流路 ₂	須恵器	甕	不明 (自然釉)	底面十字切口	N4. 黑	NW/灰	5YR 1 黑白	-	-	-	128	-	-	
252 6 IX	SD028	流路 ₂	須恵器	甕	口縁：横十字切口； 底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口； 底面十字切口	N4. 黑	NW/灰	2.5/8.1 黑白	2.5/8.1 黑白	-	-	-	260	-	-	
253 6 IX	SD028	流路 ₃	須恵器	高付朴 形	体～高台；圓底十 字切口；側面十字切口； 底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口；	N4. 黑	NW/灰	5YR 1 黑白	-	-	-	-	106	-	-	
254 6 IX	SD028	流路 ₃	須恵器	甕	ヨコナメ	ヨコナメ	N4. 黑	NW/灰	5YR 1 黑白	-	-	-	170	-	-	
255 6 IX	SD028	流路 ₃	須恵器	碗	底面十字切口	N4. 黑	NW/灰	5YR 1 黑	-	-	-	-	-	-	-	
256 6 IX	SD028	-	須恵器	杯	底面十字切口	N6. 黑	NW/灰	5YR 1 黑	-	-	-	-	-	-	-	
257 4+4 IX	SD028	-	須恵器	杯	或：ナガメ 他：	底面十字切口	N6. 黑	NW/灰	10YR 5/1 黑灰	-	-	-	138	-	-	
258 4+4 IX	SD028	-	須恵器	高付朴 形	体～高台；圓底十 字切口；側面十字切口； 底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口；	N4. 黑	NW/灰	5YR 4 黑	-	-	-	-	109	-	-	
259 6 IX	SD028	-	土師器	皿	ヨコナメ	ヨコナメ	N6. 黑	NW/灰	7.5/6.4 黄い黄	7.5/6.4 黄い黄	-	-	-	-	-	-
260 6 IX	SD028	-	土師器	皿	ヨコナメ	ヨコナメ	N6. 黑	NW/灰	10YR 8.2 黑白	10YR 8.2 黑白	-	-	-	-	-	-
261 6 IX	SD028	-	土師器	甕	底面十字切口	N6. 黑	NW/灰	10YR 8.2 黄黑	10YR 8.2 黄黑	-	-	-	-	-	-	
262 6 IX	SD028	-	土師器	甕	指手サエ	ヨコナメ	N6. 黑	NW/灰	5YR 7.4 黄い黄	5YR 7.4 黄い黄	-	-	-	-	-	-
263 6 IX	SD028	-	土師器	甕	指手サエ	不明 (マヌツ)	N6. 黑	NW/灰	10YR 8.2 黑白	10YR 8.2 黑白	-	-	-	-	-	-
264 4 IX	SD028	-	土師器	甕	口縁：ヨコナメ 子母：ナガメ	ヨコナメ	N6. 黑	NW/灰	7.5/8.6 黑	7.5/8.6 黑	-	-	-	-	-	-
265 6 IX	SD028	-	須恵器	甕	口縁：ヨコナメ 子母：ナガメ	ヨコナメ	N6. 黑	NW/灰	2.5/7.1 黑白	2.5/7.1 黑白	-	-	-	-	-	-
266 6 IX	SD028	-	土師器	甕	底面十字切口	N6. 黑	NW/灰	7.5/8.5 黑	7.5/8.5 黑	-	-	-	-	-	-	
268 6 IX	SD028	-	須恵器	甕	平行二脚サエ	ナガメ	N5. 黑	NW/灰	5YR 7.4 黄い黄	5YR 7.4 黄い黄	-	-	-	-	-	-
269 6 IX	SD028	-	須恵器	甕	高付朴 形	底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口； 底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口；	N4. 黑	NW/灰	-	-	-	-	-	-	-	-
270 6 IX	SD028	-	須恵器	甕	高付朴 形	底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口； 底面十字切口；腹十 字切口；側面十字切口；	N4. 黑	NW/灰	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 10

編号	地区	遺跡名	層位	種類	器種	調整		内面	外縁	色調		土	石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口沿	断面	壁厚	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	底面	寸法(cm)			
						内縫	外縫			N7/灰白	N7/灰白																	
330 4.4 K	SD0030	-	須恵器	碗	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
331 6.6 K	SD0030	-	須恵器	碗	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
332 6.6 K	SD0030	-	須恵器	碗?	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
333 4.4 K	SB0033	-	土師器	罐	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	N5/灰	N5/灰	7.5YR6.31±5.4mm	7.5YR6.31±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
335 6.6 K	SB0032	-	土師器	罐	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	N5/灰	N5/灰	7.5YR7.21±5.4mm	7.5YR7.21±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
337 4.4 K	SB0032	-	土師器	罐	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	口縁:横ナナメ、 体:ハゲナメ	N5/灰	N5/灰	10YR6.2±5.4mm	10YR6.2±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
338 4.4 K	罐	-	須恵器	杯	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N5/灰	N5/灰	10YR7.2±5.4mm	10YR7.2±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
339 4.4 K	土器	-	土師器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ?	N7/灰白	N7/灰白	10YR6.2±5.4mm	10YR6.2±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
340 4.4 K	土器	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	10YR6.4±5.4mm	10YR6.4±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
341 4.4 K	SD0119	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	10YR6.4±5.4mm	10YR6.4±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
342 4.4 K	SD0122	-	須恵器	杯	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	10YR8.1±6.4mm	10YR8.1±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
343 4.4 K	遺跡外	-	中國陶	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	10YR7.2±5.4mm	10YR7.2±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
344 4.4 K	遺跡外	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	10YR7.6±5.4mm	10YR7.6±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
345 4.4 K	遺跡外	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N7/灰白	N7/灰白	10YR7.8±5.4mm	10YR7.8±5.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
353 5.6 K	SD0001	下層	土師器	甕	高台付近:横ナナメ、 底付近:横ナナメ	高台付近:横ナナメ、 底付近:横ナナメ	底付近:横ナナメ	2.5YR8.2±6.4mm	2.5YR8.2±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
354 5.6 K	SD0001	下層	磁器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	7.5YR8.1±6.4mm	7.5YR8.1±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
355 5.6 K	SD0001	下層	土師器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	7.5YR8.4±6.4mm	7.5YR8.4±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
356 5.6 K	SD0002	-	土師器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	5YR8.6 備	5YR8.6 備	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
357 5.6 K	SD0002	-	土師器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	7.5YR8.2±6.4mm	7.5YR8.2±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
358 5.6 K	SD0002	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	7.5YR7.1±6.4mm	7.5YR7.1±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
359 5.6 K	SD0002	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N5/灰	N5/灰	10YR7.4±6.4mm	10YR7.4±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
360 5.6 K	SD0002	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	5YR5.1 備	5YR5.1 備	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
361 5.6 K	SD0002	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	5YR5.1 備	5YR5.1 備	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
363 5.6 K	SD0004	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
364 5.6 K	SD0004	-	須恵器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
365 5.6 K	SD0004	-	土師器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	2.5YR8.2±6.4mm	2.5YR8.2±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
366 5.6 K	SD0004	-	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	N3/灰	N3/灰	10YR3.5±6.4mm	10YR3.5±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
367 5.6 K	SD0007	上層	土師器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	7.5YR6.6 備	7.5YR6.6 備	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
368 5.6 K	SD0007	上層	土師器	甕	内縫ナナメ	内縫ナナメ	外縫ナナメ	7.5YR7.4±6.4mm	7.5YR7.4±6.4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土壤觀察器表 11

地文 学名	通称名	層位	種類	岩種	外觀		調整		色調		基土		土壤 厚 (cm)	根深 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	その他の (cm)
					内側	外部	内部	外部	赤色粒 英石	赤色粒 外閃石	母岩	砂粒					
389 5区拘 SD5007 上層	須也器	高台付杯形内腹	底:圓柱形、上部:筒形、側面:斜面	圓柱ナメ	N4/灰	-	-	-	-	-	細・少	-	70	-	-	-	-
370 5区拘 SD5007 上層	須也器	杯形内腹	底:圓柱形、側面:斜面	圓柱ナメ	5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	細・多	-	71	-	-	-	-
371 5区拘 SD5007 上層	須也器	口縁:筒形、側面:斜面	圓柱ナメ	圓柱ナメ	5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	細・少	-	136	23	103	-	-
372 5区拘 SD5007 上層	須也器	口縁:筒形、側面:斜面	圓柱ナメ	圓柱ナメ	10YR7.4/1-5V灰白	10YR6/4に近い黄鐵	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
374 5区拘 SK5002 -	須也器	天井:筒形、側面:斜面	圓柱ナメ	圓柱ナメ	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
375 5区拘 SK5003 -	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N7/灰白	-	-	-	-	-	細・少	-	198	-	-	-	-
376 5区拘 SX5003 -	須也器	要:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	7.5YR7.4/1-5V灰白	-	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
377 5区拘 SX5007 -	土師器	不明(アメツ)	不明(アメツ)	不明(アメツ)	5YR7.6 細	5YR7.8 細	-	-	-	-	細・少	-	68	-	-	-	-
378 5区拘 SX5007 -	土師器	不明(アメツ)	不明(アメツ)	不明(アメツ)	5YR8.8 細	7.5YR7.6 細	-	-	-	-	細・少	-	62	-	-	-	-
379 5区拘 SX5008 上層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	7.5G/7.1 細	7.5G/7.1 細	-	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-
380 5区拘 SX5008 上層	土師器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	7.5YR5.6 明赤褐色	7.5YR7.4/1-5V灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-
382 5区拘 SX5008 上層	底:筒形	不明(アメツ)	不明(アメツ)	不明(アメツ)	N6/灰	7.5YR6.6 細	-	-	-	-	中・多	-	-	-	-	-	-
384 5区拘 SX5008 上層	須也器	要:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	-	-	-	-	中・少	24.2	-	-	-	-	-
385 5区拘 SX5008 下層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N5/灰	5G/6.1 オリーブ灰	-	-	-	-	細・少	14.2	-	-	-	-	-
386 5区拘 SX5008 下層	土師器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N4/灰	N7/灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
387 5区拘 SX5008 下層	土師器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N6/灰	5.0E/1青灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
388 5区拘 SX5008 下層	土師器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	7.5YR6.1/1-5V灰白	7.5YR6.1/1-5V灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
389 5区拘 SX5008 下層	土師器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	10YR8.2灰黃褐色	10YR8.3灰黃褐色	-	-	-	-	中・多	26.4	-	-	-	-	-
394 5区拘 SX5009 -	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	中・少	14.4	-	-	-	-	-
395 5区拘 SX5009 -	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	-	-	-	-	細・少	-	115	-	-	-	-
401 5区拘 SD5003 上層	土師器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	7.5YR7.4/1-5V灰白	7.5YR7.4/1-5V灰白	-	-	-	-	中・少	-	73	-	-	-	-
402 5区拘 SD5003 上層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	10YR8.3灰黃褐色	10YR8.3灰黃褐色	-	-	-	-	細・少	-	84	-	-	-	-
404 5区拘 SD5003 上層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N8/灰白	2.5Y8/1灰白	-	-	-	-	細・少	15.8	-	-	-	-	-
405 5区拘 SD5003 上層	土師器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	2.5Y8/1灰白	2.5Y4/1黄灰	-	-	-	-	細・少	14.8	-	-	-	-	-
407 5区拘 SD5003 上層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N4/灰	2.5Y8/2灰白	-	-	-	-	無	15.8	-	-	-	60	-
408 5区拘 SU5003 上層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	-	細・少	-	98	-	-	-	-
409 5区拘 SU5003 上層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-
410 5区拘 SU5003 上層	須也器	底:筒形	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-

土器観察表 12

編号 名	地区 名	遺跡名	層位	種類	基盤	調査		内面	外縁	内縁	色調	土基		
						外面	内面							
411 5.6.6 SD5003 下層	黒色土	瓦器	楕	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	NM/灰	-	-	赤色粒	角質石	砂粒	口縁 (cm)	
412 5.6.6 SD5003 下層	黒色土 A 銅	瓦器	楕	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/1灰白	-	-	細・少	14.9	-	底高 (cm)	
413 5.6.6 SD5003 下層	黒色土	瓦器	楕	陶	内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	NM/灰	-	-	細・少	6.7	-	底径 (cm)	
414 5.6.6 SD5003 下層	燒毛器	瓦器	楕	陶	口縁:回転ナデ、天井 内板:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	5B6/1青灰	5B6/1青灰	-	-	中・少	14.7	-	厚 (cm)
415 5.6.6 SD5003 下層	燒毛器	瓦器	楕	陶	内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	細・少	22.9	-	±の地 (cm)	
416 5.6.6 SD5003 下層	燒毛器	瓦器	楕	陶	内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	NM/灰	NM/灰	-	細・少	-	-	-	
417 6.6 SD5003 -	土陶器	圓	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	10Y8/3浅黄褐	10Y8/3浅黄褐	-	中・少	60	10	-	
418 6.6 SD5003 -	土陶器	圓	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	10Y8/2灰黄褐	10Y8/2灰黄褐	-	細・少	73	0.9	-	
419 6.6 SD5003 -	土陶器	圓	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	-	細・少	72	1.1	-	
420 6.6 SD5003 -	土陶器	杯	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	細・少	-	80	-	
421 6.6 SD5003 -	土陶器	杯	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	中・多	10.2	-	-	
422 6.6 SD5003 -	土陶器	杯	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	10Y8/2灰白	10Y8/2灰白	-	細・少	11.3	31	-	
423 6.6 SD5003 -	土陶器	杯	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	7.5Y7/4.1灰白	7.5Y7/4.1灰白	-	細・少	-	9.9	-	
424 6.6 SD5003 -	土陶器	杯	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	細・少	10.8	25	-	
425 6.6 SD5003 -	土陶器	杯	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	10Y7/2.1灰白	10Y7/2.1灰白	-	細・少	11.4	29	-	
426 6.6 SD5003 -	土陶器	杯	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	10Y7/3.1灰白	10Y7/3.1灰白	-	中・少	12.1	8.2	-	
427 6.6 SD5003 -	黑色土	瓦器	A 銅	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	10Y7/2.1灰白	10Y7/2.1灰白	-	中・少	-	5.0	-	
428 6.6 SD5003 -	黑色土	瓦器	A 銅	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	N3/陶灰	2.5Y8/2灰白	-	細・少	-	6.4	-	
429 6.6 SD5003 -	黑色土	瓦器	A 銅	陶	内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/2灰白	NM/灰	-	細・少	-	5.9	-	
430 6.6 SD5003 -	土陶器	楕	陶	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	10Y7/2.1灰白	2.5Y8/1灰白	-	細・少	-	5.9	-	
431 6.6 SD5003 -	土陶器	楕	陶	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	10Y8/1灰白	10Y8/2灰白	-	中・少	-	7.8	-	
432 6.6 SD5003 -	土陶器	楕	陶	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	細・少	-	-	-	
433 6.6 SD5003 -	土陶器	楕	陶	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	-	中・少	-	-	-	
434 6.6 SD5003 -	中國青白	楕	陶	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	-	無	-	6.9	-	
435 6.6 SD5003 -	中國青白	楕	陶	陶	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	内板:回転ナデ後ヘタミガキ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	無	-	-	-	
436 6.6 SD5003 -	土陶器	楕	陶	陶	口縁:内板ナデ後ヘタミガキ	内板ナデ後ヘタミガキ	10Y8/3浅黄褐	10Y8/3浅黄褐	-	細・少	41	4.4	-	

土器觀察表 13

番号	地名	遺物名	層位	種類	記載	調整		色調		胎土		法量 (cm)	
						外側	内面	外部	内面	赤色熟	角閃石	粒状	長さ (cm)
437 5区付 SD5003	-	土胎器	裏	不明(マメツ)	ヨコナダ	7.5YR6.4±.5V4-6 N4/灰	10YR5.2灰黄褐 N4/灰	-	-	中・多	-	-	-
438 6区付 SD5003	-	龜山焼	裏	不明(ナゾツ)	板ナダ	2.5YR4.1灰白	-	-	-	中・少	-	-	-
439 6区付 SD5003	-	龜山焼	裏	牛、鹿(不明マメツ)	ナダ	N5/灰	N5/灰	-	-	中・少	-	-	-
440 6区付 SD5003	-	中國窯	白褐	陶	施	5.5Y7.2灰白	胎土: N8灰白	-	-	無	-	-	-
441 6区付 SD5003	-	土胎器	足底	口縁: ハケノタケ ナダ: ハケノタケ 底: ハケノタケ	口縁: 壁ナダ? 体: 壁ナダ? 底板ナダ?	10YR5.3灰 10YR4.3灰	10YR5.3灰 10YR4.3灰	-	-	細・多	15.2	-	-
442 6区付 SD5003	-	土胎器	足端	足端	ハケノタケ ハケノタケ 格子タッカ	10YR7.3灰 10YR8.3灰 10YR8.3灰	10YR7.3灰 10YR8.3灰 10YR8.3灰	-	-	中・多	24.4	-	-
443 6区付 SD5003	-	土胎器	杯	内板ナダ?	板ナダ?	10YR7.3灰 10YR7.3灰	10YR7.2灰 10YR7.2灰	-	-	細・少	11.2	-	-
444 6区付 SD5003	-	土胎器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR7.3灰 10YR7.3灰	10YR7.3灰 10YR7.3灰	-	-	細・少	12.2	27	8.0
445 6区付 SD5003	-	土胎器	杯	板ナダヘタキリ	不明(マメツ)	7.5YR6.3灰 7.5YR6.3灰	7.5YR6.3灰 7.5YR6.3灰	-	-	粗・多	12.0	31	6.5
446 6区付 SD5003	-	土胎器	杯	口縁: 回転ナダ? 底: ハケノタケ	口縁: 回転ナダ? ハケノタケ	2.5Y7.2灰白	2.5Y7.2灰白	-	-	細・少	11.7	24	8.0
447 6区付 SD5003	-	土胎器	杯	口縁: 体ヘタキリ	口縁: 体ヘタキリ ナダ: ハケノタ 底: ハケノタ	10YR8.3灰 10YR8.3灰	10YR8.3灰 10YR8.3灰	-	-	中・少	11.6	28	7.4
448 6区付 SD5003	-	土胎器	杯	口縁: 体ヘタキリ	口縁: 体ヘタキリ ナダ: ハケノタ 底: ハケノタ	2.5Y8.2灰白	2.5Y8.2灰白	-	-	中・少	11.7	28	6.9
449 5区付 SD5003	-	筑窯器	杯	回転ナダ	回転ナダ	N4/灰	N4/灰	-	-	粗・少	16.4	-	-
450 5区付 SD5003	-	筑窯器	杯	ハケノタ ヨリヒ	-	5Y5.1灰	7.5Y7.4±.5V4-6 7.5Y7.4±.5V4-6	-	-	粗・多	-	-	-
453 5区付 SD5005	上層	土胎器	皿	回転ヘタキリ板ナダ	ナダ	7.5YR7.6 穀	7.5YR8.4灰 7.5YR8.4灰	-	-	中・少	-	60	-
454 5区付 SD5005	上層	土胎器	皿	ハケノタ ヨリヒ	皿: 回転ナダ? 底: ナダ: ハケノタ 底: ハケノタ	5YR6.6 穀	10YR8.4灰 10YR8.4灰	-	-	細・少	-	62	-
455 5区付 SD5005	上層	土胎器	皿	回転ヘタキリ板ナダ	回転ナダ	10YR7.3±.5V4-6 10YR7.3±.5V4-6	10YR7.3±.5V4-6 10YR7.3±.5V4-6	-	-	細・少	-	7.4	-
456 5区付 SD5005	上層	筑窯器	皿	体: 回転ナダ? 底: ハケノタ	回転ナダ? 底: ハ ケノタ	2.5Y8.1灰白	2.5Y8.1灰白	-	-	細・少	-	10.0	-
457 5区付 SD5005	上層	筑窯器	皿	高杯	回転ナダ	5YR5.1灰	7.5Y7.1灰 7.5Y7.1灰	-	-	細・少	-	-	-
458 5区付 SD5005	上層	筑窯器	皿	口縁: ヨリヒ	回転ナダ	7.5Y7.1灰白	7.5Y7.1灰白	-	-	細・少	-	14.1	-
459 5区付 SD5005	上層	筑窯器	皿	口縁: ヨリヒ	ヨリヒ 底: ヨリヒ	N6/灰	N7/灰白	-	-	無	-	-	-
460 5区付 SD5005	上層	土胎器	台付杯	回転ナダ	5YR5.8明赤褐	-	-	-	-	細・多	-	-	-
461 5区付 SD5005	上層	土胎器	台付杯	高台: ヨリヒ	ヨリヒ 底: ヨリヒ	5YR6.6 穀	5YR6.6 明赤褐	-	-	細・少	-	-	-
462 5区付 SD5005	上層	筑窯器	皿	ヨリヒ	ヨリヒ	N5/灰	N5/灰	-	-	細・少	-	-	-
463 5区付 SD5005	上層	筑窯器	皿	圓錐型	回転ナダ	N4/灰	N4/灰	-	-	細・少	-	24.0	-
464 5区付 SD5005	上層	土胎器	皿	口縁: ハケ 底: ヨリヒ	板ナダヘタキリナダ	7.5YR5.4±.5V4-6 7.5YR4.3 穀	7.5YR4.3 穀	-	-	中・少	-	-	-
465 5区付 SD5005	上層	土胎器	皿	羽釜	ヨコナダ	5YR4.4 穀	5YR4.4 穀	-	-	粗・多	-	-	-
466 5区付 SD5005	上層	筑窯器	皿	中空ナダ	中空ナダ	N6/灰	N7/灰白	-	-	細・少	-	-	-

土器観察表 14

編号	地区	遺跡名	層位	種類	器種	調整		内面	外縁	色調		土	粘土	赤色粒	角質石	雲母	砂粒	口沿	断面	壁厚	法面	幅	底辺	$\frac{底辺}{幅} \times 100\%$	
						外面	内面			内面	外縁														
467 5.5m付 SD5005 上層	須恵器	碗	器	格子タテキ後傾ナメ	格子タテキ後傾ナメ	-	-	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
468 5.5m付 SD5005 上層	須恵器	碗	器	不明(自然)	不明(自然)	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N7/灰白	N7/灰白	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
469 5.5m付 SD5005 下層	須恵器	杯	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
470 5.5m付 SD5005 下層	土師器	杯	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・少	15.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
471 5.5m付 SD5005 下層	瓦器	碗	器	高台:ヨコナ テ、盤:ナメ	高台:ヨコナ テ、盤:ナメ	5YR5.6.5 級	5YR5.6.5 級	5YR5.6.5 級	5YR5.6.5 級	N7/灰白	N7/灰白	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
472 5.5m付 SD5005 下層	瓦器	碗	器	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR6.6 級	5YR6.6 級	5YR6.6 級	5YR6.6 級	7.5YR5.2灰褐色	7.5YR5.2灰褐色	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
473 5.5m付 SD5005 下層	須恵器	杯	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
474 5.5m付 SD5005 下層	土師器	要	器	口縁:ハゲテ後縁 手形立脚ナメ	口縁:ハゲテ後縁 手形立脚ナメ	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	N6/灰	N6/灰	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
475 5.5m付 SD5005 下層	須恵器	要?	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	5YR5.6 級	5YR5.6 級	5YR5.6 級	5YR5.6 級	5YR6.1灰	5YR6.1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
476 5.5m付 SD5005 下層	須恵器	要?	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	5YR6.1灰	5YR6.1灰	5YR6.1灰	5YR6.1灰	5YR6.1灰	5YR6.1灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
477 5.5m付 SD5005 肩	土師器	要	器	高台:ヨコナ テ、盤:ナメ	高台:ヨコナ テ、盤:ナメ	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	10YR4.1-5.5V灰白	N6/灰	N6/灰	8.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
478 5.5m付 SD5005 肩?	須恵器	要	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
479 5.5m付 SD5005 肩?	土師器	高杯	器	ハケナギ後縁へ ハケナギ後縁	ハケナギ後縁へ ハケナギ後縁	5YR6.6 級	5YR6.6 級	5YR6.6 級	5YR6.6 級	N6/灰	N6/灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
480 5.5m付 SD5006 -	土師器	碗	器	不明(マメツ)	不明(マメツ)	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	N6/灰	N6/灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
481 5.5m付 SD5006 -	土師器	碗	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	N6/灰	N6/灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
482 5.5m付 SD5006 -	須恵器	碗	器	格子タテキ後傾ナメ	格子タテキ後傾ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
483 5.5m付 SD5008 上層	瓦器	碗	器	格子タテキ後傾ナメ	格子タテキ後傾ナメ	N4/灰	N4/灰	N4/灰	N4/灰	N4/灰	N4/灰	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
484 5.5m付 SD5008 上層	土師器	碗	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	N6/灰	N6/灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
485 5.5m付 SD5008 上層	土師器	碗	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	5YR6.6 級	5YR6.6 級	5YR6.6 級	5YR6.6 級	7.5YR6.4-5.5V灰	7.5YR6.4-5.5V灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
486 5.5m付 SD5008 上層	土師器	碗	器	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR7.8 級	5YR7.8 級	5YR7.8 級	5YR7.8 級	10YR8.3浅黃	10YR8.3浅黃	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
487 5.5m付 SD5008 上層	土師器	碗	器	輪ヘタリ後傾ナメ	輪ヘタリ後傾ナメ	7.5YR7.6 級	7.5YR7.6 級	7.5YR7.6 級	7.5YR7.6 級	N5/灰	N5/灰	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
488 5.5m付 SD5008 上層	須恵器	杯	器	天井ナメ	天井ナメ	10YR5.1灰	10YR5.1灰	10YR5.1灰	10YR5.1灰	N6/灰	N6/灰	中・少	11.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
489 5.5m付 SD5008 上層	須恵器	杯	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N7/灰白	N7/灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
490 5.5m付 SD5008 上層	須恵器	杯	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N6/灰	N6/灰	N6/灰	N6/灰	2.5YR7.1灰白	2.5YR7.1灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
491 5.5m付 SD5008 上層	須恵器	杯	器	圓柱ナメ	圓柱ナメ	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	2.5YR7.1灰白	2.5YR7.1灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
492 5.5m付 SD5008 上層	須恵器	蓋	器	口縁:ハゲテ後縁、体: 輪ヘタリ後縁、底: 輪ヘタリ後縁	口縁:ハゲテ後縁、体: 輪ヘタリ後縁、底: 輪ヘタリ後縁	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N7/灰白	N7/灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
493 5.5m付 SD5008 上層	須恵器	蓋	器	輪ヘタリ後縁、底: 輪ヘタリ後縁	輪ヘタリ後縁、底: 輪ヘタリ後縁	N5/灰	N5/灰	N5/灰	N5/灰	2.5YR7.1灰白	2.5YR7.1灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
494 5.5m付 SD5008 上層	土師器	蓋	器	輪ヘタリ後縁	輪ヘタリ後縁	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	10YR8.3浅黃	10YR8.3浅黃	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器觀察表 15

圖文 番号	地区	遺物名	層位	種類	形相	調整		色調		胎土		法量 (cm)				
						外面	内面	外部	内面	石英 長石	赤色熟 色陶	颗粒 沙粒	口徑 (cm)	底径 (cm)	幅 (cm)	高 (cm)
496 5区南 SD5008	上層	土胎器	甕	口沿上端：圓ナ ド、底：八角 ナド、体：丸ナド	7.5YR6.6 棕	7.5YR6.6 棕	-	-	-	中・多	36.8	-	-	-	-	-
497 5区南 SD5008	上層	土胎器	甕	-	-	7.5YR3.1 鹽灰	7.5YR7.6 棕	-	-	-	-	-	-	-	-	-
498 5区南 SD5008	上層	土胎器	甕	ナド	N6/灰	N6/灰	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-
499 5区南 SD5008	上層	不明	不明 (マヌツ)	不明 (マヌツ)	N8/灰白	N8/灰白	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
500 5区南 SD5008	上層	土胎器	甕	口沿～体：圓柱ナ ド、底：八角ナド	10YR7.2±5.5 黃褐	10YR7.1 黄白	-	-	-	細・少	11.6	30	7.1	-	-	-
505 6区 SD5008	-	吉備系 土胎器	甕	体：丸ナド、底： 丸ナド	2.5YR8.2 灰白	2.5YR8.2 灰白	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
506 6区 SD5008	-	土胎器	甕	手：圓柱ナド後ナ ド切口後ナド 口沿～体：圓柱ナド	10YR8.2 灰白	10YR8.2 灰白	-	-	-	無	-	-	7.6	-	-	-
507 5区南 SD5008	-	見世器	甕	口沿：圓柱ナド、 底：圓柱ナド	5YR5.1 灰	5YR6.1 灰	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
509 6区 SD5008	-	土胎器	甕	體：不明 (未熟 度)、他：圓柱ナド	2.5YR8.2 灰白	2.5YR8.2 灰白	-	-	-	細・少	14.8	-	-	-	-	-
510 6区 SD5008	-	西村系 須世器	甕	附子サ接ぎヘタリナ ド後ナド後ナド	2.5YR7.1 黄白	2.5YR7.1 黄白	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-
511 6区 SD5008	-	土胎器	甕	口沿：圓柱ナド、底： 圓柱ヘタリ後ナド	2.5YR8.2 灰白	2.5YR8.2 灰白	-	-	-	細・少	6.7	14	5.2	-	-	-
512 6区 SD5008	-	土胎器	甕	口沿～体：圓柱ナ ド、底：圓柱ナド ヘタリ後ナド	2.5YR8.2 灰白	2.5YR8.2 灰白	-	-	-	中・少	10.9	29	7.2	-	-	-
513 6区 SD5008	-	土胎器	甕	口沿～体：圓柱ナ ド、底：圓柱ナド ヘタリ後ナド	10YR8.2 灰白	2.5YR5.1 黄灰	-	-	-	細・少	11.0	33	6.8	-	-	-
514 6区 SD5008	-	中國窯 白釉	瓶	口沿～体：圓柱ナ ド、底：圓柱ナド	5YR7.2 灰白	5YR7.2 灰白	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-
515 6区 SD5008	-	須世器	瓶	ヨコナナデ	5YR8.1 灰白	5YR8.1 灰白	-	-	-	細・多	-	-	-	-	-	-
516 6区 SD5008	-	中國窯 白釉	瓶	下端無輪	5YR7.2 灰白	5YR7.2 灰白	5YR7.2 灰白	5YR7.2 灰白	5YR7.2 灰白	無	-	-	-	-	-	-
517 6区 SD5008	-	土胎器	甕	高台：圓柱ナド、 底：圓柱ナド	2.5YR8.2 灰白	2.5YR8.2 灰白	-	-	-	中・少	-	-	5.4	-	-	-
518 6区 SD5008	-	土胎器	甕	口沿～体：圓柱ナ ド、底：圓柱ナド ヘタリ後ナド	10YR8.2 灰白	10YR8.3 灰黃	-	-	-	中・少	10.9	25	6.9	-	-	-
519 6区 SD5008	-	土胎器	甕	口沿～体：圓柱ナ ド、底：圓柱ナド ヘタリ後ナド	10YR7.3±5.5 黃褐	10YR7.3±5.5 黃褐	-	-	-	細・少	-	-	6.5	-	-	-
520 6区 SD5008	-	土胎器	甕	口沿～体：圓柱ナ ド、底：圓柱ナド ヘタリ後ナド	10YR7.2±5.5 黃褐	10YR8.2 灰白	-	-	-	細・少	10.8	30	6.2	-	-	-
521 6区 SD5008	-	土胎器	甕	口沿～体：圓柱ナ ド、底：圓柱ナド ヘタリ後ナド	2.5YR8.3 灰黃	10YR8.3 灰黃	-	-	-	細・少	11.9	31	7.4	-	-	-
522 6区 SD5008	-	須世器	甕	圓柱ナナデ	N7/灰白	N6/灰	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-
523 6区 SD5008	-	土胎器	甕	ヘタリケイ後 圓柱ナナデ	5YR5.6 明赤褐	5YR5.6 明赤褐	-	-	-	細・少	-	-	11.2	-	-	-
524 6区 SD5008	-	土胎器	甕	圓柱ナナデ	10YR7.3±5.5 黃褐	10YR7.4±5.5 黃	-	-	-	中・少	10.2	-	-	-	-	-
525 6区 SD5008	-	土胎器	甕	ヨコナナデ	2.5YR8.2 灰白	2.5YR8.2 灰白	-	-	-	中・少	9.1	-	-	-	-	-

土器観察表 16

編号 名	地区	遺跡名	層位	種類	器種	調整		内面	外縁	色調		土	石英 長石	赤色粒 角閃石	雲母 斜長石	砂粒	口沿 (cm)	壁 (cm)	底 (cm)	法面 (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	厚 (cm)	±の範 (cm)		
						外面	内面			触	触															
326 6区 SK5008	-	陶器	-	碗	回転ベータケリ	触	触	触	触	7.5Y6/3 黄白	触	触	7.5Y8/1 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
327 6区 SK5008	-	須恵器	-	杯	不明(自然地)	触	触	触	触	2.5Y7/1 黄白	触	触	2.5Y7/1 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
328 6区 SK5008	-	須恵器	-	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
329 6区 SK5008	-	土陶器	-	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
330 6区 SK5008	-	土陶器	-	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
331 6区 SK5008	-	龜山焼	-	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
332 6区 SK5008	-	土陶器	-	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
333 6区 SK5008	-	土陶器	-	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
334 6区 SK5008	-	土陶器	-	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
345 5区北 SK5004	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
346 5区北 SK5004	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	触	触	10Y8/3 ±6.5 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
348 5区北 SK5005	-	須恵器	■	杯	回転ベータケリ 触	触	触	触	触	N7/1 黄白	触	触	N7/1 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
550 5区北 SK5007	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/1 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
351 5区北 SK5007	-	黒土器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
352 5区北 SK5007	-	瓦器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
353 5区北 SK5007	-	瓦器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
354 5区北 SK5007	-	瓦器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
355 5区北 SK5007	-	瓦器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
356 5区北 SK5007	-	須恵器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
357 5区北 SK5010	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
358 5区北 SK5010	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
359 5区北 SK5001	-	須恵器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/2 黄白	触	触	10Y8/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
362 5区北 SK5007	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 黄白	触	触	10Y8/3 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
360 5区 SK5017	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 黄白	触	触	10Y8/3 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
361 5区 SK5017	-	須恵器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 黄白	触	触	10Y8/3 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
362 5区北 SK5009	-	須恵器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y7/1 黄白	触	触	10Y7/1 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
363 5区北 SK5009	-	須恵器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y7/1 黄白	触	触	10Y7/1 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
364 5区北 SP5007	-	土陶器	■	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	2.5Y7/2 黄白	触	触	2.5Y7/2 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
565 5区 SZ5013	-	須恵器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	2.5Y7/1 黄白	触	触	2.5Y7/1 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
566 5区 SD5020	-	土陶器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 黄白	触	触	10Y8/3 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
567 5区 SD5020	-	須恵器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/3 黄白	触	触	10Y8/3 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
568 5区北 意野外	-	土陶器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/6 黄白	触	触	10Y8/6 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
569 5区北 意野外	-	須恵器	?	杯	指ササエ 触	触	触	触	触	10Y8/1 黄白	触	触	10Y8/1 黄白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器觀察表 17

圖文 番号	施用 地区	遺物名	層位	種類	形相	外觀	内面	色調		施土		法量 (cm)	
								外輪	内輪	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	±の差 (cm)
570	5区南 遺跡外	-	須恵器	杯	口縁～体：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	中・少	11.3	3.8	-
571	5区南 遺跡外	-	須恵器	杯	口縁～体：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	細・少	-	-	-
572	5区南 遺跡外	-	須恵器	杯	口縁～体：圓柱ナメ 底：未端部 底：圓柱ナメ	N5/灰	N5/灰	-	-	細・少	-	-	-
573	5区南 遺跡外	-	土師器	杯	口縁～体：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	2.5YR5.6 陶輪	10YR7.4 ない黄褐色	-	-	中・多	13.2	-	-
574	5区北 遺跡外	-	須恵器	杯	口縁～体：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	N6/灰	N7/灰白	-	-	細・少	18.7	-	-
575	5区北 遺跡外	-	土師器	杯	口縁～底：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	10YR8.2 陶白	7.5YR8.4 陶黃	-	-	中・多	-	4.8	-
576	5区北 遺跡外	-	土師器	碗	不明(マメツフ) 底：圓柱ナメ	2.5YR5.2 陶白	2.5YR5.2 陶白	-	-	細・少	-	4.9	-
577	5区北 遺跡外	-	土師器	碗	不明(マメツフ) 底：圓柱ナメ	2.5YR5.6 陶白	2.5YR5.6 陶白	-	-	細・少	-	8.3	-
578	5区北 遺跡外	-	土師器	台状杯	体～高台：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	10YR8.2 陶白	10YR8.3 陶黃	-	-	細・多	-	-	-
579	5区北 遺跡外	-	須恵器	円面鏡	不明(マメツフ) 底：圓柱ナメ	N4/灰	N6/灰	-	-	細・少	17.4	-	-
580	5区北 遺跡外	-	須恵器	円面鏡	不明(マメツフ) 底：圓柱ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	細・少	-	15.8	-
581	5区北 遺跡外	-	須恵器	鏡体	口縁～体：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	N7/灰白	N6/灰	-	-	中・少	15.6	9.2	-
582	5区北 遺跡外	-	須恵器	鏡	口縁～底：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	5Y6.1 灰	5Y6.1 灰	-	-	中・少	23.4	-	-
586	6区 SK0001	-	生糞土器	瓶	口縁～底：ヨコナメ 底：圓柱ナメ	7.5YR5.2 陶輪	7.5YR5.2 陶輪	細・少	無	細・少	5.0	-	-
587	6区 SK0001	-	須恵器	三足	口縁～底：ヨコナメ 底：圓柱ナメ	N8/灰白	N8/灰白	-	-	中・少	-	11.0	-
590	6区 SK0004	-	須恵器	杯	口縁～底：圓柱ナメ	N4/灰	N5/灰	-	-	中・少	12.1	-	-
591	6区 SD0004	-	土師器	碗	不明(マメツフ)	7.5YR6.6 灰	7.5YR7.4 ない黄褐色	-	-	細・少	-	7.1	-
592	6区 SD0004	-	須恵器	杯	口縁～底：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	2.5YR6.1 黄	2.5YR7.1 陶白	-	-	細・少	-	6.8	-
593	6区 SD0004	-	土師器	杯	口縁～底：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	10YR8.3 陶黃	10YR8.3 陶黃	-	-	細・少	-	7.1	-
594	6区 SD0004	-	須恵器	碗	不明(マメツフ)	5Y6.6 灰	7.5YR7.4 ない灰褐色	-	-	細・少	-	8.0	-
595	6区 SD0004	-	土師器	碗	不明(マメツフ)	5Y6.6 灰	5Y6.6 灰	-	-	細・少	-	7.1	-
596	6区 SD0004	-	須恵器	碗	不明(マメツフ)	10YR8.3 陶黃	10YR8.3 陶黃	-	-	細・少	10.7	2.2	5.6
597	6区 SD0004	-	須恵器	碗	無柄、圓柱ナメ	燒	2.5YR6.6 陶輪	燒土士	N7/灰白	無	-	-	-
598	6区 SD0004	-	須恵器	碗	底：圓柱ナメ 底：圓柱ナメ	N6/灰	5YB5.1 陶灰	-	-	細・少	-	8.1	-
599	6区 SD0004	-	須恵器	要	ヨコナメ 底：圓柱ナメ	N4/灰	N5/灰	-	-	細・少	-	-	-
600	6区 SD0004	-	土師器	かまと	不明(マメツフ)	10YR7.4 ない黄褐色	10YR7.4 ない黄褐色	-	-	中・少	-	-	-
601	6区 SD0004	-	須恵器	要	ヨコナメ 底：圓柱ナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	細・少	-	-	-
610	6区 SE0001	-	龜山焼	要	ヨコナメ 底：圓柱ナメ	N3/灰	N3/灰	-	-	中・少	-	-	-
611	6区 SE0001	-	須恵器	鉢	底：ヨコナメ 底：圓柱ナメ	N6/灰	N7/灰白	-	-	中・少	-	11.3	-

土器観察表 18

編号 番号	地区 名	遺跡名	層位	種類	器種	調査		内面		外縁		色調		土器		粘土		法面 (cm)	
						外面	裏面	長石	赤色粒	角閃石	雲母	多粒	口沿 (cm)	壁 (cm)	底径 (cm)	底高 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	±の範 (cm)
612 6.8	SD0003	-	須恵器	杯壺	口縁二穴式井戸型 直柄ノ手付へ平井上 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N5/灰	-	-	-	-	細・少	79	-	-	-	-	-	
613 6.8	SD0003	-	須恵器	杯	口縁二穴式井戸型 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	5Y6.1灰	5Y6.1灰	-	-	-	中・少	-	80	-	-	-	-	
614 6.8	SD0003	-	須恵器	杯	輪舟ナメ付原り 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	細・少	-	84	-	-	-	-	
615 6.8	SD0003	-	須恵器	輪舟付杯	輪舟ナメ付原り 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	細・少	138	36	101	-	-	-	
616 6.8	SD0003	-	須恵器	輪舟付杯	輪舟ナメ付原り 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	7.5Y7.1灰白	5Y6.1灰	-	-	-	中・少	-	110	-	-	-	-	
617 6.8	SD0003	-	須恵器	高台杯	高台杯 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N8/灰白	N8/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
618 6.8	SD0003	-	須恵器	高台杯	高台杯 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	5Y8.1灰白	5Y8.1灰白	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	
619 6.8	SD0003	-	須恵器	高台杯	高台杯 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	
620 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
621 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	中・多	-	-	-	-	-	-	
622 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
623 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	中・少	133	-	-	-	-	-	
624 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	25Y8.1灰白	25Y8.1灰白	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
625 6.8	SD0003	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	5Y8.6 粗	5Y8.6 粗	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
626 6.8	SD0003	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り 輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	5Y7.8 粗	5Y7.8 粗	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
627 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	
628 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	
629 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	10Y8.3-5.5-1黄相 10Y8.3-5.5-1黄相	10Y8.3-5.5-1黄相	-	-	-	細・多	-	-	-	-	-	-	
630 6.8	SD0003	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	7.5Y8.6 粗	7.5Y8.6 粗	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
631 6.8	SD0003	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	不明(マヌツ)	不明(マヌツ)	-	-	-	中・多	18.1	-	-	-	-	-	
632 6.8	SD0003	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	10Y8.3-3.5-1黄相 10Y8.3-3.5-1黄相	10Y8.3-3.5-1黄相 10Y8.3-3.5-1黄相	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	
633 6.8	SD0003	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	5Y8.6-4.1-5.5-1粗	5Y8.6-4.1-5.5-1粗	-	-	-	中・少	35.5	-	-	-	-	-	
634 6.8	SD0003	-	須恵器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	細・少	20.4	-	-	-	-	-	
635 6.8	SP0008	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	2.5Y8.6 粗	2.5Y8.6 粗	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
636 6.8	遺跡外	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	2.5Y8.3-2灰白	2.5Y8.3-2灰白	-	-	-	細・少	70	16	44	-	-	-	
637 6.8	遺跡外	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	2.5Y8.2灰白	2.5Y8.2灰白	-	-	-	細・少	10.1	-	-	-	-	-	
638 6.8	遺跡外	-	土師器	高杯	輪舟ナメ付原り	別柄ナメ	10Y8.2-3浅黄相	10Y8.2-3浅黄相	-	-	-	中・少	-	72	-	-	-	-	

土壤觀察表 19

番号	地名	遺跡名	層位	種類	藝術	調整		色調		胎土		法線 (cm)					
						外觀	内面	N4/灰	内面	N4/灰	石英 長石	赤色熟 陶母	角閃石 斜長石	H (cm)	L (cm)	W (cm)	Z (cm)
652 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	指子サエ	不明 (マメツ)	ヨコナナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
653 6 区	遺跡外	-	土物器	陶	口縁：圓板ナナデ、体：	不明 (マメツ)	7.5YR8.4/浅黃褐色	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
654 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	口縁：圓板ナナデ、体：	圓板ナナデ	7.5YR7.0/褐褐色	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	
655 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	口縁：圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/褐褐色	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	
656 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
657 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
658 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
659 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
660 -	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
651 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
652 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
653 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
654 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
655 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
656 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
657 -	遺跡外	-	瓦器	陶	高台付板圓板ナナデ	圓板ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	
658 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	口頭：筒タキ後ナナデ、体：	筒タキ後ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	
659 6 区	遺跡外	-	瓦器	陶	口頭：筒タキ後ナナデ	筒タキ後ナナデ	7.5YR7.0/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	

表 6 瓦類察表 1

編 番 号	地 名	通 稱 名	層 位	器 種	調整			色調			始土			注 記				
					凸面	凹面	側面	凸面	凹面	側面	白色粒	黑色粒	灰白色 (厚)					
2	5区南	包含層 2a層	丸瓦	不明(マメツ)	布目	系切引	不明(マメツ)	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	12.0 NS/灰 NS/灰	70	-	1.4	-	1731
14	4-1区	SD005	-	平瓦	不明(マメツ)	ナダ	布目	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	8.8 NS/灰 NS/灰	44	-	1.8	-	68.4
15	4-1区	SD005	-	平瓦	不明(マメツ)	ナダ	布目	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	5.5 NS/灰 NS/灰	53	-	1.8	-	40.7
16	4-1区	SD005	-	平瓦	不明(マメツ)	ナダ	布目	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	6.0 NS/灰 NS/灰	48	-	1.5	-	39.1
17	4-1区	SD005	-	平瓦	不明(マメツ)	ナダ	布目	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	7.8 NS/灰 NS/灰	69	-	1.9	-	150.7
18	4-1区	SD005	-	丸瓦	繩目タキ 後ナダ	ナダ	布目	系切引	前端・ナダ	中・少・中 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	多	無	7.2 NS/灰 NS/灰	58	-	2.2	-	131.2
21	4-3区	SE4001	3層	平瓦	ナダ	ナダ	布目	-	-	-	中・多 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	108G5-1 NS/灰 NS/灰	51	-	1.9	-	110.5
28	4-3区	SE4001	3層	平瓦	ナダ	面質引灰	系切引	-	-	-	中・多 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	7.7 NS/灰 NS/灰	68	-	1.9	-	21.0
32	4-3区	SE4001	3層	平瓦	繩目後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	25.6 NS/灰 NS/灰	8.1	-	2.1	-	594.0
33	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	繩目タキ後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	8.6 NS/灰 NS/灰	5.6	-	1.8	-	151.0
34	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	繩目タキ後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	9.7 NS/灰 NS/灰	7.8	-	2.1	-	201.5
35	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	繩目タキ後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・多 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	8.2 NS/灰 NS/灰	11.1	-	2.2	-	440.5
36	4-3区	SE4001	3層	軒瓦	繩目後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	7.1 NS/灰 NS/灰	8.5	-	4.6	-	168.5
37	4-3区	SE4001	3層	平瓦	系切引後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	9.0 NS/灰 NS/灰	-	-	1.3	-	83.5
38	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	12.8 NS/灰 NS/灰	-	-	20	-	623.5
40	4-2区	SK002	-	平瓦	ヘラタキ	ナダ	布目	ヘラタキ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	4.6 NS/灰 NS/灰	60	-	20	-	79.8
44	4-4区	SX004	-	丸瓦	繩目タキ後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	4.5 NS/灰 NS/灰	67.7	-	1.3	-	67.0
110	6区	SD021	-	平瓦	格子タキ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	11.2 NS/灰 NS/灰	62	-	1.9	-	182.7
111	4-4区	SD021	-	丸瓦	-	布目	ヘラタキ	ヘラタキ	ヘラタキ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	10Y8S.2 NS/灰 NS/灰	29.2	-	14.9	-	1438.5
112	4-4区	SD021	-	丸瓦	ヘラタキ	ナダ	布目	ヘラタキ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	7.5 NS/灰 NS/灰	61	-	1.4	-	125.7
134	4-4区	SP024	-	平瓦	繩目タキ	ナダ	布目	糊跡 ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	17.0 NS/灰 NS/灰	133	-	2.5	-	673.5
161	6区	SD028	上層	丸瓦	ナダ	布目	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	6.2 NS/灰 NS/灰	33	-	1.9	-	86.9
197	6区	SD028	中層	丸瓦	ナダ	布目	ヘラタキ	ヘラタキ	前端・ヘラタキ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	5YR7.4 NS/灰 NS/灰	26.8	-	10.0	-	584.4
267	6区	SD028	-	平瓦	ナダ	布目	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	10Y8S.3 NS/灰 NS/灰	-	-	1.2	-	32.4
336	4-1区	遺物外	-	平瓦	不明	ナダ	-	-	-	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	6.5 NS/灰 NS/灰	72	-	2.3	-	100.7
347	4-1区	遺物外	-	平瓦	不明	ナダ	糸引後ナダ	ナダ	糸引後ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	8.8 NS/灰 NS/灰	58	-	2.2	-	52.0
388	4-1区	遺物外	-	丸瓦	繩目タキ後ナダ	ナダ	布目	糸引後ナダ	ナダ	中・少 1.25・1.5cm 1.25・1.5cm	無	無	7.5 NS/灰 NS/灰	52	-	1.5	-	30.9

瓦觀察表2

編文 番号	地区 名	通路名	層位	層種	調整			色調			粘土			法値 (cm・g)			
					凸面	凹面	側面	凸面	凹面	白色較	黑色較	灰色較	長径 (保存長) (cm)	短径 (保存幅) (cm)	厚さ (cm)	段	
349 4 区 外	-	平瓦	圓口タキ	布目	-	-	-	5YR6.4 12.45°+橙	5YR7.6 橙	中・少	無	無	11.9	11.5	-	2.3	-
351 5 区 内	SZD0001	上層	平瓦	圓口タキ	不明(マメツ)	-	-	10Y5R7.1 11.45°+黃	10Y5R7.2 10Y5R8.1 10Y5R8.2	中・少	無	無	5.4	5.8	-	1.7	-
352 5 区 内	SZD0001	上層	平瓦	圓口タキ	不明(マメツ)	-	-	10Y5R8.1 10Y5R8.2	10Y5R7.6 橙	中・少	無	無	7.5	7.4	-	2.1	-
362 5 区 内	SZD0002	-	平瓦	ナダ	不明(マメツ)	-	-	10Y5R8.4 10Y5R8.5	10Y5R7.6 橙	中・少	無	無	10.5	10.8	-	1.8	-
373 5 区 内	SZD0007	上層	平瓦	燒口タキ	布目	-	-	10Y5R8.4 10Y5R8.5	10Y5R7.6 橙	中・少	無	無	8.0	9.1	-	1.5	-
381 5 区 内	SX5008	上層	平瓦	不明(マメツ)	布目	-	-	NS/灰 灰	5YR7.6 橙	中・少	無	無	2.1	2.4	-	0.6	-
383 5 区 内	SX5008	上層	丸瓦?	不明(マメツ)	布目	-	-	NS/灰 灰	10Y5R7.6 橙	中・少	無	無	3.2	1.9	-	1.2	-
390 5 区 内	SX5008	下層	平瓦	燒口タキ	布目後ナダ	-	-	5YR7.1 灰	5YR7.1 灰	中・少	無	無	4.1	-	-	1.5	-
394 5 区 内	SX5008	下層	平瓦	ナダ	布目	-	-	75YR6.6 10Y5R6.6 明霞鐵	75YR6.6 10Y5R6.6 明霞鐵	中・少	無	無	6.5	5.3	-	2.5	-
392 5 区 内	SX5008	下層	平瓦	不明(マメツ)	不明(マメツ)	-	-	10Y5R6.2 10Y5R6.2 灰	10Y5R6.2 10Y5R6.2 灰	中・多	無	無	7.7	11.1	-	1.8	-
393 5 区 内	SX5008	下層	平瓦	圓口タキ	布目	-	-	前園圓? わら玉灰 灰	NST/灰 灰	中・少	無	無	6.5	8.5	-	2.3	-
396 5 区 内	SX5009	-	丸瓦	不明(マメツ)	布目	-	-	前園圓? 不明 灰	NS/灰 灰	中・少	無	無	6.3	8.7	-	1.5	-
397 5 区 内	SX5009	-	丸瓦	圓口タキ	布目	-	-	25YR7.2 灰	25YR7.2 灰	中・多	無	無	7.7	6.6	-	1.8	-
398 5 区 内	SX5009	-	平瓦	板口デ	布目後ナダ	-	-	NS/灰 灰	NS/灰 灰	相・少	中・少	無	9.0	9.1	-	2.0	-
451 6 区	SZD003	-	平瓦	圓口タキ	布目	-	-	10Y5R8.2 灰	10Y5R8.2 灰	中・少	無	無	6.9	6.9	-	2.3	-
452 6 区	SZD003	-	平瓦	ナダ	ヘラミガキ	-	-	NS/灰 灰	NS/灰 灰	中・少	無	無	8.6	10.8	-	1.9	-
500 5 区 内	SZD008	上層	平瓦	圓口タキ	布目	-	-	10Y5R8.2 灰	10Y5R8.2 灰	中・少	無	無	10.9	10.2	-	1.8	-
501 5 区 内	SZD008	上層	丸瓦	不明(マメツ)	布目	-	-	10Y5R7.3 10Y5R7.3 灰	10Y5R7.3 10Y5R7.3 灰	中・少	無	無	3.9	1.9	-	1.2	-
502 5 区 内	SZD008	上層	丸瓦	ナダ	燒口?	布目後ヘタケズリ	-	25YR6.1 灰 灰	25YR6.1 灰 灰	中・少	無	無	7.8	21	-	1.4	-
503 5 区 内	SZD008	上層	丸瓦	ナダ	ナダ	燒口?	ヘタケズリ	前園圓? ヘタキ?	75YR7.4 10Y5R8.3 灰	中・少	無	無	9.4	6.0	-	1.5	-
508 6 区	SZD008	下層	平瓦	燒口タキ?	平行タキ?	-	-	75YR7.1 灰	75YR7.1 灰	中・少	無	無	5.7	6.8	-	2.0	-
535 6 区	SZD008	-	平瓦	燒口タキ?	不明(マメツ)	-	-	25YR6.1 灰	25YR6.1 灰	中・少	無	無	9.2	9.1	-	2.0	-
536 6 区	SZD008	-	平瓦	燒口タキ	布目	-	-	25YR6.1 灰	25YR6.1 灰	中・多	無	無	11.0	10.5	-	2.6	-
549 5 区	SZD005	-	平瓦	燒口タキ?	燒口後ナダ	-	-	75YR7.1 灰	75YR7.1 灰	中・多	少	無	6.2	8.8	-	1.4	-
583 5 区	通路外	-	平瓦	不明(マメツ)	不明(マメツ)	-	-	5YR6.1 灰 灰	5YR6.1 灰 灰	中・少	無	無	6.5	6.3	-	1.5	-
584 5 区	通路外	-	丸瓦	焼ナダ	布目	-	-	25YR7.2 灰	25YR7.2 灰	中・少	中・少	無	5.3	3.1	-	1.6	-
588 6 区	SX5001	-	丸瓦	不明(マメツ)	布目	-	-	NS/灰 灰	NS/灰 灰	中・少	中・少	無	8.6	9.0	-	2.5	-

瓦觀察表3

標文番号	地区名	遺物名	層位	断面	調査		土色	法縫 (cm · cm)	法縫 (cm · cm)	厚さ (cm)	段	重量 (kg)	
					凸面	凹面							
589	6区	SK0003	-	平瓦	繩目タイキ	不明(マヌケ)	不明(マヌケ)	75Y86/1 5Y71灰白	中・少・無	7.3	9.3	-	2.5
603	6区	SK6004 -SK6006	-	平瓦	繩目タイキ	不明(マヌケ)	不明(マヌケ)	10Y87/2 15Y55灰白 灰黄	中・少・無	11.7	9.4	-	20
604	6区	SK6004 -SK6006	-	平瓦	繩目タイキ	ナダ	ヘタキリ	N7/灰白	細・少・少	9.5	8.0	-	2.4
605	6区	SK6005 -SK6006	-	丸瓦	ナダ	丸日	ナダ	N7/灰白	中・少・無	7.1	6.9	-	3.0
635	6区	SD0003	-	丸瓦	ナダ	丸日	不明(マヌケ)	N7/灰白	中・少・少・少	01130 (10)0	-	-	1.6
600	6区	遺物	-	丸瓦	ナダ	丸日	糸切り	N7/灰白 灰黄	中・多・無	8.0	6.0	-	1.5
													19.1

表7 木器觀察表1

標文番号	地区名	報告者姓名	報告位置	芯棒	調査		法縫 (cm)	法縫 (cm)	厚さ (cm)	材質	その他の (cm)
					口径 (cm)	芯棒 (cm)					
269	6区	SD4028	中層	丸棒	-	-	-	-	6.1	0.7	-
270	6区	SD4028	中層	丸棒	-	-	-	-	5.2	1.9	0.7
271	6区	SD4028	中層	丸棒	密な丸片	-	-	-	6.6	0.8	0.6
272	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	-	11.0	0.7	0.4
273	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	-	15.2	0.9	0.6
274	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	-	11.9	0.8	0.7
275	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	-	7.9	1.2	0.6
276	6区	SD4028	中層	角片	-	-	-	-	6.6	3.2	0.4
277	6区	SD4028	中層	薄板状(帆布)	帆布	-	-	-	10.9	2.9	0.5
278	6区	SD4028	中層	板状加工工具	-	-	-	-	13.7	2.5	1.2
279	6区	SD4028	中層	ヘタチ	-	-	-	-	11.5	0.7	-
280	6区	SD4028	中層	角片削片	-	-	-	-	8.2	1.9	0.7
281	6区	SD4028	中層	骨棒	-	-	-	-	4.3	1.7	0.3
282	6区	SD4028	中層	板棒	-	-	-	-	3.9	2.4	0.1
283	6区	SD4028	中層	盒中	-	-	-	-	12.6	3.1	0.3
284	6区	SD4028	中層	盒中	-	-	-	-	12.2	2.1	0.2
285	6区	SD4028	中層	油物底板	-	-	-	-	25.0	6.1	0.75
286	6区	SD4028	中層	油物底板	-	-	-	-	31.7	3.2	0.6
287	6区	SD4028	中層	板棒	-	-	-	-	53.9	8.3	3.3
288	6区	SD4028	中層	失漏加工木	-	-	-	-	179.5	11.8	8.0
289	6区	SD4028	中層	失漏加工木	-	-	-	-	213.6	-	145
290	6区	SD4028	中層	木塊?	-	-	-	-	89.1	7.7	4.3
291	6区	SD4028	中層	木塊	-	-	-	-	134.2	27.6	17.4
292	6区	SD4028	中層	木塊	-	-	-	-	134.2	27.6	17.4

表2 木器觀察表

規文番号	地区名	報告種類名	報告部位	診療	法量 (cm)			材質
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	
293	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	11.3	0.3
294	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	13.0	0.2
295	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	2.2	0.2
296	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	10.8	1.1
297	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	11.1	0.2
298	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	13.6	0.1
299	4+6区	SD0428	下頬	板村	-	-	12.2	0.3
300	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	25.7	0.4
301	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	21.3	0.9
302	4+6区	SD0428	下頬	木瀬	-	-	14.7	0.3
303	6区	SD0428	下頬	木瀬	-	-	9.8	0.4
304	6区	SD0428	下頬	木瀬	-	-	13.5	0.2
305	6区	SD0428	下頬	木瀬	-	-	7.2	0.5
306	6区	SD0428	下頬	木瀬	-	-	27.2	0.3
307	4+6区	SD0428	下頬	先端加工村	-	-	17.8	0.4
308	6区	SD0428	下頬	先端	-	-	39.5	0.7
309	4+6区	SD0428	下頬	枝元(1枚)	-	-	18	0.9
310	6区	SD0428	下頬	枝元(1枚)	-	-	48.3	0.4
311	4+6区	SD0428	下頬	枝元	-	-	58	0.3
312	6区	SD0428	下頬	枝元	-	-	13.4	0.2
313	6区	SD0428	下頬	不明	-	-	9.6	0.8
314	6区	SD0428	下頬	板村	-	-	6.4	0.9
315	6区	SD0428	下頬	魚村	-	-	4.3	0.4
316	4+6区	SD0428	下頬	魚村	-	-	86.9	0.4
317	6区	SD0428	下頬	魚村	-	-	50	0.4
318	6区	SD0428	下頬	△状木製	-	-	8.7	0.9
319	6区	SD0428	下頬	先端加工村	-	-	71	0.1
320	6区	SD0428	下頬	先端加工 魚村	-	-	23.9	0.5
321	6区	SD0428	下頬	先端加工村	-	-	25.7	1.4
322	6区	SD0428	下頬	先端加工村	-	-	6.5	0.4
323	4+6区	SD0428	下頬	先端加工村	-	-	11.3	1.2
324	6区	SD0428	下頬	先端加工村	-	-	69.0	0.4
325	4+6区	SD0428	下頬	△状木製	-	-	81.2	0.2
326	4+6区	SD0428	-	鈎	-	-	124	0.7
327	6区	SD0428	-	鈎	-	-	14.4	0.6
334	6区	SD0430	-	鈎	-	-	1.85	0.38
349	5区	SK4010	-	鈎	-	-	6.5	1.7
400	5区	SK5010	-	鈎	-	-	11.0	0.9
537	6区	SD05008	-	不明	-	-	5.8	0.3
538	6区	SD05008	-	青竹木器	-	-	6.3	0.1
539	6区	SD05008	-	由物削板	-	-	32	0.5
540	6区	SD05008	-	由物削板	-	-	4.7	0.7
541	6区	SD05008	-	由物削板	-	-	43	0.3
					-	-	11.0	0.3

木器觀察表 3

編文番号	地区名	報告遺物名	報告削除位	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	法量 (cm)	持さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他の 寸法 (cm)	材質
542	6区	SD5608	-	板村	-	-	-	10.3	16.3	2.5	-	ヒノキ
543	6区	SD5608	-	あみ具	-	-	-	24.8	33.2	2.5	-	モミ
544	6区	SD5608	-	板村	-	-	-	32.7	10.2	2.6	-	ヒノキ
545	6区	SD5608	-	角材(先端削除)	-	-	-	49.0	43.0	2.9	-	アスナロ
546	6区	SD5606	-	角材底板	-	-	-	13.2	2.2	0.6	-	ヒノキ
606	6区	SD5606	-	底板	-	-	-	10.8	1.7	0.2	-	ヒノキ
607	6区	SD5606	-	底板	-	-	-	75.5	-	7.8	-	エノキ
608	6区	SD5607	-	板	-	-	-	13.3	0.9	0.3	-	ヒノキ
636	6区	SD5608	-	曲物底板	60.0	16.5	-	-	1.3	-	-	針葉樹(ヒノキ?)
609-1	6区	SD5601	-	木釘	-	-	-	1.1	-	0.5	-	樹種不明
609-2	6区	SD5601	-	木釘	-	-	-	1.1	0.7	0.4	-	樹種不明
609-3	6区	SD5601	-	木釘	-	-	-	-	-	-	-	樹種不明

表 8 石器觀察表 1

編文番号	地区名	報告遺物名	報告削除位	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	法量 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他の 寸法 (cm)	重量 (g)
6	4-1区	急合碗	5層	石瓶	サスカイト	-	-	2.2	1.7	0.3	-	0.7
350	5区	SD501	-	石瓶	滑石	34.2	-	-	-	-	-	160.0
638	6区	SD56013	-	石瓶	サスカイト	-	-	8.6	4.1	1.3	-	48.2
661	5区	速農外	-	石瓶	サスカイト	-	-	3.3	1.6	0.3	-	1.7
602	6区	SD5604	-	石管	サスカイト	-	-	2.9	1.9	0.6	-	6.5

写 真 図 版

図版1 遺構写真1



調査地遠景（南から）



6区 3面全景（直上から）

図版2 遺構写真2



6区 3面全景（南から）



6区 SD4028 土層断面（南東から）

図版3 遺構写真3



6区 調査区西壁 (SD4028部分)



SD4028 木簡出土状況



SD4028 木製品出土状況



SD4028 木簡出土状況2



SD4028 土師器出土状況

図版4 遺構写真4



6区 SD5030、SP6003検出状況（南から）



4区 SB4002、SB4003検出状況（北から）

図版5 遺構写真5



SP6003 断面



SP4053 検出状況



SP5008 断面



SP4053 断面及び遺物出土状況



SP4056 断面



SP5056 検出状況



SO4044 検出状況



SD4019 断面



4-2区 1面完掘状況（南から）



SE4001 検出状況



SE4001 断面



SD4005 SD4006 完掘状況



SD4017 断面



SD4004 断面



4区 土器割り検出状況

図版7 遺構写真7



5区 1面完掘状況（東から）



SX5008 断面



SD5003 下層足金出土状況



SD5003 完掘状況



5区 2面完掘状況（南から）



SZ5001 検出状況



SZ5002 検出状況



SZ5013 土器出土状況



5区 畦畔検出状況

図版9 遺構写真9



4区 SD4021 柱穴群完掘状況（北から）



SD4021 完掘状況



4区 SD4021 断面



SD4030 断面



SD4031 断面

図版 10 遺構写真 10



SD5008 完掘状況（南から）



SD5009 断面（西から）



SD5008 縦断面



SD5008 断面（南から）



SD5008 底面の状況



SD5008 土器出土状況



5区 2面北半 完掘状況

図版 11 遺構写真 11



5 区 3面完掘状況



5 区 3面完掘状況（遠景）

図版 12 遺構写真 12



5 区 3面南側 遺構検出状況（東から）



6 区 1面完掘状況

図版 13 遺構写真 13



6区 西壁土層



6区 北壁土層

図版 14 遺構写真 14



5 区 西壁土層



5 区 西壁土層 2

図版 15 出土遺物写真 1



SD4028 出土木簡 302, 303 (赤外線写真)

図版 16 出土遺物写真 2



3



4



5



6



29



35



30



35

図版 17 出土遺物写真3



図版 18 出土遺物写真 4



123



124



142

143



142

143



150



154



156



156

図版 19 出土遺物写真5



図版20 出土遺物写真6



192



196



197



198



199



207



208



211

図版 21 出土遺物写真 7



209



209



212



212



215



215



217



210

図版22 出土遺物写真8



図版23 出土遺物写真9



253



258



333



335



337



338

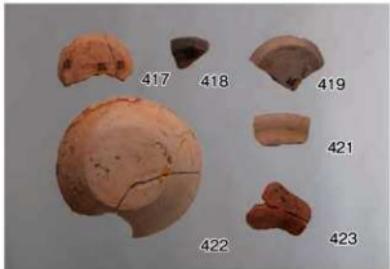
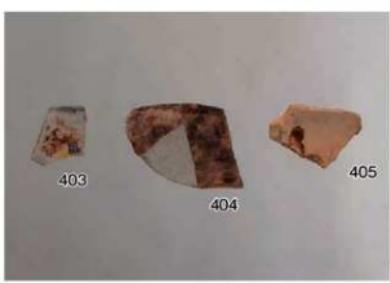
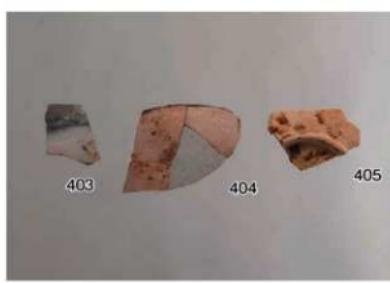


345



340

図版24 出土遺物写真 10



図版 25 出土遺物写真 11



図版 26 出土遺物写真 12



504



504



513



519



521



565



580



581

図版 27 出土遺物写真 13



579



534



596



596



638



661



602



602

図版 28 出土遺物写真 14



299



298



293



304



303



284



327



305



302

図版 29 出土遺物写真 15



296

272



307



285



543



報告書抄録

国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第6冊

岸の上遺跡I

2019年3月18日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4

Tel 0877-48-2191

E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp

発行 香川県教育委員会

印刷 ワールド印刷株式会社





付図2 岸の上遺跡I 2面平面図



付図3 岸の上遺跡I 3面平面図